京都工芸繊維大学
KYOTO INSTITUTE OF TECHNOLOGY

The Japan Association of Applied Psychology

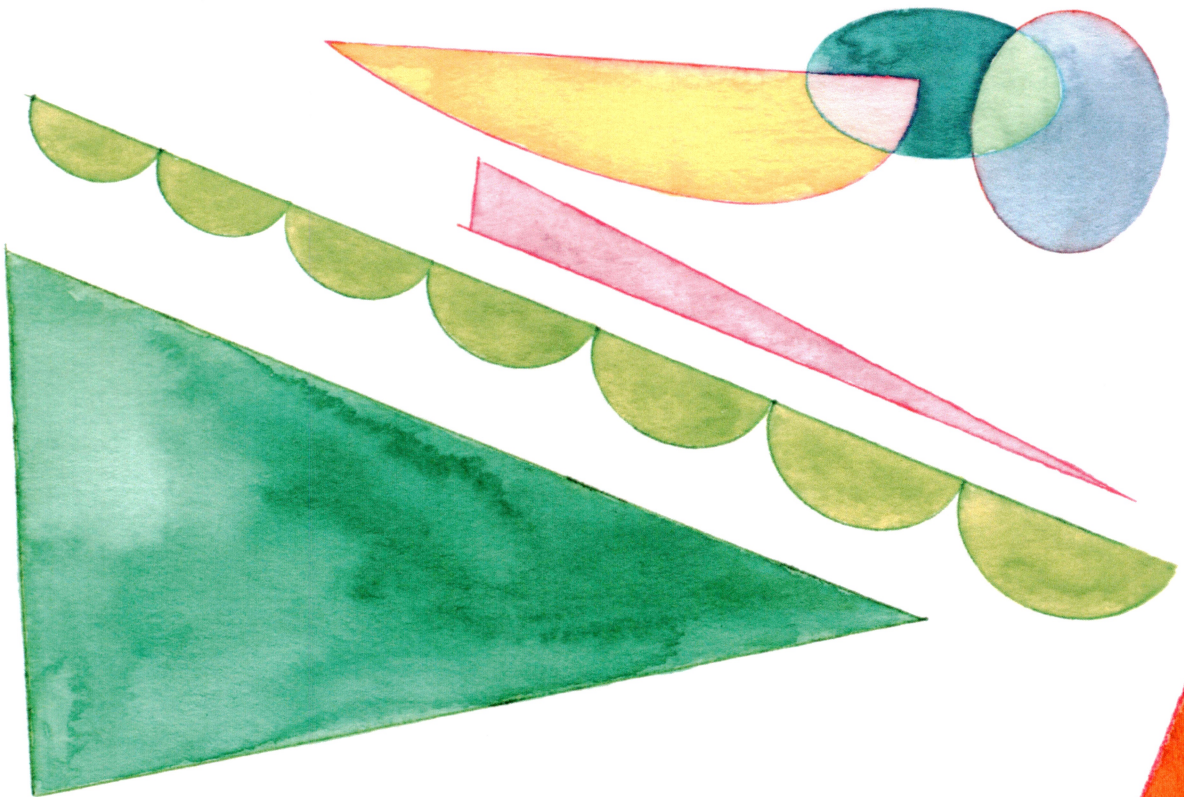
日本応用心理学会 第88回大会

発表論文集

2022年9月17日(土)～18日(日)

会場：京都工芸繊維大学（松ヶ崎キャンパス）

実行委員長：来田宣幸（京都工芸繊維大学・基盤科学系・教授）



日本応用心理学会

第 88 回大会 発表論文集

開催形式：対面とオンライン併用

会期：2022 年 9 月 17 日（土）～18 日（日）

会場：京都工芸繊維大学

Web 会期：2022 年 9 月 17 日（土）～10 月 18 日（火）

Web 会場：参加者限定ホームページ、Slack ワークスペース

目次

日本応用心理学会第88回大会　タイムテーブル

2022年9月17日（土）

09：30〜10：10　一般研究発表フラッシュトーク（Aセッション）【東3号館2F大講義室】
10：20〜11：40　大会シンポジウム：職人シンポ【記念ホール】
11：50〜12：30　一般研究発表フラッシュトーク（Bセッション）【東3号館2F大講義室】
12：40〜13：30　ランチョン企画：伝統意匠シンポ（昼休憩）【記念ホール】
12：45〜15：00　特別体験ワークショップ（参加人数制限あり）【東3号館1F大講義室】
13：40〜14：20　一般研究発表ポスター発表（Aセッション）、教育発表【2Fセミナー室】
14：30〜16：00　共催企画：安全シンポ（認知心理学会・安全心理学部会共催）【記念ホール】
16：10〜16：50　一般研究発表ポスター発表（Bセッション）【2Fセミナー室】
17：00〜18：00　交流会（予定）【2Fセミナー室】

2022年9月18日（日）

09：30〜10：10　一般研究発表フラッシュトーク（Aセッション）【記念ホール】
10：20〜11：40　自主企画研究発表【東3号館1F大講義室】【東3号館2F大講義室】
11：50〜13：05　総会（弁当あり）【記念ホール】
13：15〜13：55　一般研究発表フラッシュトーク（Bセッション）【記念ホール】
14：05〜14：45　一般研究発表ポスター発表（Aセッション）、教育発表【2Fセミナー室】
14：55〜15：55　特別セミナー：心理学の「食」への展開と応用【記念ホール】
16：05〜16：45　一般研究発表ポスター発表（Bセッション）【2Fセミナー室】

一般研究発表

2022年9月17日（土）Aセッション

フラッシュトーク　**09：30〜10：10【東3号館2F大講義室】**

ポスター発表　　**13：40〜14：20【60周年記念館2Fセミナー室】**

教育・発達・人格

1A01. 発達に支援が必要な子どもたちとのポジティブな経験の重要性〜保育施設・療育施設へのアンケート調査をもとに〜：横井川美佳（京都大学、日本学術振興会）、田中真介（京都大学）【1ページ】

1A02. 日本人用のwell-being尺度の作成：Aneesah Nishaat（創価大学）【2ページ】

1A03. 部活動指導におけるケガ予防プログラムの効果の検証：伊藤将史（近江兄弟社高等学校）、大門耕平（東北学院大学）、来田宣幸（京都工芸繊維大学）、山本ちさと（丸太町リハビリテーションクリニック）【3ページ】

1A04. 理科の実験場面における指導の内容が操作パフォーマンスに与える影響：辻井寿典（大阪大学蛋白質研究所）、来田宣幸（京都工芸繊維大学）【4ページ】

1A05. 吹奏楽指導者の発話内容要素に関する研究：高校吹奏楽部の事例的検討：飯田響一（京都工芸繊維大学）、来田宣幸（京都工芸繊維大学）【5ページ】

臨床・福祉・相談

1A07. 大学生用コロナ禍ソーシャルサポート尺度の作成（3）—大学からのサポートに着目して—：上田仁（愛知県庁）、松浦均（三重大学）【6ページ】

健康・看護・医療

1A08. ピーク・エンドの法則に則る精神作業課題の構成が遂行時の心理的・生理的反応に及ぼす影響：伊藤晃碧（立正大学）、古屋健（立正大学）【7ページ】

1A09. 精神科医療における多職種連携の成果に影響を及ぼすプロセスの検討：異儀田はづき（立正大学、東京女子医科大学）、古屋健（立正大学）【8ページ】

犯罪・社会・文化

1A10. コロナ禍における大学生の道徳意識とストレス　2022年調査—相互協調的自己観と関係流動性の関連—：伊坂裕子（日本大学）、有木永子（日本大学）【9ページ】

1A11. オンライン授業下で大学生が接した諸情報に関する分析：伊藤令枝（日本大学）【10ページ】

1A12. 特殊詐欺未然防止の検討1—特殊詐欺被害防止に向けた被害者の心理状態予測に関する実証実験—：紺野剛史（富士通株式会社）、吉岡隆宏（富士通株式会社）、近野恵（富士通株式会社）、宮原捺希（富士通株式会社）、井手健太（富士通株式会社）、桐生正幸（東洋大学）【11ページ】

1A13. 特殊詐欺未然防止の検討2—特殊詐欺音声聴取時における生理指標と心理尺度の関連性に関する基礎的な分析—：近野恵（富士通株式会社）、井手健太（富士通株式会社）、吉岡隆宏（富士通株式会社）、宮原 捺希（富士通株式会社）、紺野剛史（富士通株式会社）、桐生正幸（東洋大学）【12ページ】

1A14. 京仏壇・京仏具の社会的受容と職人の技能継承に関する研究：成田智恵子（京都産業大学）【13ページ】

産業・交通・災害
1A15. 労働者の社会貢献認知とワークモチベーション：梶原隆之（文京学院大学）、山村豊（帝京大学）【14 ページ】
1A16. 大工職の建設作業者におけるリスクテイキング行動と安全行動の促進要因−インタビュー調査による予備的検討：高橋明子（労働安全衛生総合研究所）、三品誠（有限会社サイビジョン）【15 ページ】
1A17. ワーケーションが心理･生理反応に及ぼす影響：今井章（信州大学）、白井真理子（信州大学）、堀田竜士（日本エヌ・ユー・エス株式会社）、林靖人（信州大学）、石橋剛（東急リゾーツ&ステイ株式会社）、内田宏（株式会社東急不動産 R&D センター）【16 ページ】
1A18. 継続する自然災害による被災者の仕事の変化に関する研究−2000 年三宅島噴火の被災者への面接調査から−：高鳥博正（帝京大学）【17 ページ】

スポーツ・生理
1A19. 競争心と心理的スキルとの関連に関する研究：種ケ嶋尚志（日本大学）【18 ページ】

2022 年 9 月 17 日（土）B セッション

フラッシュトーク　**11：50〜12：30【東 3 号館 2F 大講義室】**
ポスター発表　　**16：10〜16：50【60 周年記念館 2F セミナー室】**

教育・発達・人格
1B01. 「いい子願望」傾向がある者のいい子像に関する考察：関谷美希（日本女子大学）、村井あかり（日本女子大学）【19 ページ】
1B02. 中学生の将来志向性の特徴ー性差及び小学生と中学生との年齢差に着目してー：山上寛子（聖徳大学）【20 ページ】
1B03. 保育学生における＜気づき＞の促進要因；就業予期と効力感の視点から：山本睦（常葉大学）【21 ページ】
1B04. ロール・プレイングの可能性：時田学（日本大学）【22 ページ】
1B05. 特別支援教育における「児童虐待」との関係に関する研究（1）ー教職養成・保育士養成課程の学生等の意識等調査を中心としてー：石橋裕子（帝京科学大学）、林幸範（学研アカデミー保育士養成コース）【23 ページ】

臨床・福祉・相談
1B06. 経済的困難を抱える単身中高年男性の支援において相談員が感じる困難さの原因帰属と対処方略：村山陽（東京都健康長寿医療センター研究所）、山田耕平（社会福祉法人やまて福祉会）【24 ページ】

健康・看護・医療
1B07. 看護師に対する患者満足度を規定する要因について：稲野辺奈緒子（立正大学）、古屋健（立正大学）【25 ページ】
1B08. 新型コロナ禍下の子育て支援ー「抱っこ」から「あんよ」へー：佐々木美智子（志學館大学）【26 ページ】
1B09. 更生保護施設入所中の女性に対する「自分」に関するインタビュー前後の気分変化：小西奈美（京都橘大学）【27 ページ】

1B10. 大学生の妊孕性知識－性別、学部間の差を中心に－：抜田博子（帝京大学）、古屋健（立正大学）【28 ページ】

犯罪・社会・文化

1B11. 配偶におけるソシオメーターの検討：下田麻衣（京都ノートルダム女子大学）【29 ページ】
1B12. マスクの着脱が顔の魅力評価に及ぼす影響：笠置遊（立正大学）【30 ページ】
1B13. 特殊詐欺未然防止の検討３－特殊詐欺聴取時における生理反応・心理状態変化とそれに影響を及ぼす被害者の特徴－：宮原捺希（富士通株式会社）、近野恵（富士通株式会社）、吉岡隆宏（富士通株式会社）、井手健太（富士通株式会社）、紺野剛史（富士通株式会社）、桐生正幸（東洋大学）【31 ページ】
1B14. 特殊詐欺未然防止の検討４－特殊詐欺被害者に生じる心理変化の生理指標を活用した予測に関する検討－：井手健太（富士通株式会社）、紺野剛史（富士通株式会社）、近野恵（富士通株式会社）、宮原捺希（富士通株式会社）、吉岡隆宏（富士通株式会社）、桐生正幸（東洋大学）【32 ページ】
1B15. 美容意識/行動の違いによる QOL への影響：九島紀子（一般社団法人日本顔・印象コンサルティング協会）、長澤里絵（P&E 研究所）【33 ページ】
1B16. 中国語版 SNS ストレス尺度作成の試み：金嘉宸（大阪経済大学）、松田幸弘（大阪経済大学）【34 ページ】

産業・交通・災害

1B17. 発達障害者の教習に関する自動車教習所指導員の意識：東京都を対象として：小菅英恵（公益財団法人交通事故総合分析センター）【35 ページ】
1B18. 現場作業員への効果的な情報発信に関する検討－軽微な事故情報を記銘材料とした自己参照効果の検証－：小倉有紗（大阪大学、西日本旅客鉄道安全研究所）、中井宏（大阪大学）、秋保亮太（大阪大学）、和田一成（西日本旅客鉄道安全研究所）【36 ページ】
1B19. 自転車狭路走行中の頭部動作と眼球運動の関係：小嶋岳（筑波大学）、小松佳弘（筑波大学）、國部雅大（筑波大学）【37 ページ】
1B20. ネット炎上に関連する心理的要因があおり運転に及ぼす影響：森泉慎吾（帝塚山大学）、中井宏（大阪大学）【38 ページ】
1B21. 人命を軽視してきた職場から現代的意義を考える：宋其静（神奈川大学）【39 ページ】

スポーツ・生理

1B22. 大学剣道女子選手の試合前後における心理的変化：新里知佳野（日本体育大学）、古澤伸晃（日本体育大学）、八木沢誠（日本体育大学）、軽部幸浩（湘南医療大学）、藤田主一（日本体育大学）【40 ページ】
1B23. 球技スポーツ選手における非共同性眼球運動の特徴：國部雅大（筑波大学）、小松佳弘（筑波大学）【41 ページ】
1B24. 日体大版剣道イメージ尺度（NIKS）の作成（2）－ 抽出因子を探る－：古澤伸晃（日本体育大学）、新里知佳野（日本体育大学）、八木沢誠（日本体育大学）、軽部幸浩（湘南医療大学）、藤田主一（日本体育大学）【42 ページ】

2022 年 9 月 18 日（日）A セッション

フラッシュトーク　**09：30〜10：10【60 周年記念館 1F 記念ホール】**

ポスター発表　　**14：05〜14：45【60 周年記念館 2F セミナー室】**

教育・発達・人格

2A01. 修士課程進学における個人内要因としての知的好奇心・GRIT・批判的思考態度－私立工科系大学修士課程進学者と非進学者の比較による検討－：石田拓矢（目白大学）、庄司正実（目白大学）【43 ページ】

2A02. 中学生の道徳性の発達についての研究：大門耕平（東北学院大学）、来田宣幸（京都工芸繊大学）【44 ページ】

2A03. レジリエンスが大学生の自己困難認知に及ぼす影響：中山隼登（帝京大学）、宮里翔大（桜美林大学）、山村豊（帝京大学）【45 ページ】

2A04. 自己信頼性の育ちを大切にした教育の意義と可能性〜幼児期・児童期の自閉症の子どもたちへの実践を通して〜：塚田直也（筑波大学附属視覚特別支援学校）、田中真介（京都大学）【46 ページ】

2A05. 学級担任教師及び児童の自己開示が学校生活の適応に及ぼす影響：塚本伸一（東京未来大学）、三好力（秋草学園短期大学）【47 ページ】

臨床・福祉・相談

2A06. 組織社会化プロセスで発達障害者が抱える学習困難性の検討：渡辺めぐみ（常磐大学）、伊東昌子（成城大学）【48 ページ】

2A07. 障害者との共生に関する大学生の意識の変化：豊村和真（北星学園大学）【49 ページ】

健康・看護・医療

2A08. スポーツ・運動に対する態度と健康行動との関係：紙版シングルカテゴリーIAT と自己報告法を用いて：大橋恵（東京未来大学）、澤海崇文（流通経済大学）、藤後悦子（東京未来大学）、井梅由美子（東京未来大学）【50 ページ】

2A09. 清潔援助技術教育におけるジグソー学習法の学生の認識：中島正世（杏林大学）、橋本正子（杏林大学）、神宮寺陽子（杏林大学）【51 ページ】

犯罪・社会・文化

2A10. ブラック校則の遵守におけるアサーションスタイルの影響：三村陽南（東洋大学）、桐生正幸（東洋大学）、綱瞳美（東洋大学）、見城晴香（東洋大学）【52 ページ】

2A11. 嫌いな人物への対処行動とその後の感情の検討－嫌悪人物との関わりの程度による相違－：山田昂暉（帝塚山大学）、森下雄輔（帝塚山大学）、谷口淳一（帝塚山大学）【53 ページ】

2A12. 刑務所に対する近隣住民の態度分析: 美祢および島根あさひ社会復帰促進センター近隣住民への調査（2021 年実施）から：上瀬由美子（立正大学）【54 ページ】

2A13. 対人コミュニケーションにおける韓国の文化特定性の検討：援助行動を中心に：申知元（神田外語大学）【55 ページ】

2A14. 大学生は「百合」になにを求めるのか？：山岡重行（聖徳大学）【56 ページ】

産業・交通・災害

2A15. 災害伝承施設来館者の想いの変化－自由記述の分析－：静間健人（東日本大震災・原子力災害伝承館）【57 ページ】

2A16. 自然観察法による保護者と子どもの手つなぎ行動の要因検討：大谷亮（(一財) 日本自動車研究所）【58 ページ】
2A17. 新規学卒就職者のプロアクティブ行動に対する導入研修の役割：竹内倫和（学習院大学）【59 ページ】
2A18. 免許返納者と免許保有者における免許返納に対する意識の検討：太子のぞみ（日本学術振興会、同志社大学）、金山英莉花（同志社大学）、内山伊知郎（同志社大学）【60 ページ】

原理・認知・感情

2A19. 2 色（前面色・背景色）の関係を「怒り感情」を持つイラストから考える：下平晃道（京都工芸繊維大学）、来田宣幸（京都工芸繊維大学）【61 ページ】
2A20. 視覚情報処理に基づく識別技術習得のために：関陽子（科学警察研究所）【62 ページ】

2A21. 反応スタイルと Satisfice の関係性を探る：Web 調査での回答モニターおよび学生の回答行動の比較を通して：田崎勝也（青山学院大学）【63 ページ】

2022 年 9 月 18 日（日）B セッション

フラッシュトーク　**13：15～13：55【60 周年記念館 1F 記念ホール】**
ポスター発表　　**16：05～16：45【60 周年記念館 2F セミナー室】**

教育・発達・人格

2B01. 自己信頼性と社会的交流性の発達をとらえた保育・療育－自画像描画と対図形画の事例検討をもとに－：田中真介（京都大学）、横井川美佳（京都大学、日本学術振興会）、本原琴美（京都大学）【64 ページ】
2B02. 看護学生と理系大学生の向社会的行動の比較検討：八木利香（一般社団法人狭山市医師会立狭山准看護学校）、木村たき子（コンピタンス心理センター埼玉）【65 ページ】
2B03. 離乳食場面における父子および母子の情動表出と子どものアタッチメント安定性との関連：福田佳織（東洋学園大学）、尾形和男（埼玉学園大学）、森下葉子（文京学院大学）【66 ページ】
2B04. 思春期における「自己信頼性」と「社会的交流性」の発達連関－自己理解と精神的健康度の関連性をもとに－：本原琴美（京都大学）、田中真介（京都大学）【67 ページ】
2B05. 絵本の読み聞かせにおけるマザリーズと年長児の物語産出の関連：金山英莉花（同志社大学）、太子のぞみ（独立行政法人日本学術振興会、同志社大学）、内山伊知郎（同志社大学）【68 ページ】

臨床・福祉・相談

2B06. 障がい児の保護者における発達支援事業の満足度と療育効果－広島県の通所型施設における予備的検討－：木村友昭（一般財団法人 MOA 健康科学センター）【69 ページ】
2B07. コロナ禍における大学生のストレス反応と思い－KH Coder による自由記述分析を中心に－：有木永子（日本大学）、伊坂裕子（日本大学）【70 ページ】
2B08. 催眠についてのイメージと催眠態度の対応関係の性差 その 3－一般的な利用可能性のテキスト・マイニング分析－：中谷智美（甲南大学）、福井義一（甲南大学）、今井田貴裕（人間環境大学）、磯和壮太朗（名古屋芸術大学）、堀孝司（甲南大学）、大浦真一（東海学院大学）【71 ページ】

2B09. 心理カウンセリングの利用状況と利用意向－コロナ禍での比較：岩崎和子（京都工芸繊維大学）【72 ページ】

健康・看護・医療

2B10. 育児中女性の健康増進および心理的ウェルビーイング向上を目的としたメンタルトレーニングの効果検証（ランダム化比較試験）：島田恭子（東洋大学）、染矢瑞枝（一般社団法人ココロバランス研究所）、桐生正幸（東洋大学）【73 ページ】

2B11. 首尾一貫感覚と関連があるライフスタイル因子の探索について：内田誠也（一般財団法人 MOA 健康科学センター）、田中英明（一般財団法人 MOA 健康科学センター）【74 ページ】

犯罪・社会・文化

2B12. 災害による地域文化の変容と喪失 —2000 年三宅島噴火の被災者への面接調査からの検討と考察—：大森哲至（帝京大学）、尹成秀（帝京大学）、大下茂（帝京大学）、田宮憲（帝京短期大学）【75 ページ】

2B13. SNS へのポジティブ/ネガティブな投稿と幸福感との関連－自己隠蔽度の調整効果－：谷口淳一（帝塚山大学）【76 ページ】

2B14. 保育現場における職員間コミュニケーションを円滑にするための工夫：日向野智子（東京未来大学）、磯友輝子（東京未来大学）、藤後悦子（東京未来大学）、髙橋一公（東京未来大学）、角山剛（東京未来大学）【77 ページ】

2B15. ソーシャルメディアのリテラシー教育の取り組み－高校生と大学生の相互作用を通して－：富田瑛智（関西国際大学）【78 ページ】

2B16. 逸脱行動の抑制要因についての検討：見城晴香（東洋大学）、綱疇美（東洋大学）、三村陽南（東洋大学）、桐生正幸（東洋大学）【79 ページ】

2B17. 孤独感と攻撃行動の関連について：綱疇美（東洋大学）、桐生正幸（東洋大学）、三村陽南（東洋大学）、見城晴香（東洋大学）【80 ページ】

産業・交通・災害

2B18. 社会人基礎力アセスメント尺度の開発の試み－新卒求職者による経済産業省版社会人基礎力の認識と求人者が求める社会人基礎力との異同を明らかにするために－：長内優樹（合同会社セカンダリー）、内間望（目白大学）【81 ページ】

2B19. 広告における帰属誘導型両面的説得の効果：濱保久（北星学園大学）【82 ページ】

2B20. 単路部における歩行者の斜め横断の危険性：矢野伸裕（科学警察研究所）【83 ページ】

2B21. 新入社員の縦断的研究による職場における silence 発生過程の検討：松本友一郎（中京大学）、吉田琢哉（岐阜聖徳学園大学）【84 ページ】

原理・認知・感情

2B22. 親和図法を用いた都市イメージに関する検討～女子サッカーチムのホームタウンを対象として～：桑原大空（桐蔭横浜大学）、亀岡聖朗（桐蔭横浜大学）【85 ページ】

2B23. 高嶋正士と偉大性心理学－鎌倉時代に生きた親鸞聖人の偉大性について－：藤田主一（日本体育大学）【86 ページ】

自主企画発表

2022 年 9 月 18 日（日）

「幼児期・児童期・青年期での自己信頼性の発達診断と保育・教育」企画者・司会者：田中真介（京都大学）、話題提供者：塚田直也（筑波大学附属特別支援学校）、本原琴美（京都大学）、横井川美佳（京都大学、日本学術振興会）【87 ページ】

2022 年 9 月 18 日（日）

「企業における心理データを活用した応用研究～心理学と AI のコンバージングテクノロジー～」企画者・司会者：紺野剛史（富士通株式会社）、話題提供者：近野恵（富士通株式会社）、陽奥幸宏（富士通株式会社）、沢田秀司（順天堂大学）、桐生正幸（東洋大学）【88 ページ】

オンデマンド動画

「読書と自然、そのカウンセリングにおける役割：読書カウンセリング、森林を活用したカウンセリングやメンタルヘルスとは？」企画者・司会者：林潔（白梅学園短期大学）話題提供者：平宮正志（神田外語大学）、竹内啓恵（樹づ木合同会社・東京農業大学）【89 ページ】

教育発表セッション

ポスター発表

2022 年 9 月 17 日（土）13：40～14：20【60 周年記念館 2F セミナー室】

1 教育 01. Instagram の自撮り投稿への「いいね」の多少が自己愛に及ぼす影響：坂本茅杜、江尻尚生、西川由梨（帝塚山大学）【91 ページ】

1 教育 02. 浮気行動に対する許容度の大学生と社会人の相違：大西将宗、今津尚美、坂口明日香、橋本美優（帝塚山大学）【92 ページ】

1 教育 03. 体育系大学生における認知的方略と心理的競技能力の関連性について：二見優水（日本大学）【93 ページ】

ポスター発表

2022 年 9 月 18 日（日）14：05～14：45【60 周年記念館 2F セミナー室】

2 教育 01. その問題、心理の専門家に相談しますか？ その 1－Yahoo!知恵袋における「メンタルヘルス」カテゴリーの質問の分析－：澤田戒、福井義一（甲南大学）【94 ページ】

2 教育 02. 拡張版コンテイナー・テクニックのストレス低減効果－その予備的検討－：上田彩葉、福井義一（甲南大学）

2 教育 03. 同性の友人関係における束縛行動の性差の検討：芦賀啓太、石川恵梨奈、中林文香（日本大学）【95 ページ】

2 教育 04. テレワークはなぜ浸透しないのか：河崎百花、小田中美紅、山本怜実（日本大学）【96 ページ】

オンデマンド動画

3 教育 01. 大学生の対面とオンライン状況における「空気」を読めない言動への対処行動：千年珠子、栗飯原果南、中田愛実（日本大学）【97 ページ】

3 教育 02. 大学生における、SNS 利用を目的とした食べ残し傾向と性格特性の関連の検討：石川智也、郭慧都、金岡百々（日本大学）【98 ページ】

3 教育 03. 大学生の就職活動不安が就職活動関与度に及ぼす影響：田村清志郎、但馬宏直、内木咲楽（日本大学）【99 ページ】

一般研究発表

発達に支援が必要な子どもたちとのポジティブな経験の重要性

—保育施設・療育施設へのアンケート調査をもとに—

○横井川美佳[1]　田中真介[2]
([1]京都大学大学院人間・環境学研究科、日本学術振興会　[2]京都大学国際高等教育院)

キーワード：幼児期の発達支援、ポジティブ経験、保育・療育

【目的】発達に支援が必要な子どもたちとの関わりでは、支援者がポジティブな経験を積み重ね、日々の保育・療育に生かしていくことが重要となる。支援者が経験したポジティブなエピソードを調査し、所属施設による違いや経験年数との関連をもとに、支援者にとって重要な経験内容を検討した。

【方法】保育施設3か園、療育施設7施設の支援者を対象に質問紙調査を行った。「発達に支援が必要な子どもたちへの支援において、ポジティブな経験のエピソードを3つ教えてください」との質問への回答をKH coderによるテキストマイニング及び質的分析方法であるSteps for Coding and Theorization（SCAT）を用いて分析した。

【結果と考察】保育施設72名、療育施設67名の合計139名から回答を得た（回収率58.1%）。属性を表1に示す。

表1. 回答者の属性

経験年数	1	2〜5	6〜10	11〜20	21〜	計（人）
保育施設	5	34	14	12	7	72
療育施設	3	25	19	14	6	67
総計	8	59	33	26	13	139

〔テキストマイニングによる分析〕所属施設による違いについて、KH coderによる対応分析を行った（図1）。保育施設では「落ち着く」「毎日」「クラス」「友達」が、療育施設では「関係」「考える」「保護者」が特徴的な語として示された。各語からエピソードを遡ると、保育では①子どもの気持ちが落ち着く、②クラスや集団への参加、③友だちとのやりとり、療育施設では①子どもとの信頼関係の構築、②子どものことを知ること、③保護者との共感、といった観点からエピソードが書かれていた。経験内容が重要な語句を用いて記述され、それが施設の特徴や役割をよく表していた。

経験による違いを共起ネットワークで分析した（図2）。経験年数を経るにしたがって、①一時点での子ども単独の姿から、②子どもと支援者の二者間の関係性や子どもの発達的な変化、さらに③子どもと集団のあり方や支援方法の手応えなど、関係性や時間的変化をとらえた俯瞰的なエピソードへと経験内容が豊かになっていた。子ども理解の深まりにより、様々な角度から子どもたちとの関わりをポジティブな経験と捉えられるようになることが示唆される。

〔SCATよる分析〕エピソードの質的分析のために、SCATを自由記述向けに改変した。各回答を切片化したうえで、グループ化して概念化を行い、以下の4つの【概念】を抽出した。**【①子どもの姿の変化】**期間を経て感じる成長／能力的な変化／行動の切り替え／他児との関わり・集団参加／気持ちの落ち着き／子どもからの言葉や発信／遊びの広がり／笑顔・良い表情への変化。**【②支援者の熟達化】**子どもの要求・思いの理解／好きな遊びの発見・提案／発達的理解の実感／モットー・心がけ／支援からの気づき・省察。**【③子ども－支援者の関係性構築】**一緒に乗り越える・広がる／楽しさ・嬉しさの共有／名前を呼ばれる／「重要な他者」としての実感。**【④理解・共感の広がり】**保護者との共感／地域・他施設との連携、などである。

SCATによる質的な分析では、語としては現れない無意識的な普遍的内容を4つの概念として抽出できた。子どもや支援者単独の視点にとどまらず、子どもとの関係性構築や理解・共感の広がりといった「つながり」が表現されていた。どの概念においても、子どもからの発信や遊びの広がり、楽しさ・嬉しさの共有など、内面的な「自我の育ち」の実感が記述されていた。乳幼児期の発達支援では、行動面での変化以上に、子どもたち自身が「思い」や「願い」を発信し、支援者がそれを受け取ること、そしてそれが可能な関係性になることが重要な視点となっていた。また「私を頼ってくれた」といった「重要な他者」としての実感は、属性によらず多かった。他の誰でもない「私」を価値づけられる経験は、支援者自身の自己信頼性を高める重要な経験と言えよう。

【保育・療育への示唆】発達に支援が必要な子どもたちと関わる際、支援者は子どもたちが表現する多様なネガティブな行為の意味が「わからない」という場面に多く直面する。保育者・支援者の熟達化においては、「わからない」ことを「わかる」ようにすることに重きを置かれがちであるが、本研究の結果から、まず子どもたちと関係性を築き、一人一人の子どもたちの思いと気持ちを共感的に受けとめて、保育・療育実践の中で手応えを感じられるポジティブな経験を積み重ねることの重要性が示唆される。それらの経験に発達的な意味づけをすることが、子どもたちの発達の水準と特質をとらえた保育・療育を実践する力量を高めるために必要であろう。

保育者や療育支援者は子ども理解を深めて保育・療育の力量を高めていく。子どもたちの発達を支援する保育・療育では、子どもたちの表面的な行動のみに目を向けるのではなく、特に自我・自己信頼性の育ちの発達的理解を深めるとともに、子どもたちと相互を尊重する関係性を築き、支援者自身の自己信頼性を高めていくことが重要と考える。

*本研究は日本応用心理学会2021年度若手会員研究奨励賞による研究助成を受けた。

（よこいがわみか・たなかしんすけ）

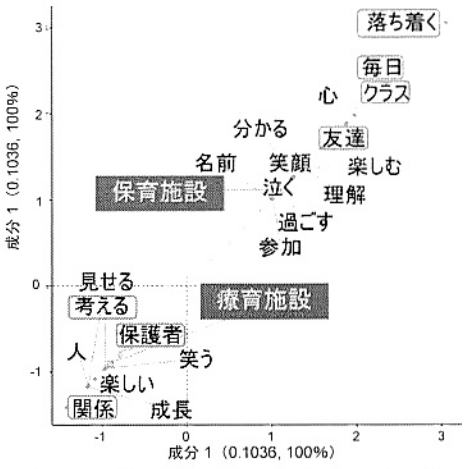


図1　ポジティブ経験：施設での違い（対応分析）

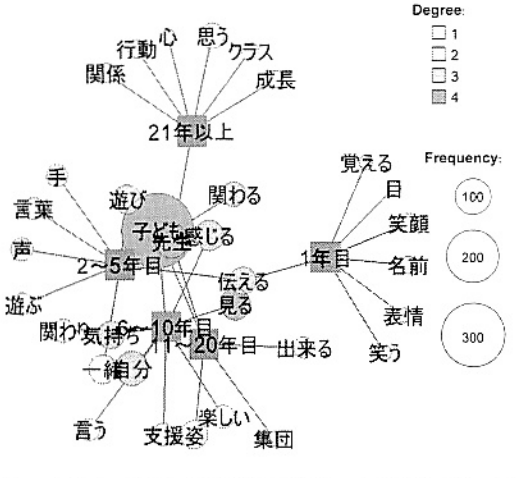


図2　ポジティブ経験：経験年数での違い（共起ネットワーク）

日本人用の well-being 尺度の作成

アニーシャ　ニシャート
（創価大学教育学部）

キーワード：日本，well-being，他者からの肯定的評価，役立ち感

【目　的】

本研究では，日本人の多様な年齢層の成人を対象にして，日本人が考え，イメージする幸福感がどのようなものであるかを把握し，それに基づいて日本人の well-being を測定するための尺度を作成，実施し，日本人の well-being の特徴と構造について確認する。

【方　法】

1．実施尺度：

(1) well-being に関する質問項目の作成と実施：質問項目を作成するために，まず，首都圏の私立大学の通信教育部に在籍する日本人の社会人学生 214 名を対象にして，「幸福とは何か」「どのようなときに幸福を感じるか」について自由記述を求め，そこで得られた日本人が考え，イメージする幸福感に関する内容を踏まえて，日本人の well-being を測定するための質問項目を抽出した。自由記述から得られた内容を KJ 法により分類し「肯定的な感情」「興味・関心」「他者からの評価」「自己成長」「人生の意義」の 5 つのカテゴリーが生成された。これらのカテゴリーに基づいて計 28 項目を作成し，これを暫定的な日本人向け well-being 尺度とした。

(2) レジリエンス尺度：齊藤・岡安(2010)が作成したレジリエンス尺度を用いて収束的妥当性を検討した。

2．実施期日：2018 年 12 月。

3．調査対象：都内の私立 3 大学の 1～4 年生計 894 名(男子 454 名，女子 440 名)を分析対象とした。

【結　果】

(1) 日本人の well-being の尺度の因子的妥当性の検討

日本人の well-being の特徴を明らかにするために，全 28 項目の得点に基づいて因子分析を行った結果，4 因子計 18 項目が抽出され，これを本尺度とした。第 1 因子は，「目標を見つけることができて満足している」「自分が成長していると感じる」など，人生の満足感や心身の健康に関する項目で構成され，「人生の充実感」因子と名づけた。第 2 因子は「周りから感謝されて幸せな気持ちになったことがある」「人から良く評価されてうれしい気持ちになったことがある」などで構成され，「他者からの肯定的評価」因子と名づけた。第 3 因子は「勉強面で，集中できている」「満足のいく学業成績が修められている」など 3 項目で構成されることから，「成就・達成感」因子と名づけた。第 4 因子は，「人に好かれていると思う」「人のために役立っているとは思わない(反転項目)」の項目で構成され，「役立ち感」因子と名づけた。

(2) 信頼性の検討

下位尺度における内的整合性を調べるために，Cronbach の α 係数を算出したところ，第 1 因子「人生の充実感」については α = .81，第 2 因子「他者からの肯定的評価」については α = .80，第 3 因子「成就・達成感」については α = .64，第 4 因子「役立ち感」については α = .70 という値が得られ，一定の内部一貫性があると判断された。さらに，Guttman の折半法信頼性係数を算出したところ，「人生の充実感」において.82，「他者からの肯定的評価」において.80，「成就・達成感」において.67，「役立ち感」において.73 と高い値であった。

(3) 収束的妥当性の検討

収束的妥当性を検討するために，齊藤・岡安(2010)が作成したレジリエンス尺度との間の Pearson の積率相関係数を算出した。その結果，レジリエンス尺度の下位尺度との間で中～高程度の有意な正の相関が認められ(r=.10～.67)，収束的妥当性が確認された。

考察

本研究では，日本人の well-being の構成要素として，「人生の充実感」「他者からの肯定的評価」「成就・達成感」「役立ち感」の 4 因子が抽出された。このうち人生の目標の発見や自身の成長感，精神的健康への自信に関する「人生の充実感」因子は，Ryff (1995)の心理的 well-being 尺度や Seligman (2011)の well-being 概念(PERMA)の一つである「ポジティブ感情」と基本的に一致する因子であると考えられる。こうした「人生の充実感」因子は，日本人だけでなく，他の国の人々にも共通した因子であると考えられる。また，「成就・達成感」因子は，Seligman (2011) が指摘している well-being 概念の構成要素の一つである「達成感」と深く関連するものであり，従来の研究にもみられる well-being の特徴であるといえる。

これに対して，本研究で抽出された「他者からの肯定的評価」因子や「役立ち感」因子は，Uchida & Kitayama (2009)の研究が示すように，幸福を社会的調和と関連づける日本人の感情を示しており，本研究を通じて，日本人に特有の well-being の要因として抽出されたことは有意義であり，日本人の幸福感への理解を深めていく上で，一つの手がかりを与えてくれるものと考えられる。

「他者からの肯定的評価」や「役立ち感」に象徴される日本人の well-being 感については，島井(2009，pp.22-23，30)もまた，「人間は集団の一員であり，そこに受け入れられていることがその本人の自尊心を高める働きを持つことも間違いない」とまた，集団主義的な文化においては，その文化に対応した内容の自己評価は，幸福感につながると考えられる」と述べている。このように，「他者からの肯定的評価」や「役立ち感」は，集団の中で生成されるものであり，集団から受け入れられているという意識や充実感と深くかかわっていると考えられる。

言い換えれば，それは，「他人との接触の中で絶えず自己を見つめている」という作業であり，「受け身で受容的な日本人」(内村，1995)の特徴でもあり，日本人の well-being の確立の上で重要な土台となっている。

内田(2012)は，欧米で策定された尺度で日本人の幸福度を測定し，平均値だけを比較して日本人の幸福度が低いと結論づけても，本当の結果は得られないと指摘し，人々の幸福の本当の意味を探るためには，その背景にある「文化的な幸福観」を理解する必要があると指摘している。

さらに，土居(1975)が，「気にする心理」について，「日本人のほとんど誰もが持っている極めてありふれた心理であり，非常にデリケートな心理である」と示唆しているように，日本人の well-being の構成要因としての「他者からの肯定的評価」や「役立ち感」は，受け身的で，「他者の存在」や「集団」を過剰なまでに意識する日本人の文化的土壌とも深く結びついているとも考えられる。こうした日本人の「気にする心理」は，肯定的な側面では，他者への気遣いや貢献感，奉仕的精神とも関連してこよう。

部活動指導におけるケガ防止プログラムの効果の検証

○伊藤将史[1]　大門耕平[2]　来田宣幸[3]　山本ちさと[4]

([1]近江兄弟社高等学校　[2]東北学院大学　[3]京都工芸繊維大学　[4]丸太町リハビリステーションクリニック)

キーワード：部活動、予防医療、オンライン診察、バレーボール

【目的】スポーツ庁は平成30年に「運動部活動の在り方に関する総合定なガイドラン」を策定し、その前文において、部活動の教育的意義の大きさを提示しながらも、「教育等に関わる課題が複雑化・多様化し、学校や教師だけでは解決することができない課題が増えている。」、「各自のニーズに応じた運動・スポーツを行うことができるよう、速やかに、運動部活動の在り方に関し、抜本的な改革に取り組む必要がある。」と指摘し、部活動指導に外部の支援を取り入れること、生徒個々のニーズに応じた支援を実現することの必要性を提言している。

しかしながら、部活動指導において外部の機関と連携することは、実践例、効果の検証が少ないという問題、そして、費用的な問題もあり実現が進んでいないという課題がある。また、顧問においても、多忙な教師としての働きに加え、新しい体制を構築することはさらなる負担を生むという課題がある。

そこで、これらの課題を解決することを目的として、高等学校における部活動指導を支援する体制を提供し、実践とその効果の検証を行うことをこの研究の目的とした。この研究により、スポーツ庁の提言を進めるための事例を提供することができると考える。

顧問のみでの指導における課題を次のものとした。

1. 医療について専門的な支援の欠如。
2. 医療機関と顧問との連携の欠如。
3. 個々の身体状態の把握と個別支援の欠如。

外部団体の部活動への参与における課題を次のものとした。

1. 診察以外での生徒とのかかわりの機会がない。
2. 顧問との連携ができない。
3. 定期的な身体状況の把握ができない。

これらの課題を解決するために、筆者らは、高等学校バレーボール部の指導において、丸太町リハビリステーションクリニックとの連携を構築し、外部の支援を取り入れること、個々のニーズに応じた支援を2019年より継続してきた。

【方法】

参加者

近畿にある私立高校女子バレー部の生徒が参加した。

支援プログラムの内容

1. 2021年4月にメディカル・フィジカルチェックを16名の生徒に実施し、アンケートを回収した。
2. 週に1回のセルフチェックを実施し、google formで回収し、顧問、理学療法士で共有した。
3. セルフチェックをもとに、理学療法士より心配な生徒の抽出、個別メニューの提案をおこなった。
4. オンラインで生徒と理学療法士をつなぎ、身体についての相談する機会を設けた。
5. 顧問と理学療法士が連携し、診察の必要性、リハビリのプログラムと期間などについて相談した。

【結果】

1.メディカル・フィジカルチェックについてのアンケート

「①バレー歴」、「②痛みが原因で全力でプレーができなくても部活動を3日以上続けた経験の有無」、「③今後の1年間で痛みが生じて部活動を3日以上続けてできなくなるという不安の有無」、「④メディカル・フィジカルチェックの印象（4件法）」を回収した。

また、メディカル・フィジカルチェックの印象についての自由記述においては、「自分の体のこと（弱さ、強さ）について知ることができた。」という内容の記述が13名あった。

① バレー歴	7.6年			
② ケガでも部活を続けた経験	あり	16名	なし	0名
③ 今後1年間での不安	あり	14名	なし	2名
④ メディカル・フィジカルチェックの印象	とてもよかった	よかった	あまりよくなかった	よくなかった
	9名	5名	1名	1名

2.顧問の立場からの見解

・日常の怪我について、専門の方の判断をすぐに、直接、相談できることで、練習、大会参加の是非、医師の診断が必要かの見極めなどにおいて、生徒も顧問も迷うことなく判断できることが利点として挙げられる。

・週に1回のチェックについては、痛みの進行度合いを見ながら、練習内容の振り返り、トレーニング内容の決定をすることにつなげることができた。

・高校入学間もない新入生のメディカルチェックについては、練習強度が大きくなる高校での練習に向けて、予防すること、強化することなどの判断の資料となった。

・全てにおいて、普段の活動は個人別の内容というのは少ない状況になるが、この取り組みによって、個人の視点に立って、個々の生徒が自分の強みや弱みを知ることができ、また、それに伴って、生徒自身が自分は何をすべきかを判断し、考え、活動することにつなげることができた。

3.理学療法士の立場からの見解

・通常痛みが強くなった時点で病院に受診することが多いが、セルフチェックやオンラインで状況の確認を行うことで、定期的な身体の状態を確認することができ、早期の受診を促すことができた。

・定期的にチェックをすることで、選手について顧問と共有することができ、コミュニケーションをとることができた。

・個別メニューの指導について、その後の経過や痛みの状態が追いにくいことが一つの課題となった。

・オンラインでは距離や時間の問題を解決することはできたが、それのみで十分なチェックを行うことは困難である。顧問と連携し、練習状態の確認を行うことの重要性も明らかとなった。

【考察】この研究では、部活動指導における外部機関との連携の実践とその検証をおこなった。その結果、生徒においては、ケガをすることへの心配を抱えている生徒、そして、ケガをしても練習を続けた経験のある生徒が大変を占めており、ケガ防止プログラムの必要性が明らかになった。そして、メディカル・フィジカルチェックの感想として、「自分の体のことを知ることができた」が多くの生徒から得られたことは、定期的な専門性の機関とのかかわりを持つことが、生徒のケガへの不安、ケガの予防を防ぐことにつながると考えることができる。また、顧問、および、理学療法士の見解からは、継続的な支援の難しさやオンラインでの支援の課題が挙げられたが、顧問と理学療法士が生徒情報を共有し、個々の生徒の状態に応じた支援を行うことが部活動指導において、有益なものとなる可能性が示された。

（いとうまさし・おおかどこうへい・きだのりゆき・やまもとちさと）

理科の実験場面における指導の内容が操作パフォーマンスに与える影響

○辻井　寿典[1]　来田　宣幸[2]
([1]大阪大学蛋白質研究所　[2]京都工芸繊維大学)
キーワード：指導、教示、操作パフォーマンス

【目的】

理科の実験場面において､技術指導､実験業務の引継ぎ等、実施する際は教科書、指導書、マニュアル等を参考にした操作が行われている。対面で直接指導を行う場合は、指導を受ける側の反応を指導者が観察することが容易であるが、文章での指導やリモートでの指導等の場合は、指導に対する反応を観察することが困難となる。そこで、本研究では指導の内容について注目し、操作前に教示を行うことにより、操作パフォーマンスに影響を与えるのか、指導内容と操作パフォーマンスに関連があるのかを明らかにすることを目的とする。

【方法】

実験対象者：パイロット実験として1名を対象とした。使用道具：ビーカー、1.5mL チューブ、スポイト、水を用いた。内容：紙に提示された教示を読み、その教示に従って、ビーカーから 1.5mL チューブへスポイトを使用して、水 1mL を移した。これを1試行とした。条件：実験操作のばらつきを評価するために、教示1回に対する操作回数が1回と5回連続繰り返す、連続操作回数検討の条件、教示を出す順がA→B→C、A→C→B、B→A→C のように順を組み替えて全通り行ったものと、A→B→C を順に繰り返す、教示の提示順序検討の条件、1教示の合計操作回数が5回、7回、30回の合計操作回数検討の条件をそれぞれ実施した。教示の内容：教示は「○○、してください」、「○○、吸い込むようにしてください」「○○、吐き出すようにしてください」で実施した。○○には「正確に」「慎重に」等の教示を入れた。データの取得方法：水を測り取る正確性、精度を評価するために、小数点第2位まで秤量できる電子天秤を使用し、水 1 mL を 1.00g とし、移した水の量を秤量した。

【結果および考察】

1）実験条件の検討

設定値 1.00 g からの差の絶対値を操作の誤差とし、条件ごとに各操作のばらつきを標準偏差の平均として求めた。

教示1回に対する操作回数の違いが与える影響：1回の条件でのばらつきは 0.0193 ± 0.0139 g、5回連続した条件では 0.0137 ± 0.0046 g であった。

教示を出す順の違いが与える影響：教示1回に対する操作回数が1回のデータで比較を行った。順を組み替えて全通り行った条件のばらつきは 0.0191 ± 0.0070 g、繰り返す条件では 0.0193 ± 0.0147 g であった。

1教示の合計操作回数の違いが与える影響：教示1回に対する操作回数が1回のデータで比較を行った。合計操作回数5回のばらつきは 0.0217 ± 0.0154 g､7回は 0.0103 ± 0.0055 g、30回は 0.0191 ± 0.0070 g であった。

実際の理科の実験現場では1つの教示に対して1回の操作、連続した操作共に想定される操作である。今回の実験では1教示に対して連続5回操作を行った条件の方が、ばらつきの少ない結果が得られた。したがって、今後は5回連続等の繰り返し操作を行う条件で検討を行うことが望ましいと考えられる。今回は、ばらつきに差はあるが、大きく差があるわけではないため、1教示に対する操作回数1回での結果も用いることとした。教示を出す順は、教示の順を全通り行ったものと、同じ順を繰り返したものに結果のばらつきの差がみられなかったため、実験の条件の設定しやすい同じ順を繰り返したもので検討を行う。操作回数は5回から7回と増やすことにより操作のばらつきは小さくなったが､7回から30回へと回数を増やすとばらつきが大きくなった。回数については今後、検討を行うことが望ましい。

2）教示内容と操作パフォーマンスの関連

操作の中の1つのポイントへ意識を向ける教示である「○○、吸い込むようにしてください」「○○、吐き出すようにしてください」､意識を向けるポイントを指定しない教示である「○○、してください」で、操作の正確性を設定値 1.00 g からの差により比較を行った。

図1に示したようにスポイトで水を測り取る分注操作は、教示の「○○、吐き出すようにしてください」よりも「○○、吸い込むようにしてください」の方が正確な操作ができる結果であった。吸い込み時に目盛りを合わせるという操作が含まれるため、吸い込み時に意識を向ける教示で正確な操作となったと考えられる。

図2に示したように「正確に」は、意識するポイントを指定しない「してください」の誤差の平均値は 0.013 ± 0.005 g、「吸い込むようにしてください」は 0.020 ± 0.011 g、「吐き出すようにしてください」は 0.038 ± 0.044 g であった。「正確に」では意識するポイントを指定しない「してください」の教示での操作で誤差が小さくなった。「慎重に」では意識するポイントの教示の条件間の大きな差はみられなかった。

教示内容「正確に」では意識をするポイントを指定しない教示で誤差の少ない操作となった結果が得られた。ポイントを指定しない教示の方が全体を意識できるため、誤差の少ない操作となった可能性が考えられる。また、今回の操作が単純なものであったため、シンプルな教示は全体を意識することが容易であった可能性も考えられる。

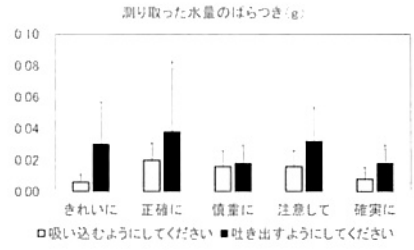


図1「吸い込むように」「吐き出すように」の教示の比較

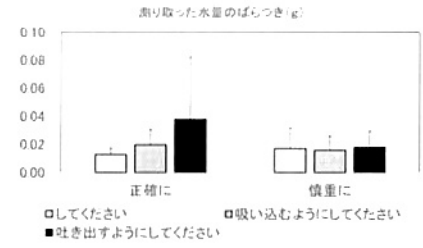


図2 意識を向ける教示と向けない教示の比較

（つじい　としのり・きだ　のりゆき）

管楽器指導者の発話内容要素に関する研究

高校吹奏楽部の事例的検討

○飯田響一[1]　来田宣幸[2]
([1]京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科　[2]京都工芸繊維大学)

キーワード：吹奏楽，指導者，KJ法，わざ言語

【目的】

先日，運動部活動の地域移行に関する検討会議において，公立中学校等の運動部活動を段階的に地域移行していく旨の提言が取りまとめられた。現在この提言は運動部活動のみに限定されているが，今後この流れは吹奏楽部をはじめとした文化部活動にも波及すると考えられる。しかし，吹奏楽をはじめとした音楽の指導は非常に難しいことが一般に知られている。また別の側面として，吹奏楽指導者が上達するためにはひたすら経験を積むしかないと一般に捉えられている。以上から，スムーズな地域移行を達成するためには，優れた指導者の指導を分析することで，指導者の上達のステップを示し，地域と顧問の指導力のギャップを埋める必要があると考えた。今回はその最初の段階として，既に上級レベルである管楽器の演奏指導の分類をおこなうことで，指導のポイントの傾向把握および体系化をめざすことを目的とした。

【方法】公立A高等学校（以下A高校）吹奏楽部および吹奏楽部顧問であるB氏を対象とした。2021年5月4日から30日までの計6日程11回の合奏練習を対象とし，ビデオカメラを用いて練習風景を記録した。通常の合奏練習をおこなうよう指示し，基礎合奏が4日程7回，楽曲合奏が2日程4回であった。記録した映像や音声をもとに，B氏が合奏練習中におこなった指導内容を文字起こしし，KJ法により分類した。発話内容は，意味合いが変わらない程度に簡略化をおこなったうえでまとめた。

【結果および考察】6日間の合奏練習の内容を表1に示した。練習時間に対する指導時間の割合（以下「指導割合」）の6日間平均はおよそ40%であった。菅（2012）による研究では吹奏楽での指導割合は60%～80%程度であり，B氏の指導割合は低い値であった。後日実施したインタビュー調査において，B氏は，スキルや価値観は指導者が強制するものではなく，生徒自身が見つけていくものであり，その引き出しを与えるのが指導だと述べていた。正解を多く語りすぎず，ヒントだけにとどめるという考えが，指導割合にも反映されたと考えられる。

1回の指導単位あたりの練習時間は2.50分間であった。

表1　各調査日の合奏練習内容

練習内容	練習時間（分）	指導時間（分）	指導割合	指導単位数（個）	平均指導時間（分/個）
基礎	21	9	0.429	10	2.10
	20	10	0.500	12	1.67
	20	7	0.350	15	1.33
	19	6	0.316	7	2.71
	31	13	0.419	10	3.10
	30	10	0.333	10	3.00
	34	12	0.353	12	2.83
楽曲	42	19	0.452	16	2.63
	44	20	0.455	12	3.67
	40	15	0.375	13	3.08
	42	17	0.405	20	2.10
合計	343	138	0.402	137	2.50

菅（2009）の研究では1.02分間であり，B氏の練習時間は長い値であった。実施時期の相違が影響を与えた可能性もあるが，B氏の指導単位あたりの練習時間はかなり長く，非効率的な指導と評価することもできる。しかし，B氏は，指導において，楽譜の当該箇所を歌唱し，指導内容の補助としていた。これは，歌を用いることで，言葉で説明した指導の模範を示すとともに，言葉では表現しきれない細かなニュアンスを伝えようとしたと考えられ，生徒の理解を深めるために必要な手段であったと考えられる。

指導単位は，KJ法により14の指導ポイントに整理できた。14の指導ポイントは身体的指導，心理的指導，知識的指導の3つの指導カテゴリーに分類された。各カテゴリーは複数のサブカテゴリーに分類でき，表2のように命名した。このうち，心理的指導は，スポーツ場面で用いられるカテゴリーと一致し，管楽器演奏とスポーツの指導における心理的指導の関連が示された。また，身体的指導と心理的指導はすべての日程でみられた。楽器演奏は身体動作により表現される芸術活動であるが，身体的指導のみではなく，心理的な指導もおこなうことの重要性がうかがわれた。

B氏の指導内容は，主に心理的指導において，「『先生は自分の耳』。周りの音を感じて耳で聞いて合わせる。」など独特の言葉や比喩表現を多用する傾向がみられた。このような表現は，通常とは異なる特殊な言語であり，生田（2000）は「わざ言語」と呼んでいる。音はすなわち空気の振動であるため，身体動作のように目に見えるものではない。可視化するにはオシロスコープなどのような特殊な機材を用いなければならず，一般人が視覚的に判別することは容易ではない。そのため，視覚的に認識しやすい比喩などに置き換えて説明したと考えられる。

表2　指導単位のカテゴリー分類とその構造

カテゴリー	サブカテゴリー	指導ポイント	個数	内容
身体的指導	個人スキル	姿勢	19	演奏時の姿勢や身体全体の使い方
		タンギング	15	発音、口腔内関連
		ブレス	9	呼気制御、呼吸関連
	集団スキル	和音制御	10	和音形成(知識を含む)
		テンポキープ	9	タイミングを揃える
心理的指導	意欲・動機付け	意欲・動機付け	13	練習に対する心構え
	集中力	選択的集中力	8	演奏時に意識する項目は取捨選択せよ
		積極的集中力	2	何も考えず演奏するな
		聴覚的集中力	6	聴くことの重要性を説く
	作戦能力	本番意識	6	本番に対する意識・考え方
		自己フィードバック	2	演奏音のフィードバック
知識的指導		楽曲知識教授	18	楽曲分析を基にした改善策
		楽曲分析促進	11	楽曲分析の重要性を説く
		困難対応	9	指導者の経験知を基にした改善策

【引用文献】

菅裕 2012 吹奏楽，独奏器楽，声楽指導における熟練指導者の音楽表現に関する指導方略 宮崎大学教育文化学部附属教育実践総合センター研究紀要,20:153-167

菅裕 2009 経験年数の異なる5名の吹奏楽指導者の演奏指導方法と指導観の比較 音楽教育学,39(1):13-24

生田久美子 2000 「伝え合う力」とは何か：学校「言語」を超えて 日本ファジィ学会誌,12(4):501-506

（いいだ　きょういち・きだ　のりゆき）

大学生用コロナ禍ソーシャルサポート尺度の作成（3）

――大学からのサポートに着目して――

○上田仁[1]　松浦均[2]
（[1]愛知県庁　[2]三重大学教育学部）

キーワード：ソーシャルサポート尺度、コロナ禍、大学

【目的】

本研究の目的は、既存のソーシャルサポート尺度の項目をコロナ禍に合わせて修正することである。2020年に新型コロナウイルス感染症が国内で確認されて以降、社会に大きな変化が生じている。中でも大学生の孤立が問題視されている。上田・松浦（印刷中）はコロナ禍で大学からのサポートと孤独感との負の関連を示したが、橋本（2021）はストレスとサポートの関連が見られないことを示した。

こうしたサポート効果に一貫した結果が見られないことについて検討の余地がある。例えば、嶋（1992）のサポート尺度の項目の「個人的な悩み事について話し合える」という内容には、対面ですぐに会って話せる環境にあることやコロナとは関連のないことについて悩みを抱えているという可能性がある。そのため、既存のソーシャルサポート尺度の項目では、コロナ禍の社会背景あった項目とはいいがたい。そこで、コロナ禍の社会背景とコロナに関連するストレスに対してのサポートを測定する必要がある。そこで、本研究では大学生のサポート資源の1つである大学に焦点を当て、コロナ禍に合わせてサポート尺度の項目を修正することとした。

【研究1】

方法

(1)調査概要　2021年8月中旬に大学生400名を対象にオンライン調査を実施。

(2)調査項目　①大学生用コロナ禍ソーシャルサポート尺度（CSSS-U）　上田（2021）の結果を基に，著者らで暫定版尺度を作成した。その後，心理学を専門とする学生6名に評定してもらい，最終的に得られた35項目5件法で尋ねた。②K6　抑うつについて，Furukawa, Kawakami, Saitoh, Ono, Nakane, Nakamura, Tachimori, Iwata, Uda, Nakane, Watanabe, Naganuma, Hata, Kobayashi, Miyake, Takeshima, & Kikkawa (2002)の尺度を使用し，6項目5件法で尋ねた。　③ソーシャルサポート尺度　既存のソーシャルサポート尺度とCSSS-Uの関連を調査するために，嶋(1992)の尺度を用いて12項目5件法で尋ねた。

(3)倫理的配慮　三重大学教育学部研究推進委員会にて研究倫理審査の承認を得た(番号2021-23)。

結果と考察

CSSS-Uについて平行分析をしたところ，3因子が提案された。そのため，3因子で設定し解釈可能かつ単純構造解を目指し探索的分析を行った。最終結果はTable 1の通りである。第1因子は、「オンラインで学生同士で交流する機会を提供してくれる」などの「オンラインに関するサポート」が17項目、第2因子は「大学の設備を使えるようにしてくれる」などの「対面に関するサポート」が6項目、第3因子は「授業料を免除（返金）してくれる」などの「金銭的サポート」が5項目であった。α係数はいずれも良好だった。

Table 1　大学からのサポートの探索的因子分析（最尤法，ジオミン回転）

項目	F1	F2	F3	共通性	平均値	標準偏差
オンラインに関するサポート(α=.909)						
オンライン授業で発言しやすい環境を整えてくれる。	.775	-.082	.069	.431	2.877	1.295
オンラインで学生同士で交流する機会を提供してくれる。	.752	-.122	.048	.500	2.768	1.405
オンライン授業でグループワークの機会を提供してくれる。	.691	-.095	.010	.583	3.163	1.439
オンラインで顔をみて授業を受けられる機会を提供してくれる。	.616	-.010	-.077	.623	3.265	1.421
パソコンの使い方やレポートの書き方をオンラインで教えてくれる。	.619	.011	.079	.576	2.975	1.458
電話やZoom、メール等で進路・就活の相談に乗ってくれる。	.608	.070	.011	.575	3.150	1.403
先生がメールで指導をしてくれる。	.603	.081	.021	.569	3.283	1.428
オンライン授業のスピードを適切にしてくれる。	.602	.091	-.003	.579	3.365	1.227
同期で中良くなる機会を提供してくれる。	.557	.043	.159	.588	2.630	1.414
TeamsやZoomなどのオンライン授業で使うアプリの使い方を教えてくれる。	.509	.132	-.026	.636	3.230	1.408
オンラインによる授業や進路などのガイダンスをしてくれる。	.509	.211	-.010	.580	3.535	1.347
授業内容を事前に教えてくれる。	.497	.067	.124	.663	3.115	1.346
対面と同じくらいの質にしてオンライン授業を実施してくれる。	.491	.103	.095	.657	3.005	1.317
授業中に先生に質問をすると答えてくれる。	.444	.376	-.072	.494	3.862	1.188
対面授業を希望しない場合に、措置をとってくれる。	.444	.178	-.011	.686	3.415	1.394
授業外で先生に質問すると回答してくれる。	.436	.341	-.045	.539	3.890	1.154
オンライン授業を受ける機会を提供してくれる。	.413	.212	-.182	.700	4.032	1.173
対面に関するサポート(α=.786)						
図書館の本を借りられる。	-.115	.796	.019	.454	4.213	1.147
大学の設備を使えるようにしてくれる。	.039	.675	.156	.470	3.710	1.277
学習スペースを提供してくれる。	.066	.517	.247	.602	3.465	1.417
対面授業を受ける機会を提供してくれる。	.102	.472	.111	.687	3.685	1.345
大学のWi-Fi設備を整えてくれる。	.118	.422	.047	.745	3.803	1.314
授業でわからなかったことを個人的に先生に聞くと、教えてくれる。	.398	.412	-.059	.504	3.868	1.193
金銭的サポート(α=.777)						
大学の施設費用を免除（返金）してくれる。	-.018	.018	.820	.333	1.762	1.177
授業料を免除（返金）してくれる。	-.052	.078	.809	.353	1.843	1.285
経済的支援をしてくれる。	.211	-.026	.506	.650	1.945	1.255
紙やインクなどの費用を援助してくれる。	.229	-.011	.418	.726	1.885	1.293
オンライン設備のための給付金をくれる。	.242	-.155	.418	.741	1.925	1.298
因子間相関	F1-F2	.553				
	F1-F3	.265				
	F2-F3	.077				

また、K6とCSSS-Uとの相関分析については、オンラインに関するサポート（r=-.199, p<.001）、対面に関するサポート（r=-.221, p<.001）、金銭的サポート（r=-.013, *n.s.*）であった。嶋（1992）とCSSS-Uの相関分析について、オンラインに関するサポート（r=.714, p<.001）、対面に関するサポート（r=.508, p<.001）、金銭的サポート（r=.552, p<.001）であった。以上の結果から、既存のサポート尺度をコロナ禍に項目を調整し、サポートを測定することと他変数との関連が見られたことを確認することができた。

【研究2】

方法

(1)調査概要　2022年2月中旬に研究1とは異なる大学生400名を対象にオンライン調査を実施。

(2)調査項目　①CSSS-U

結果と考察

探索的因子分析の結果を基に、確証的因子分析を実施した。適合度はχ^2(342)=797.658, p<.001, CFI=.901, RMSEA=.058[90%CI .053-.063], SRMR=.063であり良好であった。また、α係数についても.792から.907と概ね良好であった。以上の結果から、信頼性と妥当性は概ね確保された。

【引用文献】

橋本 剛 (2021). コロナ禍初期における外学生の心理社会的ストレスに関する探索的検討――社会規範としての援助要請スタイルの効果も含めて――　静岡大学人文社会科学部 人文論集, *71*, 15-34.

Furukawa, T. A., Kawakami, N., Saitoh, M., Ono, Y., Nakane, Y., Nakamura, Y., Tachimori, H., Iwata, N., Uda, H., Nakane, H., Watanabe, M., Naganuma, Y., Hata, Y., Kobayashi, M., Miyake, Y., Takeshima, T., & Kikkawa, T. (2008). The performance of the Japanese version of the K6 and K10 in the World Mental Health Survey Japan. *International Journal of Methods in Psychiatric Research*, *17*(3), 152–158.

Liu C, Huang N, Fu M, Zhang H, Feng X L, Guo J. (2021). Relationship between risk perception, social support, and mental health among general Chinese population during the COVID-19 pandemic. *Risk Management Healthcare Policy, 14*, 1843-1853.

嶋 信宏 (1992). 大学生におけるソーシャルサポートの日常生活ストレスに対する効果. 社会心理学研究, *7*, 45-53.

上田 仁(2021). コロナ禍で大学生はどのようなソーシャルサポートを受けているのか　日本応用心理学会第87回大会発表論文集, 50.

上田 仁・松浦 均（印刷中）. コロナ禍において大学生のソーシャルサポートは何と関連するか？―2020年11月の調査―　応用心理学研究.

（うえだ　じん　・まつうら　ひとし）

精神作業課題が心理的・生理的ストレス反応に及ぼす影響
－ピーク・エンドの法則による課題構成の効果－

○伊藤晃碧[1]　古屋健[2]
([1]立正大学大学院心理学研究科　[2]立正大学心理学部)
キーワード：ストレス反応，ピーク・エンドの法則，メンタルワークロード

【目的】

ストレッサーとなり得る出来事が引き起こす心身のストレス反応の強さは，出来事の認知的評価による影響を受けることが明らかになっている。出来事の評価を左右する認知的バイアスのひとつにピーク・エンドの法則がある(Kahneman, Fredrickson, Schreiber & Redelmeier, 1993)。この法則によれば，記憶に基づく出来事の評価は，ピーク時と終了(エンド)時の快苦感情の平均によって判断され，出来事の持続時間や快苦感情の総量はほとんど評価に影響しないとされる。実験では，ピークは同じでもエンド時の苦痛を和らげるだけで出来事の評価が良くなることが示されている。

そこで本研究では，客観的負担の総量が等しい異なる難易度から成る課題群を用いて，ピーク・エンドの法則が認知的評価だけでなく、心理的・生理的ストレス反応にも当てはまるかどうかを検討した。負担感の指標としてメンタルワークロード，心理的なストレス指標として感情状態，生理的なストレス指標としての唾液アミラーゼ値,を測定した。

仮説：メンタルワークロード，心理的なストレス反応，生理的なストレス反応は，エンド時の負担が低い課題構成の場合ほど低くなるであろう。

【方法】

実験対象者：大学生 23 名(男性 8 名，女性 15 名)を対象とした。参加者の平均年齢は 19.74 歳(*SD*=1.42)であった。

実験課題および実験計画：低難度の問題から始まり高難度の問題で終わる課題群を遂行する上昇条件，高難度の問題で始まり低難度の問題で終わる下降条件，低難度の問題と高難度の問題が交互に出題される交互条件を設けた。よって，本実験の独立変数は条件(難易度の上昇，下降，交互)であり，1 要因実験参加者内計画であった。従属変数は，負担感の指標としてメンタルワークロードの尺度である日本語版 NASA-TLX，心理的ストレス反応の指標として感情状態を質問紙で測定した。身体的ストレス反応は唾液アミラーゼを測定した。また，Kahneman ら(1993)と同様に，参加者がどの条件を最も好ましいと評価するかを明らかにするため，全課題群及び測定の終了後，「もう 1 度課題を行うが，今まで実施したどのパターンの問題を行いたいか」を選択するよう求めた。

手続き：本実験は，実験参加者を 1 人ずつ実験室に呼んで実施した。4 桁の数字に対して，決められた数字を 120 秒の制限時間内に実験者が指定した回数引き続け，口頭でカウントダウンし続けるという暗唱課題を，1 つの課題群(1 つの試行)で 5 問，日を変えて 3 条件を各 1 回ずつ実施した。なお，条件の実施順序はカウンターバランスをとった。

ストレス反応の測定は，感情反応は課題群の前後 1 回ずつ，唾液アミラーゼは課題群開始前と，終了 10 分後に測定した。唾液アミラーゼはストレスを感じてからアミラーゼ分泌量が増加するまでにタイムラグがあることが報告されており，ストレスを加え始めてから 10 分以内に唾液アミラーゼが最大値となるため，課題群遂行 10 分後の測定値を終了直後の値として採用した。

【結果】

得点化：唾液アミラーゼの事前測定値において，非常に大きなばらつき(3～93)が見られたため，測定値の平方根変換を行った。日本語版 NASA-TLX の 7 項目は各項目の平均値を，感情状態は項目を覚醒的肯定感情(ウキウキ，ワクワク，イキイキ)，抑制的肯定感情(ゆったり，のんびり，のほほん)，覚醒的否定感情(イライラ，むかつく，恥ずかしい)，抑制的否定感情(びくびく，おどおど，どんより)に分け，それぞれ平均値を算出して使用した。

選択の検討：最終試行の最後に参加者が選んだ条件について，χ^2検定(適合度の検定)を行った。その結果，各条件を選択した人数(上昇条件＝2 人，下降条件＝17 人，交互条件＝4 人)に有意な差が見られた。このことから，Kahneman ら(1993)の結果が再現された。

各指標の検討：日本語版 NASA-TLX の各項目および感情状態に対して，1 要因分散分析を行った。

その結果，日本語版 NASA-TLX の全体的な負荷において，下降条件は上昇条件と交互条件よりも有意に全体的な負荷が低かったと評定していた。続いて，タイムプレッシャーにおいて，上昇条件は下降条件よりも有意にタイムプレッシャーが強かったと評定していた。さらに，努力において，上昇条件は下降条件よりも有意により多くの努力が必要だったと評定していた。

感情状態では，覚醒的肯定感情において，下降条件は上昇条件と交互条件よりも有意に覚醒的肯定感情が高かった。続いて，抑制的肯定感情において，下降条件は上昇条件よりも有意に抑制的肯定感情が高かった。一方，否定感情はすべての条件において差が見られないことが示された。

最後に，生理的なストレス反応である唾液アミラーゼ値に対しても，1 要因分散分析を行った。その結果，下降条件は上昇条件と交互条件よりも有意に唾液アミラーゼ値が低かったが，上昇条件と交互条件との間に有意な差は見られなかった。このことから，下降条件では上昇条件と交互条件よりも生理的なストレス反応が低いことが示唆された。

【考察】

本実験において，ピーク・エンドの法則の効果が確認されただけでなく，心理的・生理的指標において下降条件が最もストレスにならないことが示唆された。ただし，いずれの指標においても上昇条件と交互条件との間に有意な差は見られなかった。よって，仮説は一部支持された。

本実験では，簡単な課題を最後に遂行することによって，心身のストレス反応の上昇が抑えられるという効果が認められた。すなわち，客観的な負荷が同じ場合でも，遂行順序を変えるという工夫だけで，ストレッサーとなる課題自体には手を加えず，そこから受けるダメージを軽減できたと言える。ただし，実験参加者本人が自分の裁量で遂行順序を変化させた場合の検討は行っていないため，今後検討を行う必要がある。

【引用文献】

Kahneman,D.,Fredrickson,B.L.,Fredrickson,C.A.,& Redelmeier,D.A.(1993).When more pain is preferred to less: Adding a Better End. *Psychological Science*, 4(6), 401-405.

(いとう　こうき・ふるや　たけし)

精神科医療における多職種連携の成果に影響を及ぼすプロセスの検討

○異儀田はづき[1]　古屋　健[2]
([1]立正大学大学院心理学研究科／東京女子医科大学看護学部　[2]立正大学心理学部)
キーワード：精神科　多職種連携　チームワーク

【目的】近年，医療の高度化や患者が抱える問題の多様化に伴い，各専門職には，互いの専門性を結集させ連携することが求められている。精神科医療においても同様に，2004年の精神保健医療福祉の改革ビジョン以降進められている精神障害者の地域生活への移行には，効果的・効率的な多職種連携が重要となる。精神科医療の多職種連携に関する先行研究は，実践報告や質的研究が中心のため，臨床実践に寄与する具体的な連携方法を明らかにするためには，多職種連携の効果に影響するプロセスについての実証的研究が求められる。

そこで，本研究では精神科医療における多職種連携の成果に影響を及ぼすプロセス要因を検討することを目的とした。

【方法】2021年7月～8月に研究協力に同意の得られた精神科病院または総合病院の精神科病棟に勤務経験のある看護師35名を対象に，構造化面接を行った。

面接で用いた質問項目は，精神科医療における多職種連携のチーム属性と連携プロセス要因に関する①対象者の基本属性9項目，②病棟，患者，多職種チームの属性17項目，③多職種連携のプロセス44項目（設問により2～5件法），④多職種連携の成果8項目（5件法），⑤多職種連携の利点と妨害要因21項目（2件法）の計99項目であった。

なお，面接では臨床現場の実態を把握するために，すでに介入を終えている患者に対して3人以上で連携したケースに基づいて回答を得た。本研究は立正大学心理学研究科研究倫理委員会の承認を受け実施した（承認番号：G20211007）。

【結果】1．研究参加者の属性

研究参加者35名から61ケースについての回答が得られた。面接時間は，平均65.4±22.7（範囲30-105）分だった。研究参加者は男性15名，女性20名，年齢は20代1名，30代12名，40代18名，50代4名，精神科経験年数は，平均13.2±6.4（範囲1-25）年だった。

2．精神科医療の多職種連携の成果とプロセスの因子構造

多職種連携のプロセスおよび成果について，因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行った。その結果，プロセスは，「チームの凝集性」「意思決定」「連携不足」「コミュニケーション不足」の4因子，成果は「主観的満足」「成果評価」の2因子が抽出された。代表的な項目例を表1に示す。

表1．多職種連携のプロセスならびに成果の因子構造と項目例

因子名	項目数	項目例(一部抜粋)	α
プロセス			
チームの凝集性	5	チームのメンバー同士の人間関係は良好だった 連携した介入の基本となる職種間の信頼関係ができていた	.938
意思決定	10	重要な決定の前にはメンバー間で十分な意見交換が行われた チームのメンバーはカンファレンス以外でも情報交換していた 問題の所在や原因についてメンバー間で共通の理解がされていた 治療目標の達成度はこまめに評価されていた	.923
連携不足	4	治療計画の進捗状況の全体像を把握できないことがあった 職種間の連携不足のために必要な介入が遅れることがあった	.831
コミュニケーション不足	4	チームでの話し合いの場ではメンバーに病棟な発言権があった 職種による概念や用語の違いがコミュニケーションの障害になった	.845
成果			
主観的満足	4	自分の専門的スキルや能力をチームの中で発揮できましたか 総合的に見て、このチームの中で仕事をしたことに満足ですか	.907
成果評価	4	チームとしての目標は達成できましたか 担当患者は質の高い医療サービスを受けられたと思いますか	.782

3．精神科医療の多職種連携のプロセスと成果の相関分析

精神科医療の多職種連携のプロセス，成果を因子分析により抽出された下位概念ごとに得点化し，プロセスと成果との関連について相関分析を行った。その結果，「チームの凝集性」と，「主観的満足（r=.340，p<.01）」，「成果評価（r=.294，p<.05）」との間に中程度の正の相関が認められた。他のプロセス得点である「意思決定」，「連携不足」，「コミュニケーション不足」と「主観的満足」，「成果評価」との間に有意な相関は認められなかった。

4．チームの凝集性と他のプロセス因子の重回帰分析

「チームの凝集性」と他のプロセス因子との関連を見るために，「チームの凝集性」を従属変数，他のプロセス因子を独立変数とする重回帰分析を行った。その結果，「チームの凝集性」に対して「意思決定」は正の影響，「連携不足」と「コミュニケーション不足」は負の影響を及ぼしていることが示された（表2）。モデルの適合度はきわめて高かった。

【考察】因子分析の結果から構成された多職種連携のプロセスに関する4下位尺度，成果に関する2下位尺度のCronbachのαは十分に高く，いずれも高い内的整合性を持つと考えられる。

多職種連携のプロセスと成果の相関分析から，凝集性が高いチームほど，成果である主観的満足，成果評価の得点が高いことが示された。しかし，相関が中程度に留まっていたため，成果には，患者の疾患の特徴などプロセス以外の要因が影響している可能性がある。

チームの凝集性と他のプロセス因子の重回帰分析の結果から，チームの凝集性は，適切な集団意思決定のための基本的な条件が満たされているほど高く，連携不足やコミュニケーション不足があると低くなることが明らかになった。

以上より，精神科医療の多職種連携の成果を規定する直接の要因はチームの凝集性であることが示された。凝集性が高いチームでは，意思決定プロセスが適切に進められ，職種間連携やコミュニケーションの問題が少なく，これらの要因が凝集性を介して成果に影響をあたえていることが示唆された。

今回は面接調査の少ないケース数のため，一般化には限界がある。今後はケース数を増やし，調査項目が精神科医療の特徴を捉えているか等の構成概念妥当性の検証が課題である。また今回は，成果は主観的評価を用いたため，客観的な成果評価との対応については別に検討する必要がある。

本研究はJSPS科研費JP22K10823の助成を受けた。
(いぎた　はづき・ふるや　たけし)

表2．チームの凝集性と他のプロセスの重回帰分析結果

独立変数	標準化β
意思決定	.386 **
連携不足	-.237 *
コミュニケーション不足	-.345 **
R	.833 **
R^2	.693
調整済みR^2	.677

従属変数：チームの凝集性　**p<.01，*p<.05

コロナ禍における大学生の道徳意識とストレス　2022年調査

―相互協調的自己観と関係流動性の関連－

○伊坂　裕子[1]　有木永子[1]
([1]日本大学)

キーワード：道徳意識・相互協調的自己観・関係流動性・コロナ禍

【目的】

2021年3月にWHOにより新型コロナウィルス感染症がパンデミックと認定されてから2年半が経過し，感染症の流行状態に伴い行動様式の変化が求められてきた。その間，求められている行動様式に適合しない行動に対して，自粛警察やマスク警察など個人の道徳判断により他者を批判する傾向がみられた。伊坂・有木(2022)では2021年前期に感染症の流行による大学生の生活の変化，ストレス，感染症関連行動に対する道徳判断と文化的自己観，関係流動性の関連を検討した。感染症の流行のフェイズによる変化をみるため，継続して調査を実施している。本研究では，2022年の調査を中心にコロナ関連行動に関して大学生が抱く道徳意識と文化的自己観や関係流動性との関連，また，ストレスとの関連を検討することを目的とする。

【方法】

参加者：　日本人大学生436名（男性235名，女性200名，無回答1名，平均年齢18.7歳±1.2)。

調査時期：　2022年4月6日～5月2日。

調査内容：

1）生活の変化…学生5名と著者1名の討論によって挙げられた23項目に，2022年は新たにワクチンの副反応について問う1項目を加えた24項目。「体験なし…0」「体験したが何ともなかった…1」～「非常に辛かった…4」で得点化。

2）ストレス反応尺度…松浦・勝岡・脇(2012)による12項目，4段階評定。

3）道徳判断…新型コロナ感染症の流行にともなって，道徳的に問題とされている行動20項目に2022年はワクチン関連の行動を加えた24項目，6段階評定。

4）関係流動性尺度…Yuki et al.(2007による12項目，6段階評定。

5）相互独立的 - 相互協調的自己観尺度…高田・大本・清家(1996)による20項目，7段階評定。

6）自由記述

【結果】

1）生活の変化に対する負担感・ストレス反応

2021年と共通する項目で，調査時期による負担感の変化を検討した。一元配置分散分析の結果，「他者と交流する機会が減った」($F(2, 887)=5.13$, $p<.01$)，「一人で過ごす時間が増えた」($F(2, 867)=3.82$, $p<.01$)「授業の形態がオンライン授業になった」($F(2, 878)=6.76$, $p<.01$)など7項目で，2021年前期に比べて2022年前期の辛さが減少していることが示された。

ストレス反応も調査時期による有意差があり，合計点は2022年前期($M=27.0$, $SD=8.9$)が2021年前期($M=25.5$, $SD=8.3$)に比べて有意に低かった($F(2,923)=9.08$, $p<.001$)。

2）道徳的判断

道徳的判断について，「感染拡大行動」「誹謗中傷行動」「ワクチン関連行動」「不平等・自由制限」の4因子を抽出した。ワクチン関連行動は新しく追加された項目であるが，ワクチンに関連した誹謗中傷や，ワクチン接種の強制，理由のない接種拒否等の行動が含まれていた。それらが「感染拡大行動」と「誹謗中傷行動」に含まれるわけではなく，ワクチン関連行動として一つの因子にまとまった。また，相互協調的自己観は「誹謗中傷行動」を除く3因子に中程度の正の相関($rs=.319$~363)があり，相互協調的自己観の高さが道徳意識の高さに関連していた。道徳判断は4つのクラスターに分類でき，厳格型は他のタイプに比べて，生活の変化に辛さを感じ，易怒感や身体的不調感も高いこと，非難寛容型は易怒感は低いが，身体的不調感が高いことが示された。また，非難寛容型は，他のタイプに比較して相互独立的自己観が低く，相互協調的自己観が高いことも示された（表1）。

表1　道徳判断のタイプによる比較

		type1 ワクチン敏感型 N=181	type2 厳格型 N=111	type3 非難寛容型 N=110	type4 寛容型 N=34	F(3, 432)	p	最小有意差
生活の変化（辛さ）	平均	2.00	2.27	1.97	2.02	5.167	<.01	1,3<2
	SD	0.65	0.69	0.56	0.73			
抑うつ感	平均	6.10	6.05	5.83	5.85	0.279	n.s.	
	SD	2.63	2.87	2.64	2.43			
易怒感	平均	4.63	5.12	4.45	5.38	2.549	<.10	3<2, 4
	SD	2.21	2.55	2.24	2.39			
疲労感	平均	6.60	6.89	6.61	6.21	0.622	n.s.	
	SD	2.69	2.79	2.76	2.52			
身体的不調感	平均	6.49	7.41	7.17	6.79	2.898	<.05	1<2, 3
	SD	2.64	2.94	2.87	2.86			
ストレス合計	平均	23.82	25.47	24.05	24.24	0.886	n.s.	
	SD	8.50	9.38	7.98	9.10			
関係流動性	平均	3.74	3.71	3.75	3.57	0.664	n.s.	
	SD	0.67	0.80	0.70	0.52			
相互独立的自己観	平均	4.25	4.45	3.99	4.00	4.167	<.01	3<1, 3.4<2
	SD	1.01	1.10	0.93	1.33			
相互協調的自己観	平均	4.92	5.30	5.13	3.95	21.630	<.001	4<1<2, 3
	SD	0.91	0.90	0.79	1.01			

【考察】

感染症の流行により，マスクの着用をはじめ，新しい行動規範が生まれたが，相互協調的自己観はそのような規範に敏感に反応する。自己を他者との関連で考える相互協調的自己観は，コロナ禍でみられるさまざまな行動に対して寛容になりにくいことが示された。また，非難寛容型の道徳タイプは相互独立的自己観が低いことが示された。自己と他者の間に明確な境界線を持つ相互独立的自己観をもつ個人の行動は，その人の態度や価値観など内的要因を原因と考えるため，各自の行動の自由を求めることにつながる。そのため感染拡大につながる行動を不道徳と考えるより，その行動を行った人を非難中傷することに道徳的な問題を感じると思われる。一方，相互協調的自己観は規範を重視する集団主義的社会を形成し，社会の中で感染症の蔓延リスクを低減する役割を果たすことが示唆された。関係流動性との関連は2022年調査では見出されなかったが，新しい行動様式への慣れが影響しているかもしれない。

【引用文献】

伊坂裕子・有木永子(2022). 大学生における新型コロナウィルス感染症による生活の変化とストレス(1)~相互協調的自己観と関係流動性の関連~　日本大学生活科学研究所報告(44). 59-41.

(いさかひろこ・ありきながこ)

オンライン授業下で大学生が接した諸情報に関する分析

○伊藤令枝
（日本大学理工学部）

キーワード：流言、COVID-19、インターネット

【目的】流言は、災害による被害の広範性、災害の反復性、情報の過剰性の中で流布されやすくなるが（廣井、1988）、2020 年に拡大した新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は、まさに流言の温床となったと言えよう。確度の高い情報も、科学的根拠が乏しい情報や流言と考えられるものも一様に巷間に伝播され、情報の受け手にこそ、その情報の取捨選択と適切な対処行動が求められる。

さて、2020 年度前期は多くの大学でオンライン授業が整備された。現代の大学生は、インターネットや SNS に幼少期から親しんでいると言われているが、外出や対面的接触等を制限された状態で自宅学習に取り組む中、COVID-19 関連情報にどのように対処しようとしたのか実態を理解することを試みた。

【方法】

調査対象者：大学生 385 名。調査への平均回答率は 56.4%であった。

調査時期：調査は 2020 年 4 月 29 日から 2020 年 8 月 3 日にかけて実施された。そのうち 5 月 31 日までを第 1 期とし、6 月 1 日以降を第 2 期とした。

調査方法：調査時期には、学生はすべての授業をオンラインで受講しており、オンデマンド型授業の実施のために当該大学で整備された LMS（Learning Management System）を活用して調査が実施された。調査では、COVID-19 に関して見聞きした情報（政府機関による発表や報道等を除く）の内容とその入手経路、その情報に対して行った行動が収集された。また、その情報に接した時の感情（信用性、驚き、不快感、ショック、不安感、高揚感）について 5 段階で評定された。第 1 期調査は毎日、第 2 期調査は週 1 回実施され、回答は任意であった。

【結果】調査時期によって報告率は異なるが、のべ 2080 件の情報が収集された（調査 1 回につき最少 25 件、最大 106 件）。情報の入手経路は、インターネット 37.77%、家族 14.84%、友人・知人 11.91%、ネットニュース（インターネットのポータルサイトのニュースやニュースアプリ等）10.47%、ツィッター9.43%、その他 SNS4.86%、マスメディア 7.79%、動画投稿サイト 2.93%であった。

調査第 2 期について分散分析を行ったところ、情報に対する不快感と不安感が 7 月中旬に有意に増大していたことが示された（F（3、196）=4.75、t（196）=3.09; F（3、193）=2.77、t（193）=2.82、p<.05）。そのほかの時期に感情の顕著な変化は認められなかった。

次に、情報の入手経路（ツィッターとその他 SNS の合算、家族や友人知人、ネットニュース）と感情との関係性について分散分析を行った。その結果、情報に対する信用性は、ネットニュース、身近な人間関係、SNS の順で高く、一方で、SNS、身近な人間関係、ネットニュースの順で驚きをもって受け止められていた（F（3、1029）=48.23、F（3、1020）=14.42、p<.01）。さらに、ショックや不安感はネットニュースで有意に高かった（F（3、1026）=11.60、F（3、1020）=11.44、p<.01）。すなわち、広範にわたって伝播されるネットニュースは、大学生にとって信用性が高く認識されており、だからこそ、この経路によって入手された情報には驚きやショックを感じやすく、その反対に、SNS は信用性が相対的に低いために、SNS によって受信した情報に感情的に反応する必要がなかったことが示唆された。

また、入手した情報に対する具体的反応について分類したところ、特に何もせず 46.00%、情報そのものに対する対応行動（例えば「ウイルスには発酵食品が良い」という情報に対して、実際に発酵食品を購入したなど）11.17%、他者への伝達 9.83%、感染症予防・「密」回避行動やその意識の増大 5.21%、信憑性確認のための情報検索 3.67%、その他 2.33%であった。そして、もっとも報告数の多かった 4 月 30 日調査について、対応行動がとられた場合、当該情報を伝達した場合、行動がなかった場合の感情を比較した。その結果、行動間で不安感に有意差が認められたものの、ライアン法による下位分析では有意差がなかった（F（2、69）=3.20、p<.05; t（69）=2.45、t（69）=0.24、t（69）=1.95、*n. s.*）。不信感、驚き、不快感、ショック、高揚感のいずれの感情についても行動間に有意差は認められなかった（F（2、71）=0.10、F（2、70）=0.88、F（2、70）=1.40、F（2、71）=0.52、F（2、71）=0.37、*n. s.*）。

【考察】2020 年 7 月中旬に、情報接触に伴って不快感と不安感に有意な高まりが認められた。この時期は感染拡大第 2 波に相当しており、「外出が制限された状況で夏季休暇を迎えるのだろうか」「2020 年度後期の授業も大学に通学できないのではないだろうか」などの心配が反映された結果であると考えられる。また、調査実施全期間をとおして、ネガティブな感情が比較的、高く維持されていた。

一方で、そのような不安感のなかで、情報聴取が何らかの行動に直結することはあまり多くなかった。そもそも、当該時期に大学生の接した情報は、即時的な行動が導き出されるような情報よりも、感染源や感染拡大に関するものが多かった。そして、外出が制限された状況下で、なおかつ、マスク着用や「密」回避など感染予防行動やその意識が高く維持されており、情報あるいは流言に対してすぐに反応する必要もなかったのだろう。しかし、流言への反応が皆無であったわけではなく、流言内容に沿った行動も見受けられ、また、積極的に流言を信じずとも、その流言に即した行動を念の為行う場合もあった。流言を伝播させた場合もあれば、誤情報と理解した上で注意喚起のために家族や知人に伝達する場合、笑い話のネタにすることもあり、情報に対する受け止め方や反応は多種多様であった。今後は、受け取った情報の内容と行動との関係性などについて、より詳細な分析が求められる。

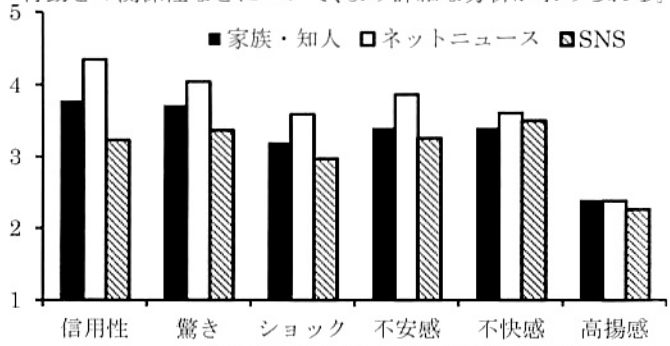


Figure 1. 受け取った情報に対する平均評定値

【引用文献】

廣井脩（1985）うわさと誤報の社会心理　日本放送出版協会

（いとう　よしえ）

特殊詐欺未然防止の検討 1

特殊詐欺被害防止に向けた被害者の心理状態予測に関する実証実験

紺野剛史[1]　○吉岡隆宏[1]　近野恵[1]　宮原捺希[1]　井手健太[1]　桐生正幸[2]
([1]富士通株式会社　[2]東洋大学社会学部)

キーワード：特殊詐欺，生理反応，犯罪心理学

【目的】　特殊詐欺とは，不特定多数の人物に電話などで接触し現金などをだまし取る犯罪であり，オレオレ詐欺や還付金詐欺などがある。警察庁によると，2021 年における全国の特殊詐欺の認知件数は，前年比 911 件増加し 14,461 件であった。その内，65 歳以上の高齢者を標的とする特殊詐欺が 88.2%と大部分を占めている。

これに対し，自宅の固定電話で通話内容の音声を分析し，詐欺被害を未然に防ごうとする手法が提案されている（遠藤・谷田，2022）。しかし犯人の手口もそれに合わせるように複雑化かつ巧妙化するためすぐに手法が適用できなくなる課題がある。

そこで著者らは，通話内容のような犯人側の状態ではなく，被害者側の心理状態に着目した。還付金詐欺では，犯人は自治体の職員などと名乗り，医療費の過払いの還付手続きに期限があると焦らせ，すぐに手続きをするよう被害者を誘導する。この状況で，被害者が普段と異なる心理状態になっていることを推測できれば，被害の未然防止につながる。著者らはこのような被害者の心拍数や呼吸数などの生理反応から心理状態を予測し，特殊詐欺被害を未然に防ぐ技術の実現を目指し研究開発を進めている。本研究では，兵庫県尼崎市の協力のもと，高齢者が特殊詐欺の電話を受けているときの生理反応と心理変化を測定することでそれらの関係分析を試みた。

【方法】　**実験参加者**：兵庫県尼崎市在住の 68～84 歳の男女 15 名が実験に参加した。実験の性質上，強く精神的ストレスを感じる可能性があるため，すべての実験参加者は事前に特殊詐欺についての実験であること，ヘッドフォンを装着して刺激音声を聞いている間の生理反応が測定されることが伝えられ，全実験参加者から了承を得た。

装置：実験参加者は，心電センサーおよび呼吸センサーを装着し，心電および呼吸信号の記録には，信号取得デバイス ProComp Infiniti と信号取得ソフトウェア BioGraph Infiniti (Thought Technology) を用いた。また，ヘッドフォンは Evolve30II (Jabra)を使用した。実験参加者の目前には 27 インチモニタが設置され，実験参加者への指示などが表示された。実験参加者と実験者の間にはパーティションを設置し，実験参加者の視界にはなるべくモニターだけが見えるように配慮した。安全面を考慮し，カメラ C922n (Logicool) を設置し，実験中の実験参加者の様子を観察した。

刺激音声：日本全国で発生している還付金詐欺の記録音声を参考に，刺激音声のシナリオを作成した。シナリオは兵庫県尼崎市の生活安全課や，兵庫県警による確認を受けたのち，兵庫県尼崎市職員による録音を実施した。刺激音声は，導入部，中間部，後半部の刺激音声ブロックに分割しており，それぞれ表 1 のような構成となっている。

測定データ：刺激音声聴取時の心電と呼吸のデータを取得した。また，各刺激音声ブロック終了直後に，各ブロックの刺激音声聴取時の心理状態を振り返り，Profile of mood states 2 (POMS2)の緊張・混乱に関する項目を今回の実験に合わせて改良した質問項目に対し口頭で回答させた。

表 1　刺激音声の構成

音声区間	内容	話者
導入部(47 秒)	医療費払戻でお金が戻る	市役所職員
中間部(75 秒)	払戻金受領には至急対応が必要	市役所職員
後半部(66 秒)	現金自動預払機操作方法の説明	銀行員

実験の流れ：実験参加者は，センサーを装着した状態で椅子に座り，両腕を机の上に置き，なるべく動かさないように指示した。また刺激音声に対して返答しないように指示した。モニターには実験参加者への指示と，改良後の POMS2 の選択肢が表示された。刺激音声聴取時のみ，全面白色の画面が表示された。Figure 1 に実験の流れを示す。

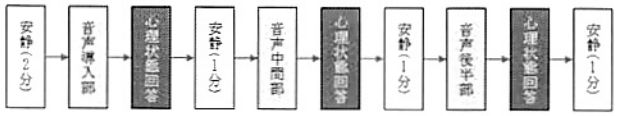


Figure 1　実験の流れ

実験参加直前・直後のヒアリング：実験参加直前に，実験参加者は健康状態や既往歴についてのアンケートに記入した。また，実験内容の説明を受け，実験参加同意書にサインした。その後 State-Trait Anxiety Inventory (STAI)の特性不安尺度と，STAI の状態不安尺度それぞれを今回の実験に合わせて改良した質問項目について口頭で回答した。実験参加直後には，改良後の STAI の状態不安尺度にもう一度回答し，実験内容を振り返りながら，刺激音声のシナリオの各セリフについてどのように感じたか，これまで特殊詐欺被害を受けた経験があるかなどの質問に回答した。

なお，本実験は，東洋大学社会学部の倫理委員会の審査による承認を得たうえで実施された。

【結果と考察】　心電あるいは呼吸の測定データに異常が認められた 3 名を除く 12 名分の測定データを分析対象とした。音声刺激には焦りや不安を促す刺激を含んでおり，このような刺激が呈示された際には生理反応と心理状態が連動し心拍数が増えるなどの反応があると仮説をたてた。8 名については仮説を支持する結果が得られ，4 名については仮説を支持しなかった（続報 2）。また，仮説を支持しなかった結果の分析により，実験参加者の性格的な特徴が結果に影響していることが示唆された（続報 3）。さらに，心理状態を目的変数とした重回帰分析により，詐欺音声聴取時に被害者が緊張・混乱状態を引き起こす要因を調査した。その結果，生理反応だけでなく，続報 3 で示された実験参加者の性格的な特徴を含む 11 の因子が関与していることが明らかになった（続報 4）。今後これらの傾向と騙されやすさとの関連性について調査し，心理状態の予測への影響を解明していく。

【今後の展望】　今回の結果は，音声聴取のみの理想的な環境下で得られたものであった。特殊詐欺未然防止技術開発に向けて，次の実証実験では実際のシーンに近い環境で，上述の 11 因子を用いた被害者の心理状態予測の正確性を検証することを計画している。

【引用文献】

遠藤 渉太・谷田 康司 (2020).　特殊詐欺通話の検出のための感情分析を用いた音声解析に関する検討　信学技報 NS2020-78, 120 (257), 14-19.
（こんの たけし・よしおか たかひろ・ちかの めぐみ・みやはら なつき・いで けんた・きりう まさゆき）

特殊詐欺未然防止の検討 2

特殊詐欺音声聴取時における生理指標と心理尺度の関連性に関する基礎的な分析

○近野恵[1] 井手健太[1] 吉岡隆宏[1] 宮原捺希[1] 紺野剛史[1] 桐生正幸[2]
([1]富士通株式会社 [2]東洋大学社会学部)

キーワード：特殊詐欺、生理反応、犯罪心理学

【目的】第 1 報で報告した通り、特殊詐欺の被害は深刻である。特殊詐欺防止について、自宅の固定電話で通話内容の音声を分析し，詐欺被害を未然に防ごうとする手法が提案されている（遠藤・谷田，2020)。しかし犯人の手口もそれに合わせるように複雑化かつ巧妙化するためすぐに手法が適用できなくなる課題がある。

本研究の目的は、そうした課題に対処するため通話内容ではなく、通話時の被害者に生じる心理状態の変化に着目し、心理状態の変化から特殊詐欺を検知し未然防止に繋げることである。

本報告では、生理反応から心理状態を予測するために、実証実験で収集したデータをもとに、特殊詐欺被害時の生理反応と心理状態の関連性について分析する。

【方法】第 1 報で報告した実証実験で収集したデータを用いて、特殊詐欺被害時における、生理反応と心理状態の関連性について基礎的な分析を実施する。具体的には各種生理反応と心理状態の相関係数を実験参加者ごとに算出し、生理反応と心理状態の関連性を評価する。

データ：実験参加者は 3 つのブロックに分けた特殊詐欺音声をそれぞれ聴取している。各ブロックの音声聴取期間に計測した心拍数、呼吸数、呼吸時間それぞれの平均値を生理反応として用いる。また心理尺度として、各ブロックの音声聴取後に実施した POMS2 の緊張・混乱に関する項目を今回の実験に合わせて改良した質問項目の回答結果を用いて心理状態を計測する。15 名のうち、生理反応の計測に不備のあった 3 名を除外して、12 名を分析対象とする。

仮説：下記の 3 つの仮説をもとに分析を行う。緊張・混乱が高まることで、心拍数が上昇すると考えられるため、心拍数と POMS2 のスコアは正の相関関係にある（仮説 1.)。緊張・混乱が高まることで、呼吸数が上昇すると考えられるため、呼吸数と POMS2 のスコアは正の相関関係にある（仮説 2.)。緊張・混乱が高まることで、呼吸数が増え、呼吸が浅くなることから呼吸時間は下降すると考えられるため、呼吸時間と POMS2 のスコアは負の相関関係にある（仮説 3.)。

分析方法：実験参加者ごとに、各音声聴取時の生理反応と直後の POMS2 スコアの相関係数を算出する。実験参加者ごとに各生理反応と POMS2 スコアとの相関係数を算出するのに利用可能なデータは 3 件と少ないため、無相関検定を実施すると同時に効果量である相関係数の値そのものによる評価を実施する。算出した相関係数が 0.5 を上回る場合には、正の相関関係にあると評価する。一方で-0.5 を下回る場合には負の相関関係にあると評価する。それ以外の場合には無相関と評価する。

【結果】各実験参加者の生理反応と POMS2 スコアの相関係数を Table 1. に示す。

心拍数と POMS2 スコアとが正の相関関係(r>0.5)にあり、仮説を支持する結果を示した実験参加者は 12 名中 ID04,07,08,10,12 の 5 名のみであった。そのうち ID12 の相関係数のみ統計的有意性(p<0.05)を確認できた。

呼吸数と POMS2 スコアとが正の相関関係(r>0.5)にあり、仮説を支持する結果を示した実験参加者は 12 名中 ID01,04,05,08,の 4 名のみであった。そのうち ID04 の相関係数のみ統計的有意性(p<0.01)を確認できた。

呼吸時間と POMS2 スコアとが負の相関関係(r<-0.5)にあり、仮説を支持する結果を示した実験参加者は 12 名中 ID01,02,04,05,08 の 5 名のみであった。そのうち ID04 の相関係数のみ統計的有意性(p<0.1)を確認できた。

Table 1. 実験参加者ごとの生理反応と POMS2 スコアの相関係数一覧

	心拍数	呼吸数	呼吸時間
ID01	-0.9206	0.7281	-0.7929
ID02	-0.9801	0.3847	-0.9873
ID03	-0.5858	-0.215	0.2383
ID04	0.6635	1**	-0.994+
ID05	-0.4246	0.9062	-0.9633
ID06	-0.7738	-0.9973*	0.9958+
ID07	0.9759	0.0349	0.7016
ID08	0.9072	0.9308	-0.9653
ID09	-0.5986	0.3301	0.1209
ID10	0.7884	-0.1526	0.1163
ID11	-0.9256	-0.9737	0.9786
ID12	0.999*	-0.957	0.9868

*+ p < 0.1, * p < 0.05, ** p < 0.01, *** p < 0.001*

生理反応について、いずれかの仮説を支持する結果を示した実験参加者は 12 名中 ID01,02,04,05,07,09,10,12 の 8 名であった。仮説を支持する結果を一つも示さなかった実験参加者は ID03,06,08,11 の 4 名であった。

【考察】いずれかの仮説を支持する結果を示した実験参加者は 12 名中 8 名と多く、複数の生理反応を用いることで、生理反応と連動する心理状態の変化を説明できる可能性が示された。また、12 名の実験参加者のうち 4 名はいずれの生理反応も、心理状態の変化と連動していない。これらのことから、特殊詐欺音声聴取時に、心理状態と連動し、生理反応が変化するパターンを示す実験参加者と、そうでないパターンを示す実験参加者が存在することが分かった。

こうした生理反応と心理状態の反応差を規定する要因を明らかにすることで、より有効な心理状態変化の予測が可能になり、特殊詐欺検知につなげられると考える。

続く第 3 報では、各実験参加者の特徴に着目し、生理反応と心理状態が連動する・しない 2 つのパターンについて分析する。

【引用文献】

遠藤 渉太・谷田 康司 (2020). 特殊詐欺通話の検出のための感情分析を用いた音声解析に関する検討 信学技報 NS2020-78, 120 (257), 14-19.
(ちかの めぐみ・いで けんた・よしおか たかひろ・みやはら なつき・こんの たけし・きりう まさゆき)

京仏壇・京仏具の社会的受容と職人の技能継承に関する研究

○成田　智恵子
（京都産業大学）
キーワード：伝統工芸、京仏壇・京仏具、社会的受容、意匠

【目的】京都は多種多様な工芸が集約した日本最大規模の伝統工芸の産地である。数ある京都の伝統工芸の中でも京仏壇・京仏具は木地や漆塗、蒔絵、木彫刻、彩色、金属工芸などの様々な工芸と意匠が集約された総合工芸品である。京仏壇・京仏具は分業制によって支えられており、各工程において最高峰の技能を有する職人たちが手仕事を通じて伝統意匠と技能の継承を行なっている。一方、ライフスタイルや宗教信仰、死生観の変化などに伴い、仏壇・仏具を取り巻く環境は大きく変化している。仏壇・仏具を求める人々の考え方や求める仏壇・仏具の形状や色、機能なども大きく変化しており、その製造の在り方や販売形態も多様化している。

伝統的な京仏壇・京仏具は定型的な仕事が多く、既存の型を踏襲するための観察的な技能習得が重視される工程も多い（成田・来田, 2016）。そのため、仏壇・仏具の意匠の変化は職人の技能継承に直接的な影響を与える。つまり、受容の変化に伴う意匠の変化も技能継承を考える上で重要である。しかし、当該分野の研究は手付かずである。そこで、本研究は京仏壇・京仏具の社会的受容が職人の技能継承に与える影響について調査を行なった。仏壇・仏具を求める人々の意識の変化とその変化に対する仏壇・仏具業者の動向を整理するために、京仏壇・京仏具の製造販売者と職人の語りに着目した。

【方法】半構造化インタビュー法を用いて、京仏壇・京仏具について[歴史的経緯] [受容の変化] [意匠の変化]の 3 つの項目に従い、京都府仏具協同組合に所属する 2 名にインタビューを行なった。対象者 1 は江戸期創業以来、主に東西両本願寺をはじめとした浄土真宗系統の寺院内装や仏壇・仏具販売を手掛けている会社に所属しているキャリア 50 年以上の男性とした。対象者 2 は仏壇・仏具製造（蒔絵彩色部門）の職人であり、キャリア 40 年以上の男性とした。

対象者たちには事前に研究内容を説明し、同意を得た上でインタビューを行なった。2021 年 12 月から 2022 年 5 月にかけて複数回インタビューを行ない、語られた内容を IC レコーダーにて録音し、テキスト化と分析を行なった。なお、仏壇・仏具には寺院用のものと家庭用のものがあるが、本研究では家庭用の仏壇・仏具に着眼して分析を進めた。

【結果】[歴史的経緯]一般に浄土真宗の仏壇は金仏壇とされる。金仏壇とは全体に黒漆が施され、内部に金箔が押されている仏壇である。仏壇は宗派によって細部が異なり、例えば西本願寺と東本願寺の仏壇を比較すると特には金の使用法や荘厳加飾などに違いが見られる。そのため、職人は各宗派それぞれの意匠に応じた技能を発揮する必要がある。時代に伴う変化として、旧来は仏壇商が遠慮して「本山通りに仏壇をつくってはいけいない」という考えを持っていた時代もあった。しかし、本山通りの仏壇を製造して販売する仏壇商が現れた結果、本山通りの仏壇を求める需要が生じた。昭和 30 年代には京都府の主導でデザイナーと協働した新型仏壇の製造が検討された。結果的に対象者 1 が所属する会社を含む京都府仏具協同組合の中の 2 社が新型仏壇の製造に着手した。当時の新型仏壇は伝統的な寺院の在り方や本山の形式などを精査した上で設計されたものであり、その設計に基づいて京仏壇の職人が京仏壇の技術で製造にあたった。当初の新型仏壇の売れ行きはあまり良くなかったが、その後幾度もの改良を経て、現代では新型仏壇が主力製品となっている。

[受容の変化] 上記の京仏壇の流れを汲む新型仏壇とは別に、家具製造業などの業者が新しく参入して製造した家具調仏壇も昭和期に出現した。さらに、唐木仏壇などの業者が家具調仏壇を製造するなど、仏壇製造は多様化・複雑化していった。結果として伝統的な金仏壇に関心を示す人が減少した反面、家具調仏壇を求めて京仏壇・京仏具の販売店を訪れる人も増加しているとのことである。京都府仏具協同組合では技能継承や後進育成のために伝統的な仏壇・仏具の工程を解説できる人材の育成にあたっている。しかし、対象者 1 は上記の購入者の関心の推移から伝統的な仏壇・仏具の解説を求められる機会自体が少ない状態であることを課題としていた。また、対象者 2 は職人の技能向上や後進育成に対して消費者の要求との乖離が生じていることを課題として挙げていた。

[意匠の変化] 生活習慣・住居環境の変化に適応した仏壇が模索された結果として新型仏壇や家具調仏壇などが誕生し、仏壇・仏具の意匠は大きく変化している。仏壇・仏具ともに簡素化や小型化が進み、上記の京仏壇の新型仏壇においても木彫刻や蒔絵彩色、錺金具などの装飾的な工程の簡素化や省略化も見られる。対象者 2 からは蒔絵の仕事量の全体的な減少の一方で伝統的なモチーフとは異なる蒔絵の仕事が生じていることについての言及があった。伝統的な仏壇・仏具は元来本尊を荘厳するための役割を持ち、その役割を果たすための意匠を持っている。しかし、現在は荘厳から離れ、仏壇に位牌のみを置く人も増加している。また、従来の分業制の工程とは異なるガラス製の仏具などへの需要も生じている。

【考察】伝統的な京仏壇・京仏具の職人は各宗派の意匠に応じた技能を発揮し、その技能を代々継承してきた。一方、現在は伝統的な京仏壇の流れを汲む新型仏壇や家具製造業者などが手掛ける家具調仏壇などが混在している状態にあり、伝統的な金仏壇を求める人は激減している。売り手側の多様化と現代の生活に応じた仏壇・仏具を求める買い手側の変化が相まったことにより仏壇・仏具の意匠の変化が引き起こされ、結果的に伝統的な仏壇・仏具製造に携わる職人が技能を発揮する場自体が減少したと考えられる。この場の減少に加えて、目利きとして職人の技能を支えてきた人たちが減少することによって、職人の技能の向上や職業継続意識に対して今後さらなる負の影響を与えていくことが予期される。

受容の変化に伴う顧客価値の変化は歴史上多々見られることである。しかし、技能継承を考える上では現在の社会的受容のみならず、従来継承されてきた意匠の意味を踏まえた技能の在り方や、文化財修復などの将来を見据えた俯瞰的な視点が重要である。そのため、今後は「現状の求められるもの」と「職人の技能習得」との乖離が職人の意識や文化の継承に与える影響について引き続き調査を行なう必要がある。

本研究は JSPS 科研費 21K12888 の助成を受けたものです。

【引用文献】成田智恵子・来田宣幸, 2016, 伝統工芸士の職業継続要因とスキル習得に関する研究, 応用心理学研究, 42(2) , 149-150.

（なりた　ちえこ）

労働者の社会貢献認知とワークモチベーション

○梶原隆之[1]　山村豊[2]
([1]文京学院大学人間学部　[2]帝京大学教育学部)
キーワード：労働、社会貢献、主観的幸福感

【問題と目的】

人間の労働への動機づけについて、上原(2009)は、ハースバーグの動機づけ衛生理論をめぐって、「達成」「承認」「仕事自体」「責任」「成長」の職務内容の要因であるM因子と、「経営と管理」「監督技術」「給与」「対人関係」「作業条件」の職務環境の要因であるH因子があるとし、M因子の内在的報酬によって動機づけることを内発的モチベーション、テイラーが行った科学的管理法のような、H因子の外在的報酬による動機づけを外発的モチベーションと説明したうえで、CSR評価の関係性構築モデルについて検討している。

モチベーションの理論では内容理論と過程理論に分けて論じられるが、内容理論のひとつとして、マスローの欲求階層説が挙げられる。マスローが人間の基本的欲求の段階説を述べ、「生理的欲求」「安全の欲求」「所属と愛の欲求」「承認の欲求」「自己実現の欲求」と下層から下位の欲求が満たされると上位の欲求が満たされるとされており、職場ではそれぞれの段階の欲求が満たされ、最後に自己実現の欲求を満たすと理解されている。しかし、さらにマスローは、自己実現について「もっともたやすく自我を忘れ、これを超越する。また最も問題中心的、自己滅却的で、活動に際しては最も自然」と自己超越について述べている。そのことはマスローの理論を再構成したマクレランドの理論でも最上位が「成長欲求」となっているが、自己実現の最上部に「自己超越」があり、それは、いいかえれば「社会貢献」だと考えられる。よって、労働への動機づけについてM因子の中に「社会貢献」という要因が存在することを示唆しているといえる。

梶原・山村（2018）は、労働者400名に、「業務上どのようなときに社会貢献をしていると感じるか」について自由記述で調査し、その傾向を探った。513の事例を20のカテゴリーに主観的に分類した。

本研究では、梶原・山村（2018）の結果をもとに、労働者の社会貢献認知を因子分析するとともに、ワークモチベーションとの関連について明らかにする。

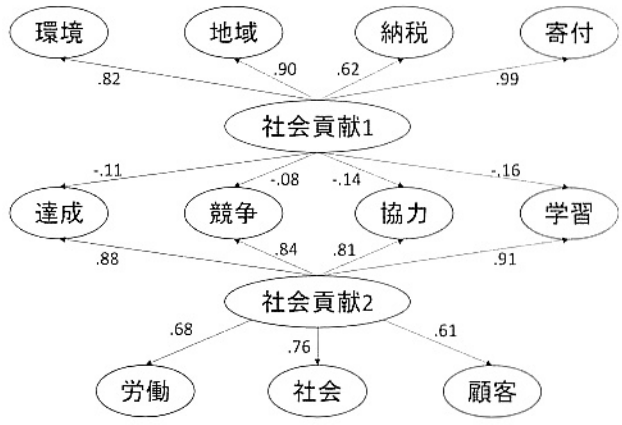
【方法】

調査対象者：A調査会社に登録している労働者500名（男性226名、女性272名、その他2名、平均年齢44.14±13.64歳)、実施時期：2022年5月、手続き：フェイスシート3項目（性別、年齢、職業)、梶原・山村（2018）の調査結果から各カテゴリーで代表的なもの2項目を選定した仕事上の社会貢献認知に関する40項目、池田・森永（2017）のワークモチベーション尺度の4因子から方向性、持続性、強度の項目について1項目ずつ全12項目を5件法で、WEBで回答させた。

【結果】

社会貢献認知に関する項目について探索的因子分析を行った。すべての項目の因子分析をした後、「高価な買い物」を含む「本業による社会貢献活動によって得られた結果」と解釈できない項目を除いた項目で再度因子分析したところ、「直接的社会貢献」（社会貢献1）と「本業による社会貢献」（社会貢献2）の2因子が抽出された。さらに、各因子について因子分析をしたところ、4つと3つの因子が抽出された。また、ワークモチベーションの項目についても探索的因子分析を行った。「達成志向」「競争志向」「協力志向」「学習志向」の4因子が抽出された。これらについて検証的因子分析を行い、適合度の指標はどれも許容範囲であることを確認した（社会貢献：GIF=.909 AGIF=.878 RMSEA=.069; ワークモチベーション：GIF=.927 AGIF=.881 RMSEA=.086)。

次に共分散構造分析による因果分析を行った。その結果、figureに示すように、「本業による社会貢献」がワークモチベーションのすべての因子に強く影響するとともに、その社会貢献には「社会」が強く影響していることが明らかになった。このことは、「本業による社会貢献」のうちでも、「社会や世の中、人のために役立っている」と感じたような場合に、ワークモチベーションが高まることを示唆する。



N=500 GFI=.816 AGFI=.781 RMSEA=.079 観測変数と誤差は省略

【考察】

労働者の労働における社会貢献認知は、「直接的社会貢献」と「本業による社会貢献」ということが明らかになり、後者がワークモチベーションに強い影響を与えていた。CSR活動では環境への配慮や地域参加など特別なことを実施している例もあるが、本業によるCSRを検討した方が労働者のモチベーションにとって良いことが分かる。また、「社会や世の中、人のために役立っている」と感じたような場合に、ワークモチベーションが高まることが示された。よって、常日頃から、自社の活動や労働者の業務が、いかに社会や人の役に立っているかを意識させるという、研修等の方策を実践することが有意義だといえる。

【引用文献】

アブラハム・H・マスロー，上田吉一（訳）　2014　完全なる人間　魂の目指すもの　誠信書房　46

池田　浩・森永雄太(2017)　我が国における多側面ワークモチベーション尺度の開発　産業・組織心理学研究　30(2), 171-186

梶原隆之・山村豊（2018）企業労働者の社会貢献認知　日本応用心理学会第85回大会発表論文集, 62

上原　衛・山下洋史・大野高裕（2009）　ワーク・モチベーションとCSR評価―ハースバーグの動機付け衛生理論とCSR評価の関係性構築モデル―　日本経営工学会論文誌, 60(2), 105-112

（かじはら　たかゆき・やまむら　ゆたか）

大工職の建設作業者における リスクテイキング行動と安全行動の促進要因

-インタビュー調査による予備的検討

○高橋明子[1]　三品誠[2]（非会員）
（[1]労働安全衛生総合研究所　[2]有限会社サイビジョン）

キーワード：大工職の建設作業者，リスクテイキング行動，安全行動

【目的】本研究では，建設作業者の作業経験別のリスクテイキング行動および安全行動の認知行動モデルを作成するための予備的検討として，ベテランの大工職を対象としたインタビュー調査を行い，認知行動モデルに組み込むべき要因を抽出することを目的とした．

【方法】調査対象者：関東地方で働くベテランの大工職 18 名（平均経験年数 21.6±6.7 年，平均年齢 39.7±6.4 歳）．

調査方法：1 名ずつ調査の説明をし参加の同意を得た後，半構造化面接を行った．調査は第一著者所属機関の研究倫理審査委員会の承諾を得た（R3-安 4-01）．

調査項目：脚立作業を対象とし，調査項目は（1）「普段やることのあるリスクテイキング行動」の 4 項目，(2)「経験の浅いころはやったが現在はやらないリスクテイキング行動」の 5 項目，(3)「経験の浅かったころも現在もやらないリスクテイキング行動」の 3 項目，(4) リスクテイキング行動に関する頻度の推移の主観評価であった．本報は調査項目 (1) ～ (3) の結果を報告する．

分析方法：インタビューの音声データから 18 名分の逐語録を作成し，コーディングを行った．1 人目の逐語録を読み込み，NVivo により「大工職の建設作業者が脚立作業のリスクテイキング行動を促進する要因」に関連する箇所を抽出して，コード名と定義を記録した．2 人目以降も同様に分析した．コードを抽出する際，調査対象者間でコードの類似性と相違性を比較・確認し，コード名や定義を修正した．また，類似するコードを集めて，サブカテゴリー名，カテゴリー名を付けてまとめた．「大工職の建設作業者が脚立作業の安全行動を促進する要因」についても同様に分析した．

【結果と考察】リスクテイキング行動の促進要因：カテゴリーとサブカテゴリーを【 】と［ ］で示す．ベテラン作業者のリスクテイキング行動の促進要因は 4 カテゴリー（【作業者の内的要因】,【経験的要因】,【状況的要因】,【他者の影響】），9 サブカテゴリー，21 コードが抽出され，初心者のリスクテイキング行動の促進要因は 4 カテゴリー（ベテラン作業者と同じ要因），14 サブカテゴリー，36 コードが抽出された．

このうち，9 サブカテゴリーがベテラン作業者と初心者に共通もしくは類似していた．先行研究と比較すると【作業者の内的要因】の［主観的なリスク評価の低さ］は，Low et al.（2019）と Man et al.（2021）の「リスク知覚」と類似していた．また，［リスクテイキング行動と効率性・作業性・安全性との関連の認識］を持つことも Man et al.（2021）の期待される結果のためにリスクをとる「結果期待」と類似していた．【状況的要因】の［時間的に切迫した状況］は Man et al.（2017）の「作業スケジュール」と類似し，Man et al.（2017）では安全よりも生産の優先や先輩のタイムプレッシャーで，リスクテイキング行動が普通のことだと考えるようになることが指摘された．このように，【作業者の内的要因】,【状況的要因】は，先行研究と類似の要因が多く認められ，我が国の建設作業者にもこれらの要因が適用可能だと考えられた．

次に，5 サブカテゴリーが初心者にのみ見られた．【作業者の内的要因】の危ない状況に遭遇しても［対処できるという気持ち］は Low et al.（2019）の自信過剰やコントールできるという錯覚のような「認知バイアス」と類似し，この要因が特に若年者や作業経験の浅い作業者に見られる可能性があった．また，【他者の影響】の［親方・先輩のリスクテイキング行動の模倣・踏襲］や［上級者等の作業方法の教示不足・ルール違反の容認］のように上の立場の作業者の態度や行動が初心者の行動へ影響する可能性が示唆された．

安全行動の促進要因：安全行動の促進要因は，作業経験別の特徴はあまり見られず，作業者の内的要因を中心に，7 カテゴリー（【安全・作業に関する知識・スキル】,【自己の能力，立場に関する自覚】,【ケガ・事故の影響の認識】,【作業（方法，場所）に関する認識】,【作業への主体的な関わり】,【経験・具体的行動】,【他者からの支援・影響】），14 サブカテゴリー，36 コードが抽出された．

まず，作業者の【安全・作業に関する知識・スキル】は，Shin et al.（2015）と Guo et al.（2016）の現場の安全衛生に関する「安全知識」と類似していた．本調査ではさらに作業者の自己の作業能力・体力の衰え・指導的な立場の自覚，ケガ・事故の自己や他者への影響の認識，正しい作業と効率性・作業性・安全性・正確性の良さが関連するという認識も抽出された．今後定量的に検討しこれらの自覚や認識が安全行動の予測要因であれば，作業者にこれらの自覚や認識を持ってもらう安全教育の提案が可能となる．また，【経験・具体的行動】の［自己・他者のケガ・ヒヤリハット経験］が安全行動の促進要因として認められ，Wong et al.（2020）の個人用防護具利用の促進要因と同様であった．加えて，【他者からの支援・影響】の［会社・親方・先輩・上司等からの安全に関する教示・指導］は，Guo et al.（2016）の上司や同僚からの安全に関する支援である「社会的支援」と類似の結果となった．本調査は管理者から作業者への教示・指導のように一方向の情報伝達の要因が抽出されたが，双方向，すなわち，Shin et al.（2015）で報告された現場の安全問題に関するオープンな「コミュニケーション」も安全行動に関連する可能性があるため，今後検討したい．

最後に，各行動の促進要因を比較するとリスクテイキング行動と安全行動とで同様の効果が期待できる要因もあったが，各行動独自の促進要因もあった．そのため，リスクテイキング行動と安全行動の促進要因は必ずしも一軸上に乗らないか，どちらか一方の行動の検討では抽出されづらい可能性がある．リスクテイキング行動の抑制と安全行動の促進を目指すには，各行動の促進要因を検討すべきであることが示唆された．

今後は安全行動の促進要因に着目し，定量的な検討する．

【文献】

Guo, B. H. W., You, T. W., Gonzalez, V. A. (2016). *Safety Science*, 84, 1-11.
Low, B. K. L., Man, S. S., Chan, A. H. S, Alabdulkarim, S. (2019), *International Journal of Environmental Research and Public Health, 16*, https://doi.org/10.3390/ijerph16081335
Man, S. S., Chan, A. H. S., Wong, H. M. (2017) *Safety Science*, *98*, 25-36.
Man, S. S., Chan, A. H. S., Alabdulkarim, S., Zhang, T. (2021) *Safety Science*, 136, https://doi.org/10.1016/j.ssci.2020.105155
Shin, D., Gwak, H., Lee, D. (2015) *International Journal of Occupational Safety and Ergonomics*, 21, 298-311
Wong, T. K. M., Man, S. S., Chan, A. H. S. (2020) *Safety Science*, *126*, https://doi.org/10.1016/j.ssci.2020.104663

本研究は厚生労働科学研究費補助金労働安全衛生総合研究事業 21JA1002 の助成を受けたものです．

（たかはし あきこ・みしな まこと）

ワーケーションが心理・生理反応に及ぼす影響†

○今井 章[1]　白井 真理子[1]　堀田 竜士[1,2]（非会員）　林 靖人[1]（非会員）　石橋 剛[3]（非会員）　内田 宏[4]（非会員）
([1]信州大学　[2]日本エヌ・ユー・エス(株)(現所属)　[3]東急リゾーツ＆ステイ(株)　[4](株) 東急不動産 R & D センター)

キーワード：ワーケーション　心理反応　生理反応

【目的】仕事(work)と休暇(vacation)とを組み合わせた造語であるワーケーション(workcation)が，COVID-19 新型コロナウイルス感染症拡大の影響も受け，近年にわかに注目されている。一方，ワーケーションの学術的定義は定まっておらず，ワーケーションが心身に及ぼす影響を実証的に検討した研究はほとんどない。そこで，本研究ではワーケーションを「リゾート環境においてリモート業務をこなしつつ余暇を楽しむこと」と定義し，ワーケーションが心理・生理反応に及ぼす影響を検討した。併せて職域による違いを比較するため，経営者群と一般職群における効果の差異も検討した。

【方法】**参加者**　一般広告による募集に応じた経営者群 5 名(平均 40.4 歳)と一般職群 4 名(平均 41.3 歳)であった。

測度　(1)心理反応として，以下の 4 つを使用した。①過去 1 週間の気分を測定するため，POMS2 日本語短縮版(横山, 2015)を用いた。これは全 35 項目 7 因子(怒り－敵意／混乱－当惑／抑うつ－落ち込み／疲労－無気力／緊張－不安／活気－活力／友好)から構成され，「まったくなかった」(0 点)から「非常に多くあった」(4 点)の 5 件法で回答を求めた。②STAI(FormX)日本版(水口・下仲・中里, 2012)から状態不安尺度を用いた。全 20 項目からなり，「全くあてはまらない」(1 点)から「非常によくあてはまる」(4 点)の 4 件法で回答を求めた。③快と不快の全体的な感情状態を測定するため，肯定的感情(PA)，否定的感情(NA)，安静状態(CA)の全 24 項目 3 因子からなる一般感情尺度(小川・門地・菊谷・鈴木, 2000)を用いた。現在の感情状態を「全く感じていない」(1 点)から「非常に感じている」(4 点)の 4 件法で回答を求めた。④主観的ストレス度を「全く感じていない」を 0，「非常に感じている」を 100 とする，視覚アナログ尺度(visual analogue scale; VAS)により評定させた。

(2)生理反応として携帯型の心電図計測器(Checkme Pro B ADV 三栄メディシス)を使用して心電図を測定した。

手続　(1)事前測定としてワーケーション実施日 1 週間前の業務日に，心理尺度はオンラインアンケートにより回答を求めた。心理尺度への回答後，事前送付した心電図測定器とその使用法を教示する簡易説明書を用いて心電図を 5 分間，自己記録してもらった。

(2)令和 3 年 11 月上旬に長野県茅野市のリゾートホテルにおいて，1 泊 2 日のワーケーションを実施した。1 日目の午前中に，1 時間半のワーケーション関連の研修講習会に参加してもらった。昼食後，各自が宿泊ホテルの自室，あるいはホテルから徒歩 5 分のコワーキングスペースのいずれかにおいて通常の業務を 5 時間，リモートで行ってもらった。午後 6 時を業務終了時間とし，その後，心理尺度への回答と心電図の測定を自己記録してもらった。

(3)事後測定としてワーケーション実施日の 1 週間後の業務日に，事前測定と同様に心理尺度への回答，および，心電図の自己記録を行ってもらった。

【結果】**心理反応**　①POMS2…7 因子ごとに得点を集計し，それぞれについて群(経営者／一般職)×測定時期(事前／当日／事後)の分散分析を行ったが，主効果，交互作用のいずれも有意ではなかった。②STAI 状態不安…同様な分散分析を行ったが，いずれも有意ではなかった。③一般感情尺度…PA，NA，CA について同様な分散分析を行ったが，いずれも有意ではなかった。④主観的ストレス度…同様な分散分析を行ったが，いずれも有意な結果は得られなかった。

生理反応　計測された心電図から心拍数，交感神経系活動の指標として LF/HF 比，副交感神経系活動の指標として HF 値をそれぞれ算出し，分析の対象とした。また心電図は，事前，当日，事後の 3 回の測定値が得られた経営者群 3 名，および一般職群 3 名のみを分析対象とした。①心拍数…群×測定時期の分散分析を行ったが，有意な結果は得られなかった。②HF 値…同様の分散分析の結果，測定時期の主効果が有意($F(2, 8) = 5.49$, $p < .05$)，群と時期の交互作用が有意傾向($F(2, 8) = 3.66$, $p < .08$)であった(図 1)。事後の HF 値は事前，当日と比較して有意に増大していた。また事後の一般職群の HF 値の増大が有意傾向であった。③LF/HF 比…同様の分散分析の結果，群と時期の交互作用が有意傾向($F(2, 8) = 3.38$, $p < .09$)であった(図 2)。

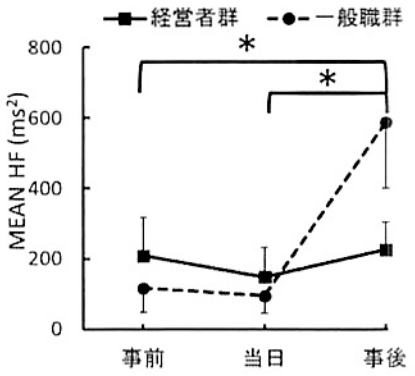


図1　平均HF値の変動

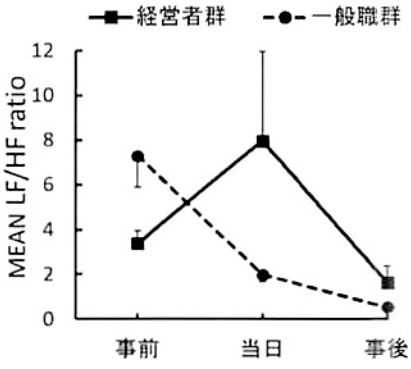


図2　平均LF/HF比の変動

【考察】心理反応には経営者群と一般職群とで差異が認められなかった。一方，生理反応には職域の違いが示され，HF 値は一般職群においてワーケーション 1 週間後に上昇する傾向が認められた。また，LF/HF 比は当日，経営者群において上昇する一方，一般職群では事前から事後にかけて減少する傾向が認められた。ワーケーションの効果は生理反応におけるリラックス効果として現れること，またその効果は職域によって異なることが示唆される。

【引用文献】

水口 公信・下仲 順子・中里 克治 (2012). 日本版 STAI (FormX) 使用手引(増補版) 三京房

小川 時洋・門地 里絵・菊谷 麻美・鈴木 直人 (2000). 一般感情尺度の作成 心理学研究, *71*, 241-246.

横山 和仁監訳 (2015). POMS2 日本語版マニュアル 金子書房

† 本研究は東急リゾーツ＆ステイ(株)，および，(株)東急不動産 R & D センターとの共同研究として実施された。本研究の実施にあたりご協力をいただきました，東急リゾートタウン蓼科統括総支配人山崎国博氏，東急リゾーツ＆ステイ(株)経営企画部助田知子氏に謝意を表します。
(いまい あきら・しらい まりこ・ほりた りょうじ・はやし やすと・いしばし つよし・うちだ ひろし)

継続する自然災害による被災者の仕事の変化に関する研究

—2000 年三宅島噴火の被災者への面接調査から—

高鳥　博正
（帝京大学大学院　経済学研究科）
キーワード：三宅島噴火、災害復興、被災者支援

【目的】

2000 年に起こった三宅島噴火は噴火から 15 年以上にわたり有毒な火山ガスが放出し、被災者の生活再建にさまざまな被害をもたらしている。なかでも深刻な問題は火山ガスの被害による仕事の問題である。間断なく続く火山ガスは、三宅島の主要な産業であった農業などに多大な被害をもたらしている。このことは国勢調査（1995, 2015）でも三宅島の噴火前と後の就業率は 31.8%も減少し、特に農業や漁業を中心とした第一次産業の減少の割合は著しく高くなっている。

被災者の長期的影響に関する研究では生活の基盤となる住宅、仕事、収入、コミュニティなどを喪失した被災者は長期にわたって精神的に危険な状態にあることを指摘している（藤森, 1998）。このことは 2000 年三宅島噴火の被災者の精神健康を調査している大森（2010, 2011）の研究でも被災者の 6 割以上に精神健康の悪化が認められ、精神健康の回復を抑制している要因として仕事の再開ができないことや仕事がうまくいかないことをあげている。

これらの先行研究を参考にすると被災者が災害後に直面するさまざまな仕事に関する実情を明らかにし、それらの問題に促した支援策を検討していくことは現状の被災者支援における重要な課題であると考える。しかしながら「被災者の直面している仕事の実情を明らかにする」という視点からすると先行研究では被災者の精神的回復を抑制している要因の一つとして仕事の問題との関連を明らかにすることにとどまっており、被災者個人に焦点をあてた研究はきわめて少ない。すなわち被災者は災害後にどのような仕事の問題に直面し、その解消のためにどのようなことを望んでいるのかなど、個人の抱える問題に焦点をあてたアプローチはほとんどされてこなかった。

以上の問題提起を踏まえ、本研究の目的は現在も火山ガスとの共生しながら生活再建をしている 2000 年三宅島噴火の被災者を対象に面接調査を実施し、被災者個人の抱える仕事の問題を明らかにすることである。

【方法】

実施期間：本調査は 2021 年 3 月 14 日から 16 日、4 月 3 日から 6 日、8 月 2 日から 6 日、12 月から 16 日に実施した。

面接対象者：8 名　平均年齢 65, 3 歳 (SD=15, 0)

面接の手続き：対象者となる三宅村の被災者の自宅を訪問して個別面接を実施した。面接に要した時間は 1 名あたり約 1 時間程度であった。面接の結果は非面接者の同意を得て IC レコーダーに録音し、その内容について逐語録を作成し分析を行った。

面接内容：面接は半構造化面接を実施した。質問の内容は対象者の性別や年齢などのデモグラフィック特性、災害後における仕事の変化や災害後に抱えた仕事に関する問題についてである。

論理的配慮：面接調査の実施にあたり、質問への回答は本人に自由意志を尊重し、強制することはしなかった。

【結果】

面接の内容は面接者の所属するゼミで、指導教員及びゼミで協議をし、以下のように整理した。

・67 歳男性：2000 年の噴火で放出された火山ガスによって、帰島後、体力面・金銭面などの理由から農業を諦めてしまう人も多い。自分もそのなかのひとり。今後は噴火前からの仕事の転換をし、観光業を積極的に盛り上げていくなど災害後の状況に応じた仕事のスタイルへ変えていくことも必要だと思う。

・71 歳男性：噴火以降はだんだんと魚も少なくなってきていて漁業だけで生活をしていくのも大変な状況。避難から戻ってしばらくは復興関係の仕事がありなんとかなっていたが先のことを考えると不安も大きい。景気のいい話もないので考えないようにしている…。

・72 歳女性：噴火前は農業で生計を立てていたが噴火後はいつ火山ガスがやむかもわからなかったので農業をやめてしまった。今は自分が食べる分や近所に配る分だけ育てている。噴火後は若者も減少していて農業を続けても後継者がおらずやめることに後悔とかはなかった。

・50 歳女性：噴火後は観光客も減っていて民宿経営も苦しくなった。今後は民宿だけでなく三宅島特産のお土産を開発するなどの新しい取り組みも必要になってきていると思う。観光を活性化できれば観光客も増えて島全体の活気が戻ってくると思う。

【考察】

本研究の目的は現在も火山ガスとの共生しながら生活再建をしている 2000 年三宅島噴火の被災者を対象に面接調査を実施し、被災者個人の抱える仕事の問題について明らかにすることであった。

本研究における面接の結果、被面越者の多くが 2000 年噴火後に仕事の変化を体験したと語っていた。すなわち被面接者の多くが災害を契機として、仕事だけでなく災害前の日常も大きく変化させていた。ストレス理論では新しい生活環境に再適応するまで心理的な負担を伴うことが指摘されている。この点を踏まえると、被災者は災害という突然の出来事によって、急激に生活環境の変化を迫られることから、その心理的負担も大きくなることが推察される。したがって、今後の被災者支援においては、被災者が仕事の再開や回復にとどまらず、災害前の日常や新しい生活環境の変化に適応することができるような支援を検討していくことが必要であると考える。また、面接では被面接者の多くが災害の被害が長期化していることに今後の不安や諦めの気持ちを感じていると語っていた。ラファエル(1998)によると、被災者の中には繰り返し災害を体験することで、日常的な惨事、損害、苦難、絶望になれてしまう場合もあるとし、このような場合には楽観や希望を裏付けてくれるものが何もないので、被災者はさまざまな望みを放棄する傾向にあることを指摘している。この点を踏まえると、三宅島の被災者の支援においては、希望や期待が持てるような支援策もあわせて今後検討していく必要があると考える。

（たかとりひろまさ）

競争心と心理的スキルとの関連に関する研究

種ケ嶋　尚志（日本大学スポーツ科学部）

【目的】

競争にはメリット、デメリットがあり、競争の心理的構造を理解することは、スポーツや勉強への取り組み方や、一般社会での仕事における競争や成果主義雰囲気の中においても、健全で適応的な競争意識を取り入れることが可能となろう。競争心を有することの肯定的な面と否定的な面の両面が明らかになる（種ケ嶋ら（2019））中で、どのような心理的スキル（心理的競技能力）が競争心と関係するのかを明らかにしている研究は少ない。

そこで本研究では心理的スキルに着目し、競技力向上に繋がる競争心と心理的スキルの関連についての基礎的検討をすることを目的とし、得られた結果から競技環境を勝ち抜くために必要な「競技に打ち込む環境」「アスリート・ウェルビーイングの促進」といった安定的な競技環境を整えることに繋げるための「競争心」について検討する。

【方法】

1．調査対象者

首都圏の大学に通うスポーツ専攻学生（1～4 年生）242 名の内、有効な回答であった 232 名（男性 177 名，女性 55 名）を回答に使用した。　有効回答率 95.9%

2．調査期間　2022 年 7 月

3．調査内容：以下の調査を実施した。

(1)フェイスシート

(2) 多面的競争心尺度：太田(2010)が作成した 5 因子（手段型競争心、負けず嫌い、社会的承認、過競争心、競争回避）21 項目から構成されている質問紙を用いた。

(3)心理的競技能力診断尺度(DIPCA)：徳永ら（2003）が作成した心理的競技能力の 5 因子（競技意欲、精神安定集中、自信、作戦能力、協調性）52 項目から構成されている質問紙を用いた。

表1　競争心と心理的競技能力の相互相関

		心理的競技能力				
		競技意欲	精神安定	自信	作成能力	協調性
多面的競争心	手段型競争心	.63**	.06	.44**	.42**	.45**
	負けず嫌い	.48**	-.21**	.25**	.27**	.29**
	社会的承認	.38**	-.13*	.36**	.39**	.30**
	過競争心	.36**	-.26**	.41**	.40**	0.0
	競争回避	-.21**	-.36**	-.05	-.00	-.15*

*p<.05, **p<.01

【結果】

心理的競技能力尺度と多面的競争心尺度を分析した結果、心理的スキルの「競技意欲」「自信」「作戦能力」「協調性」と「手段型競争心」と正の相関。「精神の安定・集中」では競争回避で負の相関がみられた（表 1）。

また、フェイスシート項目の実力発揮の主観的評価度（「本番で実力発揮できているか？」）と多面的競争心尺度を分析した結果、本番で実力発揮出来ていると評価した群の方が、出来ていない群と比べて「手段型競争心」の得点が有意に高かった（表 2）。

【考察】

競争心と心理的競技能力との検討から、心理的スキルを向上していくためには、競争心の中でも特に、「手段型競争心」が関係していた。手段型競争心とは、「競争することを自己実現等へ近づくための手段として捉えこと、また相手とお互いを高めあい友情を築いたりすることで、結果的に自分が強くなれる」といったマインドを有することである。「競争（相手）は自分を強くする手段である」として競争を捉えるマインドは、競技意欲をより高め競技に対して前向きに取り組むことを可能にする。「手段型競争心」は自らのスポーツスキルを向上させていくために不可欠なマインドであると考えられる。実力発揮と競争心の検討からも、普段から実力発揮できていると自覚出来ている方が「手段型競争心」を強く意識していることが明らかとなった。競技力向上のためには大舞台で実力発揮できるようにすることも重要である。

本研究の結果から、本番で実力発揮し心理的スキルを高めるための競争心は、特に「手段型競争心」を強く意識し、練習や試合に臨むことが重要であることが示唆された。

キーワード（競争心、心理的スキル、実力発揮）

表2　実力発揮と競争心

		実力発揮	M	SD	t 値
多面的競争心	手段型競争心	できない（N=103）	28.72	4.68	-5.27**
		出来る（N=129）	31.64	3.51	
	負けず嫌い	できない（N=103）	16.84	3.05	-2.15**
		出来る（N=129）	17.64	2.41	
	社会的承認	できない（N=103）	11.66	2.55	-1.76（n.s）
		出来る（N=129）	12.22	2.33	
	過競争心	できない（N=103）	11.04	3.53	-1.79（n.s）
		出来る（N=129）	11.95	4.26	
	競争回避	できない（N=103）	8.68	2.67	.79（n.s）
		出来る（N=129）	8.37	3.23	
心理スキル	DIPCA合計	できない（N=103）	169.76	22.47	-7.27**
		出来る（N=129）	191.96	23.64	

*p<.05, **p<.01

「いい子」願望傾向がある者のいい子像に関する考察

○関谷美希[1]　村井あかり[1]
([1]日本女子大学大学院人間生活学研究科人間発達学専攻)
キーワード：いい子，葛藤

【目的】本研究では、江藤・向山（2019）より「いい子」を「自分の感情を抑えてでも周りからの期待に添うように努力したり、他者の欲求充足を重視し、自己をつくりあげることで外的適応の維持もしくは上昇させようとする傾向をもつ者」と定義する。「いい子」として振舞っている者が「いい子である」という他者からの評価を得られない際に外的葛藤を引き起こし、また他者からの評価を得られた場合も周囲に過剰に適応していることから内的葛藤を引き起こし、その結果として心理的不適応を抱えていると仮定する。

表面上は適応的であることから注目されにくい「いい子」の抱える葛藤と精神的健康に焦点を当て、その心理的メカニズムを明らかにすることで、「いい子」について新たな知見を得ることを目的とする。

【方法 1】質問紙調査

1)調査対象者：20 代男女 111 名
2)調査時期：2022 年 7 月
3)調査方法：インターネットのアンケートフォームを利用し質問紙を配布した。
4)使用尺度：「いい子尺度」（江藤・向山,2019),「自尊感情尺度」(山本・松井・山成,1982),「本来感尺度」(伊藤・小玉,2005),「Stress Response Scale-18」(鈴木・嶋田・三浦・片柳・右馬埜・坂野,1997)
5)分析の手続き：各尺度について 5 件法で回答を求め、得られた結果を *SPSS* にて解析した。

【結果 1】

各尺度に関する質問項目について得点分布を確認したところ、全ての項目において大きな偏りは見られなかった。そこで、全項目を分析対象として、主因子法による因子分析を行った。「いい子尺度」では固有値の変化から 6 因子構造が妥当であると解釈した。十分な負荷量を示さなかった 5 項目を削除し、最終的に 54 項目 6 因子が抽出された。第一因子は「自分は真面目だと思っている」「元気がない時でも明るく振る舞う」といった 20 項目から成り立っており、「優等生・過剰適応因子」と命名した。第二因子は「自分の感情を抑えてしまっている」といった 13 項目から成り立っており、「自己抑制因」と命名した。第三因子は「自分の評判はあまりよくないと思っている」といった 8 項目から成り立っており、「否定的自己意識因子」と命名した。第四因子は「人からほめてもらえることを考えて行動する」といった 6 項目から成り立つため「評価意識因子」と命名した。第五因子は「スポーツで頑張ることができる」といった 4 項目から成り立っており「活発性因子」と命名した。第六因子は「周りに言われるがままに生きてきた」といった 3 項目から成り立っており、「自我脆弱性因子」と命名した。α 係数は全ての因子で十分な値を示した。そこで、「いい子尺度」を構成する 6 因子と各尺度の因子の相関係数を男女別に算出したところ、表 1、表 2 に示す結果が得られた。

【考察 1】

「活発性」傾向が高い者は自尊感情も高く、「自我脆弱性」傾向が高い者は自尊感情の低下やストレス反応を引き起こしていたことから、「いい子」の特徴により精神的健康との関連には差が見られることが示唆された。また、女性は男性よりも本来感との相関が複数示され、自分らしくある感覚の喪失という周囲が察知し難い形での心理的不適応を引き起こしやすいことが推察された。今後は、心理的不適応に至るプロセスをパス解析等により検討する予定である。

表1　いい子・自尊感情・本来感・SRS18の相関係数（男性）

	優等生・過剰適応	自己抑制	否定的自己意識	評価意識	活発性	自我脆弱性
自尊感情	.318	.076	-.736**	.337	.478**	-.414*
本来感	.293	-.244	-.635**	.214	.162	-.23
悲しみ怒り	-.197	.298	.234	-.316	-.188	.480**
抑うつ無気力	-.133	.19	.484**	-.223	-.380*	.598**

**p<.01, *p<.05

表2　いい子・自尊感情・本来感・SRS18の相関係数（女性）

	優等生・過剰適応	自己抑制	否定的自己意識	評価意識	活発性	自我脆弱性
自尊感情	.026	-.203	-.696**	.205	.337**	-.322**
本来感	-.056	-.353**	-.404**	.067	.295**	-.433**
悲しみ怒り	.122	.096	.223*	.244*	-.121	.015
抑うつ無気力	.225*	.217	.542**	.07	-.256*	.302**

**p<.01, *p<.05

【方法 2】フォーカスグループインタビュー調査

1)調査対象者：女子大学生 7 名
2)調査時期：2022 年 7 月
3)方法：フォーカスグループインタビューを 1 回実施した。
4)質問項目：「いい子」は葛藤を抱えているのかについて、過去の具体的なエピソードから解明することを目的に質問項目を設定した。対象者には「いい子」について、「周りの期待に応えようとしたり、自分の気持ちを抑えようとしたりする人」と説明し、「いい子」の特徴が当てはまる行動をとったことがあるかを尋ねた。行動に関する具体的なエピソードや行動の理由、当時の感情などについて尋ねた。
5)分析の手続き：録音データと録画データから逐語録を作成した。分析の妥当性を確保するため調査者 2 名で、逐語録を繰り返し読み、データを分節化し、意味内容による分類を行った。分類結果について、別の言葉で置き換え概念を生成した。

【結果 2】分析で得られた結果のうち、「いい子」の葛藤に関する 3 つの概念が生成された。

1)【対人葛藤－「本心」の不在による軋轢】「みんなにいい態度を取りすぎてしまって、私をめぐって（中略）どっちの方が大事に思ってるの？みたいに言われて」などのデータから、「いい子」がすべての人間を傷つけないようにするあまり、本当の気持ちを表出できず、対人葛藤が起こることと定義した。

2)【個人内葛藤－隠される「疲労」・「自己犠牲感」】「すごい無理してるなっていうのはあって、嫌なのに、周り、その場のノリとか雰囲気とか、相手の気持ちとか考えちゃって」などのデータから、「いい子」は、「いい子」であろうとすることで抱える疲労や自分を犠牲にしているという感覚があり、個人内葛藤が起こることと定義した。

3)【葛藤の終結－「諦め」によって得る安全】「言わなくていいやで、こう、自分の中で解決させて、無理やり解決しちゃう」などのデータから、「いい子」は、何らかの葛藤の末、他者から非難されないために、本当の気持ちを表出しないということを選択しているとし、定義した。

【考察 2】「いい子」傾向が高い者が周りの期待に応え自己の気持ちを抑えることで、何らかの葛藤を引き起こしている可能性が推察された。今後、調査を重ね、どのような葛藤を抱え、そして、なぜ葛藤を引き起こしてしまうのかについて検討する予定である。

【引用文献】

江藤 有里・向山 泰代 (2019). Big Five との関連から見た「いい子」の特徴と親からの期待　研究紀要「プシュケー」，*18*，37-48.

（せきや　みき・むらい あかり）

中学生の将来志向性の特徴

―性差,及び,小学生と比較した年齢差に着目して―

○山上寛子
(聖徳大学大学院児童学研究科)

キーワード：中学生,将来志向性,性差,小学生と比較した年齢差

【目的】

これまでの未来展望の情緒的側面を取り上げた研究は,主に高校生や大学生を対象としており,中学生の未来展望の検討した先行研究は数少ない。さらに中学生を対象とした研究は,情緒的側面の中でも,非現実的とされる「希望」を検討している(元森,20009;都筑,2001)。本研究では,未来展望の中の「希望」と将来の見通しである「展望」との両概念を含む,中学生の将来志向性の特徴を,性差,及び,小学生と比較した年齢差に着目して明らかにすることを目的とした。

【方法】

◎調査対象：X 県公立 A・B 小学校の 5・6 年生 214（男子 118 人,女子 96 人），X 県公立 C・D 中学校の 1～2 年生 457 人；男子 224 人,女子 233 人)に質問紙による調査を行った。

◎将来志向性:山上・相良(2019)の中学生向け将来志向性尺度「良識・向上志向」下位尺度 4 項目,「家庭志向」下位尺度 3 項目,「金持ち志向」下位尺度 3 項目の 3 下位尺度,合計 10 項目から構成された。

【結果】

小学生のデータ,中学生のデータにおける,将来志向性の下位尺度得点(良識・向上志向,家庭志向,金持ち志向)と標準偏差,相関係数を,それぞれ男女別に算出した(Table 1)。その結果,各下位尺度の相関係数は,学校別・男女別において,有意な正の関連があった(小学生男子 r=.37～.46;小学生女子 r=.40～.60,中学生男子 r=.24～.40;中学生女子 r=.21～.36,p<.001)。

中学生の将来志向性の性別,及びに,小・中の年齢別による差を検討するために,性別,小・中の年齢差を独立変数,良識・向上志向,家庭志向,金持ち志向を従属変数とした 2 要因分散分析を行った(Table 1)。性別における仮説検定から,男子は女子に比べて金持ち志向が有意に高く家庭志向が有意に低いこと,また,小・中の年齢による差の検定から,中学生の将来志向性は,良識・向上志向,家庭志向,金持ち志向のいずれの下位尺度においても,中学生の得点が小学生に比べて有意に低いことが示された。

さらに,導き出された上記の将来志向性の性別,及び,小・中学校の年齢別による差について,実質的な大きさを評価するために効果量(effect size)を算出した(Table1)。効果量の大きさの目安として,水本・竹内(2008)は,二元配置分散分析の主効果では,効果量の小(Small)として η^2=.01,効果量の中(Medium)として η^2=.06,効果量の大(Large)として η^2=.14 を目安として示し,交互作用の効果量の目安では,効果量の小(Small)として η^2=.01,効果量の中(Medium)として η^2=.09,効果量の大(Large)として η^2=.25 を示している。本研究をこの効果量の目安に照らしてみると,性別による差では金持ち志向(η^2=.04),小・中学校の年齢差では良識・向上志向(η^2=.05)に中程度の大きさの差が見られたが,その他には小さな差しか見られなかった。男子の金持ち志向が高いという性差(η^2=.04)に比べて,女子の家庭志向が高いという性差(η^2=.01)は小さかった。年齢差では,中学生になるにつれて良識・向上志向,家庭志向,金持ち志向の 3 志向性共に低下することが示されているが,良識・向上志向の低下(η^2=.05)に比べて家庭志向(η^2=.02),金持ち志向(η^2=.02)の低下は少なかった。

【考察】

将来志向性の性別による差の検討

性別における仮説検定から,男子は女子に比べて金持ち志向の得点が有意に高く家庭志向の得点が有意に低いことが確認された。先行研究では,元森(2009)が,「幸せになっているか？」などの 8 項目を調査して,希望の性差は,男子は社会貢献が,女子は家族との幸せな未来が,幸せの決め手であることに言及している。本研究は,元森(2009)の希望の性差をさらに具体的に,つまり,展望に近づけた結果である。

将来志向性の小・中の年齢別による差の検討

小・中の年齢差の検定から,中学生の将来志向性は,良識・向上志向,家庭志向,金持ち志向のいずれも,中学生の得点が小学生に比べて有意に低いことが示された。本研究のは，年齢が上がるにつれて将来への希望が低下していくことを示した先行研究(都筑,2001；白井,1997)を支持する結果である。

性差と年齢差の効果量の検討

「男子は金持ち志向が高い」という性差には中程度の大きさの効果量(η^2=.04)が確認されたが,「女子は家庭志向が高い」という性差には小程度の効果量(η^2=.01)しか確認されなかった。差の大きさを検討する効果量の検討結果から,年齢が上がるにつれて中学生の将来志向性が低下する傾向は,家庭志向(η^2=.02)と金持ち志向(η^2=.02)よりも,良識・向上志向(η^2=.05)に顕著にみられることが明らかにされた。中学生男子は女子よりも金持ち志向が高いことから,男子は「人や社会のためになりたい」という公共に向けられていた視野が「高い報酬を得たい」「豊かな暮らしがしたい」といった現実性を重視する視野に変わってきているのではないかと考えられる。

Table 1　平均値,標準偏差,及び分散分析の結果

	小学生		中学生		主効果		交互作用
	男子 N=118	女子 N=96	男子 N=224	女子 N=233	性差	小中の差	
	M SD	M SD	M SD	M SD	F値 (η^2)	F値 (η^2)	F値 (η^2)
良識向上志向	3.37 .60	3.20 .65	2.95 .68	2.98 .63	1.74, $n.s$ (.00)	35.86*** (.05)	3.59† (.01)
家庭志向	3.19 .70	3.34 .69	2.87 .92	3.11 .82	8.23*** (.01)	16.41*** (.02)	.42, $n.s.$ (.00)
金持ち志向	3.39 .68	2.96 .82	3.06 .74	2.79 .78	30.89*** (.04)	15.78*** (.02)	1.61, $n.s$ (.00)

***p<.001　**p<.01　†p<.10

【引用文献】元森恵理子(2009).第２回子ども生活実態基本調査　ベネッセ研究所報,49,130-145.
都筑学(2001).小中学生における時間的展望の横断的分析　日本教育心理学会総会発表論文集(43),24.

保育学生における＜気づき＞の促進要因

―就業予期と効力感の視点から―

○山本　睦
（　常葉大学　）

キーワード：気づき、保育者効力感、就職可能性

【目的】

2020 年 3 月厚生労働省は、保育所を対象に保育者および保育所の自己評価活動を促進し、C（評価）から始まる PDCA サイクルによって自己評価活動の重症性を強調する方向で「自己評価ガイドブック」の改訂を行った。これまで保育者自身の成長を促すことが目的とされる園内研修では、エピソード記述の持ち寄りや検討を通して＜気づき＞が得られる過程を分析（福崎他,2012）や、教師の成長において「省察」が重要視(Steffy, et.al, 2013/2000, 金,2009)されてきた流れを受けて、昨今の保育学部生の実習日誌に対する園からの評価にも＜気づき＞を求める事例が増えている。

先の保育者の自己評価が「エビデンスに基づく」ことが目指されているものの、実際にはその多くが主観的判断に基づく評価、もしくは園内の相対的立場に基づく相対評価（「先輩がこれくらいだから、自分はこれくらい」といった周囲とのバランスを考慮した評価）となっており、PDCA サイクルを回す原動力となる評価活動になっていない。この自己評価が何を示しているのかは再考する必要があるだろう。

本研究では数日の実習経験があり、資格取得につながる本実習準備に入っている大学生を対象に、授業後の考察文章を分析、＜気づき＞のカテゴリ化を実施し、その出現傾向と学生の「保育に対する自信度（現状の効力感）」と「保育職に就く可能性（就職可能性）」を重ね合わせることで、主観的な自己評価と＜気づき＞の関係性を検討した。その分析を通じて、＜気づき＞がある学生とない学生の自己評価の特徴を抽出することを目的とした。

【方法】

・手続き

教育実習必修科目である「教育心理学」受講の 2,3 年生（3 年生は再履修者）197 名中、第 1,2,6 回の 3 回とも出席し、Forms への回答もあった 158 名を対象とした。第 1,2 回で「自信度；効力感」と「就職可能性；就業予期」と尋ね、%数値を回答してもらった。授業では毎回「この授業を受けて、気づいたことは何ですか」という設問で感想ではなく「考察」を書くよう指示している。今回の分析対象は第 5 回「MI 理論」の考察とした。

また考察の比較対象として、第 1,2 回では,授業中に使用した映像資料（ロシアのウクライナ侵攻に関する映像、非認知能力に関する映像）から、「子どもに教えたい学習内容」を記述してもらった。考察ではなく、知識を指導計画に反映する作業をしてもらい、文章作成能力としての高低が考察に影響しているのかを合わせて調べた。

・カテゴリの作成

＜気づき＞の内容については、以下の基準に従ってコーディングした。

①授業内容の復唱　その日の授業で教員が話した内容がそのまま記述されている。要約。

②既存の考え方の変更　授業を聞くまで持っていた常識、信念、知識が変化した、修正されたといった記述。

③関連する知識との統合　異なる回の授業内容と重ね合わせて、知見を得たことを示す記述。

④実践への応用　この回で学んだ理論をもとに、保育現場での諸活動に応用した記述。

また学習内容については、語尾に注目し、「理解させる、できるようにする、教える」といった保育者目線の「ねらいの内容」、「～ということ」や名詞で終わっている「理解させる内容」。「メタ認知、戦争の悲惨さ」など「タイトルのみ」の 3 カテゴリに分類された。

【結果と考察】

自信度と就職可能性の度数分布が正規分布とはならなかったので、四分位パーセンタイルによって 4 グループ（1～4；低→高）に分類し、各カテゴリの出現度数に対して Mann-Whitney の U 検定を行った。その結果、2 回目の就職可能性について、「授業内容の復習(U=3729.000, p < .05) 」と「関連する知識との統合(U=996.000,p<.05)」のみ有意であった(Figure1)。

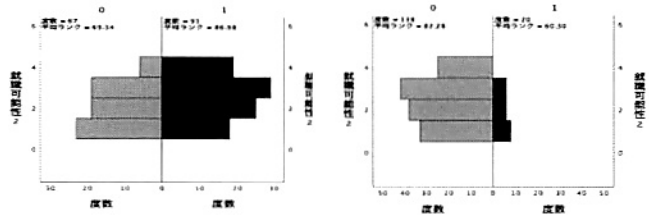


Figure1 2 回目の就職可能性；
授業内容の復唱と関連する知識との統合出現度数

通常高い方が良いと考えられがちな就職可能性であるが、90%以上と回答した 4 グループのみ「授業内容の復唱」を書かない人が多く、また「関連する知識との統合」がされないことが示された。「先生になりたい」と揺るぎなく考えている人が、＜気づき＞がないというこの傾向は、キャリア選択を考えるうえでミスマッチによる早期離職の可能性を示している。また、自己効力に関する変数が何の傾向も示さないことは、自己評価が「保育の質の向上」につながるという言説の妥当性がないことを示しているのではないだろうか。山本（2021）でも現行の自己効力感尺度が業務不安と対称性を示しておらず、妥当性が疑われることを示した。評価活動を保育者に課すのであれば、保育者養成課程の時点で客観的なエビデンスを作成する能力の獲得が保証される必要があるのではないだろうか。

【引用文献】

福崎淳子・小河原惠津子・小野寺冨美子・鈴木君栄 2012 保育におけるエピソード記録から読み取る保育者の気づきと学び合い；人的環境に視点を当てた園内研修の試みから. 東京未来大学研究紀要,5,111-121.

金玟志 2009 新人保育者による省察の意味とその変容を支える支援のあり方；保育実践後の「保育者間の話し合い（対話）の中から. 保育学研究,47(1),66-78.

Steffy,B.E., Wolfe,M.P., Pasch,S.H., and Enz,B.J. 三村隆男(訳) 2013 教師というキャリア；成長続ける教師の 6 局面から考える（Life cycle of the career,2000, Corwin Press.）雇用問題研究所.

山本睦 2021 保育実習生の実践計画力が担任業務に対する不安，効力感に及ぼす影響，日本応用心理学会大会発表論文集、87,p32..

（やまもと　ちか）

ロール・プレイングの可能性

○時田　学[1]
([1]日本大学商学部)

キーワード：コミュニケーション・ロール・プレイング（R・P）・実施事態

【目的】日常生活の中で，コミュニケーションを行うとき，私たちはどの程度意識的にコミュニケーションを行っているだろうか。毎日繰り替えされる場面であれば，私たちのコミュニケーションは意識的にそれらを行っている可能性は低い。そして，それは日常場面だけではとどまらない確率が高く，社会人であれば職業として，学生であれば学校場面の中の振る舞いを通じて私たちが体験することであろう。しかし，COVID-19の蔓延によって各種教育機関で，文部科学省の指導（文部科学省，2020）もあり，日常場面そのものが見直される事態となった。また，職場においても一時的に在宅ワークを行うことが推奨され（厚生労働省，2020），実態として教育現場や職場での活動体験に変化が生ずる事態となった。一方，教育場面や職場でコミュニケーションや振る舞いについて改めて考える場合にロール・プレイング（以下R・P）を活用することは現在まで行われており，R・Pを行う場合は演者や観客が同一な場所にいるということは特に意識することなく実施されていたと考えられる，しかし，現状では同一空間でない事態（遠隔）で教育場面や職場のコミュニケーションが行われている。このような現状でR・Pを行うことの可能性を検討することはあまり行われていない。今回遠隔講義の一環としてR・Pを行う機会が得られたことから，遠隔事態でのR・Pが参加者にどのような影響を与えるかについて検討を行った。加えて，それら非対面での実施事態がR・Pに与える影響について，多面的に評価する必要があると考え，半構造的面接をおこなうための面接資料の収集を継続的に進めており，その一部を示す。

【方法①】参加者：N大学ゼミナール学生16名が参加。2名が演者役として参加し，残りの学生は観客役として参加，監督役は筆者であった。今回参加した学部学生は，正規の心理学科の学修を行っているわけではないが，R・P体験を日本心理劇学会（研修会）や研究会などを通じて体験し，自主的にR・Pについて学修をしていた。今回は，実際にR・Pを対面で体験した学生10名と，体験していない学生5名をデータとして用いた。倫理的配慮：参加者には研究の意義・目的などについて説明し調査協力の同意を得た。本発表に関連し，開示すべきCOI（利益相反）関係にある企業等は無かった。手続き：遠隔講義のツールZoomを使用し，R・Pについての簡単な講義と話し合いをウォーミングアップとして行った後，参加者の演じて見たい場面を2名の参加者が演者役になって行った。場面は，買い物に来たお客役が，商品を選択し，購入する想定で設定された。演じた時間は1分程度であった。演技が終了した演者と観客それぞれに感想を求めてから場面を終結させ，講義を終了した。講義終了後，今回の体験について参加者個々人に感想を求めた。分析：講義終了後に参加者に求めた感想文に，ユーザーローカル(株)テキストマイニングツール
（https://textmining.userlocal.jp/）による分析を行った。実際の文章については，2名の判定者（筆者・社会学を専攻するもの1名）が内容を確認した。

【結果・考察①】今回のそれぞれの体験について，感想文12名分の分析を行った。単語の出現頻度から，R・Pを実際に遠隔で行ってみて，ある程度は出来る，と感じていることが明らかになった。また実際に対面で行う場合と遠隔で行う場合では感覚が違うと感じることが示された。次に，R・Pに対しての経験が異なった参加者ごとにそれぞれ感想文について分散分析を行った結果，有意差は認められなかった（$F(1, 10)=1.59$, $n.s.$）。そこで，それぞれの参加者群ごとに単語の出現頻度などから内容について検討したところ，経験のある参加者では，R・Pを遠隔で行った場合，ある程度は出来る，予想以上に不自由ではなかったと感じている一方で，実際に対面でやる，見るとでは感覚が違う，という感情もあることが明らかになった。経験のない参加者では，遠隔の体験として割り切ればR・P体験として特に違和感の様なものは感じていないことが示された。勿論限定した体験下であるが，対面であることにあまり拘らず遠隔でのRPを行っていくことに可能性を見出していくことの意味はあるのではないかと推察される。また，非対面のR・Pの体験を積み重ねることにより，今までの対面とは異なった情報が得られる可能性も考えられる。さらに詳細に分析が必要であろう。

【方法②】参加者：R・Pについて十分経験もあり，現在も監督・主催者の立場でセミナーなどを行っている男性2名が参加。インタビュアーは発表者であった。実施時期：インタビュー実施時期は2022年8月であった。調査方法：調査1の結果を参加者にインタビュアーを通して伝えた後，R・Pを実施する事態で対面・非対面時それぞれの効果についてインタビューを行った。質問内容：R・Pの監督・演者・観客それぞれの立場として実施事態の違いでのメリット・デメリット，R・P実施事態全般で考えられる実施事態でのメリット・デメリットについて。倫理的配慮：方法①と同様であった。

【結果・考察②】結果は，1名のR・P経験者がインタビュー内容について整理を行った。R・Pの監督・演者・観客それぞれの立場として考えられる対面・非対面のメリット・デメリットについて，参加者全員の前で「体験する」「体感をリアルで感じる」ことについては，メリット・デメリット双方で可能性を指摘することが示された。一方で，対面・非対面双方で，演者・観客として個別に「実感」を伴わない可能性，個別であればこそ「リアリティがある」「現実感」をどのように感じ・受け止めるかという点を検討する必要があることも示された。また，「リアリティ」は自分にかかわりのある関係の中で生ずると考えられるので，その体験が可能であれば，対面・非対面に関わらずメリットと考えられる点や，体験を受け取る度合いは，非対面の場合のデメリットとなる可能性も指摘された。一方R・P実施事態全般で考えられる対面・非対面時のメリット・デメリットについては，それぞれのできることをやればよい，例えばトレーニング体験として考えれば非対面でもできるのはメリットではないかという点や，対面時・非対面時では，「ともにある」・「リアルである」ことは同じと捉えられるか否か。同様に「自発的であること」・「本音の感情交流（テレ）」が同じように起こるとは考えにくい点や，現実場面を扱う場合とファンタジックな場面を扱う場合は対面・非対面を同様に扱うのではなくそれぞれのメリット・デメリットを考えて行うことが大切ではないかといった点が指摘された。また，R・Pでの問題の取り扱い方・狙い・内容を対面時・非対面時で検討する必要がある事や，プレイングとトレーニングについて対面・非対面の可能性に分け検討する必要性も指摘された。今回の回答内容からは，対面・非対面それぞれにメリット・デメリットは存在するものの，それらをR・Pを企画する側が良く検討する必要性が示されたと考える。最終的には，参加者個人の考え方・感じ方にゆだねる部分はあるが，参加者の考え方・感じ方の方向性については事前に可能な限り予測することが必要であると考えられる。また，役割の練習・トレーニングを行うこと，創造的に行っていくことに適した方略の存在も窺えた。今回，感染症という不測の事態の中で，非対面事態でのR・P行うことにより，その中で生じた事態を詳細に検討することを通じて，R・Pの効用を考えることが出来る1つの視点を得ることが出来たと考えられた。

【引用文献】
文部科学省（2020）
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/043/siryo/__icsFiles/afieldfile/2018/09/10/1409011_6.pdf
厚生労働省（2020）https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/newpage_00003.html（閲覧日2022年9月10日）

謝辞：本研究実施にあたり学部よりの研究助成に感謝申し上げる。またR・P・インタビュー実施に協力いただけた学生・協力者に感謝申し上げます。本研究の一部は第26回日本心理劇学会栃木大会で発表を行った。（ときた　がく）

特別支援教育における「児童虐待」との関係に関する研究（１）

－教職養成・保育士養成課程の学生等の意識等調査を中心として－

○石橋　裕子[1)]　　林　幸範[2)]

1)帝京科学大学　　2)学研アカデミー保育士養成コース

キーワード：児童虐待、特別支援教育、教職養成・保育士養成課程学生

【研究の目的】

平成18年に文部科学省が作成した「虐待資料」や、杉山が「虐待＝第４の発達障害」と提唱したことなどから被虐待児を特別支援教育の対象とすることの重要性が示唆された。そのような中、平成23年の教職養成の再認定時に、「特別支援教育」の単位化と同時に対象の拡大が示され、被虐待児の特別支援教育での対象化が保障された。しかし、①「特別支援教育」のテキストには虐待の記載がほとんどなく、②保育士、幼稚園教諭などの養成課程での「児童虐待」の教育も社会福祉系科目で１～２時間程度あるのみで体系的に教えているとは言い難く、③被虐待児に対する学習法の研究もほとんどなく、④文科省の資料作成当事者も教育に関してはほとんど実施していないなどが現状であり、虐待に対する教育は欠如していると言わざるをえない。そこで、筆者らは研究会を組織し「児童虐待」に関するカリキュラム作成のためのパイロット授業として、被虐待児の記載がある「よくわかる教職エクササイズ５　特別支援教育」(ミネルヴァ書房，2019)を教科書とし、主に「特別支援教育」「障害児保育(施設)」などで授業を実施している。

本研究では、「児童虐待」のカリキュラムの基本データの収集として授業などで実施した学生調査の結果などについて報告する。

【方法】

(1)授業時期…大学生：2022年、短大生：2018～2020年。(2)授業対象…東京の二大学(140名：栄養学系受講者13名，教員養成系受講者127名）、短期大学：関西の幼稚園教諭・保育士養成課程の二短大2年生(351名)。(3)調査方法…授業の初回時にQRコードを読み込ませ授業内で実施、SNS(スマホ)で回答。(4)調査表の記入の説明(告知)…受講生に調査表の記入の説明を口頭で実施。①調査の記入の仕方・記入上の留意点。②調査の回答は任意、回答をしなくてもよい。回答をしたくない場合には、「回答したくない」にチェック(分析の際は「無回答」)。③調査項目などには正答がなく成績に関係しない。④結果は、授業方法の研究として学会や紀要などで公表するが、記入者が特定できないようにするなど。(5)回収…出席者全員。(6)分析項目…①特別支援教育の対象、②虐待発見時の行動、③虐待に対して必要な対応策。(7)凡例…囲込み数字50.0%以上。比較差：≫30%以上、＞10%以上、≒1%以上、＝1%未満。

【結果】

(1)特別支援教育の対象について(複数回答：29項目：大学生のみの項目4項目)(表１参照)…5割以上の項目は、大学生では7項目、短大生は6項目で大学生と共通の項目のみ。短大生と比較して大学生の割合が高い項目は12項目。　(2)虐待発見時の行動(複数回答：12項目)(大学生のみ)…児童相談所に連絡(54.0%)、知り合いに相談(46.8%)、児童相談所虐待ダイヤル「189」に連絡(42.7%)、その子が通う学校などに連絡(39.5%)、警察に連絡(38.7%)、様子を見る(29.8%)、市区町村役所へ連絡(24.2%)、その子の保護者に状況を尋ねる(12.9%)、わからない(4.8%)、止める(0.8%)の順。　(3)虐待に対して必要な対応策(複数回答：14項目)(表２参照)…5割以上の項目は、大学生は7項目、短大生は5項目で、大学生・短大生との共通項目は4項目。短大生よりも大学生の割合が高いのは2項目、逆に短大生の割合が高いのは4項目。

表２　虐待に対して必要な対応策の比較

項目(複数回答)	大学生	短大生
虐待を受けている子どもへの援助	68.5%	＞ 55.3%
児童相談所へ通告(確実に伝える)	65.3%	≒ 70.4%
児童相談所との連携	59.7%	＜ 76.6%
教員間の連携	57.3%	≒ 69.5%
虐待を受けている子どもへの活動や学習支援などの方法の確立	53.2%	＞ 31.3%
市区町村役所に通告(確実に伝える)	50.0%	≒ 43.3%
虐待している保護者への援助	46.0%	＜ 65.8%
市区町村役所との連携	41.1%	≒ 46.2%
虐待に関する研修	0.0%	＜ 43.0%
マニュアルの作成	0.0%	＜ 29.9%
別にない	0.0%	≒ 0.6%
わからない	4.0%	≒ 2.6%
児童相談所虐待対応ダイヤル「189」へ通告(確実に伝える)	58.1%	－－

【考察】

以上のことから、(1)特別支援教育の対象では、①全体で大学生の方が高い割合の項目とほぼ同じ割合の項目は各12項目(24共通項目)、②発達障害関係の項目で「高機能以外の自閉症スペクトラム傾向」以外の項目はほぼ同じ割合、③虐待関連項目で、大学生の方が高い割合の項目が多い。　このことから、特別支援教育の対象は、基本的には発達障害関連の者が中心と考えており、虐待関連の者は対象と考える傾向は、発達障害関連の者に比べて少ないと考えている。　(2)(3)虐待に対しての対応では、①発見時の対応は、児童相談所へ連絡するが一番多いが、様子を見るという消極的な対応が3割程度いた。②必要な対応策は、児童相談所への通告・連携が両者とも多いが、大学生の方が短大生よりもその割合は低い。　このことから、虐待に対しては「児相」などに通告・連絡をすることが主な対応だが、様子見や保護者に状況を聞くなどの消極的な対応をする者もいることが明らかになった。

これらから、①特別支援教育に対しては、基本的には大学生の方が短大生よりも情報があると言える。②虐待の対応策についても、同様な傾向が見られる。③対応策については、保護者援助と子ども援助に対する考え方に違いが生じている。これは、大学生と短大生の保育・教育の対象及び虐待についての情報に接する時間・頻度などと関連があると考えられる。さらに、石橋・林らのこれまでの研究から、適切でない教材の提示により、学生が誤った知識を獲得しているという結果などと併せて、虐待に対しての系統的なカリキュラムの作成の重要性が示唆されている。

(いしばしゆうこ　　はやしゆきのり)

表１　特別支援教育の対象児童(複数回答)

項目(複数回答)		大学生	短大生
発達障害関係	[高機能以外の自閉症スペクトラム傾向]	79.0%	＞ 64.4%
	[AD/HD(注意欠損/多動症)傾向]	75.8%	≒ 69.2%
	[LD(学習障害)傾向]	74.2%	≒ 72.1%
	[高機能自閉症スペクトラム(アスペルガー症候群などを含む)の傾向]	73.4%	≒ 72.4%
	運動面での不器用さが著しく認められる者	24.2%	≒ 16.2%
虐待関係	虐待の疑いがある者	44.4%	＞ 29.3%
	家庭環境に問題がある者	42.7%	＞ 19.4%
	保護者が問題を抱えている者	26.6%	＞ 12.5%
	保護者が子どもに無関心な者	22.6%	≒ 14.2%
文部科学省の対象拡大関係	外国籍または外国にルーツのある者	27.4%	≒ 21.9%
	勉強が分からない者	24.2%	≒ 17.4%
	経済的に貧困である家庭の者	24.2%	＞ 14.2%
	兄弟姉妹が問題を抱えている者	17.7%	≒ 8.0%
回答者	回答者総数 475名	124名	351名
性別	◎大学　女性(44名 35.5%)・男性(77名 62.1%)　◎短大　女性(319名 90.9%)・男性(32名 9.1%)		

項目(複数回答)		大学生	短大生
メンタリティー関係	情緒不安定、情緒表現の未成熟など主に情緒面に問題がある者	80.6%	＞ 65.5%
	心に問題を抱えている者	59.7%	＞ 35.3%
	不登校傾向のある者	49.2%	＞ 26.8%
	キレやすい者	23.4%	≒ 16.0%
その他	身体にハンディキャップのある者	66.9%	＞ 53.3%
	病気のある者	42.7%	＞ 28.8%
	家出や放浪などの非社会的な行動をする者	37.1%	＞ 20.5%
	万引きや盗みなどの反社会的な行動をする者	33.9%	＞ 18.2%
	対象を限定せず、その都度保護者と学校とで決める	29.0%	≒ 20.8%
	対象を限定せず、子どもの困り感で決める	17.7%	≒ 14.0%
大学のみ	性別違和(旧称・性同一性障害)の者	29.0%	－
	食べ物や花粉などにアレルギーを持つ者	14.5%	－
	ひとり親家庭の者	9.7%	－
	建いな食べ物が多い者	5.6%	－
	わからない	2.4%	≒ 4.0%

経済的困難を抱える単身中高年男性の支援において相談員が感じる困難さの原因帰属と対処方略

○村山 陽[1]、山田 耕平[2]
([1]東京都健康長寿医療センター研究所 社会参加地域保健研究チーム [2]社会福祉法人 やまて福祉会)

キーワード：単身中高年男性、経済的困難、原因帰属、生活困窮者自立支援制度、相談員

【目的】単身男性中高年者は孤立や困窮に陥るリスクが高く,その予防に向けたアプローチが求められている(小谷, 2007)。一方, 男単身男性中高年者における地域保健等の公的サービスの利用は少ない(河野, 2009)。生活困窮経験者への面接調査(Murayama et al,2021)や単身中高年者への郵送調査(Murayama et al,2022)では,経済的困難を抱えている単身中高年男性ほど将来に対する展望を諦める意識が強く,そのことが生活問題の把握や援助要請の遅れにつながることが示されている。こうした単身中高年男性に特徴的な態度は,援助者側の支援を阻害する要因となり,単身中高年男性に対するスティグマの形成を促す恐れが考えられる。対人援助職が抱くスティグマは,ネガティブな感情表出を引き起こすだけではなく,それにより被支援者自身のセルフスティグマを強めてしまう恐れもある。スティグマには原因への帰属が影響を及ぼすことが示されているが,援助者が単身中高年男性への支援において感じる困難さの原因をどのように帰属し,それにどのように対処しているのか明らかではない。原因帰属の様式からその対処に至るまでのプロセスを解明することは,スティグマを抑制する支援のあり方を示すことにつながる。そこで本研究では,生活困窮者自立支援事業の相談員を対象に,経済的困難を抱える単身中高年男性の支援において感じる困難さの原因帰属様式を把握し,その対処方略を明らかにする。

【方法】

(1) 調査方法：【調査 1】1 都 6 県(東京都, 埼玉県, 千葉県, 神奈川県, 群馬県, 栃木県, 茨城県)の 自立相談支援機関 294 ヵ所の事業所に調査票を 2 部(2 人分:合計 588 人分)郵送し, 最終的に 388 人(回収率 60%)より回答を得た。対象者は, 2 年以上の相談業務の経験があり, 直近 3 年以内に相談支援業務の経験がある者とした。対象者には, ①単身世帯の中高年男性の相談者に対する相談支援のプロセスにおける困難さや難しさの程度(1 項目 4 件法), ②単身中高年男性への支援における困難について自由記述で回答を求めた。基本属性として, 性・年齢, 職種, 保有資格, 勤続年数等を尋ねた。

【調査 2】調査 1 の調査協力者の中から面接調査の協力に応じた 7 事業所 13 人に半構造化面接を実施した。質問紙調査により抽出された「単身中高年男性支援の難しさ」の解消に向けた取組や工夫を尋ねた。分析には,MAXQDA2020 を用いた。

(2) 調査期間：2021 年 3 月～11 月(質問紙調査), 2021 年 8 月～11 月 (面接調査)

(3) 分析方法：①自由記述から得られたデータは, 研究者 2 人と実践家 1 人により定性的コーディング(佐藤, 2008)を参考に「コード」を生成した。生成した分類のためのコード表に基づき, 評定者 2 人による評定で一致した分類コードを採用した。自由記述内に 2 つ以上の内容の記述が認められた場合は,複数コードとして処理をした。②インタビューデータには「支援における困難さへの対処方略の過程」を分析テーマに設定し, 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(木下, 2003)によりカテゴリーの生成から概念図を作成した。

(4) 倫理的配慮:発表者が所属している機関の倫理委員会の承認を得て実施した(承認日:2020 年 12 月 18 日, 受付番号 2688)。

【結果】

(1) 単身中高年男性支援の難しさ：9 割弱の相談員が, 単身世帯の中高年男性の相談者に対する相談支援のプロセスに困難さや難しさを感じたことがあると回答した。

(2) 自由記述の分類結果：自由記述(n=262)から,「単身中高年男性の能力」に関する記述 145 個(42.9%),「単身中高年男性の人柄」についての記述 158 個(46.7%)を収集した。評定の一致度を示すカッパ係数は, 0.92 であった。本稿では,カテゴリーを【 】,サブカテゴリーを「 」で表記をして示す。【能力】は,「生活能力 (n=32)」,「コミュニケーションスキル (n=12)」,「仕事のスキル (n=33)」,「理解力 (n=11)」,「メタ認知能力 (n=48)」,「適応力 (n=33)」から構成された。【態度・意識】は,「自己の正当化(n=40)」,「こだわりの強さ(n=41)」,「意欲の低さ」,「諦め・放棄(n=16)」,「希薄な問題意識(n=33)」,「消極的な態度(n=42)」,「主体性の低さ(n=9)」から構成された。各次元のカテゴリーの性差・年代差・経験年数を検討するためにχ^2検定を行った結果, 【能力】における「希薄な問題意識」では相談経験 5 年未満の相談員(10.2%)よりも 5 年以上の相談員(20.9%)の割合が高かった。

(3) 困難さへの対処方略の過程：単身中高年男性の態度・意識の困難さに直面した際に, 相談員は単身中高年男性と【適度な距離】と【否定しない態度】を保ちつつ相談者との【関係性の構築】から【問題認識を促す】対処方略過程が示された。一方, 能力の困難さへの対処方略過程は認められなかった。

【考察】

相談員の多くが単身中高年男性の支援に困難さを感じており, その原因を相談者の内面(能力と態度・意識)に帰属する傾向が見られた。相談員は、困難さへの内的帰属を相談者支援に向けた関係構築の手がかりとして活用していた。具体的に, 相談員は態度・意識の困難さに対して, 適度な距離と否定しない態度を保ちながら関係性を深め, 問題認識を深める対処の過程が認められた。今後, 相談員の相談技術の向上に向けた取り組み(研修会, スーパービジョン, 相談員同士の情報共有等)が求められる。一方, 相談員による能力の困難さへの対処は行われていない現状が示唆された。能力の困難さに対処するため, 多職種・多機関との連携, アセスメントツールや支援プログラム開発等の基盤づくりを進める必要性が示唆された。

【引用文献】

1) 小谷みどり (2007). 孤立する男性独居高齢者の現状. 保健師ジャーナル, 73, 378-383.
2) 河野あゆみ他 (2009). 大都市に住む一人暮らし男性高齢者のセルフケアを確立するための課題, 日本公衆衛生雑誌, 56(9), 662-673.
3) Murayama Yoh et al (2021). How Single Older Men Reach Poverty and its Relationship with Help-seeking Preferences , *Japanese Psychological Research*, 63(4), 229-480.
4) Murayama Yoh et al (2022). Psychological Factors That Suppress Help-Seeking among Middle-Aged and Older Adults Living Alone, *International Journal of Environmental Research and Public Health, 19, 10620.*
5) 佐藤郁哉 (2008). 質的分析法-原理・方法・実践』新曜社.
6) 木下康仁 (2003). ライブ講義 M-GTA. 東京：弘文堂.

(むらやま よう・やまだ こうへい)

看護師に対する患者満足度を規定する要因について

○稲野辺奈緒子[1]　古屋健[2]
([1]東京女子医科大学看護学部/立正大学大学院心理学研究科　[2]立正大学心理学部)
キーワード：患者満足度、看護の質、看護師評価

【目的】患者満足度調査（HCAPS）（厚生労働省・日本病院会）の結果、医療の質を評価する患者満足度の規定要因は看護に対する満足度であった。このことから看護の質が医療の質を支えているともいえ、質の高い看護師の育成は喫緊の課題である。ところが、我が国の患者満足度に関する研究は、医療全般を対象としたものが多く、現時点で患者満足度に影響を与える看護師の看護実践に必要な要素を、総合的かつ多次元的に捉えて評価する尺度は開発されていない。

そこで本研究では、看護師の技術（知識、ケア、指導、コミュニケーション）や個人特性（共感性）といった「看護師の質を総合的に評価するための尺度」開発を目的とした。

【方法】調査対象者：東海地方にある２つの総合病院に入院中の 20 歳以上で意識清明な患者 443 名に配布した。

調査内容：①基本属性（性別、年齢、入院回数と日数等）②**日勤で受け持ちをした看護師に対する満足度・評価**：受け持ちをした看護師に対する総合的満足度（総合的満足度０～10 点で採点）、La Monica, Oberst, Madea, & Wolf(1986)による LOPSS を参考に作成した看護師行動評価（11 項目５件法）、オリジナルで作成した看護師に対する評価（３項目５件法）で回答を求めた。③**調査日に患者が受けた看護ケアに対する評価**（８種の看護ケアについて、ケアを受けた場合に４項目３件法）であった。ここでの８種のケアは、堀内（1996）の QNCQ-P を参考に作成した。

手続き：2021 年９月～12 月に担当看護師以外または、看護師以外の医療従事者が調査票の配布を行い、回答日は患者のタイミングで決定した。回答後、調査票は医療従事者、または院内にある投書箱に投函された。

倫理的配慮：立正大学心理学研究科研究倫理委員会（承認番号：G2021004）の承認を得た。

【結果】回収した 310 名のうち有効回答 232 名（52.5%）のデータを分析対象とした。

【結果】対象者の属性：男性ｎ127（54.7%）、女性ｎ103（44.4%）、年齢 Ave61.7、Med64.0、入院回数 Ave2.6、Med1.0、入院日数 Ave13.07、Med7.50 であった。

日勤で受け持ちをした看護師に対する満足度・評価：担当看護師への満足度に対し「あなたが看護師から受けたケアについて、考えられる最悪のケアを０点、理想的で最高のケアを 10 点」とし、10 点満点で回答を求め、Ave8.77、SD1.31、Range は 4-10 であった。次に、看護師行動評価では、11 項目の看護師の行動について「1 全くない」から「5 いつでも」までの５段階で回答を求めた。質問内容は、看護師はあなたの「要望にすぐに対応してくれた」「一生懸命に対応してくれた」「あたたく対応してくれた」「丁寧に対応してくれた」「治療や検査についてわかりやすく説明してくれた」「健康に必要な注意点を説明してくれた」「病状・病気について説明してくれた」「ペースに合わせて話しを聞いてくれた」「声をかける前に先に声をかけてくれた」「状態の変化を読み取ってくれた」「わかろうとしてくれた」である。この 11 項目に対しプロマックス回転法で因子分析を行ったところ、３要因が抽出され、それぞれ態度(3)、知識(3)、共感(4)の因子と解釈された。

調査日に患者が受けた看護ケアに対する評価では、援助を受けたケアに対する４項目での評定の総計を求め、診療補助スキル（２項目）と生活援助スキル（６項目）に分けて平均点を算出し、それぞれのスキル得点とした。

重回帰分析：総合的満足度、看護師への評価、共感を従属変数とする重回帰分析を行った。

パス解析：重回帰分析の結果から、図１に示したパス図を作成した。欠損値のない 155 人のデータを用いてパス解析を行った結果、モデル適合度に関する指標は χ^2=11.242（df=7，p=.128），GFI＝.979，AGFI＝.918 で、適合度が高いことが示された。

【考察】パス解析の結果、総合的満足度に対して直接的な正の影響を与えていたのは看護師への評価、生活援助スキル、知識であり、看護師への評価に直接的な正の影響を与えているのは共感と診療の補助スキルであった。また、共感は知識、態度、生活補助スキルからの正の影響を受けていた。このように、本研究で使用したすべての尺度が総合満足度に対して直接・間接の影響を与えていることが示唆された。

今後は、尺度とモデルの妥当性について確認していく必要がある。

【引用文献】

HCAHPS II investigators (2003). HCAHPS three-state pilot study analysis results. The Agency for Healthcare Research and Quality（AHRQ）.

日本病院会(2020)QI プロジェクト(2011 年～2019 年)＜https://www.hospital.pr.jp/qip/past.html＞（2020 年 12 月 6 日）

厚生労働省(2002)医療施設経営安定化推進事業報告書（2002）https://www.mhlw.go.jp/topics/2002/10/tp1009- 1a.html＞（2020 年 12 月 6 日）

La Monica,L., Oberst, M.T., Madea, A,R. & Wolf. R.M.（1986）Development of a Patient Satisfaction Scale. *Research in Nursing & Health*, Vol.9,No.12, Pp43－50.

堀内成子・太田喜久子・小山眞理子・小山眞理子・森明子・小松浩子・岡谷恵子・高田早苗・井部俊子・Holzemer, W.L.（1996）看護ケアの質を評価する尺度開発に関する研究－信頼性・妥当性の検討－,日本看護科学学会誌,Vol.16,No.3, Pp. 30－39.

（いなのべなおこ・ふるやたけし）

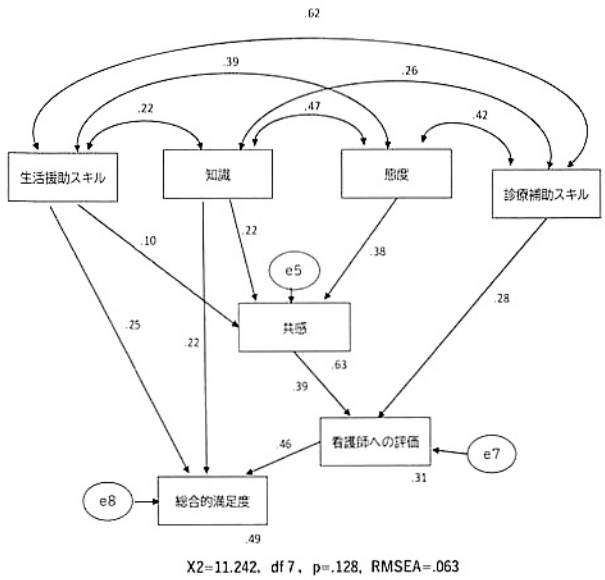


図１　総合的満足度に対するパス解析の結果

新型コロナ禍下の子育て支援

―「抱っこ」から「あんよ」へ―

佐々木　美智子
（志學館大学）

キーワード：新型コロナ禍　孤独な育児　子育て支援

【目的】2021年の出生数は81万1604人で統計開始以来最少、第1子出産時の母親の平均年齢も30．9歳と過去最高である。新型コロナ禍下で、我が国の子育ては困難さを増している。2020年から2022年にかけて知りえた事例を手がかりに、高齢初産の子育て支援のあり方を考察したい。

【方法】実際に見聞した1例と間接的に知りえた3例、計4例の2年間の歩みと子育て支援のとりくみを時系列に沿って検討する。全員30代後半の高齢初産であった。

＜表1＞第1子出産4例の概況

	出産年月	居住地	里帰り出産の有無	分娩時期と形態
A	20･2	地方	有	満期･吸引
B	20･4	首都圏	無	満期･帝切
C	20･6	地方	無	満期･帝切
D	20･6	首都圏	有	36週･帝切

【結果】

1. 周産期―帝王切開の増加と感染防止対策

近年、検査も含む何らかの不妊治療が増加しているが、4 例とも待望の妊娠であった。また、帝王切開が増加しているが、新型コロナ禍下では、リスク回避のため更にその比率が高まったと思われる。A はまだ夫の立ち合いと面会が可能であったが、他は制限され、母親たちの心身のストレスは大きかった。

2. 新生児期―里帰りと夫婦の協力、医療と母子保健

AとDは里帰りが可能であった。Bは、育児は在宅勤務の夫の協力を得られたが、家事負担はあり、術後の母体不調と母乳不足に悩まされた。C は、実家は近いが育児法の違いもあり、夫婦で育児し、夫の夕食は外で済ませてもらった。夫婦の家事分担の不均衡が出産後は顕わになった。

新生児期の公的子育て支援は、現在、生後半月健診と 1 か月健診（産科）、新生児訪問（自治体）が制度化されている。A は、自治体間連携によって里帰り先で感染対策を取っての助産師訪問を受けた。 4例とも、児の心雑音や臍ヘルニア、母体の乳腺炎や腱鞘炎等のため、それぞれ医療機関を受診していた。

3. 乳児期前半―予防接種と3，4か月健診、SMS

A は、自治体の乳児健診が小児科委託の個別受診制になっていたのがコロナ禍下で幸いした。生後2か月から予防接種を開始し、発熱や下痢･血便等の副反応はあったが、3，4か月児健診以外でも相談にのってもらう機会になった。 また、実家にも母子の体調不良時に協力してもらった。B は在宅勤務の夫の協力を得つつ、コロナ禍第1波の収まりを待って実家からの来訪と双方の里帰りが可能になった。C は近くの実家で昼食を共にし、D は里帰りから戻ってベビーシッターを利用した。

4例とも LINE で結ばれ、励ましや祝福、児の発育ぶりや育児の悩み等、写真･動画とメールで頻繁に交流があった。育児グッズ情報を得るとネット通販で入手でき、新型コロナ禍下の孤立しがちな育児の支えになった。一方で、スマホを手放せない母親たちの状況は拡大した。

4. 乳児期後半―離乳食と発育･発達の相談

A 児は、6か月から開始した離乳食が進まず大きな悩みになっていた。ワンオペ育児の室内遊びが多く、人見知りや場所見知りも強かった。ようやく11か月から、全国的な自粛解除に伴い再開された自治体の子育て支援施設や地域の子育てサロンを利用できた。栄養士や理学療法士の指導も受け、母親の不安は軽減されていった。A 児と C 児は、座位獲得から四つ這いまでゆっくりと進み、B 児は、両親と子育てサロンや公園を良く利用し、四つ這いを経ずに11か月で歩行開始した。

5. 幼児期への移行―外遊びの場と1歳 6 か月児健診

A 児の歩行開始までには、「抱っこ」から立ち上がらせる➡背部からの両手支え歩き➡手をつないで片手支え歩き➡自ら対象物へのつかまり立ちと伝い歩き➡手放しの体のねじりから一人立ち➡足を踏み出しては何度も手を床につき、立ち直っては進んで笑顔―の過程を経た。歩行獲得前には「抱っこ」の要求が多く、「指差し」や「発語」の社会的コミュニケーションも場面に応じて出現していった。1歳6か月児健診を受診し、何とか通過した。しかし、全国的な感染再拡大によって、利用していた子育て支援施設や子育てサロンはまた閉鎖になった。近くの公園にも子どもの姿は無く、次子も妊娠して切迫流産もあり、再びワンオペ育児に戻ったこの時期が、A は最も辛かったと言う。

6. 集団保育への移行―復職･次子出産

BとDは、21年度より保育施設に預けて復職した。当分在宅勤務であった。C は22年度より保育施設に預けて復職した。A は、子育て支援施設、子育てサロン、幼稚園の未就園児教室を利用し、次子出産後 22 年4月から幼稚園に入園させた。2歳児でもマスク着用が勧められた。

通園開始後も、A児は発熱･欠席がよくあり、受診時は毎回新型コロナ感染の検査がなされ、家族感染も心配された。B 児は、感染者発生による保育施設の休園も体験した。いずれも、夫婦や祖父母も含めた家族対応であった。

【考察】

① 不妊治療もある高齢初産では、妊娠中のリスクもあり、出産時の帝王切開の比率も高い。新型コロナ禍下では、感染防止対策も加わり、母親の心身のストレスは強かったと思われる。②新生児期は、里帰り出産と夫婦対応に任されがちであるが、新型コロナ禍下では、里帰りできないケースも含めた産後ケアの充実が求められる。③乳児期前半からの個別受診の予防接種と乳児健診は、新型コロナ禍下で有意義であった。一方、母子たちの出会いの場は限られ、SNS による情報交換に置き換わったことの功罪もあった。④乳児期後半には、特に孤独な密室育児下で、離乳食や発育･発達の問題が顕在化する。新型コロナ禍下でも、公的･専門的な相談支援機関が感染防止対策を講じながら継続する意義は大きい。⑤幼児期への移行期は、外遊びの場と人的交流が求められる。新型コロナ禍下での発達の経過を見て、「発達障害」の環境要因の再考が促された。⑥集団保育への移行は、親たちの余裕を生み出し、職場復帰と次子出産も可能とする。子育て世代のワーク･ライフバランスの要であり、すべての希望者に保障することが求められている。新型コロナ禍下では、入園しても感染のリスクと休園対応に追われた。母親中心の子育て負担の大きさが浮き彫りとなり、妊娠中から幼児期を見通した、夫婦や家族の協力に留まらない社会的な子育て支援の充実が各地域で求められていると考える。　　（ささき　みちこ）

更生保護施設入所中の女性に対する「自分」に関するインタビュー前後の気分変化

小西奈美
（京都橘大学看護学部）
キーワード：薬物依存　自己開示　気分

【目的】
更生保護施設入所中の女性に対する自分に関するインタビュー前後における気分の変化を明らかにし、自分を語ることによる心理的影響について検討する。

【方法】
1.研究参加者：更生保護施設入所中の薬物使用歴のある女性。
2.インタビュー方法：伊藤ら[1]によって開発された自分らしさを測定する尺度の10項目を参考に半構造化面接を行った。
3.評価項目：
1）こころの地図®：12個の色相環（1環8色、12種類の色の濃淡のある環が、濃色から淡色に上下左右に配置されている）から、参加者にその時の気分にあう環を選択してもらい、空間的一時的な意欲や心の重さなどのこころの状態を測定する。それぞれの環には、その特徴を示す名前がつけられている。更に、左右4列配置のうち左から3列は、順に「内観の柱」「バランスの柱」「継続の柱」と命名されており、上下はこころの軽さや重さ、左右は意欲を推定する[2]。
2）二次元気分尺度（Two-Dimensional-Mood-Scale-Short Term：以下TDMS-ST）：8つの気分について、「全くそうではない」～「非常にそう」の5段階評価と、調査用紙に含まれている空欄に、「今の状況について具体的に記入」を求めた。
4.測定手続き：
研究参加者に対し半構造化面接の直前後に、上記1）2）の順で調査を実施した。
5.分析方法：
TDMS-STは、各項目得点から採点方法に基づき「活性度」「安定度」「快適度」「覚醒度」を算出し、統計解析ソフトJMP9を用いてt検定を行い前後の平均得点を比較した（$p<0.05$）。「こころの地図®」は、選択された色相環の前後変化の有無や、TDMS-STの手引きに基づき作成した「安定度」と「活性度」からなる二次元グラフと比較しながら検討した。
6.倫理的配慮：
研究開始にあたっては、京都橘大学倫理委員会の承認（18-50）を経て、参加者には書面を用いて本研究の目的や主旨などについて口頭で説明し、同意書への署名後に行った。

【結果】
研究参加者は20名、平均49.2（8.2）歳であり、インタビュー時間は25～95分、平均52.95（17.67）分であった。
1.こころの地図®
20名中16名は、インタビュー後のこころは軽く、意欲がある状態を示した。一方、「内観の柱」の軽い状態からこころが重い状態へ変化した者は2名（ID8、ID9）、「内観の柱」から、「バランスの柱」の重い方向へ意欲が変化した者が1名（ID10）、左右の変化はなく「バランスの柱」の最も重い状態から軽い方の上方へ変化した者が1名（ID11）であった。
2.TDMS-ST
「活性度」は、前0.6、後4.25（$p=0.0003$）、「安定度」は前3.35、後5.55（$p=0.04$）、「快適度」は、前3.95、後9.8（$p=0.002$）、と有意に上昇した。「覚醒度」は、前−2.75、後−1.3（$p=0.051$）であった。二次元グラフから、全体的に不快から快の方向へ変化する傾向がみられた（図1.）。
3.こころの地図®とTDMS-ST（図2.）
こころの地図®の前後において、こころが重くなったり意欲の変化がみられなかったりした4名（ID8、ID9、ID10、ID11）の、TDMS−STの二次元グラフ（X軸：活性度、Y軸：安定度）、こころの地図®の環の名前、TDMS-STで述べられた気分を「」で示し、前後の変化を順に述べる。
ID8は、不快から快の方向へ移動し、light「少しドキドキしています」からdhyana「何を考えて良いのか今はわからないです」、ID9は安定度は下がるが活性度が高まる方へ移動し、light「ふつう」からdhyana「ふつう」、ID10は、安定度は下がるが活性度が高まる方へ移動し、dhyaya「気分が悪いです」からearth「気分が悪くなりました」、ID11は、安定度は不変で活性度が高まる方へ移動し、ebony「話ができるかわからない」からearth「少し落ちついたけど色々思い出しました」と変化していた。

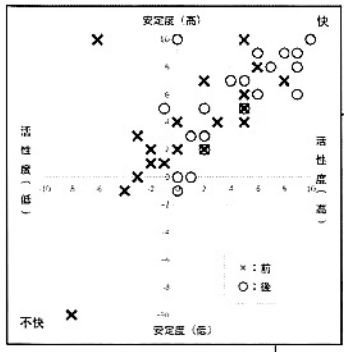


図1.TDMS-ST二次元グラフ（全員）

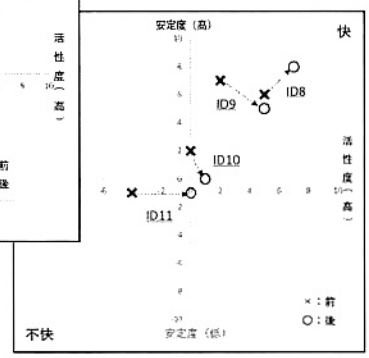


図2.TDMS-ST二次元グラフ（ID8, ID9, ID10, ID11）

【考察】
過去の辛い体験を話すことによる心理的負担が考えられたが、終了後には多くの方がポジティブな気分を抱いていた。しかし、自己開示によるカタルシス効果ではなくインタビュー終了に伴う結果であるとも考えられる。一方、気分が悪くなったり、気持ちの整理がつかず、心が重くなったり、軽くなったものの意欲の変化が見られなかったりした方でも、気分の活性化が示唆され、こころの地図の変化とも合わせると、話すことでこころのバランスを保とうと頑張っていたり、ことばでは中間的な表現であっても心理的安定度の低下や負担が生じている可能性が示唆された。自己開示による肯定的な評価が言葉で得られない場合、開示後には十分な配慮が必要であることが考えられた。

【文献】
1）伊藤正哉,小玉正博：自分らしくある感覚（本来感）と自尊感情がwell-beingに及ぼす影響の検討,教育心理学研究,2005. 53.pp74-85
2）春田博之：こころの地図色調が教えてくれるこころの世界.フレグランスジャーナル社.2017

（こにしなみ）

大学生の妊孕性知識

―性別、学部間の差を中心に―

○抜田 博子[1]　古屋 健[2]
([1]帝京大学医療技術学部看護学科　[2]立正大学心理学部)

キーワード：妊孕性知識、CFKS-J、大学生

【目的】日本では晩産化・少子化が進んでいる。その中で、不妊治療の実施数は増加の一途をたどり、日本は不妊治療大国とも言われている。Bunting et al. (2013) の調査によれば、妊孕性（妊娠するための力）知識の国際比較で、日本は諸外国に比べて点数が低い。この調査では、カーディフ妊孕性知識尺度が使用されており、日本語版（Maeda et al. 2015）も作成されている。このような知識不足は、少なからず不妊に影響していると考えられ、次世代を担う若い世代の知識水準を向上させる必要がある。本研究の目的は、日本における大学生の妊孕性に関する知識水準を明らかにすることである。

【方法】Web 調査会社を通じて実施したスクリーニング調査の回答者の中から、調査協力に同意の得られた全国の大学生を対象とした。不適切な回答を除いた 571 名（男子 284 名、女子 287 名）を分析対象とした。調査は 2022 年 1 月に実施した。

調査項目は、基本属性（性別，年齢）、所属する学部、カーディフ妊孕性知識尺度 日本語版（CFKS-J）である。本尺度は不妊の要因、妊孕性に関する誤解、妊孕性に関する事実の 3 領域から構成される 13 項目の設問に対し、「正しい」「間違い」「わからない」の 3 件法で回答を求めるもので、今回は正答であれば 1 点、不正解もしくはわからないであれば 0 点として得点化した。CFKS-J の使用については、作成者の許可を得て実施した。

【結果】対象の平均年齢は 20.92 歳（*SD*=1.52）、所属学部は、社会科学系 143 名(28.5%)、人文系 126 名(22.1%)、理系 101 名（17.7%)、医療系 86 名(15.1%)、その他 95 名(16.6%)であった。CFKS-J の正答率(%)を表 1 に示す。

・性別による平均点の差：CFKS-J の全体平均点は 5.65 点(*SD*=3.07:正答率 43.5%)であり、性別では男子が 5.07 点(*SD*=2.97:正答率 39.0%)、女子が 6.22 点(*SD*=3.09:正答率 47.8%)であった。男子よりも女子の方が平均点は有意に高かった。(t (569)=4.52, p<.01)

・設問項目ごとの性別による正答率の差

χ^2検定を行ったところ、設問 1,2,5,7,8,10 で有意差がみられた。いずれも男子より女子で正答率が高かった。

・学部による平均点の差：「その他」はスポーツ系や芸術系など多岐に渡るため除外し、他 4 群の平均を分析した。性×学部の二要因分散分析を行ったところ、性の主効果が有意（F(1/468)=8.903, p<01)，学部の主効果が有意傾向であった（F(3/468)=0.075, p<.10)。多重比較の結果,医療系は人文系より平均点が高かった。性別と学部の交互作用は認められなかった。

・学部による正答率の差：χ^2検定を行ったところ、設問 2,11 で有意差がみられた。残差分析では、設問 2 は医療系が高く、11 は人文系が低かった。

【考察】Bunting et.al.(2013)の各国を対象とした調査では平均正答率が 56.9%（男性 46.2%、女性 59.1%)、そのうち日本を含む先進国の正答率は 64.3%であった。その後に作成された日本語版を本調査では用いており、多少の誤差は考えられるものの、日本の大学生の妊孕性知識水準はかなり低いと言える。性別では男子よりも女子の正答率の方が高い結果は同様であり、妊娠に直接関わる女子の方が、自身の妊孕性について興味を持っていることが考えられる。

また、学部によっても正答率に差があることがわかった。一部ではあるが、医療系が専門的な学修によって知識が高いことが考えられる。

今後、女子のみならず男子も含めて、専門領域以外の学部においても教育の機会が必要だと考えられる。

【引用文献】

Bunting, L., Tsibulsky, I., Boivin, J. (2013). Fertility knowledge and beliefs about fertility treatment: findings from the International Fertility Decision-making Study. *Hum Reprod*,28,385-397.

Maeda, E., Sugimori, H., Nakamura, F., Kobayashi, Y., Green, J., Suka, M., ... Saito, H. (2015). A cross sectional study on fertility knowledge in Japan, measured with the Japanese version of Cardiff Fertility Knowledge Scale (CFKS-J), *Reproductive Health*, 10.

（ぬきた ひろこ・ふるや たけし）

表1　性別によるCFKS-Jの正答率(%)

設問項目	男子	女子	男女
1. 女性は36歳以降では妊娠する能力は落ちる。○	54.2	72.8	63.6
2. 避妊せずに1年間定期的にセックス(性交渉)をしても妊娠しない夫婦は不妊である。○	26.1	37.6	31.9
3. タバコを吸う女性は妊娠する能力が落ちる。○	55.6	56.6	56.1
4. タバコを吸う男性は不妊になりやすい。○	48.9	47.6	48.2
5. 約10組に1組の夫婦は不妊である。○	34.9	44.8	39.8
6. 精子が作れる男性は不妊ではない。×	47.5	54.2	50.9
7. 今日では、40代の女性も30代の女性と同じくらいの確率で妊娠できる。×	40.8	57.7	49.3
8. 健康的な生活習慣の人は不妊ではない。×	56.0	70.6	63.3
9. 思春期以降におたふくかぜにかかった男性は、将来不妊になりやすい。○	12.3	16.1	14.2
10. 月経のない女性も妊娠できる。×	33.1	53.1	43.2
11. 標準体重より13キロ以上太っている女性は妊娠できないことがある。○	13.0	15.7	14.4
12. 勃起できる男性は不妊ではない。×	56.0	60.5	58.2
13. 性感染症にかかったことがある人は不妊になりやすい。○	28.5	36.0	32.3

配偶におけるソシオメーターの検討

○下田麻衣

（京都ノートルダム女子大学）

キーワード：ソシオメーター、恋愛、配偶、受容と拒絶

【目的】ソシオメーター理論(Leary et al, 1995)によると，自尊心は自分が他者から関係的に価値を置かれ，社会的に受容されているという個人の認識に関する計測器の役割を担っていると説明されている。最近では，ソシオメーターにも機能的に異なる複数の領域（例：配偶，地位）があることが議論されている。例えば，Kavanagh, Robins, & Ellis(2010) は「配偶ソシオメーター」に焦点をあて，配偶願望の制御メカニズムについて検討を行った。その結果，異性（潜在的配偶対象者）からの受容経験は，拒絶経験に比べて，その後の高魅力異性と自分の恋愛適合性を高く評価していた。一方で，異性からの拒絶経験は，受容経験に比べて，低魅力異性との恋愛適合性を高く評価していた。また，この研究では，状態自尊心が異性からの受容・拒絶経験と恋愛適合性との関連を媒介することも確認されており，配偶領域におけるソシオメーターが存在することを示唆している。

しかし，Kavanagh et al.(2010)は異性からの受容・拒絶経験のみを扱っており，同性からの受容・拒絶経験による影響との比較は行われていない。そこで本研究では新たに同性からの受容・拒絶条件を加え，Kavanagh et al.(2010)の概念的追試を行う。本研究の仮説は以下のとおりである。仮説1：高魅力異性との恋愛適合性は，異性拒絶に比べて，異性受容の方が高いだろう。仮説2：低魅力異性との恋愛適合性は，異性受容に比べて，異性拒絶の方が高いだろう。仮説3：異性との恋愛適合性は，高魅力，低魅力にかかわらず，同性からの受容・拒絶による差はみられないだろうないだろう。仮説4：異性からの受容・拒絶経験が自尊心を媒介し，恋愛適合性を調整するだろう。

【方法】

事前調査　調査会社の全国モニターの20歳代女性6000人を対象に以下の条件に合致する人を抽出し，本実験の対象者とした（恋人や配偶者がいない，同性または異性からの受容経験・拒絶経験がある，異性愛者である）。その際，「異性からどのくらい魅力的に思われているか」に関する自己評価の質問に回答してもらった。

参加者　事前調査で抽出した20歳代女性366名に回答を依頼し，そのうち分析対象者299名（平均年齢24.35歳、標準偏差2.90）であった。DQS項目に誤答した41名及び想起課題に記述のなかった31名は除外した（内5名は両方に該当）。

実験デザイン　想起内容（受容/拒絶）×想起相手（異性/同性）×プロフィール人物の魅力（高/低）×自己評価（連続量)であり，プロフィール人物の魅力のみ参加者内要因であった。

質問紙構成の概要　(1) 受容拒絶経験の想起：異性（同性）からの受容（拒絶）経験の中で最も印象に残っている内容について記述を求めた。参加者には想起相手(同性/異性)×想起内容（受容/拒絶）の4パターンのいずれかが無作為に割り当てられた。(2) 操作チェック：相手からの受容・拒絶感（6件法）(3) 状態自尊感情の測定：自尊感情尺度（箕浦・成田，2016）(4) 恋愛適合性の測定：魅力度の高い／低い2種類の男性プロフィールを提示し，参加者自身との相性（恋愛適合性）について評定を求めた（6件法）。

【結果】恋愛適合性（プロフィール人物との相性の評価）を従属変数とし，想起相手(同性/異性)，想起内容（受容/拒絶)，プロフィールの魅力（高魅力/低魅力)，自己評価（連続量：標準化した値)，それら積の項を独立変数とした一般線形モデルによる分析を行った。その結果，4要因の交互作用が有意であった（$F(1, 291)=3.91$, $p=.049$, $\eta p2=.013$)。プロフィール人物の魅力（高魅力/低魅力）ごとに下位検定を行った結果，高魅力において3要因交互作用が有意（$F(1, 291)= 9.63$, $p=.002$, $\eta p2=.032$）となり，自己評価低群（-1SD）における想起相手×想起内容の単純交互作用が有意であった（$F(1, 291)=5.90$, $p<.003$; Figure1)。つまり，自己評価が低い人において，異性からの拒絶経験を想起した場合は，受容経験と比べて高魅力他者との恋愛適合性を低く評価していた。次に，状態自尊心の媒介効果を確認するため，媒介分析を行った。その結果，自己評価高群・低群ともに状態自尊心に対する有意な媒介効果は示されなかった（Sobel $zs < 1.60$, $ps > .11$)。

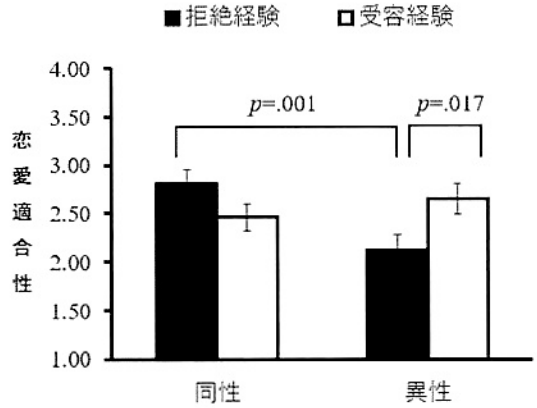


Figure1: 自己評価低群（-1SD）における結果

【考察】本研究ではKavanagh et al.(2010)の概念的追試を行った。その結果，異性からの魅力の自己評価が低い人では，異性からの拒絶経験によって高魅力異性との恋愛適合性を低めており，自己評価が低い人は拒絶経験によって自身の配偶価値が低下した可能性を示唆していた。また，状態自尊心の媒介効果は示されなかった。以上の結果から，配偶ソシオメーターは限定的に支持されたが，自尊心の媒介効果についての仮説は支持されなかった。今後は，受容拒絶経験の操作に統制条件を追加し，詳細な比較を行うこと，そして想起法ではなく実験室実験において操作を行うことが必要であると考えられる。

【引用文献】

Kavanagh, P. S., Robins, S. C., & Ellis, B. J. (2010). The mating sociometer: A regulatory mechanism for mating aspirations. Journal of Personality and Social Psychology, 99(1), 120–132.

Leary, M. R., Tambor, E. S., Terdal, S. K., & Downs, D. L. (1995). Self-esteem as an interpersonal monitor: The sociometer hypothesis. Journal of Personality and Social Psychology, 68(3), 518–530.

箕浦有希久・成田健一(2016). 2項目自尊感情尺度を用いた状態自尊感情の測定―実験的に操作された場面想定法による妥当性の検討 パーソナリティ研究, 25, 151-153.

※ 本研究は令和 2 年度立正大学心理学研究所研究助成を受けたものです。（しもだまい）

マスクの着脱が顔の魅力評価に及ぼす影響

笠置 遊（立正大学心理学部）

キーワード：マスク、着脱、魅力、ゲインロス

【目 的】

COVID-19 の世界的流行により，人々は他者と対面でコミュニケーションを行う際，マスクを着用するようになった。しかし，食事場面やオンライン会議場面では，マスクを外して他者とコミュニケーションを行っている。このように，人々は他者のマスクを着用した顔と外した顔の両方を呈示されている。このような状況において人々は，他者の顔の魅力をどのように判断しているのだろうか。

他者の顔全体の魅力判断において，目は他のパーツよりも影響力が大きく(Saegusa & Watanabe, 2016)，人は，目元部分の魅力度の高い顔を呈示されると，顔全体の魅力度も高いと推測することが明らかにされている(Kampe et al., 2001)。マスクを着用すると，目以外の顔のパーツは遮蔽される。したがって，マスク着用顔を呈示されたとき，人は目元部分の魅力度から顔全体の魅力度を推測すると考えられる

では，マスクを着用した顔の後にマスクを外した顔を呈示された場合，顔の魅力評価はどのように変化するのだろうか。Saegusa & Watanabe (2016)によると，人が顔のパーツから推測する顔全体の魅力度評価は，顔全体が呈示された場合の魅力度評価よりも高くなる。このことから，特に目元の魅力度の高い顔の場合，マスク着用顔呈示後にマスク非着用顔を呈示されると，最初に推測した魅力度と実際の魅力度のギャップが大きくなり，ゲイン・ロス効果(Aronson & Linde, 1965)が生じ，顔全体の魅力度が低く評価されると考えられる。従来の研究では，同一人物のマスクを着用した顔画像と着用していない顔画像を独立した刺激として参加者に呈示している(Kamatani et al., 2021; Miyazaki & Kawahara, 2016)。しかし，日常生活において，人々は同一人物のマスク着用顔と非着用顔を連続して見ていることが多く，それによって魅力評価がどのように変化するのかについては検討されていない。そこで本研究では，同一人物のマスクの着用・非着用顔画像を連続呈示し，魅力評価がどのように変化するのかを検討する。

【方 法】

参加者　大学生 133 名（男性 64 名，女性 69 名）。

刺激画像　目元の魅力の高い人物 5 名と低い人物 5 名のマスク着用画像および非着用画像計 20 枚（予備実験により選定）。

実験デザイン　マスクの着用（有→無条件 vs.無→無条件 vs.有→有条件 vs.無→有条件）×評定回（1 回目 vs.2 回目）×目元の魅力（高 vs.低）の 3 要因混合計画であった(マスクの着用は参加者間要因，評定回と目元の魅力は参加者内要因)。

手続き　参加者は，PC 画面上に 5 秒ずつ呈示される刺激画像人物の魅力を評定するよう求められた(全 9 項目 5 件法；刺激画像人物 10 名×各 2 回，計 20 回；Figure 1)。

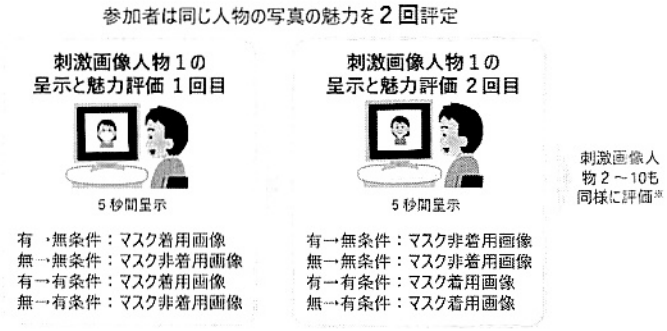


Figure1　実験手続き(※刺激画像人物の呈示順序はランダム)

【結果と考察】

マスクの着用×評定回×目元の魅力の 3 要因混合分散分析を実施したところ(Figure 2)，2 次の交互作用が有意であった(F (3, 129) = 22.62, p < .001)。下位検定の結果，目元の魅力高・有→無条件における評定回の単純・単純主効果が有意であり(F (1, 258) = 55.96, p < .001)，目元の魅力の高い人物のマスク着用画像→非着用画像の順で呈示された条件では魅力評価が有意に低下した(t (129) = 5.96, p < .001)。このことから仮説は支持されたといえる。また，目元の魅力高・無→有条件における評定回の単純・単純主効果が有意であり(F (1, 258) = 34.55, p < .001)，目元の魅力の高い人物のマスク非着用画像→着用画像の順で呈示された条件では魅力評価が有意に高まることが示された(t (129) = 4.68, p < .001)。このことから，ギャップの効果はマスク非着用顔後に着用顔を呈示された場合も生じることが示唆された。一方，目元の魅力低条件においては，マスクの着用・非着用顔呈示による魅力評価の変化はみられなかった。

【引用文献】

Aronson, E., & Linder, D. (1965). Gain and loss of esteem as determinants of interpersonal attractiveness. *Journal of Experimental Social Psychology, 1*, 156–171.

Kamatani, M., Ito, M., Miyazaki, & Y., Kawahara, J. (2021). Effects of masks worn to protect against COVID-19 on the perception of facial attractiveness. *i-Perception, 12*, 1-14.

Kampe, K. K. W., Frith, C. D., Dolan, R. J., & Frith, U. (2001). Reward value of attractiveness and gaze. *Nature, 413*, 589–590.

Miyazaki, Y., & Kawahara, J. (2016). The sanitary-mask effect on perceived facial attractiveness. *Japanese Psychological Research, 58*, 261-272.

Saegusa, C., & Watanabe, K. (2016). Judgments of facial attractiveness as a combination of facial parts information over time: Social and aesthetic factors. *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance, 42*, 173–179.

（かさぎゆう）

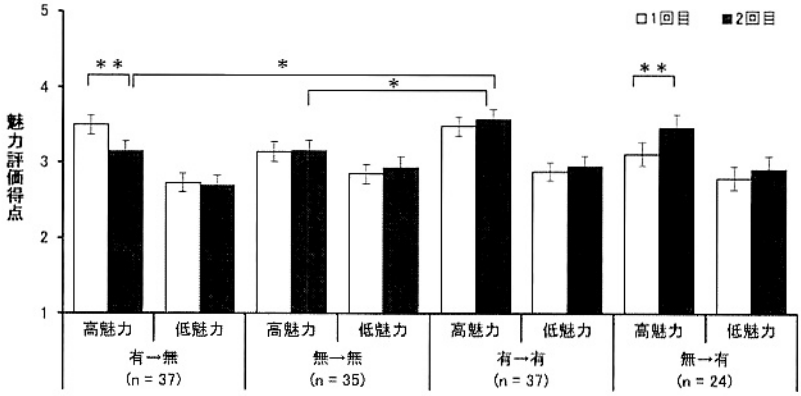


Figure 2　各条件の平均魅力評価得点（**p < .001, *p < .05。エラーバーは標準誤差。なお，全条件において高魅力＞低魅力であった(ps < .01)）

特殊詐欺未然防止の検討３

特殊詐欺聴取時における生理反応・心理状態変化とそれに影響を及ぼす被害者の特徴

○宮原捺希[1]　近野恵[1]　吉岡隆宏[1]　井手健太[1]　紺野剛史[1]　桐生正幸[2]
([1]富士通株式会社　[2]東洋大学社会学部)

キーワード：特殊詐欺，犯罪心理学，生理反応

【目的】

近年，不特定多数の人物に電話などで接触し現金などをだまし取る犯罪である特殊詐欺被害が大幅に増加している．自宅の固定電話で通話内容の音声を分析し，詐欺被害を未然に防ごうとする手法が提案されているが（遠藤・谷田，2020），犯人の手口もそれに合わせるように複雑化かつ巧妙化するためすぐに手法が適用できなくなる課題がある．

本研究の目的は，そうした課題に対処するため通話内容ではなく、通話時の被害者に生じる心理状態の変化に着目し、心理状態の変化から特殊詐欺を検知し未然防止に繋げることである．第二報では特殊詐欺の標的となりやすい高齢者の特殊詐欺音声聴取時の生理反応から心理状態を予測するため，それら２つの反応の関連分析を行った．生理反応と心理状態の傾向は連動するという仮説を立てて分析を行ったものの，連動する実験参加者(8 名)と連動しない実験参加者(4 名)の 2 群に分かれることがわかった．これら 2 群に属する被害者の特徴を把握し，被害リスクとの関連を知ることができれば，心理状態予測の際に被害者に合った予測手法を適用でき，より正確な特殊詐欺検知に繋げることができる．

本報告では特殊詐欺音声聴取時における生理反応と心理状態が連動する／しない２つの群の実験参加者において，それぞれに影響を及ぼす被害者の特徴に着目する．

【方法】

上記２つの群を，心理状態と生理反応の傾向が一致する／一致しないという意味合いから，「一致群」と「不一致群」とし，目的変数とする．第一報で報告された実験参加直前・直後で実施したアンケートの回答により，実験参加者の日常的な心理状態の傾向と，実験参加直前・直後の一時的な心理状態を調査した．今回用いた心理尺度は，State-Trait Anxiety Inventory (STAI)を実験に合わせて改良した質問項目で，実験参加者の基本的な性質を測る特性不安尺度 (STAI-特性)と実験参加直前・直後の状態を測る状態不安尺度 (STAI-状態)，そして滝口 (2019) が Generalized Communicative Suspicion (Levine & McCornack, 1991) をもとに作成した，猜疑心尺度である．猜疑心尺度と STAI-特性は日ごろの心理状態を表す指標，STAI-状態は回答時点での心理状態を表すものである．

実験では上記に関する指標を説明変数として，2 変数の組み合わせを複数抽出し，それぞれの組み合わせについて線形判別分析(Linear Discriminant Analysis) を実験参加者 12 名のデータに対して実施した．実験で用いた説明変数の詳細を表１に示す．線形判別分析の結果から，効果量が高くかつ正解通りに群分けできた変数の組み合わせを抽出し，実験参加者の特徴を考察した．

表 1. 線形判別分析で用いた説明変数一覧

説明変数	指標の説明
猜疑心	他者に対する疑いやすさ
STAI-特性	性格的な不安になりやすさ
STAI-状態(前)	実験前の一時的な不安の大きさ
STAI-状態(後)	実験後の一時的な不安の大きさ

【結果】

表 2 に各線形判別モデルの概要と相関比η^2と群分けの可否による評価，図 1 に線形判別分析結果例のプロットを示す（各変数は正規化されている）．(1)のモデルでは，最も高い相関比が得られ，正解通りに群分けできた．

表 2. 線形判別関数の概要と評価

	変数 1	変数 2	η^2	群分け
(1)	猜疑心	STAI-特性	0.614	○
(2)	猜疑心	STAI-状態(前)	0.332	×
(3)	猜疑心	STAI-状態(後)	0.339	×
(4)	STAI-特性	STAI-状態(前)	0.296	×
(5)	STAI-特性	STAI-状態(後)	0.305	×
(6)	STAI-状態(前)	STAI-状態(後)	0.368	×

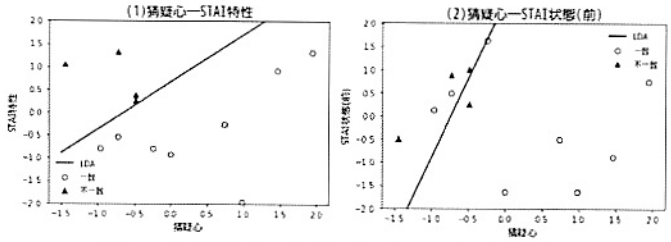


図 1. 線形判別分析結果のプロット（抜粋）

【考察】

相関比が高くかつ正しく群分けができた線形判別モデルとその説明変数から，心理状態と生理反応の傾向が不一致になる実験参加者の特徴を考察した．結果から，(1)の猜疑心尺度と STAI-特性を説明変数としたモデルの評価が高く，図 1 より猜疑心が低く特性不安が比較的高い，すなわち，疑いにくく，比較的不安になりやすい性格の人が不一致群に属する傾向にあることが示された．特にこの結果からは実験時の一時的な心理状態ではなく，実験参加者の性格的な特徴から群分けできることが示された．以上の結果より，本研究の目的である特殊詐欺における被害者の心理状態予測において、被害者の特徴から生理反応と心理状態の連動傾向を予測できることがわかった．それにより被害者の心理状態を正確に把握することができ，高度な特殊詐欺検知への貢献が期待できる．

次の第 4 報では，上記の被害者の特徴が生理反応と心理状態の連動に寄与することを用いて心理状態変化を予測するモデルを検討した．今後の展望として，実験参加者を増やした際に一致群と不一致群の解釈を深めること，そしてそれぞれの群に対する心理状態変化の予測を検討していきたい．

【引用文献】

遠藤 渉太・谷田 康司 (2020). 特殊詐欺通話の検出のための感情分析を用いた音声解析に関する検討. 信学技報 NS2020-78, 120 (257), 14-19.

Timothy R. Levine, & Steven A. McCornack (1991). The dark side of trust: Conceptualizing and measuring types of communicative suspicion. *Communication Quarterly, 39.4*, 325-340.

(みやはら なつき・ちかの めぐみ・よしおか たかひろ・いで けんた・こんの たけし・きりう まさゆき)

特殊詐欺未然防止の検討 4

特殊詐欺被害者に生じる心理変化の生理指標を活用した予測に関する検討

○井手健太[1]　吉岡隆宏[1]　近野恵[1]　宮原捺希[1]　紺野剛史[1]　桐生正幸[2]
([1]富士通株式会社　[2]東洋大学社会学部)

キーワード：特殊詐欺、生理反応、犯罪心理学

【目的】第 1 報で報告した通り、特殊詐欺の被害は深刻である。特殊詐欺防止について、自宅の固定電話で通話内容の音声を分析し，詐欺被害を未然に防ごうとする手法が提案されている（遠藤・谷田，2020)。しかし犯人の手口もそれに合わせるように複雑化かつ巧妙化するためすぐに手法が適用できなくなる課題がある。

本研究の目的は、そうした課題に対処するため通話内容ではなく、通話時の被害者に生じる心理状態の変化に着目し、心理状態の変化から特殊詐欺を検知し未然防止に繋げることである。第 2 報で、生理反応から心理状態を予測するために、生理反応と心理状態の関連性を分析した。生理反応と心理状態が連動しない実験参加者が存在することがわかった。続く第 3 報では生理反応と心理状態が連動するかどうかは実験参加者の猜疑心などの心理的特性によって説明可能であることが示されている。

本報告では、上記の分析結果を踏まえて、特殊詐欺被害時の生理反応に基づく心理状態の予測モデルを検討する。

【方法】第 1 報で報告した実証実験で収集した生理反応と POMS2 の緊張・混乱に関する項目を今回の実験に合わせて改良した質問項目を用いて、心理変化の予測モデルを検討する。

分析対象：15 名の実験参加者の内、生理反応の計測不備のあった 3 名を除外し、12 名のデータを分析対象とする。

分析方法：音声ブロック聴取後の POMS2 スコアと 1 つ前の音声ブロック聴取後の POMS2 スコアとの変化量を目的変数とする。12 名での POMS2 スコアの変化量のデータをもとに 24 サンプルで重回帰分析を実施する。

説明変数として心拍数平均の変化量、呼吸数平均の変化量、LF/HF の変化量を利用する。各生理反応の変化量は、音声ブロック聴取時の計測値と 1 つ前の音声ブロック聴取時の計測値との変化量とする。また心拍数と呼吸数については POMS2 回答直前の音声聴取時の平均値も説明変数として利用する。呼吸変動が心拍関連の生理反応に影響を及ぼすことが知られている、そうした影響を統制するため、呼吸数、呼吸時間の変化量の大きさ(2 乗項)も説明変数に加える。そして、第 3 報で示したように生理反応と心理状態の連動性に対して心理的特性が影響を与えると考えられるため、実験参加者の猜疑心スコア、STAI 特性を説明変数として利用する。その他基礎的な情報として、事前調査した実験参加者の性別、年齢、POMS2 回答直前に聞いていた音声種別を説明変数とする。上記をもとに生理反応と性別、年齢、音声種別を説明変数とするモデル（Model 1)、Model 1 に猜疑心を加えたモデル（Model 2)、Model 1 に STAI 特性を加えたモデル（Model 3）の 3 つのモデルを検討する。

各モデルの当てはまりの良さを確認するために、効果量である自由度修正済みR^2を評価する。説明変数の有効性を確認するために、標準化偏回帰係数の有意差検定を実施する。

【結果】重回帰分析の結果を Table 1. に示す。猜疑心を加えた Model 2 の自由度修正済みR^2が最大である。以降では最も当てはまりの良い Model 2 の標準化偏回帰係数の有意差検定結果を説明する。年齢($p < .01$)、性別($p < .05$)、猜疑心($p < .01$)、心拍数平均($p < .05$)、呼吸数平均の変化量($p < .01$)、LF/HF の変化量($p < .01$)、呼吸時間の変化量の大きさ(2 乗項)($p < .01$)、呼吸数平均の変化量の大きさ(2 乗項)($p < .1$)の偏回帰係数について統計的有意性が確認できた。

特殊詐欺犯人との通話時に生じる生理反応と心理変化の関係については以下のことがわかった。心拍数平均、LF/HF の変化量、呼吸数平均の変化量について、POMS2 スコアの変化量に対して正の相関がある。

Table 1. 重回帰分析結果：回帰係数と 95%信頼区間

	Model 1	Model 2	Model 3
音声種別	0.151	0.139	0.149
	[-0.149, 0.451]	[-0.093, 0.370]	[-0.156, 0.454]
年齢	0.608**	0.500**	0.707***
	[0.225, 0.991]	[0.197, 0.803]	[0.247, 1.166]
性別	-0.402*	-0.322*	-0.467**
	[-0.708, -0.096]	[-0.564, -0.081]	[-0.817, -0.117]
猜疑心スコア	-	0.344**	-
	-	[0.120, 0.568]	-
STAI特性	-	-	0.215
	-	-	[-0.317, 0.604]
心拍数平均	0.237	0.330*	0.143
	[-0.155, 0.629]	[0.022, 0.638]	[-0.317, 0.604]
呼吸数平均	-0.073	-0.249	-0.014
	[-0.481, 0.335]	[-0.584, 0.085]	[-0.453, 0.425]
心拍数平均変化量	0.035	-0.017	0.047
	[-0.284, 0.353]	[-0.265, 0.231]	[-0.279, 0.372]
呼吸数平均変化量	0.381*	0.338**	0.319+
	[0.089, 0.673]	[0.111, 0.564]	[-0.015, 0.653]
LF/HF変化量	0.608***	0.627***	0.606***
	[0.328, 0.888]	[0.411, 0.843]	[0.322, 0.891]
呼吸数平均変化量(2乗項)	-0.231	-0.203+	-0.187
	[-0.545, 0.084]	[-0.446, 0.040]	[-0.524, 0.150]
呼吸時間変化量(2乗項)	-0.475**	-0.541***	-0.418**
	[-0.812, -0.137]	[-0.805, -0.278]	[-0.788, -0.048]
Num.Obs.	24	24	24
R2 Adj.	0.645	0.792	0.639

*+ p < 0.1, * p < 0.05, ** p < 0.01, *** p < 0.001*

その他の説明変数について、年齢、猜疑心は POMS2 スコアの変化量に対して正の相関がある。また、性別、呼吸数変化(2 乗項)、呼吸時間変化(2 乗項)は負の相関がある。

【考察】各モデルの効果量の比較から、各生理反応と猜疑心などの 11 因子によって、犯人との通話時に生じる心理状態の変化を予測できる可能性が示された。こうした正確な心理状態予測の実現によって、被害者の心理状態の変化から特殊詐欺に巻き込まれている状態かを検知し、被害の未然防止につなげることができると考える。

今後はこの予測モデルについて、実験参加者の数を増やしたとき、他の犯行手口で実験したとき、それぞれについて有効性を検証していきたい。データを増やしたときに第 2、3 報で述べられている生理反応と心理状態の連動性によって生じる予測精度への影響を中心に検証していきたい。

【引用文献】

遠藤 渉太・谷田 康司 (2020). 特殊詐欺通話の検出のための感情分析を用いた音声解析に関する検討 信学技報 NS2020-78, 120 (257), 14-19.
（いで けんた・よしおか たかひろ・ちかの めぐみ・みやはら なつき・こんの たけし・きりう まさゆき）

美容意識/行動の違いによるQOLへの影響

○九島紀子[1]　長澤里絵[2]

([1]一般社団法人 日本 顔・印象コンサルティング協会　[2]P&E研究所)

キーワード：QOL、美容意識、美容行動

【目的】少子高齢化が進むにつれて、健康寿命に関連する研究が増加してきている。その中で度々取り上げられるのが、QOL(quality of life)である。例えば高齢者への化粧やマッサージなどの美容介入が、高齢者のQOLを高めることが明らかにされている。また福祉の領域だけでなく、臨床領域においても患者のQOL向上のために美容が有効であることが明らかになってきている(土方他,2013)。しかし、福祉や臨床領域以外の一般の人々を対象としたQOLと美容の関連を検討している研究は多くない。そこで本研究では、QOL向上のためにどのような美容行動や美容意識が有用なのかを探索的に検討することを目的とする。

【方法】

対象者

心理学系選択授業を受講した女子大学生75名（M=18.68, SD=.55）を対象に、オンライン上で設問への回答を求めた。

質問項目

質問項目は美容行動/美容意識に関する34項目とWHO QOL26尺度 26項目であった。

美容行動/美容意識に関する項目は、「ヘアサロンへ行っていますか」などのサロン利用7項目、「スキンケア化粧品を使っていますか」などの化粧品使用8項目、「メイクアップ化粧品を買いますか」などの化粧品/装飾品購買13項目、「美容に関心がありますか」などの美容意識6項目について、1(全くあてはまらない)～5(非常に当てはまる)の5件法で回答を求めた。

WHO QOL26尺度の項目は、「自分の生活の質をどのように評価しますか」「自分の健康状態に満足していますか」の全体的QOL/健康状態2項目、「毎日の生活の中で治療(医療)がどのくらい必要ですか」などの身体的領域7項目、「毎日の生活をどのくらい楽しく過ごしていますか」などの心理的領域6項目、「人間関係に満足していますか」などの社会的領域3項目、「必要なものが買えるだけのお金を持っていますか」などの環境領域8項目について、1(全くあてはまらない)～5(非常に当てはまる)の5件法で回答を求めた。

【結果】

美容行動／美容意識の下位尺度をそれぞれ平均値を基準に高低群に分け、t検定を行った。

サロン利用に関して、サロン利用頻度の高低によるQOLの違いは見られなかった（QOL平均：$t(73)=.56, n.s.$)。ただし美容クリニック等を除いた美容サロンのみの利用で分析をすると、美容サロン利用頻度が高い人は環境的QOLが高いことが明らかになった($t(73)=2.60, p<.01$)。

化粧品使用に関して、化粧品使用頻度の高い人ほどQOLが高く(QOL平均：$t(73)=3.18, p<.01$)、中でも心理的領域($t(73)=2.01, p<.05$)・社会的領域($t(73)=2.98, p<.01$)・環境領域($t(73)=3.53, p<.001$)が高いことが明らかになった。

化粧品/装飾品購買に関して、化粧品/装飾品購買頻度の高い人ほどQOLが高く(QOL平均：$t(73)=.3.03, p<.01$)、中でも全体的QOL/健康状態($t(73)=2.58, p<.01$)と環境領域($t(73)=5.48, p<.001$)が高いことが明らかになった。

美容意識に関して、美容意識が高い人ほどQOLが高く(QOL平均：$t(73)=5.03, p<.001$)、中でも身体的領域($t(73)=3.59, p<.001$)・心理的領域($t(73)=7.19, p<.001$)・社会的領域($t(73)=2.99, p<.01$)・環境領域($t(73)=2.70, p<.01$)が高いことが明らかになった。

【考察】本研究では、QOL向上のためどのような美容行動や美容意識が有用なのかを探索的に検討することを目的とした。その結果、化粧品使用・化粧品/装飾品購買・美容意識が高いほどQOLが高いことが明らかになった。このことから美容行動や美容意識が人々のQOLを向上させる可能性が示唆された。

ただし、本研究では調査対象者が少なく限定された年代だったため、今後、調査対象者の人数と年齢の幅を広げる必要があり、美容行動/美容意識の尺度化も行いたい。さらには美容行動と美容意識によるQOL向上の因果関係をも分析することが求められる。

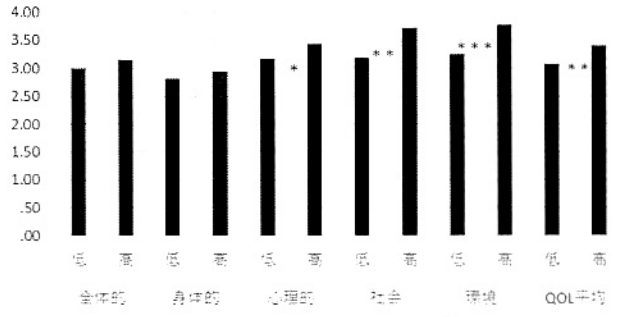


Fig. 1　化粧品使用高低群によるQOLの違い

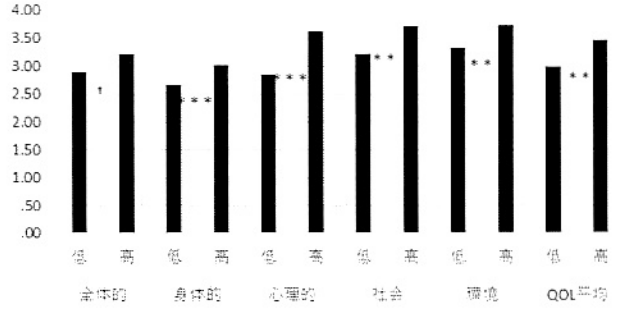


Fig. 2　美容意識高低群によるQOLの違い

【引用文献】

土方 僚子, 鈴木 裕美子, 竹内 裕美, 松本 梓, 田崎 美弥子, 大沢 かおり, 岡田 直美(2013). 化学療法の美容上の副作用に対する美容ケアによる乳がん患者の QOL 改善効果　日本香粧品学会誌,37,3,171-176

（くしまのりこ・ながさわりえ）

中国語版 SNS ストレス尺度作成の試み

○金嘉宸[1]　松田幸弘[1]
（大阪経済大学大学院人間科学研究科）

キーワード：SNS ストレス尺度，中国語版作成，因子分析

目　的

近年，SNS の普及により，時間と場所を問わず，いつでもどこでもコミュニケーションができるようになった。それにも関わらず，SNS による対人関係に悩んだり，負担に感じたりするケースが増加する傾向もある。総務省（2013）も SNS 利用が増加していると共に，多くの者が SNS 利用によるストレスを感じていることを報告している。岡本（2017）は SNS 利用時のストレスを検証するために，7 因子から構成された SNS ストレス尺度を開発した。しかし，中国においても同様に SNS の利用が増加しているにもかかわらず，この問題について全く検討されていない。そこで，岡本（2017）の SNS ストレス尺度の中国語版を作成し，その妥当性と信頼性について検討した。

方　法

測定尺度：岡本（2017）の SNS ストレス尺度（7 因子，26 項目）中の 6 因子，23 項目を選出し，関連尺度（SNS 共感性尺度など）も含めて全て中国語に翻訳した。そして，その中国版訳も日本語に再度翻訳して 2 つの日本語版を比較し，異なる点を修正して最終版の中国語版尺度を作成した。

調査期間：2022 年 5 月～6 月。

調査の手続き：20 人の中国人留学生（大学生，専門生など）に最終版の尺度で予備調査を行い，問題点を修正して web による質問紙で回答を求めた。回答形式は，各項目について，「よくあてはまらない」～「よくあてはまる」の 7 件法であった。

対象者：16 歳から 30 歳の中国人 128 人（男性 67 人，女性 61 人）を対象とし，その内訳は平均年齢 21.4 歳（SD=3.6），専門生 22.65%，大学生 46.88%，その他 30.47%であった。また，毎日 SNS を使う頻度について，2 時間以下の人が 8.59%，2 時間から 4 時間の人が 42.97%，4 時間から 6 時間の人が 25%，6 時間以上の人が 23.44%であった。

結果と考察

中国語版 SNS ストレス尺度 23 項目について，因子分析（最尤法，バリマックス回転）を行った。1 つの項目を除いた結果，Table1 が示したように全ての因子負荷量が 0.40 以上であり，22 項目で 5 因子が抽出された。第 1 因子は，「一度投稿すると，完全には消すことができないので不安である」など 4 項目から構成され，因子名は「情報拡散不安」とした（α＝.880）。第 2 因子は，「友だちの投稿はいつもチェックしないといけない気がする」など 5 項目から構成され，因子名は「閲覧強迫」因子とした（α＝.838）。第 3 因子は「楽しそうな投稿を見ると嫉妬してしまう」など 7 項目から構成され，岡本（2017）の「社会的比較」と「過剰な繋がり」の 2 つの因子がまとまり，「過剰な繋がりと社会的比較」因子とした（α＝.824）。第 4 因子は，「SNS では，自分を良く見せなければいけないような気がして煩わしい」など 3 項目からなる「背伸び」因子とした（α＝.875）。第 5 因子は，「SNS と現実の人間関係の違いに悩んでしまう」など 3 項目から構成され，「SNS と現実のギャップ」因子（α＝.787）とした。第 3 因子を除き、他の因子は岡本（2017）の先行研究とほぼ同様な因子構造であることが確認された。

Table1 中国語版SNSストレス尺度の因子分析の結果（最尤法，バリマックス回転）

項目内容	1	2	3	4	5	共通性
F1：情報拡散不安（α＝.880）						
8、一度投稿すると，完全には消すことができないので不安である	**.782**	.127	.252	.208	.259	.802
7、SNS への投稿は，誰にチェックされているのか分からないので不安になる	**.746**	.213	.281	.130	.185	.732
6、一度投稿すると，情報がどこまで広がるか分からず不安である	**.722**	.098	.311	.079	.011	.634
9、SNS に書き込むと，自分の行動を人に把握される気がして気持ちが悪い	**.621**	.007	.377	.058	.061	.534
F2：閲覧強迫（α＝.838）						
2、友だちの投稿はいつもチェックしないといけない気がする	-.049	**.813**	.253	.093	.146	.757
4、友だちからのコメントに返信しないと，他のことに集中できない	.088	**.699**	.088	.186	.104	.549
1、定期的に見ていないと大事な情報を見落とすのではないかと不安になる	.086	**.654**	.072	.144	-.001	.462
3、SNS の情報を見ておかないと，話題についていけない気がする	.120	**.638**	.021	.078	.185	.462
5、コメントに対してすぐに返信しなければ嫌われるのではないかと不安になる	.307	**.572**	.177	.162	.167	.507
F3：過剰な繋がりと社会的比較　（α＝.824）						
16、SNS を続けていると知られたくない人間関係が知られてしまいそうで嫌だ	.192	.127	**.690**	.132	.121	.560
11、楽しそうな投稿を見ると嫉妬してしまう	.352	.196	**.619**	.107	.051	.560
15、常に他人の情報を見ていることに疲れる	.186	.016	**.584**	.105	.063	.367
18、SNS での馴れ馴れしさに戸惑ってしまう	.221	.066	**.513**	.029	.398	.475
14、常に SNS で人とつながっている気がして疲れる	.232	.127	**.503**	.150	.192	.383
10、自分の投稿を見てほしい人以外にも見られてしまうのが嫌だ	.375	.160	**.463**	.104	.068	.397
12、楽しそうな投稿を見ると悲しくなることがある	.342	.228	**.439**	.095	.135	.389
F4：背伸び（α＝.875）						
22、SNS では，自分を良く見せなければいけないような気がして煩わしい	.114	.132	.247	**.811**	.135	.767
23、充実した自分を SNS 上で演出するために，無理をしてしまうことがある	.174	.301	.101	**.785**	.273	.821
21、何か良いことを投稿しなければと，無理に背伸びをしてしまう	.129	.246	.143	**.671**	.220	.596
F5：SNS と現実のギャップ　（α＝.787）						
20、SNS と現実の人間関係の違いに悩んでしまう	.204	.222	.079	.347	**.791**	.844
19、実際に会ったときと SNS での態度のギャップに戸惑うことがある	.214	.291	.207	.192	**.685**	.679
17、SNS と現実とで，しゃべり方の違いに戸惑ってしまう	-.016	.098	.340	.217	**.474**	.397
因子寄与	2.904	2.849	2.847	2.177	1.899	
累積寄与	37%	48%	56%	61%	67%	

以上の結果より，本研究の中国語版 SNS ストレス尺度は，各因子の信頼性が十分に高いといえる。また SNS ストレス尺度と関連尺度の各因子間の関連性を検討した結果，有意な相関が認められたので，妥当性も確認された。

引用文献

岡本卓也（2017）「SNS ストレス尺度の作成と SNS 利用動機の違いによる SNS ストレス」信州大学人文科学論集，Vol. 4，113-131.

総務省（2013）「青少年のインターネット利用と依存傾向に関する調査」（https://www.soumu.go.jp/iicp/chousakenkyu/data/research/survey/telecom/2013/internet-addiction.pdf）（2022.7.1 取得）

発達障害者の教習に関する自動車教習所指導員の意識

東京都を対象として

○小菅　英恵

（公益財団法人交通事故総合分析センター）

キーワード：発達障害者，運転免許取得支援，教習，自動車教習所

【背景・目的】

昨今，障害者の運転再開や運転免許取得など，自動車運転支援の取り組みが自動車教習所（教習所）で始まっている．発達障害者の免許取得支援としては，2018 年に全日本指定自動車教習所協会連合会（全指連）が，全国の教習所に『発達障害者の教習支援マニュアル』を配布している．また，発達障害者向けの自動車運転免許教習サービス「つばさプラン」[1] により，支援に取り組む教習所も存在する．

一方，現状は，発達障害者がどこでも免許取得の教習を受講可能な状況では無い．身体障害者[2]，聴覚障害者[3]，知的障害者[4] の教習受け入れについては，行政対応や支援体制の問題，教習所の設備や環境の問題，教習所における専門家の不在などから，発展途上であることが指摘されている．しかし，発達障害者の教習については，実際に受け入れる現場の教習所職員が，発達障害者の教習についてどのような意識を持っているか，また，どのような現状であるかについて，十分に把握がなされていない．

そこで，本研究では，教習所における発達障害者に対する運転免許取得支援の取り組みに向けて，教習に携わる教習資格を保有する教習所職員を対象に，発達障害者の運転免許取得や教習に関し質問紙調査を実施した．

【方　法】

調査対象者：東京指定自動車教習所協会が開催する法定講習を受講した，東京指定自動車教習所の教習指導員および技能検定員（*N*=416）とした。

質問紙・調査項目：質問紙は，フェイスシート，受講した法定講習（2 項目），発達障害者の運転免許取得や教習で必要な配慮や支援，懸念や不安事項など（8 項目）を訊ねる内容で構成した．8 項目は，先行研究[5] を参考にした．

調査の手続き：調査者が担当する法定講習の講義（2 時間）において，『発達障害と自動車運転：安全支援に向けた障害特性の理解と支援』の講義後，受講者に調査の内容・目的を説明の上，質問紙を配布し記入を求め，その場で回収した．その際，倫理的配慮として APA「倫理原則と行動規範」に則り，調査は法定講習と関係は無く，協力は受講者の任意であること，収集した回答を用いた研究成果を学会等で公表する場合，個人を特定する分析や情報は公表しないことなどを口頭で説明し，研究は書面で承諾の得られた者のデータのみを用いた．調査は，2020 年 6 月～2021 年 4 月末日の間に実施した．

【結　果】

対象者特性：調査に同意した 380 名について集計した結果，男性 302 名・女性 66 名，教習指導員 211 名・技能検定員（教習指導員の資格保有含む）156 名，年齢の範囲 22 歳～72 歳，平均年齢 43.5±11.5 歳，指導年数の範囲 0 年～44 年，平均指導年数 15.7±11.3 年，発達障害者への指導経験の有る者 93 名・無い者 268 名であった．

発達障害者の教習に関する教習所職員の意識

（1）**発達障害者であっても免許を取れることを知っていたか**（単一選択）は，16%が「知らなかった」と答えた．

（2）**通常の教習所で発達障害者の教習は適切と思うか**（単一選択）は，12%が「適切ではない」と答えた．

（3）**発達障害者の学科教習・技能教習では，どのような配慮・支援が必要と思うか**（自由記述）は，「環境整備」「職員への教育」「情報共有」「専門スタッフ」「担当制」「発達障害の理解」といった〈組織のあり方〉，「個室」「個別・特別指導」「指導員の配慮」「少人数」「同一指導者」「他の生徒への配慮」といった〈関わり方・授業環境〉，「根気強さ」「個に合わせる」「時間をかける」「配慮する」「指導方法の工夫」「生徒への理解」「ゆっくり話す」などの〈職員の配慮・対応〉が挙がった．

（4）**自身が教習する場合の懸念・不安**（自由記述）は，「円滑な教習が出来るか」「教習方法」といった〈教習への懸念〉，「取得後の事故発生」といった〈取得後の懸念〉，「発達障害に関する知識不足」「発達障害の判断」といった〈障害に対する不安〉が挙がった．

（5）**発達障害者が免許を取得するための連携体制や社会的な仕組みは充実していると思うか**（単一選択）は，49%が「充実していない」と答えた．

（6）**会社の発達障害者の免許取得の取り組み状況**（単一選択）は，30%が「既に取り組んでいる」，9%が「取り組む準備をしている」，26%が「取り組むことは考えていない」と答えた．「その他」（*n*=85）には，「会社の取り組みや現状が分からない，知らない」（*n*=34），「会社として発達障害者の免許取得支援の認識がない，準備や取り組みはまったくない」（*n*=16），「特別な準備はしていないが，入所があれば，適宜，現場の指導員が対応」（*n*=10），「前例がない」（*n*=4）などが挙がった．

【考　察】

東京都の教習所職員を対象とした調査の結果，発達障害者が免許取得可能なことを知らない者が約 2 割存在し，組織としての運転免許取得の支援や取り組みが十分に進んでいない状況が明らかとなった．また，職員の意識には，積極的な運転免許取得支援に対し期待がある一方で，発達障害や障害者に対する不安，また，障害者を対象とした教習の実施や方法，免許取得後の事故などに懸念があることが分かった．

教習所における発達障害者の受け入れを推進するためには，発達障害者の免許取得に対する教習所の役割について経営者側の認識を高め，教習所と公安・特別支援学校・行政との連携体制や社会的な仕組みづくりを充実させていくと共に，専門家から積極的に発達障害者の運転や事故，教習方法などについて，正しい情報発信と情報提供を行なっていく必要があると考える．

また，東京都以外の地域の状況も把握する必要がある．

【謝辞】調査場所をご提供くださった東京指定自動車教習所協会・法定講習ご担当者様，調査に協力いただいた受講者の皆様に対し，ここに記して御礼を述べる．

【引用文献】1）栗村(2015).作業療法ジャーナル, 49(2), p.106-p.110.
2）川口(2000). IATSS review, 26(1), p.67-p.73.
3）徳田・水野(2000).日本教育心理学会第 42 回総会発表論文集, p. 99.
4）伊保・田中 (2008).琉球大学教育学部紀要, (73), p.175-p.181.
5）田中 (2014). Asian Journal of Human Services, 7, p.72-p.85.

（こすげはなえ）

現場作業員への効果的な情報発信に関する検討

—軽微な事故情報を記銘材料とした自己参照効果の検証—

○小倉 有紗[1・2]　中井 宏[1]　秋保 亮太[1]（非会員）　和田 一成[2]
([1]大阪大学大学院人間科学研究科　[2]西日本旅客鉄道株式会社 鉄道本部 安全研究所）

キーワード：自己参照効果，リスク情報，危険感受性

【目的】 労働現場において，インシデント等が発生すると，その情報を社内に周知し類似事象の再発防止に努めることが求められる。この情報提供時に，どのような工夫があれば，将来それを活かしてリスクを発見できる可能性が高まるかについて検討することは有意義であると考えられる。

本研究では，記銘材料を自己に関連させて処理すると記憶が促進される現象である「自己参照効果」に着目した。従来，自己参照効果は，性格特性単語や日常の失敗事例を記銘材料として，記銘後，短期間で想起させる条件で検証されてきた(Klein,2012)。しかしリスク情報として現場に発信される事例はより複雑であり，その想起は自身の過去の経験等，様々な要因の影響を受けやすいと考えられる。また，想起すべきタイミングは，多くの場合，情報提供後一定以上の日数が経ってから発生すると考えられる。そこで，本研究では情報提供場面を模した現実に近い条件で自己参照効果を検証した。

【方法】 **参加者**：オンライン調査会社のモニタに登録しており，「交通機関で働いた経験がない」等の一定の条件を満たした 20～50 代の成人男女を対象とした。調査は調査 A(記銘フェーズ)と，10～12 日後実施された調査 B(想起フェーズ)の 2 段階で構成されていたが，調査 A の有効回答 516 名に調査 B を配信し，先着 200 名を調査 B の参加者とした。
手続き：調査はオンラインで実施し，参加者は配信期間中，任意のタイミングで PC 又はスマートフォンで回答した。
[調査 A] 全ての参加者に対し 10 の事例を提示した。事例は全て「A さんは」で始まり，A さんが駅構内で軽微な事故に巻き込まれる内容(例：持っていたキャリーケースが他の人にぶつかる)となっていた。文章の長さは全て約 200 字に統一し，事故の規模やケガの程度も同程度とした。

10 事例のうち半数を自己参照条件，残り半数を対照条件に割り当てた。自己参照条件では「A さんに起こったのと同じような状況が将来あなた自身に起こる可能性があると思いますか」という問いに，1)そう思わない 2)どちらかといえばそう思わない 3)どちらかといえばそう思う 4)そう思う の 4 件法で回答を求めた。また，対照条件では「A さんはどこに向かっているところでしたか」等の 4 択問題に回答させた。

なお,調査 A では調査 B を予告しなかった(偶発記憶課題)。
[調査 B] 調査 A の 10～12 日後に，調査 B に回答を求めた。調査 B では参加者に 1 枚のイラスト(図 1)を提示した。イラスト中の 8 名の人物に番号が振られており，これらの人物が登場する事例が，前回調査にあったかを 1)まちがいなくなかった 2)たぶんなかった 3)たぶんあった 4)まちがいなくあった の 4 件法で回答させた(想起課題)。想起課題に用いた 8 事例中，調査 A に実際に含まれていたのは 6 事例(ターゲット事例)で，残りの 2 事例は調査 A には含まれていなかった(ダミー事例)。加えて，各事例に対して，過去に同じような直接経験(参加者自身が実際に経験したこと)・間接経験(直接経験してはいないが見聞きしたこと)があるかを選択式で回答させた(調査 A に先行する経験の有無)。

以上の手続きは，第一著者所属機関の倫理審査委員会で承認を得た。

【結果】 **自己参照効果の検証 1**：信号検出理論に基づき，想起課題回答のうちターゲット事例から Hit 率を，ダミー事例から FA 率を算出した。それをもとに検出力 d' を算出し，自己参照条件と対照条件を比較した。

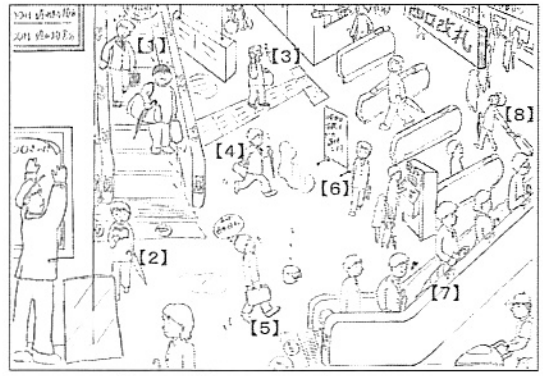


図 1：調査 B で用いたイラスト

参加者内 t 検定の結果，「まちがいなくあった」を検出とみなした場合の自己参照条件の検出力($M = 0.56$, $SD = 0.26$)は対照条件の検出力($M = 0.48$, $SD = 0.36$)より有意に高かった($t(199) = 3.08$, $p = .002$, $d = .211$)。

自己参照効果の検証 2：参加者自身の過去の経験の影響を統制するため，参加者に関係なくターゲット事例の全試行(200 名×6 事例)の想起の有無を従属変数としたロジスティック回帰分析を実施した。独立変数は，自己参照の有無に加え，調査 A に先行する直接経験及び間接経験の有無を投入した。分析の結果，「まちがいなくあった」を想起有とみなした場合，先行経験の影響を統制しても自己参照効果が有意であった(表 1)。

表 1：ロジスティック回帰分析結果(強制投入)

変数	オッズ比	VIF
自己参照の有無	1.479 **	1.001
先行する直接経験	1.165	1.534
先行する間接経験	1.053	1.534
近似 R^2	.014 *	

自己参照の程度の影響：　自己参照条件のみ(100 名×6 事例)に限定し，想起の有無を従属変数としたロジスティック回帰分析を実施した。独立変数として，調査 A における自己参照条件の質問の回答(1~4)を投入した。分析の結果，自己参照の程度の効果は有意ではなかった。

【考察】 現実に近い条件で自己参照効果が確認できたことから，現場における情報提供場面において自己参照効果を活かした工夫を講じることは有効である可能性がある。また，自己参照の程度の検証から，上記の工夫においては，自分に当てはめて考えさせる機会を設けることが重要であり，考えた結果「自分にそのようなことは起こらなさそうだ」と感じたとしても，事例が想起されやすくなる効果は変わらないと考えられる。ただし，今回検討したのは，提供されたリスク情報の記憶の側面に限られる。記憶された情報を周囲の状況に適用し，リスクの発見につなげるという側面に関しては，さらなる検討が求められる。

【引用文献】 Klein, S. B. (2012). Self, memory, and the self-reference effect: An examination of conceptual and methodological issues. *Personality and Social Psychology Review, 16*(3), 283–300.

(おぐら ありさ・なかい ひろし・
あきほ りょうた・わだ かずしげ)

自転車狭路走行中の頭部動作と眼球運動の関係

○小嶋岳[1]　小松佳弘[1]　國部雅大[2]
([1]筑波大学大学院人間総合科学学術院 [2]筑波大学)
キーワード：自転車、視線、OKN (視運動性眼振)

【目的】

交通心理学の観点から歩行，自転車，車など移動行動中の注視箇所がこれまで多く研究されている。自転車走行中の注視箇所は主に正面，周囲の環境，走行経路に分かれる。Vansteenkiste et al. (2013) によると幅が広い道路の自転車走行では，面や周囲の環境を注視する割合が高くなり，狭路や低速では走行経路を注視する割合が高くなることが報告されている。しかし，「走行経路」の具体的にどの程度先を見ているか不明である。より実環境に近い視線の動きを検討するには，時系列データとして具体的に視線方向を測定することが求められる。そして，具体的な視線方向は眼球位置と頭部の回転角度を足し合わせることで測定可能である。

自転車走行中の具体的な眼球の動きとしては視運動性眼振 (Optokinetic Nystagmus，以下，OKN) が観察されている (Vansteenkiste et al., 2013)。OKN は緩徐相と急速相からなる眼球運動で，自転車走行中では経路の手前と奥を交互に見る眼球の動きにあたる。運動中における OKN の機能は測定の困難さなどの問題からあまり検討されていない。また，自転車走行中に OKN の発生を報告した上述の先行研究では，眼球位置の測定のみのデータであるため，頭部の上下動作 (前庭動眼反射，以下，VOR) と区別することができない。そこで本研究の目的は，球位置測定に加えて頭部動作の測定を実施することで，安定性が求められる自転車狭路走行中の頭部，眼球，視線の関係を検討することとした。

【方法】

参加者 (自転車競技経験がない大学生 19 名) はグラス型眼球運動測定装置 (EMR-9, nac) および 9 軸モーションセンサー (スポーツセンシング社) を設置したヘルメットを装着した。シティサイクル (タイヤの外径 26inch) に乗車し，レーン (木製，幅 12cm，長さ 30m，高さ 13mm) 内をなるべく逸脱しないように 3 回走行することを課題とした。

自転車の前輪がレーンに入る地点からレーンを出る地点までの時間を測定し，走行速度を算出した。レーンのスタートから走行時間の 80%を各パラメータの評価に利用した。立位で正面を注視した状態を 0deg，下方向を負の値として，課題中の頭部回転角度および眼球位置を記録し，これらを足し合わせたものを視線角度とした (Figure 1)。データの中央値を各パラメータの代表値とし，最大値と最小値の差から頭部・眼球・視線の動きの範囲を求めた。

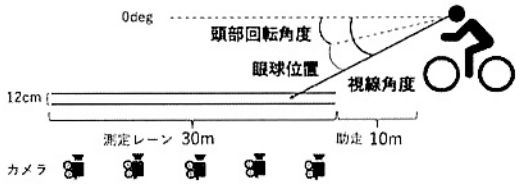


Figure 1. 実験風景

【結果】

各パラメータ 19 名の平均 (中央値，範囲) は，頭部回転角度：-10.8deg，13.5deg，眼球位置：-10.3deg，31.1deg，視線角度：-20.9deg，34.1deg であった。また，頭部回転角度と眼球位置の間に負の相関関係がみられた (r=-.495, p<.001)。さらに，走行速度と眼球位置の範囲 (r=-.443, p<.001) および視線角度の範囲 (r=-.452, p<.001) の間に負の相関関係がみられた。

各パラメータをグラフ化したところ，視線角度の鋸歯状の動き (OKN) は眼球位置と共通しており，頭部回転角度に鋸歯状の波形はみられなかった (Figure 2)。

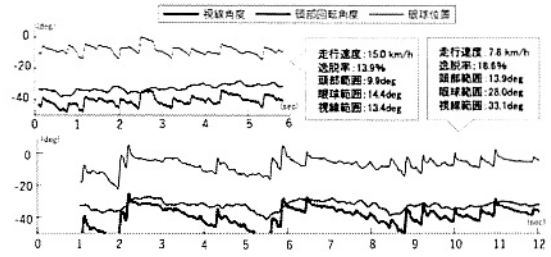


Figure 2. 代表的な 2 名の参加者における
視線角度・頭部回転角度・眼球位置の時系列データ

【考察】

今回の課題において，19 名中 16 名は走行中常に走行経路を注視していた。自転車乗車中の目線の高さを 1.5m と仮定すると視線は約 4m 先の経路に向けられていたことになる。また，頭部回転角度と眼球位置の間に負の相関関係がみられた。これは，視線の向け方には主に頭部を下に向ける方略，眼球のみ下に向ける方略があることを示している。樋口 (2013) は「眼を絶えず動かすためには，眼を他の身体部位と独立に動かせることが前提条件となる」と述べている。頭部ごと下に向けて走行経路を注視することは，眼球運動の独立性が低い状態を示し，周囲を確認する際にバランスを崩す要因になる可能性がある。

走行速度と眼球位置および視線角度の間に負の相関関係がみられた。これは高速では狭い範囲，低速では前後に広い範囲に視線を向けていたことを示している (Figure 2)。走行経路内での大きな視線の動きは，注意の分散をもたらし周囲への注意が疎かになる可能性がある。例えば，慎重な走行が求められる狭路などの自転車走行環境では，歩行者や車との間に物理的な仕切りを設けるといった配慮が考えられる。本研究では歩行者や車の往来が無い空間で実験を実施した。今回用いた測定手法を実際の走行環境で用いることで，自転車の交通安全に有用な知見が得られると考えられる。

グラフから視線角度および眼球位置に鋸歯状の動きがみられ，頭部回転角度にはみられなかった (Figure 2)。よって，眼球位置の鋸歯状の測定データは頭部回転動作による VOR ではなく，OKN の眼球運動を示している可能性が高い。そこで，今後 OKN の機能を解明するために，自転車走行の安定性との関連を検討する必要がある。

【引用文献】

樋口貴広. (2013). 運動支援の心理学–知覚・認知を活かす. 三輪書店.

Vansteenkiste, P., Cardon, G., D'Hondt, E., Philippaerts, R., Lenoir, M. (2013). The visual control of bicycle steering: The effects of speed and path width. *Accident Analysis and Prevention*, 51, 222-227.

(こじま たかし・こまつ よしひろ・こくぶ まさひろ)

ネット炎上に関連する心理的要因があおり運転に及ぼす影響

○森泉慎吾[1]　中井宏[2]
([1]帝塚山大学心理学部　[2]大阪大学大学院人間科学研究科)
キーワード：あおり運転、ネット炎上、匿名性

【目的】「あおり運転」は、2020年6月に「妨害運転罪」として新たな罰則が制定されるなど、重要な社会問題の1つとなっている。あおり運転については、aggressive driving（攻撃的運転）などの類似の現象の観点で交通心理学にて議論されてきた（中井, 2021）。中でも、匿名性の高い環境であるがゆえに生じる大胆で過激な行動という点で、あおり運転のメカニズムは「ネット炎上」（インターネット上のある人の書き込みをきっかけに、多数の人が集まってその人への批判・攻撃が行われる現象（小島・古澤, 2017））と類似すると論じられることがある（志堂寺, 2020）。一方で、ネット炎上に関連する心理要因とあおり運転との関係についての実証研究は希薄である。そこで、本研究においては、あおり運転とインターネット上での炎上に共通する心理的要因との関連について検討することを目的とした。

【方法】

調査参加者　株式会社サーベイリサーチセンターを通じて、20代から50代までの普通免許を所有するドライバー計133名（男性66名、女性67名）を対象とした。平均年齢は38.94歳（SD=11.46）であった。免許取得後の年数の平均は19.30年（SD=11.26）であり、週あたりの運転日数の平均は5.06日（SD=2.06）であった。

あおり運転に関する変数　中井（2021）の研究で用いられた「青信号に変わっても先行車（トヨタ製のスポーツカー86）が発進しない状況」を撮影した動画を10秒間提示した。動画の状況にて、「怒りを感じる程度」「車内で舌打ちをしたり、文句を言ったりする程度」「クラクションを鳴らす程度」の3項目についてそれぞれ10件法にて評価を求めた。

ネット炎上に関する変数　小島・古澤（2017）の研究より、「ネット炎上を容認する傾向」に関する10項目（例.自作自演行為が露呈して、バッシングされるのは仕方がないことだ）にあてはまる程度を4件法で評価させた。

また、増井（2019）のネット荒らし尺度より、ネット上での荒らし行為に関する8項目（例.インターネット上で面識のない人を困らせるのは楽しい）に当てはまる程度を5件法で評価させた。

個人差に関する変数　あおり運転やネット炎上に関連する個人差要因として、刺激欲求に関する6項目（例.目新しくて変化に富んだ色々なことをしてみたい）について古澤（1989）の研究より引用し、当てはまる程度を5件法にて評価させた。

手続き　Web経由にて調査参加を求めた。調査票（Googleフォームにて作成され、上述の会社を通じて調査参加者にアクセスを求めた。回答時間は15分程度であった。

【結果】本研究にて取得した変数について、それぞれ構成する項目の平均を「あおり運転の傾向」得点（M = 5.93, SD =2.02, α = .79)、「炎上容認」得点（M = 2.13, SD = 0.61, α = .87)、「ネット荒らし」得点（M= 1.73, SD = 0.96, α= .97）「刺激欲求」（M= 2.56, SD= 0.70, α = .76）とした。

ネット炎上の関連変数とあおり運転の傾向との関係を検討するために、あおり運転傾向を独立変数、性別（男性を「1」、女性を「0」とコードしたダミー変数)、免許取得後の年数、週あたりの運転頻度、刺激欲求、炎上容認、ネット荒らしを独立変数とする強制投入法による重回帰分析を行った。その結果、これらの独立変数を含むモデルは有意となり、免許取得後の年数（β= -.16, p= .09)、炎上容認（β= .30, p< .001）があおり運転の傾向に有意に関連していた（Table 1)。一方、ネット荒らしは、あおり運転傾向との有意な関連が認められなかった（β= -.16, p = .09)。

Table 1　あおり運転の傾向と各変数との関連

独立変数	β	VIF
性別（男性=1, 女性= 0)	-0.06	1.07
免許取得後の年数	-0.16 †	1.23
週あたりの運転頻度	0.09	1.07
刺激欲求	0.13	1.22
炎上容認	0.30 ***	1.04
ネット荒らし	0.01	1.25
Adj. R^2 = .13 (F (6, 123) = 4.27, p <. 001)		

注1）*** p <.001, † p <.10

【考察】本研究の結果、ネット炎上の中でも「ネット荒らしで炎上させる行為」そのものではなく「炎上を容認する」心理があおり運転と関連を示した。各変数をあおり運転のケースに当てはめると、ネット荒らしは「悪意を持ってあおり運転を行い、その行為自体を楽しむ」ことに対し、炎上の容認は「あおられる側に非があると思い込んであおり運転を行う」ことであると考えられる。今回の研究で設定したあおり運転に関する場面は「信号が変わっても発進しない状況」であったため、相手（先行車）が自身の進路を妨害していることを非とみなした可能性がある。ただし、本研究は場面想定法によるWeb調査であり、あおり運転の傾向についても、また「青信号でも発進しない先行車への反応」という一側面しか扱っていないため、他の研究手法や攻撃的運転にも今回の知見が当てはまるかどうかは議論の余地がある。

【引用文献】

古澤　照幸（1989). 刺激欲求尺度・抽象表現項目版（Sensation Seeking Scale-Abstract Expression）作成の試み　心理学研究, *60*, 180-184.
小島 弥生・古澤 照幸 (2017). インターネット上の炎上への関与に刺激欲求が及ぼす影響　埼玉学園大学紀要 人間学部篇, *17*, 113-126.
増井 啓太・田村 紋女・ マーチ エヴィータ (2019). 日本語版ネット荒らし尺度の作成　心理学研究, *89*, 602-610.
中井 宏 (2021). あおり運転に関する研究の概観と抑止策の提案　交通科学, *52*, 1-10.
志堂寺 和則 (2020). 最近の「あおり運転」に潜む心理　交通安全教育, *646*, 6-13.

【付記】本発表に関連し、開示すべきCOI関係にある企業等はありません。また、本研究の実施にあたり、帝塚山大学心理学部 2021年度卒業生の坪川暁夫氏から多大なるご協力を得た。ここに記して感謝致します。

（もりいずみ しんご・なかい ひろし）

人命を軽視してきた職場から現代的意義を考える

宋其静
（神奈川大学大学院 経済学研究科）
キーワード：白蝋症、振動症、現代的意義

【研究背景】

私はここ最近、以前の中国ではあまり耳にすることはなかった「振動症」なる新聞記事について目にする機会が何度かあった。

一例として、某省のゴルフクラブを作っている工場において、その作業行程に携わっていた従業員らが、振動のなかで仕事を続けるあまり、手の指にまで十分な血流が行かなくなるという、所謂、白蝋症状が見られるようになり、労災を申請したという（こうした事柄と近似した新聞記事を、今般、幾つも目にしてきた）。真摯に職業に向かうことで、手指等に障害が残るのは忍びない。しかし日本では振動症が大々的に見られた過去があり、とりわけ林業労働者に多くみられていたことを知った。しかも、それが全国的に見られ、自殺した者までいたことも知るようになった。

【振動症の辛苦、および同病への多角的な検討】

この振動症について調べていくと、日本では戦後、本格的にチェンソーを使って林業作業を行い、そうした材木を使って住宅などを作り続けた、高度経済成長期に多く見られた職業病であることがわかってきた。

この病症は、度重なる振動を手指が受けることにより、血管の内部に様々な変化が起こって血流が手先まで行かなくなり、指が紫色や白色に変化することから始まる。それでも振動に携わる作業を続けるなら、それが神経にまで影響を与えて強張りだし、二の腕や肩にまで痺れが及び、心臓は無理にでも血流を手先まで届けようとして、血圧が高くなったりもするという。

さらに進むと首までも硬直し始め、倦怠感や酷い頭痛、また耳に蝉が張り付いて四六時中鳴いているような耳鳴りが生じ出す。結果として全てのことに対して気力が無くなり、横になっていることしかできなくなるものの特効薬はなく、こうなると効果的な治療方法は殆どないとのこと。しかし外見的な変化はあまり大きなものではないことから、傍から見ると、その苦痛が伝わりにくく、「怠け者だ」…との烙印を押されがちな職業病であることも知った。

ところで、彼らの作業場についてであるが、そもそも、取り扱っている木材は固く、重く、丸い（つまり安定しない）。そのため、転がってきたり、落ちてきて挟まれた、潰された、そうして亡くなった、大怪我を被ったという記録は枚挙に暇がない。また、そうした非常に固いものを扱うため、それらを縛るための留め金も頑丈な金属製のものであり、何かあれば人に甚大な身体的障害を与えかねないものでもある。

さらには、伐採を行う場所は山間部であるため（斜面であることもあって）作業しにくく、落石は間々あり、舗装されていない道路が普通であることから、重い木材を運搬している最中に車両ごと崖下に落ちる、沢が崩れて河川に落ちるなど、そうした重大災害の記録も数多目にした。

毎回の現場が違うこともあって、こうした災害は熟練従業員でも多々見られるとのことであった。そんな中で、彼らは重いチェンソーを何時間も使い続けたのである。というのも戦後復興期には沢山の材木が（とりわけ住宅需要増を念頭に）国有林から供給されることとなった。そのため国有林での伐採マンとして何万人もの人々が雇用された。しかしながら彼らの多くは来期も雇ってもらえるかわからないという、細切れ型の労働契約の型が一般的であった。かつ、彼らにはそうした背景から、所謂、ノルマとも呼びうるものが課されがちであった。

加えてこの時期は、日本中の若者たちが金の卵とされて学校卒業後、一斉に都会に出ていった時分でもあった。そうして都市部での生産性の高い仕事に従事し、日本を経済大国へと押し上げていった頃合いである。ようは、そうした生産性向上の流れが山間部にも入ってきたのであった。例えば、コスト削減のためにチェンソーの歯は稀にしか替えてもらえない、しかしながら長時間のチェンソー作業が必要な伐採作業をしないと告げられたノルマ数は達成できない。そうしたことから、振動機械を使った過密労働を作業員たちは長時間強いられることとなった。のみならず海外から木材が安価で入ってきたため、そうした値段に負けないよう、彼らに一層の負荷がかかるようになっていったことが、無数の記録から読み取れてきた。

【調査結果】

作業員たちの命を削る姿勢、労働の在り様への軽視は、白蝋症になった後の、社会復帰のための在り方にも見られたと言わざるを得ない。例えば、私は罹患後の作業員たちが、どの様に社会復帰をしていったのだろうか…と調べ始めはしたものの、そうした記録はあまりなく、僅かながら宮崎県にて、罹患者たちを集めて治療を受けさせつつも簡易な農業作業などに従事してもらうことで社会復帰を後押しする、そうした書き物を少々目にしただけあった。

こうした命を軽視するような過去の実例を通じ、そうした職業病は、何らかの決定的な一因によるもの…というよりも（ここまで既述してきたように）様々な直接的、また間接的な「複合要因」や、数多の背景等によって生じたものと思わざるをえなかった。

【考察】

こうした事象は、今般の命を軽視するような職場、例えば過酷な成果主義や、技能実習生の問題にも対してもヒントとなるようなものが多々得られるのではないかと思うようになった。

【参考資料】

・日刊建設工業新聞 2005 年 5 月 11 日、
・宮崎日日新聞 2005 年 3 月 1 日、
・宮崎日日新聞 2010 年 5 月 10 日の記事など。

※ 紙面の関係上、ここで全ての参考文献を紹介することは困難であることから、発表当日の報告の場にて詳述することで御容赦願いたい。

（そう きせい）

大学剣道女子選手の試合前後における心理的変化

○新里知佳野[1]　古澤伸晃[1]　八木沢誠[1]　軽部幸浩[2]　藤田主一[1]
（[1]日本体育大学　[2]湘南医療大学）
キーワード：大学剣道女子選手　特性不安　状態不安

【目的】

これまでに我々は、本学会において大学剣道に関する理論的側面、競技的側面等について具体的・実践的研究を積み重ねてきた（新里他、2020；新里他 2021 等）。そこで、本研究は「大学剣道女子選手の試合に対する取り組み」と「選手の心理的変化」との関係についてその知見を応用し、今後の剣道選手育成へ貢献することを目的として計画された。

【方法】

1. **対象者**：都内 A 大学剣道部女子学生のうち、第 40 回全日本女子学生剣道優勝大会（愛知県春日井市，2021 年 11 月 14 日）出場の選手 7 名（平均年齢 20.6 歳，SD=1.4）。

2. **使用検査**：Y-G 性格検査、TAIS（スポーツ特性不安診断検査）、DIPCA（心理的競技能力診断検査）を実施した。

3. **調査日**：2021/7/19、10/10、10/17、10/24、10/31、11/7、11/14 に実施した。7/19 は女子剣道部員全員（30 名）に調査を行い、10/10 からは選手 7 名のみを対象とした。調査は、毎週日曜日の同時間と同場所で行ったが、11/14 の実施については、大会開催地からの移動中に行った。本研究は、日本体育大学倫理審査委員会の承認（021-H071）を受け、全選手に研究計画を説明し参加の同意を得て実施した。

【結果と考察】

1. 選手選考試合の結果から登録選手 7 名に絞り、週 6 日の稽古を部員全員で継続した。

2. Table 1 は Y-G 性格検査を 2 回実施したときの結果である。7/19 の結果は、選手 7 名個々の性格特性と考えられる。

Table 1　Y-G 性格検査の結果

	2021/7/19	2021/11/14
選手 1	A"	AD
選手 2	D	D
選手 3	A'	A"
選手 4	D'	D'
選手 5	A	A'
選手 6	A"	D'
選手 7	B'	B'

4 ヶ月後の 11/14 の結果は、全体的に A 系統、または D 系統への変化が見られた。たとえば、選手 1 は 2 回目で D 系統の方向に変化した。これはいろいろな特性を持ち合わせていたが、D 系統が加わったので部員をまとめ中心的に動こうとする傾向が芽生えたといえる。また選手 2 は 2 回とも同じ D 系統であったが、1 回目 9 点から 2 回目 10 点になったことは D 系統がより強まったことを意味する。D 系統が高くなったということは情緒的安定、社会的適応かつ活動的で主導権を握る傾向が高くなり、個としての選手の意識に加え、チームの選手としての意識が変化したといえる。これらはおそらく、団体戦に向けてチームの団結と和協を思い積極的に行動するよう、日ごろから指導し続けてきたことが大きな要因と考えられる。

3. Figure 1 は TAIS の特性不安、Figure 2 は TAIS の状態不安の得点をまとめたものである。TAIS は「スポーツ選手が試合前の不安傾向を知っておくのは大切なことで、この検査は試合前になると一般的に不安になりやすいかどうかの傾向をみるものである。不安に陥りやすい程度と不安の内容を調べ、今後の練習や試合に役立てるために使用される」検査である。この検査で分かることは、「動作の乱れ傾向」「結果に対する不安傾向」「身体面の緊張傾向」「競技回避傾向」「自信喪失傾向」の 5 因子がレーダーチャートとしてプロフィールが作成される。

4. Table 2 は、選手 7 名の DIPCA5 因子（競技意欲、精神の安定・集中、自信、作戦能力、協調性）の得点をまとめたものである。この検査は，得点が高いほど優れた心理的競技能力を示すとされ，有用なアセスメントツールとして広く使用されている。例えば、選手 1 が試合前後に関わらず競技意欲、精神の安定・集中などすべての因子の得点が高くなっていたことは、試合を重ねることで経験を積み、次の目標に結び付ける能力を潜在的に有し、「自己実現」できる力を備えた選手ではないかと考えられる。

今回の結果より、今後さらに選手個々の特性を見極めた指導を追求していきたい。

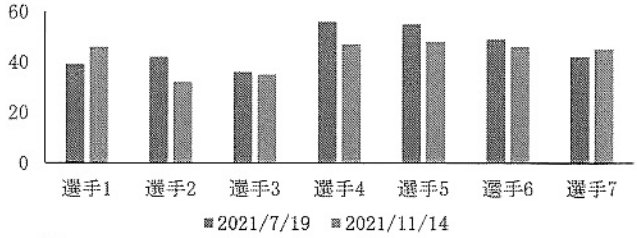


Figure 1　TAIS（特性不安）の結果

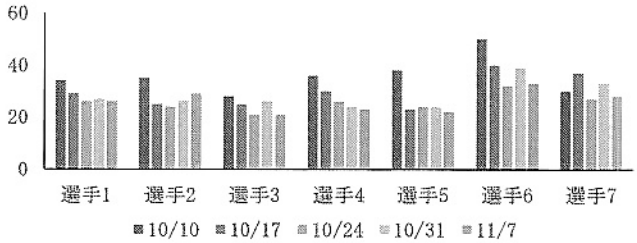


Figure 2　TAIS（状態不安）の結果

Table 2　DIPCA の結果

		競技意欲	精神の安定・集中	自信	作戦能力	協調性
選手 1	7月19日	71	45	26	27	19
	11月14日	72	48	29	28	20
選手 2	7月19日	72	45	35	34	20
	11月14日	72	48	29	29	20
選手 3	7月19日	69	44	31	32	20
	11月14日	62	48	27	27	16
選手 4	7月19日	73	34	28	23	20
	11月14日	63	40	20	23	20
選手 5	7月19日	70	29	24	27	20
	11月14日	68	39	27	30	20
選手 6	7月19日	68	45	31	29	20
	11月14日	69	44	27	30	20
選手 7	7月19日	69	30	30	29	20
	11月14日	58	44	17	20	15

【参考文献】

新里知佳野・古澤伸晃・八木沢誠・軽部幸浩・藤田主一（2020）剣道選手における心理構造とその応用―（1）女子剣道部員の特徴について ―．応用心理学研究（日本応用心理学会大会発表代替論文集）．47.

新里知佳野・古澤伸晃・八木沢誠・軽部幸浩・藤田主一（2021）剣道に関するイメージ構造の分析的研究― 剣道部学生と一般学生との比較 ―．応用心理学研究，47（1），1-11.

（しんざとちかの・ふるさわのぶあき・やぎさわまこと他）

球技スポーツ選手における非共同性眼球運動の特徴

○國部雅大[1]　小松佳弘[2]
([1]筑波大学体育系 [2]筑波大学大学院人間総合科学学術院)

キーワード：輻輳，開散，斜位，野球，サッカー

【目的】

球技スポーツの場面では，空間内で様々な距離に位置する対象物を素早く認識することが求められる。球技スポーツ選手の運動技能には両眼視機能が重要な役割を有する可能性が検討されていることから（Zwierko et al., 2015），「斜位」や「両眼眼球運動」も貢献していることが想定される。

斜位は隠れ斜視ともよばれ，潜在的な眼位ずれ（両眼での注視時には眼位ずれはないが，片眼を遮蔽すると眼位ずれが起こる状態）のことを指す。斜位の種類には，水平斜位（内斜位，外斜位）と上下斜位があり，多くの人はいずれかの斜位を有している。斜位の程度が大きくなると，適応の限界（水平方向は±2.0△，上下方向は±0.5△）を超え（丸尾ほか, 2011），複視を誘発するとされている。しかし，屈折異常の測定に比べて斜位の測定は重要視されておらず，スポーツと視知覚の研究では斜位を考慮した検討が不十分である。

両眼眼球運動は，左右両眼が同方向に動く共同性眼球運動と，逆方向に動く非共同性眼球運動に分類される。球技スポーツ選手を対象にした研究の多くでは共同性眼球運動を対象に測定が行われてきた。非共同性両眼眼球運動を測定した研究もみられるが（國部ほか, 2020），斜位の種類や程度と非共同性眼球運動の関係については検討がなされていない。

以上から本研究では，球技スポーツ選手を対象に，奥行き方向への注視移動を行う際の非共同性眼球運動（輻輳開散運動）の特徴と斜位との関係を検討することを目的とした。

【方法】

参加者は，大学硬式野球選手 24 名（19.8±1.2 歳）および大学サッカー選手 24 名（20.2±1.4 歳）であった。

まず，各参加者の斜位の測定に関しては，ヴィズスクリーン（カール・ツァイス社製）と偏光板（オクルス社製）を用いて，ポラテスト法により斜位の種類（水平斜位/上下斜位）と程度を測定した。斜位の程度については，水平斜位は 0.5～2△を適応範囲内，2.5△～を適応範囲外に分類し，上下斜位は 0.5△を適応範囲内，1.0△～を適応範囲外に分類した。

続いて，両眼眼球運動の測定を行った。参加者は椅子に座り，頭部位置を固定した状態で準備した。そして，両眼中央から 20cm と 58cm の距離に両眼と同じ高さで設置された，2 秒毎に交互に点灯する 2 つの LED に対して素早い注視移動を行った。各参加者は奥から手前への注視移動（輻輳眼球運動）と手前から奥への注視移動（開散眼球運動）を各 10 試行行った。眼電図により左右各眼の水平方向成分を個別に測定し，輻輳開散運動を記録した。

【結果】

斜位に関して，水平斜位を有する者の割合や程度は野球選手とサッカー選手の間で差がみられなかった（Figure 1a）。一方，上下斜位を有する者の割合は野球選手がサッカー選手に比べて小さく，また斜位の程度も小さかった（Figure 1b）。

両眼眼球運動に関して，輻輳は開散よりピーク速度値が高かった。また，上下斜位を有する選手は有しない選手に比べて，非共同性眼球運動における左右の眼球運動の時間パラメータに非対称性がみられ，不安定な眼球運動が観察された（Figure 2）。

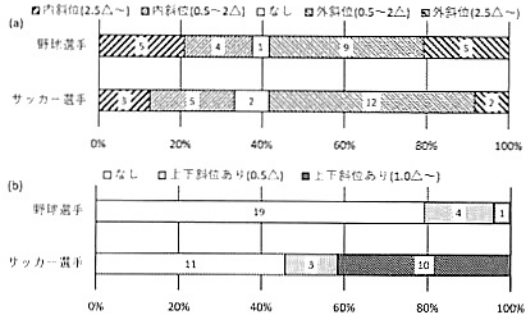


Figure 1　斜位の種類と程度（a）水平斜位（b）上下斜位

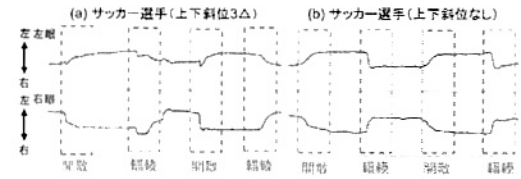


Figure 2　非共同性眼球運動（輻輳・開散）の典型例
（a）上下斜位を有する選手（b）上下斜位を有しない選手

【考察】

輻輳が開散よりも速度が大きいことは先行研究（國部ほか, 2020; Yang & Kapoula, 2004）の結果と類似しており，野球選手やサッカー選手においても奥より手前方向への注視移動が速いことを示唆している。

上下斜位のある者はない者に比べ，非共同性眼球運動において左右の眼球運動が非対称であったことから，上下斜位の程度が小さい球技スポーツ選手は，奥行き方向の注視移動を素早く安定して行える可能性が考えられる。また野球選手は手元に接近する速いボールの追従が求められるため，上下斜位が運動遂行時の重要な要因となる可能性が推察される。

本研究の結果から，球技スポーツ選手において，上下斜位が非共同性眼球運動の対称性と関連する可能性が示された。本研究の応用面として，スポーツ選手の両眼眼球運動と斜位を測定することにより，各選手のもつ空間知覚能力の特徴の一端を把握できる可能性が考えられる。今後は両眼眼球運動の非対称性と運動技能との関係を検討することが課題である。

【引用文献】

國部 雅大・東 亜弓・村上 なおみ・荒木 雅信 (2020). 大学バスケットボール選手における輻輳開散運動の潜時と速度に関する実験的研究，大阪体育学研究, 58, 1-12.

丸尾 敏夫・久保田 伸枝・深井 小久子 (2011). 視能学 第 2 版，文光堂, p.142.

Yang, Q., & Kapoula, Z. (2004). Saccade-vergence dynamics and interaction in children and in adults. *Experimental Brain Research*, 156(2), 212-223.

Zwierko, T., Puchalska-Niedbal, L., Krzepota, J., Markiewicz, M., Wozniak, J., & Lubinski, W. (2015). The Effects of Sports Vision Training on Binocular Vision Function in Female University Athletes. *Journal of Human Kinetics*, 49, 287-296.

（こくぶ まさひろ・こまつ よしひろ）

日体大版剣道イメージ尺度（NIKS）の作成（2）

― 抽出因子を探る ―

○古澤伸晃[1]　新里知佳野[1]　八木沢誠[1]　軽部幸浩[2]　藤田主一[1]
（[1]日本体育大学　[2]湘南医療大学）

キーワード：剣道　イメージ　NIKS

【目的】

我々はこれまでに、剣道イメージについて研究（古澤他2021a.2021b）を進め、その知見をもとに剣道イメージ構造を明らかにしてきた。さらに、研究を進める過程で、剣道を「習う者」「指導する者」の心理的構造を測定するために、日体大版の剣道に対するイメージ尺度（NITTAIDAI Image of KENDO Scale；NIKS）を新しく作成した。本研究では、前報に続いて調査対象者を広げることでNIKSの妥当性を確認することを目的とする。

【方法】

1.調査対象者　調査は、関東の剣道有力7大学の1年生から4年生を対象として2021年10～11月に実施した。調査対象者は、合計418名（平均年齢19.9歳）、男子282名（平均年齢20.0歳、SD=1.23）、女子136名（平均年齢19.8歳、SD=1.24）であった。

2.調査内容　質問用紙（A4用紙1枚）は、フェイスシート（学年、年齢、性別、剣道経験、スポーツ歴）に続き、調査は72項目の質問について、回答方法を4件法（4非常にそう思う,3そう思う,2そう思わない,1まったくそう思わない）とし、実施した。

3.手続き　調査への協力依頼は、「以下の質問内容を読んで、あなたがどう感じたかを答えてください。そう思った回答のところに○印をつけてください。正しい答えや、間違った答えはありませんので、気軽に思ったところを回答してください。」のように教示し同意を得て進められた。

4.倫理的配慮　調査の実施等については、日本体育大学倫理審査委員会へ、「人を対象とする研究倫理審査申請・研究計画書（研究課題名:剣道イメージの構造に関する分析的研究）」ならびに「説明書」「同意書」を提出し、審査の結果、承認された（承認番号020-H172）。

【結果と考察】

1. NIKSを構成する因子　調査結果を因子分析したところ、剣道に対するイメージは、5因子（KENDO）で構成されることが明らかになった（Table 1）。因子Ⅰは、「剣道は礼儀作法が身に付く武道である」などの10項目から構成されているので「知識（Knowledge）」と解釈した（α=0.897）。因子Ⅱは、「剣道は冬に稽古をするのはやめたほうがよい」などの5項目で「剣道の否定的見方（Negative）」と解釈した（α=0.845）。因子Ⅲは、「剣道は合宿で鍛えることが大切である」などの4項目で「剣道の本来の姿（Originally）」と解釈した（α=0.530）。因子Ⅳは、「剣道は相手と打突し合う武道である」などの4項目で「剣道の伝統と文化の継承（Education）」と解釈した（α=0.705）。因子Ⅴは、「剣道は冬に床が冷たく足が痛い」などの2項目で「身体的な不快（Discomfort）」と解釈した（α=0.712）。NIKS（全25項目）の信頼性係数は0.991であった。

2.今後の課題　NIKSの標準化を目指し、剣道部員以外の生徒・学生（武道必修化にともなう剣道授業経験者も含む）を対象にして同様の調査を行い、本研究から得られた5因子が安定するか否かについて検討したいと考えている。

【参考文献】

古澤伸晃・新里知佳野・八木沢誠・軽部幸浩・藤田主一（2021a）武道必修化に伴う中学生の剣道イメージに関する研究．応用心理学研究，46(3), 234-246.

古澤伸晃・新里知佳野・八木沢誠・軽部幸浩・藤田主一（2021b）日体大版剣道イメージ尺度（NIKS）の作成（1）―研究目的と予備的調査について―．日本応用心理学会第87回大会発表論文集，80.

（ふるさわのぶあき・しんざとちかの・やぎさわまこと他）

Table 1　因子分析の結果

		回転後の因子パターン（標準化回帰係数）				
	質問内容	Factor1	Factor2	Factor3	Factor4	Factor5
1	剣道は礼儀作法が身に付く武道である。	**0.90**	0.01	-0.06	-0.07	-0.06
2	剣道は人間形成を目指す武道である。	**0.88**	0.03	-0.09	0.00	-0.09
3	剣道は相手を敬う心を養う武道である。	**0.80**	0.08	-0.10	0.05	-0.08
4	剣道は礼儀が身に付くようになる。	**0.76**	0.03	0.11	-0.01	0.01
5	剣道は心身を鍛錬する武道である。	**0.76**	-0.07	0.11	-0.13	0.04
6	剣道は礼節を重んじる武道である。	**0.74**	-0.04	-0.23	0.14	-0.05
7	剣道は負けた相手を思いやる武道である。	**0.69**	0.10	0.12	-0.04	0.03
8	剣道は子どもから高齢者まで楽しめる武道である。	**0.66**	-0.14	0.05	-0.02	0.21
9	剣道は怪我予防のためにウォーミングアップが大切である。	**0.63**	-0.12	0.15	-0.19	0.32
10	剣道は挨拶ができるようになる。	**0.60**	-0.08	0.18	0.21	0.08
11	剣道は冬に稽古をするのはやめたほうがよい。	0.02	**0.84**	-0.02	0.02	-0.01
12	剣道は夏に稽古をするのはやめたほうがよい。	-0.01	**0.80**	-0.06	-0.07	0.16
13	剣道は無駄に声を出す武道である。	0.03	**0.73**	0.15	-0.03	-0.04
14	剣道は発声がうるさい武道である。	0.06	**0.72**	-0.01	-0.04	0.21
15	剣道は冬は寒く夏は暑いので子どもたちには向かない。	0.00	**0.69**	0.11	-0.09	-0.04
16	剣道は合宿で鍛えることが大切である。	0.04	-0.05	**0.69**	-0.03	-0.11
17	剣道は比較的危険が少ない競技である。	-0.03	0.29	**0.64**	-0.06	-0.25
18	剣道は自分の意思表示ができるようになる。	0.22	0.07	**0.62**	0.02	-0.17
19	剣道は剣道着・袴姿がかっこいい。	0.14	-0.29	**0.61**	-0.04	0.23
20	剣道は相手と打突し合う武道である。	-0.15	-0.05	0.01	**0.78**	0.13
21	剣道は日本を代表する武道である。	0.29	-0.09	-0.07	**0.67**	-0.01
22	剣道はもっと世界に広めるべきである。	0.23	-0.03	0.05	**0.64**	-0.09
23	剣道は子どものころから習うほど成長できる武道である。	-0.07	0.07	0.07	**0.62**	0.06
24	剣道は冬に床が冷たく足が痛い。	0.08	0.17	-0.09	-0.01	**0.77**
25	剣道は裸足なので足が冷たい。	0.03	0.14	-0.08	0.11	**0.77**

修士課程進学における個人内要因としての知的好奇心・GRIT・批判的思考態度

―私立工科系大学修士課程進学者と非進学者の比較による検討―

○石田拓矢[1]　庄司正実[2]
([1]目白大学大学院心理学研究科　[2]目白大学心理学部)

キーワード：修士課程進学・個人内要因・工科系大学

【目的】

私立工科系大学は一部の大学を除いて，学部学生の修士課程への進学促進が喫緊の課題となっている（石田・庄司，2022a）。石田・庄司（2022b）は私立工科系大学大学院修士課程学生の修士課程進学における「個人内要因」をインタビュー調査により質的に検討し，「知的好奇心」が高いこと，「GRIT」が高いこと，「批判的思考」をしようとすることが修士課程進学者の「個人内要因」であることが示唆された。

本研究では，研究1として私立工科系大学を卒業予定の修士課程進学予定者と非進学予定者の「知的好奇心」，「GRIT」および「批判的思考態度」を比較し，修士課程進学における個人内要因であるかを明らかにすることを目的とする。研究2として私立工科系大学を卒業予定の修士課程進学予定者を修士課程進学決定時期による分類を行い，「知的好奇心」，「GRIT」，「批判的思考態度」および「進学動機」，「結果期待」，「影響要因」を比較して，修士課程進学のメカニズムを探索的に検討することを目的とする。

【方法（研究1）】

調査協力者は2020年3月および2022年3月に私立工科系大学卒業予定の修士課程進学予定者133名（男性112名，女性21名）および非進学予定者74名（男性58名，女性16名）を合わせた207名（男性170名，女性37名，平均年齢22.4歳（SD=1.04））であった。調査項目は知的好奇心尺度12項目（西川・雨宮；2015），日本語版グリット尺度12項目（竹橋・樋口・尾崎・渡辺・豊沢；2019），批判的思考態度尺度32項目（平山・楠見；2004）であった。

【結果（研究1）】

Table1 知的好奇心，GRITおよび批判的思考態度の相関分析

	拡散的知的好奇心	特殊的知的好奇心	努力の粘り強さ	興味の一貫性	論理的思考への自覚	探求心	客観性・証拠の重視
拡散的知的好奇心	-	.468***	.350***	-.183**	.387***	.716***	.383***
特殊的知的好奇心	-	-	.382***	-.051	.301***	.317***	.363***
努力の粘り強さ	-	-	-	.302***	.625***	.254***	.276***
興味の一貫性	-	-	-	-	.321***	-.211**	.011
論理的思考への自覚	-	-	-	-	-	.264***	.434***
探求心	-	-	-	-	-	-	.495***
客観性・証拠の重視	-	-	-	-	-	-	-

*P<.05，**P<.01，***P<.001

Table2 進学者と非進学者の平均値とSDおよびt検定の結果

	進学者		非進学者		
	平均	SD	平均	SD	t値
拡散的知的好奇心	3.74	.68	3.41	.74	3.23***
特殊的知的好奇心	3.88	.59	3.61	.73	2.89**
興味の一貫性	2.52	.64	2.59	.60	1.27
努力の粘り強さ	3.37	.63	3.25	.68	.78
論理的思考への自覚	3.22	.53	3.14	.61	1.00
探求心	3.88	.58	3.64	.64	2.72**
客観性・証拠の重視	3.77	.47	3.58	.52	2.63**

P<.01，*P<.001

【考察（研究1）】

知的好奇心，特に拡散的知的好奇心が高いことが修士課程進学における個人内要因であると考えられる，GRITは修士課程進学における個人内要因とはいえなかった。さまざまな情報を求めようとする態度や客観的に考えようとし，適切な証拠を求めてそれに基づき判断しようとする批判的思考態度を持っていることが，修士課程進学における個人内要因であると考えられる。

【方法（研究2）】

調査協力者は2022年3月に私立工科系大学卒業予定の修士課程進学予定者78名（男性62名，女性15名，不明1名，平均年齢22.0歳（SD=.70））であった。調査項目は研究1で調査した項目に加え，「進学動機」，「結果期待」および「影響要因」については，石田・庄司（2022a）を基に項目を設定した。

【結果（研究2）】

Table3 進学決定時期別の知的好奇心・GRIT・批判的思考態度の平均値とSDおよび分散分析の結果

	1．早期決定者(n=26)		2．三年次決定者(n=32)		3．四年次決定者(n=43)			
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	F値	多重比較
拡散的知的好奇心	3.72	.73	3.49	.72	3.57	.67	.74	
特殊的知的好奇心	3.95	.58	3.60	.68	3.78	.59	2.12	
興味の一貫性	2.42	.70	2.58	.75	2.59	.58	.44	
努力の粘り強さ	3.37	.63	3.13	.81	3.37	.53	1.09	
論理的思考への自覚	3.25	.45	2.93	.69	3.20	.39	2.74*	1 > 2
探求心	3.78	.64	3.77	.60	3.90	.62	.31	
客観性・証拠の重視	3.95	.43	3.62	.63	3.74	.50	2.47*	1 > 2

+P<.10，*P<.05，**P<.01，***P<.001

三年次決定者の「研究活動／研究指導教員」の影響は，他群ほどではなかったが3.93と高かった。四年次決定者は「就職活動」の影響が3.90と他群よりも高かった。

【考察（研究2）】

「知的好奇心」が高い早期決定者は，低学年時から研究に興味があると思われることから，早期から研究室の研究に触れる機会を設けることが必要である。三年次決定者のように「知的好奇心」や「批判的思考態度」がそれほど高くない学生でも，大学卒業後の進路を考える時期に研究指導教員から研究の面白さなどを伝えることで修士課程への進学促進に繋がると考えられる。四年次決定者のように「知的好奇心」や「批判的思考態度」が高いが就職を考えている学生に対しては，修士課程に進学して知識・技術を身に付けてからの方が希望する進路に進む可能性が高いことを伝えることが，修士課程への進学促進に繋がると考えられる。

【主な引用文献】

石田拓矢・庄司正美（2022a）．工科系修士課程進学者の個人内要因 ―高度専門技術者養成を目的とした私立大学におけるインタビュー調査― 応用心理学研究，48(1)，22-32.
石田拓矢・庄司正美（2022b）．工科系修士課程進学者の個人内要因―高度専門技術者養成を目的とした私立大学におけるインタビュー調査― 日本教育心理学会大会発表論文集，64，17.

(いしだ たくや・しょうじ まさみ)

中学生の道徳性の発達についての研究

○大門耕平[1]　来田宣幸[2]

([1]東北学院大学文学部　[2]京都工芸繊維大学)

キーワード：道徳教育、道徳性の発達的傾向、幼児教育、宗教教育

【目的】2019年度より中学校教育において、「特別の教科道徳」が実施されることとなり、文部科学省は、道徳科における評価の意義において、「生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある。」と提言した。しかし、道徳性の発達的傾向を測定する尺度やその傾向を示した研究は多くなされてない。筆者は、「中学校期における道徳性の発達的傾向を測定する尺度の開発」を実施し、道徳教育（宗教教育）によって中学生の道徳性の発達について可視化することに取り組んできている。しかし、この尺度には、他尺度との関連性が示せていないという課題がある。そこで、この研究では、中学校期における道徳性の発達的傾向を測定する尺度を用いて、他尺度との関連性を明らかにすることにより、妥当性が認められることを確認し、尺度を用いて中学生の道徳性の発達的傾向を示すことを目的とした。また、中学生の道徳性と宗教教育の関連を調べるため、宗教教育の経験の有無が中学生の道徳性の発達にどのような影響を与えているか調査した。宗教教育の有無については、幼児教育における私立学校の割合が、小学校・中学校と比較して多いことに着目し、幼児教育における宗教教育の有無を被験者間要因とした分析をおこなった。

【方法】

1.参加者：近畿圏にある中学校2校を対象とした。参加生徒は、699名であり、男子302名、女子381名、無回答16名であった。また、宗教教育の経験については、経験あり230名、経験なし469名であり、宗教教育経験者は全体の32.9%であった。宗教の系列については、キリスト教系61.7%、仏教系36.0%、神道系1.0%であった。

2.調査内容：中学校期における道徳性の発達的傾向を測定する尺度、ソーシャルスキル尺度、自己肯定感尺度、宗教教育の経験の有無（幼児教育）について調査を実施し、分析をおこなった。

【結果】

1.道徳性の発達的傾向を示す尺度と他尺度との関連

	ソーシャルスキル	自己肯定感
自然や生命、崇高なものとの関わりに関する肯定的な意識	0.18 **	0.21 **
自分自身に関する肯定的な意識	0.22 **	0.41 **
人との関わりに関する否定的な意識	-0.28 **	-0.20 **
自然や生命、崇高なものとの関わりに関する否定的な意識	-0.10 *	-0.08 *
集団や社会との関わりに関する肯定的な意識	0.33 **	0.22 **
ソーシャルスキル		0.42 **

*p<.05, **p<.01

中学校期における道徳性の発達的傾向を測定する尺度の妥当性を検討するため、ソーシャルスキル尺度、自己肯定感尺度との相関係数を算出した。その結果、5つの下位尺度のすべてがソーシャルスキル尺度、自己肯定感尺度と有意な相関であることが示された。

2.中学生期の道徳性の発達傾向（学年差）

	1年生	2年生	3年生	
	AV ± SD	AV ± SD	AV ± SD	多重比較
1.自然や生命、崇高なものとの関わりに関する肯定的な意識	4.61 ± 1.21	4.29 ± 1.41	4.20 ± 1.38	1年>2年,3年
2.自分自身に関する肯定的な意識	5.02 ± 0.80	4.76 ± 1.04	4.75 ± 0.86	1年>2年,3年
3.人との関わりに関する否定的な意識	4.03 ± 1.30	4.05 ± 1.38	4.01 ± 1.31	
4.自然や生命、崇高なものとの関わりに関する否定的な意識	3.68 ± 1.16	3.87 ± 1.15	3.84 ± 1.10	
5.集団や社会との関わりに関する肯定的な意識	5.20 ± 1.23	5.19 ± 1.27	5.29 ± 1.01	
6.ソーシャルスキル	3.35 ± 0.78	3.47 ± 0.79	3.63 ± 0.94	3年>1年
7.自己肯定感	3.26 ± 1.01	3.24 ± 1.05	3.51 ± 1.13	

*p<.05, **p<.01

中学校期における道徳性の発達的傾向について、学年による差を分析するため、学年を被験者間因子とする1要因分散分析をおこない、有意な主効果がみられたので、多重比較をおこなった。その結果、「自然や生命、崇高なるものとのかかわりに関する肯定的な意識」および「自分自身に関する肯定的ない意識」については、1年生が2年生、3年生と比較して、有意に高い値であることが示された。また、ソーシャルスキルについては、3年生が1年生と比較して有意に高い値であることが示された。

3.中学生期の道徳性の発達傾向（男女差）

	男子	女子	t検定
	AV ± SD	AV ± SD	
1.自然や生命、崇高なものとの関わりに関する肯定的な意識	4.37 ± 1.38	4.61 ± 1.20	女子>男子
2.自分自身に関する肯定的な意識	4.93 ± 0.91	4.94 ± 0.83	
3.人との関わりに関する否定的な意識	4.26 ± 1.33	3.81 ± 1.27	男子>女子
4.自然や生命、崇高なものとの関わりに関する否定的な意識	3.74 ± 1.24	3.72 ± 1.07	
5.集団や社会との関わりに関する肯定的な意識	5.14 ± 1.27	5.29 ± 1.13	
6.ソーシャルスキル	3.39 0.84	3.45 0.81	
7.自己肯定感	3.37 1.06	3.25 1.04	

*p<.05, **p<.01

中学校期における道徳性の発達的傾向について、性別による差を分析するため、性別を被験者間因子とするt検定をおこなった。その結果、「自然や生命、崇高なるものとのかかわりに関する肯定的な意識」においては、女子が男子と比較して高い値であり、「人との関わりに関する否定的な意識」においては、男子が女子と比較して有意に高い値であった。

4.幼児教育における宗教教育と道徳性

	経験あり	経験なし	
	AV ± SD	AV ± SD	
1.自然や生命、崇高なものとの関わりに関する肯定的な意識	4.63 ± 1.19	4.40 ± 1.35	*
2.自分自身に関する肯定的な意識	5.02 ± 0.82	4.86 ± 0.90	*
3.人との関わりに関する否定的な意識	3.99 ± 1.33	4.05 ± 1.31	
4.自然や生命、崇高なものとの関わりに関する否定的な意識	3.69 ± 1.17	3.77 ± 1.14	
5.集団や社会との関わりに関する肯定的な意識	5.20 ± 1.27	5.22 ± 1.17	

*p<.05, **p<.01

幼児教育における宗教教育を受けた経験の有無を被験者間要因とするt検定を実施した結果、「自然や生命、崇高なものとのかかわりに関する肯定的な意識」および「自分自身に関する肯定的な意識」において、幼児教育における宗教教育を受けた経験のある生徒が、ない生徒と比較して、有意に高い値であった。

【考察】中学校期における道徳性の発達的傾向を測定する尺度が、ソーシャルスキル尺度、自己肯定感尺度と有意な相関であることを示すことができた。このことから、中学生の道徳性の発達的傾向を示すうえで、この尺度に一定の妥当性があることができたと判断し、道徳性を測定する尺度を用いて、学年差、性別差について検討をした結果、学年差においては、「自然や生命」および「自分自身」に関する意識は、学年が上がると低下する傾向が示され、道徳（宗教）教育の重要性を示すことができた。また、幼児教育において宗教教育を受けた生徒が、受けていない生徒と比較して2項目で有意に高い値であることが示され、幼児教育における宗教教育が中学生の道徳性に影響を与えることが明らかとなった。

【引用文献】

大門耕平　宇田川千帆 2022「中学校期における道徳性の発達的傾向を測定する尺度の開発」「宗教と社会」学会機関紙　第28号,pp.17-31

Rosenberg, M. (1965) Society and the adolescent self-image. Princeton, NJ: Princeton University Press

菊池章夫、「Social Skill 尺度の作成」、『東北心理学研究38号』、東北心理学会、1998、67-68

（おおかど　こうへい・きだ　のりゆき）

レジリエンスが大学生の自己困難認知に及ぼす影響

○中山隼登[1]　宮里翔大[2]　山村　豊[1]

([1]帝京大学　[2]桜美林大学)

キーワード：レジリエンス、自己困難認知、発達障害

【問題】

レジリエンスとは、American Psychological Association (2020)によると「逆境、心的外傷、悲劇、脅威、あるいは家族や人間関係の諸問題、深刻な健康問題、職場や経済的なストレス要因から派生した重大なストレスに直面したときに、それにうまく適応する過程」としており、ネガティブなことから回復、適応する特性である。そのネガティブな出来事として、大学生の学生生活における困難が挙げられる。大学等では、学生に対して発達障害への支援が行われているが、発達障害の自覚はなくとも、何らかの修学に関する困難さや身体的・精神的な辛さを感じている学生も多いと指摘されている(佐藤・相澤・郷間,2012)。

【目的】

本研究では、レジリエンスに着目し、大学生におけるレジリエンス要因が、学生生活の中で大学生が認知した困難にどのような影響を及ぼすかを検討する。

【方法】

調査対象者　関東圏内の大学生329名（男性183名、女性145名、その他1名)、平均年齢19.73歳±1.24であった。

実施時期・場所　2022年4月から6月にかけて関東圏内の大学の複数の授業にて実施した。

質問項目　レジリエンスについては、平野（2010）がレジリエンスを構成する要因を、Cloningerの気質―性格理論をもとに資質的と獲得的に分類したのち作成した「二次元レジリエンス要因尺度」(「よくあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの5件法）の21項目を使用した。また、自己困難認知については、佐藤・相澤・郷間（2012）の発達障害のある学生が示すと考えられる困難さの項目を用いて、学生の困難さの自己認知に関する構造を明らかにするために作成した、「自己困難認知尺度」(「よくある」から「ない」までの4件法）の31項目を使用した。

手続き　調査対象者に、収集したデータの使用用途を説明し、承諾を得た上で、Google Formで作成した質問紙に回答を求めた。

【結果】

二次元レジリエンス要因尺度の21項目について、最尤法・プロマックス回転による因子分析を行い、さらに因子負荷量が低い項目を除いて、再度、同様に因子分析を行ったところ、第1因子「社交性」(3項目)、第2因子「行動力」(4項目)、第3因子「楽観性」(3項目)、第4因子「問題解決志向」(3項目）の4因子が抽出された。

さらに、自己困難認知尺度の31項目について、最尤法・プロマックス回転による因子分析を行い、さらに因子負荷量が低い項目を除いて、再度、同様に因子分析を行ったところ、第1因子「不安・抑うつ」(5項目)、第2因子「修学上の困難」(7項目)、第3因子「計画困難」(4項目)、第4因子「対人関係困難」(3項目)、第5因子「感覚困難」(3項目)、第6因子「不注意」(3項目)、第7因子「衝動性」(3項目）の7因子が抽出された。

つぎに、レジリエンスが大学生活における困難さの自己認知に及ぼす影響を検討するため、「二次元レジリエンス要因尺度」の下位尺度得点を説明変数、「自己困難認知尺度」の下位尺度得点のそれぞれを目的変数とする強制投入法による重回帰分析をおこなった。その結果、Figure1に示すように、「社交性」は「修学上の困難」と「対人関係困難」を有意に弱め、「楽観性」は「不注意」を有意に高めることが示された。また、「社交性」は「計画困難」と「感覚困難」を、「行動力」は「対人関係困難」をそれぞれ有意に弱める傾向が示され、「楽観性」は「対人関係困難」を有意に高める傾向が示された。このことはレジリエンスを構成する要因の一部が大学生の学生生活における困難に影響を及ぼすことを示している。

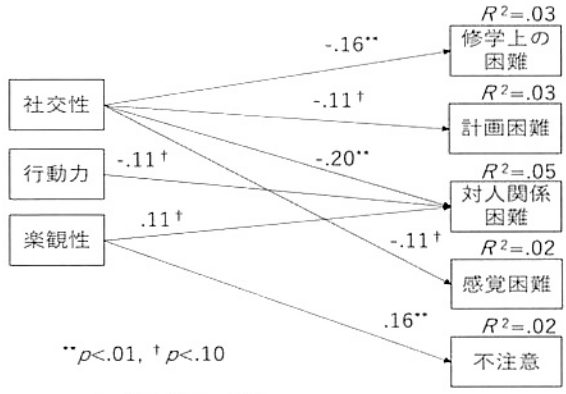


Figure1　重回帰分析の結果

【考察】

本研究の結果、「楽観性」を除くレジリエンス要因である「社交性」と「行動力」が自己困難認知に負の影響を与え、これを和らげる傾向があることが示された。レジリエンスは精神的な健康に寄与する(石毛・無藤,2006)ことから、健康的に回復・適応した心理状態が学生生活における問題を大きな困難と捉えにくくさせると示唆される。

【引用文献】

American Psychological Association. (2020). Buildingyour resilience. Washington. DC: American Psychological Association. Retrieved from https://www.apa.or-g/topics/resilience(November 25, 2020)

平野 真理 (2010). レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み－二次元レジリエンス要因尺度(BRS)の作成 パーソナリティ研究, 19, 94-106.

石毛 緑・無藤 隆 (2006). 中学生のレジリエンスとパーソナリティとの関連 パーソナリティ研究, 14, 266-280

佐藤 克敏・相澤 雅文・郷間 英世 (2012). 大学生における自己困難認知尺度の開発の試み－発達障害との関連から－　LD研究, 21(1), 125-133.

(なかやまはやと・みやざとしょうた・やまむらゆたか)

自己信頼性の育ちを大切にした教育の意義と可能性

―幼児期・児童期の自閉症の子どもたちへの実践を通して―

○塚田 直也[1]・田中 真介[2]

（1筑波大学附属視覚特別支援学校　2京都大学国際高等教育院）

キーワード：幼児期・児童期の発達、自己信頼性、自閉症、療育実践、特別支援教育

【問題提起】自閉症の療育・教育では、行動面での特異性に対応し、より適切な行動への変容を意図した実践が試みられてきた。しかし、子どもたちは、多様な「抵抗的行動」を通して発達への切実な願いを伝えようとしており、その「言葉にならない言葉」を受けとめた新たな教育的援助の方法を検討する必要があると考えた。

本研究では、新たな視点として、自他を価値づけ尊重する発達的力量としての「自己信頼性」の生成発展に着目した。特別支援学校での自閉症教育の実践研究を通して、自己信頼性を育む教育の意義と可能性を検証し、自閉症のある幼児・児童への具体的な教育方法を考察する。

【対象と方法】K特別支援学校に在籍する自閉症児3名、A児（生活年齢CA 3:1、発達年齢DA 1:7）、B児（CA 6:8、DA 1:9）、C児（CA 11:1、DA 5:8）を対象として、自己信頼性に焦点をあてた教育方法を検討し実践研究を行った。1年間の実践記録をもとに発達過程を分析した。自己信頼性の発達水準が異なる3名への実践内容を相互に比較し、どのような教育方法が自己信頼性の生成と充実を支えたかを検討した。A児とC児には新版K式発達検査2001、B児には自閉症児・発達障害児教育診断検査3訂版（PEP-3）を実施した。

【結果】（1）A児（指導期間 CA 3:1～4:1、幼稚部年少組）

1）教育目標：学校や家庭で気持ちを言葉で表現できず、を壊したり、人をたたいたりして自己表現する傾向があった。物を壊す、母親や身近な教師との関係性の構築が難しかった。

A児は**「自我の誕生期」**にあり、自分や対象の価値を実感する力への援助を求めているとみて、大人と共に過ごす心地よさや楽しさを味わえるよう配慮した。

2）指導経過：教師はA児が相手を嫌がらずに受け入れる距離から見守り、物を壊すような場面でもA児の行為を受けとめて「いっぱい、たたいたね」等と意味づけて共感的に関わった。また、遊び場面でA児の発語や笑顔などの表情を模倣し、本人が自分自身の気持ちを鏡に映すようにして理解できるよう援助した。併せて、家庭を訪問し、母親の子育ての苦悩を聴き取り、A児の育ちや関わり方を共有した。

3）教育成果：A児は、身近な教師に微笑みかけたり、自分が持っていた玩具を手渡したり、教師や母親に抱きつくようになった。また、身近な教師の言葉をまねて様々な声を表出したり、見立て遊びを楽しんだりするなど、人や物との関わりや自己表現ができ始め、物を壊すことはなくなった。

（2）B児（指導期間 CA6:8～7:8、小学部1年生）

1）教育目標：アニメの登場人物の動きやせりふを再現することが好きで、よく遊べていた。しかし教師が関与して働きかけると、「いやなの！」と大声を出したり、物を投げたりして強い拒否を示すことが多かった。

B児は**「自我の拡大期」**にあり、自他関係を捉え、自分の力をしっかりと発揮することに援助を求めていた。相手に合わせてもらう心地よさを感じ、人や物との交流を通して、もてる力を密度高く柔軟に発揮できるよう教育内容を組織した。

2）指導経過：B児の表現を笑顔で受けとめ、追いかけっこや絵本の読み聞かせなど、本児の好きな遊び方で関わった。また、健康診断などの場面を生かして、B児自身が活動内容を理解して意欲的に参加できるように、教師が実演する映像を見せるなど、事前学習に取り組んだ。

3）教育成果：B児は「もう一回」と遊びの継続を要望し、自ら教師と新しい活動に取り組もうとするようになった。また、好きな歌やリズム、絵本など「社会的な価値」のある教材を介して関わった。その結果、拒否の表現は減っていき、友達や教師とリズムに合わせて楽器を鳴らすなど、もてる力を発揮して多彩な自己表現ができるようになった。

（3）C児（指導期間 CA11:1～12:1、小学部6年生）

1）教育目標：自分の思いや願い、特に自分の嫌なことを率直に表現できず、給食が食べられなくなったり、自分の体をたたいたりして、いら立ちや気持ちの揺れを表していた。

C児は、**「自励心・自制心の形成期」**にあり、多彩な視点で自己を認識し、自分を励ます力への援助を求めているとみて、友達や教師とのやり取りを通して多彩な価値観や表現に触れ、のびのびと気持ちを表現できる教育内容を準備した。

2）指導経過：教師自身の嫌なことをC児に率直に語ることで、徐々に「先生、～嫌い」と言って微笑むようになった。また、教師やC児の嫌なことを歌詞にした「嫌いの歌」づくりなど、自分のネガティブな気持ちを率直に表現し、受けとめてもらえることを実感させる指導を試みた。

3）教育成果：「給食、嫌いだ」と嫌なことを歌詞にして歌うことで、気持ちを整え、穏やかに食事をしたり、「疲れたから保健室で休みたい」と気持ちを伝えて休息したりするなど、自励心・自制心が育ち、多彩な自己表現ができ始めた。

【考察】各対象児の自我・自己信頼性の発達段階に焦点をあわせた教育を通して、人や物との関わり、自己表現が豊かになり、破壊や拒否などのネガティブな行動も減少した。

1）臨床的援助の観点：①子どもの行為を模倣して共感的に関わった。子どもたちは、自分の行為の意味と価値を実感でき、自我を誕生・回復させて自己信頼性を育み始めた。

②保護者の思いを受けとめ、家族の生活実態に合わせて子育てを援助した。保護者は、自分の悩みや弱さ、孤独さなどの内面を援助者に語るようになった。語ることは、保護者の自己信頼性を高め、援助を求める社会的交流性を豊かにした。

2）発達的援助の観点：①自我の誕生期（DA10か月～2歳）：自分を発見し、人や物とのつながりの中で「～ではなく○○だ」と柔軟に自己や対象を操作する力が芽生える段階である。援助者が子どもの行為を意味づけ、気持ちを鏡に照らすように共感的に受けとめることで大人への愛着が形成され、対象の価値を実感して遊びが多彩に展開され始めた。

②自我の拡大期（DA1歳半ば～3歳代）：自分の力を様々な場で発揮し、自分や対象を尊重する力が育まれる段階である。絵本や音楽など、社会的な価値を大人と共有したことで、分かる世界が拡がり、多彩な自我をもつ自我が育った。

③自励心・自制心の形成期（DA3歳～5歳代）：社会的評価と自分の価値観の間で葛藤し、自身の価値を再発見し、自分の変化を見つめる自己が育つ。相手の内面を知り、多様な価値観に触れ、気持ちの表現を受けとめられることによって多面的な自己を実感し、新たな自己信頼性が育まれた。

3）自己信頼性の育ちを大切にした教育の意義と可能性：子どもは、自分や対象の価値を実感する力である自己信頼性が育まれることで知識や技能を獲得していく。自己信頼性の育ちを大切にすることは、生存権・発達権を保障した新たな教育の実現へとつながる。（つかだなおや、たなかしんすけ）

学級担任教師及び児童の自己開示が学校生活の適応に及ぼす影響

○塚本伸一[1]　三好力[2]（非会員）
（[1]東京未来大学こども心理学部　[2]秋草学園短期大学）

キーワード：教師の自己開示、児童の自己開示、学校適応

【目的】従来、学校、学級における良好な人間関係、また、その適応を促進する要因として、自己開示の有効性が指摘されており、中学生を対象に検討した小野寺・河村（2002）は、学級集団内での自己開示が学校満足度やスクールモラールを高めることを明らかにしている。さらに、自己開示の返報性（Jourard　1959）に従えば、学校場面で児童生徒が自己開示の受け手となった場合、特に、学級の中心的存在である教師から自己開示を受けた場合に、児童生徒の自己開示が促進されるだけでなく、送り手である教師を好意的に評価する結果、教師との関係性が向上し、児童生徒の学校適応、学級適応の促進がはかられることが予測できる。本研究では、この関連を小学生を対象に検討する。

【方法】対象　A県内の公立B小学校の３年生２クラス66名、４年生２クラス70名、　５年生２クラス　52　名の計188名および各学級担任教師である。**測定尺度**　①教師用自己開示尺度：自己の「属性」、自己の「体験・行動」、自己の「嗜好」の３側面につき各６項目、計18項目からなる。各項目をどのくらい担任する学級の児童に話したことがあるかについて４件法により評定を求めた。②児童用対教師自己開示尺度：教師用自己開示尺度の３側面を考慮した６項目からなる。各項目をどの程度担任教師に話したことがあるかについて３件法で評定を求めた。③児童用対児童自己開示尺度：対教師自己開示尺度と同様の６項目からなり、各項目をどの程度学級の友達に話したことがあるかについて３件法で評定を求めた。④学校生活適応尺度：「わたしの受け持ちの先生は、しんせつで思いやりがあります」等21項目から構成。３件法で評定を求めた。

【結果】学校生活適応尺度の検討　学校生活適応尺度を検討するために、最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から３因子構造を妥当と判断した。第１因子は、「わたしの受け持ちの先生は、しんせつでおもいやりがあります」など９項目から構成され、「教師関係」と命名した。第２因子は、「わたしは、学校を一日も休みたくありません」などの６項目から構成され、「学校適応」と命名した。第３因子は「わたしの学級は、とても明るくてたのしいかんじがします」などの６項目から構成され、「学級適応」と命名した。内的整合性は、第１因子がα=.80、第２因子がα=.70、第３因子がα=.80であった。**学校生活適応の性差と学年差**　学校生活適応の各下位尺度得点を従属変数として、２（性別）×３（３、４、５年）の２要因分散分析を行った結果、「教師関係」では、学年の主効果（F (2, 182) =12.16　p<.01）、性と学年の交互作用（F (2, 182) =9.60　p<.01）が有意であった。単純主効果を検討すると、４年生（F (1, 182) =15.03　p<.01）と５年生（F (1, 182) =5.05　p<.05）において性の主効果が有意であり、４年生においては男子児童よりも女子児童の方が、５年生においては、逆に女子児童よりも男子児童の方が教師関係得点が高くなっている。**変数間の影響関係**　教師の自己開示は、関係性の改善を媒介として、児童の学校適応、学級適応に直接影響するとともに、児童の自己開示自体を促進し、その結果、児童の自己開示も学校適応、学級適応を高めるとのモデルを設定し，共分散構造分析による検討を行った（図 1）。モデルの適合度は、χ^2=32.82　df=16　p=.008、GFI=.958、AGFI=.906、CFI=.947、RMSEA=.075であった。分析の結果、自己の属性に関する教師の自己開示は、児童の教師に対する自己開示に正の有意な（p<.01）影響を与えるとともに、児童の級友に対する自己開示にも正の有意な（p<.01）影響を与えること、また、自己の体験や行動に関する教師の自己開示は、教師との関係性の良好さに有意な（p<.01）正の影響を与えることが明らかになった。さらに、児童の教師に対する自己開示は教師との関係性の良好さに（p<.05）、児童の級友に対する自己開示は、自分の学級に対する適応に（p<.01）、それぞれ有意な正の影響を与えることが明らかになった。加えて、教師との関係性の良好さは、学級の適応（p<.05）とともに、学校への適応（p<.01）に有意な正の影響を与え、学級適応も学校への適応に有意な（p<.01）正の影響を与えることが明らかになった。

【考察】本研究の結果は、自分の身長、体重や家族といった自己の属性に関する自己開示を教師が児童に対して行うことは、児童が教師に対して行う自己開示を増大させるとともに、児童が級友に対して行う自己開示も促進すること、また、子ども時代の友人や勉強、休日の過ごし方など、自分の私的な体験や行動に関して教師が自己開示することは、児童が教師との関係性やその指導について肯定的、好意的に評価する傾向を促進すること、さらに、児童が教師との関係性や指導、態度を好ましく評価する傾向は、自分の学校が好きで楽しく、一日も休みたくないといった学校への適応を直接促進するとともに、級友との良好な関係性や学級からの受容感、適応感が増すことを媒介して、学校適応を向上させることを示唆するものである。また本結果は、Jourard（1959）に基づく予想を支持するものであり、自己開示の返報性が学校場面においても機能することを示すものである。教師の自己開示が児童の級友に対する自己開示を促進する現象については、自己開示行動のモデリング効果によるものと解釈できる。教師自ら率先して語りかけ、コミュニケーションをとる態度が、学級における児童間のコミュニケーションの活性化につながることを示唆するものである。

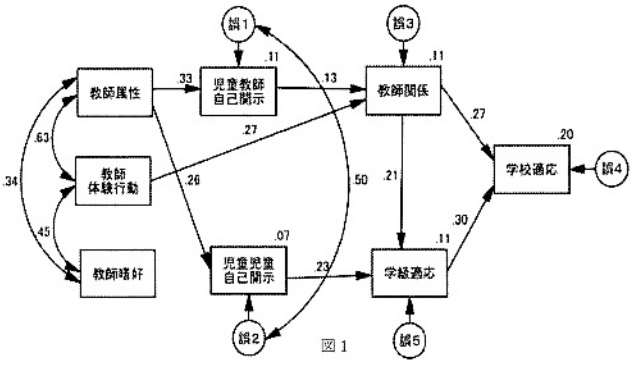


図1

小野寺正巳・河村茂雄（2002）．中学生の学級内における自己開示が学級への適応に及ぼす効果に関する研究　カウンセリング研究，35，47-56.

Jourard, S. M.（1959）. Self-disclosure and other-cathexis. *Journal of Abnormal and Social Psychology, 59*, 428-431.

（つかもと　しんいち・みよし　ちから）

組織社会化プロセスにみられる発達障害者の学習困難と支援

○渡辺めぐみ[1]　伊東昌子[2]
([1]常磐大学人間科学部　[2]成城大学経済研究所)

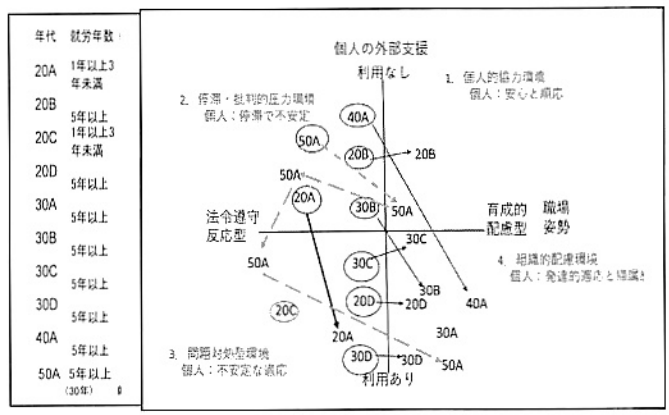
キーワード：発達障害者就労,育成的配慮型対応,育成支援ネットワーク

【研究背景・目的】本研究は,知的能力障害のない発達障害者が就労し定着する際に必要とされる組織社会化プロセスにおいて,生じるトラブルを事例から検討し,どのような学習困難があるのかを考察することを目的とする。

2016年に障害者差別解消法が施行され，2018年から障害者雇用義務の対象として,精神障害者が加わった。2021年3月より従業員数43.5人以上の企業に義務づけられた障害者の法定雇用率は2.3%となった。令和3年度厚生労働省統計では，法定雇用率を達成している企業は47%となっている。一方，独立行政法人高齢・障害求職者雇用支援機構の「障害者の就労状況などに関する調査研究」(2017)では,就職後,1年以内に離職する人が29.5%で,離職理由の70%が自己都合,具体的理由は不明21.9%,業務執行上の課題あり15.6%などとなっており,就業初期数ヶ月間の組織社会化過程の学習におけるトラブルが離職に影響している可能性があり，障害者雇用者に対して組織社会化を促す教育・支援が必須と考えられる。中途採用,1年から3年の短期契約雇用などで流動性が高く,ジョブ型雇用の多い発達障害者雇用には，新卒からの長期雇用やメンバーシップ型雇用を想定している正社員向け組織社会化戦略は,適用されていないことが多い。発達障害者の就労支援時のトラブル・問題点を就労支援5年以上の経験がある専門家達10名に調査した結果では(渡辺,2020)，事業所側が法定雇用率のために雇用し，ジョブが想定されていない，雇用後は無関心，受け入れ準備不足，現場担当者の障害特性の理解不足かつ学ぶ余裕がない，正職員への昇進の可能性のなさ，などの問題が指摘され，職場での従業員・担当者への教育研修支援の必要性が指摘されていた。このように，法定雇用率への反応として障害者雇用を実施し，従業員にはキャリアパスを想定せず，場当たり的な仕事を与える。トラブル時には対処的に合理的配慮を実施する障害者雇用のことを，本稿では法令遵守反応型と定義する。一方，従業員に対して専門的理解に基づく個別配慮があり，専門的理解を促進するために担当職員への外部機関からの支援を利用するなど，事業所と従業員の相互作用を通して，従業員を戦力化しようとする人事的差配がある対応のことを育成的配慮型と定義する。本稿では，当事者と支援者の聴き取り調査を元に,知的能力障害のない発達障害の方々が就労後の組織社会化プロセスの中で，遭遇する学習困難と法令遵守反応型あるいは育成的配慮型の事業所対応との交絡について分析し，当事者，事業所への支援のあり方を考察する。なお,本研究は，常磐大学倫理委員会の承認を得ており,報告すべき利益相反はない。

【方法】研究対象:知的能力障害のない発達障害と診断を受け，就労継続中の方10名(20代4名;20A,20B,20C，20D,30代4名;30A,30B,30C，30D,40代1名;40A,50代1名;50A)。個人情報保護のため施設・所属機関・事業所などの固有名詞は明記しない。調査方法:就労継続時の困難と学びについて，対面のアンケート調査およびインタビューを実施した。まず項目選択および自由記述で回答していただき，記述の意味が分かりにくい箇所は，本人に直に質問して内容を明確化した。調査内容・質問項目:年齢，就労年数(1年未満，1年から3年未満，3年から5年未満、5年以上から選択)転職回数，仕事を選んだ基準，仕事上の困難，困難への対処方法，役に立った支援,就労を継続して生じた周囲・自分の変化(感情，生活習慣，人付き合いなどから選択)，仕事の意味の変化，仕事を通じての学び。
分析方法:分析の枠組みとして,個人の外部支援の利用の有無を縦軸,横軸に個人が働く職場・現場の姿勢をとり,4象限に職場環境タイプと個人の適応状態を区別した(図1)

【結果】回答内容から，就労後の外部支援の利用有無・職場の障害者雇用への姿勢(法令遵守反応型，育成的配慮型)の交絡が対象者の組織社会化と成長に与える影響を考察した。対象者の記述を元に，就労時から組織社会化プロセスで対象者にみられた変化を図1にプロットした。○が初期の状態で矢印の先の記号が変化後の位置。事例として20Aの記述と分析を示す。『職場では直属の上司から,他の部署や会社に移って欲しいと言われ，発達障害支援期間に対しても上司の理解がない。他者に相談することを上司が嫌うため，社内カウンセラーを利用しづらく，会社を辞めたくなる。同僚・外部カウンセラー，就業支援員らに相談し，話を聞いて貰えた事，助言を貰えた事が役に立った。先輩達の仕事の進め方を聞いたり,本から学んだりなどして，職場では具体的な対処法を学ぶ事で善処できるようになった。就労によって専門知識,CADソフトの操作技術が身に付いたり，人との雑談が,学生時代よりできるようになった』。２０Ａの上司は法令遵守



反応型だが，先輩・同僚のキャリア機能のメンタリング，外部の支援者達などから問題対処的な支援を受け，仕事の知識・技能スキル，コミュニケーションスキルなどを学習することができ，不安定ながら職場に適応できるようになった（第2象限から第3象限への移行)。他の9名の記述についても同様の分析を行なった。個人と職場の両方が育成的配慮型ならば，本人には対人スキルの向上，人と関わる楽しさ・大切さ，仕事の楽しさを知る，生活リズムの改善，仕事に関わる知識・技能向上などの変化が生じ，職場にとっては個人の戦力化向上となっている。職場が法令遵守反応型対応では，批判や圧力的コミュニケーションが発生し，組織社会化は停滞することが示された。

【考察】障害をもつ従業員は新たな職場環境で，自発的・主体的適応行動をとることが苦手なため，法令遵守反応型の環境では，本人も事業所も何が問題でトラブルが生じているのか分からないまま，感情的衝突が生じることになる。職場と障害者従業員が相互に成長できる関係を構築するには，就職後1年以内に個別的な育成配慮型支援が必要と考えられる。そこでは組織の人事方針を反映した仕事の割当，職場担当者を支援する研修，外部機関と職場担当者との連携を可能にする支援ネットワークシステムなどの環境作りなどが重要であろう。

【引用文献】渡辺めぐみ(2020).職場学習の心理学(伊東昌子編)：勁草書房,pp187-209.　(わたなべめぐみ・いとうまさこ)

障害者との共生に関する大学生の意識の変化

○豊村　和真

(北星学園大学)

キーワード：障害者との共生、受容度、横断的変化、縦断的変化

【目的】

縦断的かつ横断的に障害者との共生に関する大学生の意識の変化（安定性）について検討する。対照データとして同時に取得した健常者との共生のデータ、および2018年に同じ手続きで得られたデータと比較検討する。さらにそれらと関連する要因を検討する。

【方法】

必修科目の時間内に同一人について2度2022年度に約3ヶ月の期間を空けて同一の調査を実施した。同様の手続きで2018年度に実施したデータを合わせて示し、短期的な縦断的な障害者との意識の変化について調査した。2回ともに回答し、欠損値がないもののみを分析の対象とした。その結果被験者数は2022年は99名、2018年は97名であった。

質問項目は、障害者との共生（対障害者）、また、健常者との共生（対健常者）について、先行研究に従い、7件法による回答の12項目（4因子各3項目ずつ）からなっていた。因子名と各項目の略記形は、1)人当たり（「意地悪」「不快行動」「和を乱す」）2)人付き合い（「地域活動無」「近所付合無」「非社交的」）3)社会適応力（「周囲孤立」「無職」「会話未成立」）4)見た目（「顔立不整」「格好悪い」「可愛くない」）であった。これらの項目を「あなたの住んでいる地域に、これからAさんという人が住もうとしています。もしAさんが以下のような人だった場合、同じ地域で暮らしていく上であなたはAさんのことをどの程度受け入れられますか？」（対障害の場合は下線部を「Bさんという障害者」に書き換えた）という教示文のもとに質問した。さらに性別年齢の他、回答する際にどの障害について思い浮かべていたか、それまでの接触経験の有無および接触形態、接触の際の快-不快の程度、再接触希望の有無について回答させた。なお、ベクトルグラフ以外の分析には主としてＨＡＤ（清水, 2016）を利用した。

【結果】

項目名は因子の名前にＮ（健常）ｈ（障害）＋調査の回数で示した。例えば「人当たり_N1」は人当たり因子の対健常についての1回目の値を意味している。

全因子の平均点の比較

図1より対健常(N1,N2)と対障害(h1,h2)との比較は、全て対健常＜対障害であった。すなわち(障害者に対してより受容的であった。

横断的変化（2018年vs 2022年）は、N1で受容度上昇したが、N2でほぼ横ばい、h1は横ばい、ｈ2で受容度低下といういう結果であった。

同年1回目と2回目の縦断的変化は、2018年は、対健常は横ばい、2022年は2回目（N2）に2018年の水準になった。

対障害は2018年はほぼ横ばいか、わずかに上昇しているが、2022年は受容度低下していた。

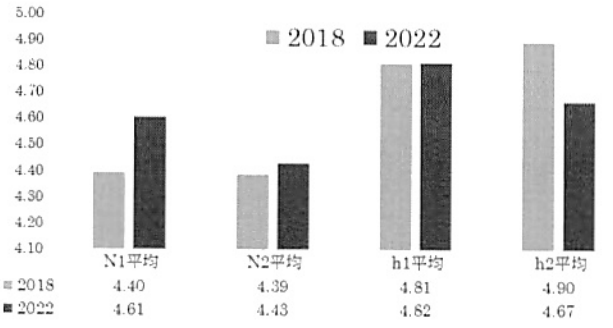


図1 年別回別対象者別全因子平均点　数値は受容度（1～7）

クラスター分析による結果

クラスター分析により5クラスターが得られた。縦断的変化については、CL1(196名中68名)で全体が平均的で2回目はいずれの項目でも平均的で対障害は対健常よりやや受容的、CL2(28名)は対健常、対障害ともやや受容的で2回目に受容性が高まる傾向がある。CL3（20名）は「人当たり」のみ非受容的でそれ以外は全体的に受容的、CL4(12名)はほぼ全てが著しく受容的、CL5（68名）は逆にほぼ全てが非受容的で対健常≒対障害であったが、2回目は平均に近づく傾向がみられた。

横断的変化については、残差分析によりCL2のみ有意に2022年で低下がみられた。

その他の結果

これらのクラスターと接触経験の有無およびその接触形態（自発的か偶発的か）については、検定では差がない（該当する人数が少ない）が、受容性の高いクラスターでは接触経験のある人数が少ないという傾向がみられた。

個人個人の変化をみるため、各因子（例えば人当たり）の(N1,h1)を起点として（N2, h 2）の値を終点とするベクトルグラフをクラスター分析×因子別に作成した。その結果はある程度、全体的な変化を反映したものになっていた。

【考察】

全体的な変化としては、横断的変化も縦断的変化も、共に対健常と対障害の受容度が同じ水準（全体の平均値、4.4程度）に収束する方向に向かっているように思われる。これは、障害者に対して特別視をしなくなったという傾向の現れと考えられる。因子別には「人当たり」が特殊な様相を示したが、他の因子はほぼ同じ様相を示していた。

【引用文献】

清水裕士(2016)、フリーの統計分析ソフトＨＡＤ：機能の紹介と統計学習・教育、研究実背における利用方法の提案　メディア・情報・コミュニケーション研究、1,59-73

（とよむらかずま）

スポーツ・運動に対する態度と健康行動との関係

紙版シングルカテゴリーIATと自己報告法を用いて

○大橋　恵[1]　澤海崇文[2]　藤後悦子[1]　井梅由美子[1]
([1]東京未来大学こども心理学部　[2]流通経済大学社会学部)

キーワード：シングルカテゴリーIAT、潜在的態度、顕在的態度、紙版IAT

【目的】

スポーツや運動は身体に良いとされているものの、実際に行うかどうかには、時間や経済的なゆとり、価値観、一緒に行う仲間の存在など様々な要因が影響するとされる。しかしながら、このような環境的な要因が揃っていても「なんとなく」「めんどくさくて」しない層は存在する。そこで本研究は、スポーツ・健康に関する具体的な行動をとる程度に、より心理的な要因であるスポーツ・運動に対する態度も影響があると考え、検討した。潜在的態度が顕在的態度と往々にしてずれており、独自の予測力を行動や他の関連変数に対して持つことは様々な概念を対象に示されている。そのため、自己報告法で測定したスポーツ・運動に対する顕在的態度に加え、シングルカテゴリーIAT (Karpinski & Steinman, 2006) で測定される潜在的態度の影響を検討した。

【方法】

参加者

心理学系選択授業の受講者107名が参加した。そのうち、冊子の不備があった1名、IAT正答率が75%未満だった3名、IATで何らかのミスをしたと推測される5名を分析から除外した。その結果、分析対象者は98名（男性27名、女性71名、M=19.59歳、SD=2.18）となった。

実験デザイン

1要因2水準。使用カテゴリーが異なる冊子（望ましさIAT条件または楽しさIAT条件）をランダムに配布した。なお、IATで肯定セッション先と否定セッション先の実施順はカウンターバランスを取った。

測度

スポーツ・運動に対する潜在的態度は、紙版SC-IATで測定した。手続きは先行研究（藤井・上淵, 2010；Karpinski, & Steinman, 2006；岡部他, 2004）に沿い、練習では10秒、本番（各2回）では20秒間に正しく分類できた言葉の数をカウントした。IAT得点は、先行研究同様、肯定セッションで正しく判断できた数から否定セッションで正しく判断できた数を引き算して算出した。数値が大きいほど運動・スポーツに肯定的な態度を持つことを意味する。

スポーツ・運動に対する顕在的態度は、自己報告法によって測定した。具体的には、「楽しい」「役に立つ」など6項目について賛成度を7件法で尋ねた。

健康行動として、まず、授業参加の際の階段利用を測定した。具体的には、「あなたは今日この授業に来る時に、階段を使いましたか？エレベーターを使いましたか？」と尋ね、1.階段、2.両方、3.エレベーター、覚えていないから選択させた。この質問は2週間前にも行っていた。

つぎに、スポーツ・運動実施を測定した。まず実際の実施頻度について「この一か月に平均してどのくらい運動・スポーツを行いましたか？　30分以上のジョギングや筋トレも含みます。」と尋ね、週に5日以上、週に3〜4日、週に2日程度、週に1日程度、週に1回未満、全くしなかったから選択させた。さらに理想の実施状況について、「環境が許せば、あなたはどのくらいの日数運動・スポーツをしたいですか？」という質問を用いて尋ねた（選択肢は実際と同じ）。

最後に、関連する可能性がある要因として、性別年齢に加え、高校時代の運動部・スポーツ系の習い事経験を尋ねた。

【結果】

まず、IAT得点の平均値は0.05（SD=9.67）だった。IAT得点と自己報告法による態度との相関関係は見られなかった（楽しさ r=.13, p=.20；望ましさ r=.08, p=.45）。

つぎに、健康行動との関係をロバスト重回帰分析を用いて検討した。階段利用は、当日（IAT測定後）と2週間前の2回尋ねていた。そのため、2回とも階段利用と答えた者（2, n=33）、2回ともエレベーター利用と答えた者（0, n=27）、それ以外の者（1, n=33、ただし事前調査欠席者は欠損値とした）として、分析を行った。スポーツや運動への態度には運動部経験が関係していることが示されているため、交互作用効果を加えたモデルを採用した。その結果、性別とIAT得点のみが有意に階段利用行動に影響していた（Table）。すなわち、男性よりも女性の方が階段を利用しており、IAT得点が高い者ほど階段を利用していた。一方、自己報告法で測定した楽しさ・望ましさの影響は有意ではなかった。

運動実施状況についても同様の分析を行った結果、自己報告法による態度の影響のみが認められた。楽しさ得点が高いほど、スポーツ・運動の現実の実施頻度は高く、楽しさ得点・望ましさ得点が高いほど、理想とする実施頻度が高かった。全分析で、多重共線性の指標VIFは5未満であった。

Table　重回帰分析の結果（β）

説明変数	階段利用	スポーツ・運動実施頻度 現実	スポーツ・運動実施頻度 理想
条件(1=望ましさ、2=楽しさ)	-.05	.02	.00
高校時代の運動部経験(1=有、0=無)	-.01	.03	.00
性別(1=男性2=女性)	.32 **	-.04	-.16 +
IAT得点	.27 *	-.17	-.05
自己報告得点(楽しさ)	.06	.40 *	.36 *
自己報告得点(望ましさ)	-.19	.21	.31 *
高校時代の運動部経験*IAT得点	.12	-.19	-.02
条件*IAT得点	-.07	-.06	-.03
高校時代の運動部経験*自己報告得点(楽しさ)	-.29	.09	-.06
高校時代の運動部経験*自己報告得点(望ましさ)	.15	.21	.24 +
R^2	.17	.26 **	.39 ***

*** p<.001, ** p<.01, * p<.05, + p<.10

【考察】

階段利用や1カ月の運動実施という具体的な健康行動に対する、態度の影響を検討した結果、階段利用については、潜在的態度、一か月の運動実施については顕在的態度の影響が認められた。そのため、態度がいかに形成されているかを検討し、肯定的なものに変えていくことが、健康行動にもつながることが示された。

本研究は科学研究費（20K11346）の補助を受けた。

【引用文献】

Bardin, B., et al. (2016). Testing of a paper-and-pencil personalized single category implicit association test (SC-IAT-P). *International Review of Social Psychology*, 29.31-44./藤井・上淵 (2010). 紙筆版IATを用いた自尊心査定の試み　東京学芸大学紀要, *61*, 113-120./Karpinski, A., & Steinman, R. B. (2006). The single category implicit association test as a measure of implicit social cognition. *JPSP, 91*, 16-32./岡部康成他 (2004). 紙筆版潜在連合テストの妥当性の検討　人間科学研究, *26*, 145-151.

（おおはしめぐみ・さわうみたかふみ・とうごえつこ・いうめゆみこ）

清潔援助技術教育におけるジグソー学習法の学生の認識

○中島正世[1]　橋本正子[1]　神宮寺陽子[1]
([1]杏林大学保健学部看護学科)

キーワード：基礎看護技術，ジグソー学習法，清潔援助

【目的】看護基礎教育では清潔援助技術が最も修得の難易度が高い技術である。さらに，COVID-19 の感染防止のために，演習および自主練習において制約を設けている。次に臨地実習においても実習期間の短縮等により，学生が対象者に清潔援助技術を提供する機会が減少している事は明らかであり，学内での技術修得が求められている。

そこで，今年度から学生の主体的な学びと協調学習ができる 1987 年に社会心理学者の Aronson が考案したジグソー学習法を導入した。ジグソー学習法とは，ジグソーパズルを解くように，学習内容を部分に区切って各部分を受け持って学び，それらを組み合わせることで，全体像や内容が理解できたり，課題に多角的に取り組んだりすることができる学習法である。看護技術へのジグソー学習法の研究は，基礎看護技術のベッドメーキングや注射技術などで効果が報告されている（緒方ら，2003；新屋，2016)。

本研究では A 大学でのジグソー学習法の学習効果と学生の認識を明らかにすることを目的とした。

【方法】研究対象は，A 大学看護学科 2 年生で生活行動援助技術Ⅱの授業を履修した 101 名を対象に web での自己入力式の質問法を実施した。手続きは授業終了後に対象者に書面と口頭で調査依頼を行い，調査の URL と QR コードを示した。

質問内容は，基本情報（年齢，担当エキスパート項目等）と緒方ら(2003)の調査内容と同様に，授業の評価 12 項目，ジグソー学習法の課題 4 項目，ジグソー学習の効果 11 項目，ジグソー学習法が効果的な学習かの認識 1 項目の計 28 項目とした。質問項目は，6 段階評定法（1：全くそう思わない～6：とてもそう思う）で求めた。

ジグソー学習法は，部分浴・洗髪・清拭・陰部洗浄の 4 項目をエキスパート項目とした。活動はエキスパート 2 回，ジグソー各 4 回で行い計 18 回行った。分析方法は，R を基本とする JASP 統計解析ソフトを使用し基本統計，効果的な学習法と授業評価，学習効果，課題等をノンパラメトリック検定で相関係数を求め，5%水準以下を有意とした。

倫理的配慮は，A 大学研究倫理審査会の承認を得た。調査依頼書に調査協力者の個人のプライバシーの厳守，匿名性の確保，個人に不利益は生じないこと，結果を論文で公表することを書面と口頭で説明し，web 上で同意の承諾を得た。

【結果】有効回答者数は 50 名（回収率 50%）で，年齢 19～20 歳であり，回答者のエキスパート項目の偏りはなかった。

1．技術演習をジグソー学習法で行うことの学生の認識

学生は技術演習をジグソー学習法で行うことは，とても効果的であるに対して 7 割が思うと回答していた。

2.学生の授業評価　授業の評価に関する項目は，平均値 4.0 以上と高く，最も平均値が高かった項目は，「互いに教えあえた」M=5.36 ,(SD±1.08)，「教師役の学生の教え方が熱心であった」M=5.32（SD±.84)，「教師役としての負担感が大きかった」M=5.12（SD±.96）であった。

3.ジグソー学習法による技術演習の学習効果　ジグソー学習法による技術演習の学習効果に関する項目で，最も平均値が高い項目は，「学習への積極性をもつことができた」M=5.28 ,(SD±.78)，「責任感が身についた」M=5.24（SD±.72)，「人間関係が良くなった」M=5.08（SD±1.21)、「将来に役立った」M=5.08（SD±1.18）であった。一方，最も低い項目は「技術修得に関する自信はある」M=3.86（SD±1.13）であった。

4.ジグソー学習法の「清潔援助技術」課題に対する認識　課題の認識は，「正しく教授することへの不安がない」M=1.86 ,(SD±.95)，「難易度の差を感じない」M=2.42 ,(SD±1.03)，「技術の根拠の難しくない」M=2.56 ,(SD±1.03)，「技術演習時間にゆとりがあった」M=2.56 ,(SD±1.20）と低かった。

5.効果的な学習法の認識と授業評価，学習効果，課題等の相関関係　「効果的な学習法」は「授業評価」「学習効果」「時間のゆとり」と強い正の相関が有意に認められた（p<.001 ）。また，「授業評価」は「学習効果」「難易度の差がない」「時間のゆとり」「効果的な学習法」と正の相関が認められた（p<.01 ）。

Table 1. 効果的な学習法と授業評価、学習効果、ジグソー法の課題の認識との相関係数（Spearman's rho)

Variable	授業評価	学習効果	教授への不安がない	難易度の差がない	根拠は難しくない	時間のゆとり
学習効果	.81 *** [.68-.89]	—				
教授への不安がない	.03 [-.25-.30]	.02 [-.26-.30]	—			
難易度の差がない	.39 ** [.12-.6]	.27 [-.01-.51]	.16 [-.12-.42]	—		
根拠は難しくない	-.12 [-.39-.16]	-.08 [-.35-.21]	.53 *** [.29-.70]	.02 [-.26-.30]	—	
時間のゆとり	.40 *** [.14-.61]	.47 *** [.22-.66]	-.10 [-.37-.18]	.29 * [.02-.53]	-.01 [-.28-.27]	—
効果的な学習法	.79 *** [.65-.87]	.81 *** [.68-.88]	-.05 [-.32-.24]	.28 * [.00-.52]	-.14 [-.41-.14]	.45 *** [.2-.65]

*p <.05, **p <.01, ***p <.001　[　] 内：95% CI −　　n =50

【考察】

結果は教師役として負担感が強いが，技術演習にはジグソー学習法が効果的と感じ，学習への積極性をもつことや，責任感が身についた，人間関係が良くなったという項目が高かった。このことは，緒方ら（2003）によると，ジグソー学習法が清潔技術において「技術習得への意欲の向上」「学習への積極性」などの主体的学習行動の育成が可能で，「責任感」「他者と望ましい人間関係が形成できる能力」も形成されたと報告している内容と一致する。さらに，エキスパート学生には，教師役のデモと，デモ後の他学生の演習時に継続して教授役としての役割を与えたことが責任感や人間関係等と関連しているのではないかと考える。効果的な学習法と授業評価が，時間的なゆとりで強い相関があった。このことは，学習者に時間的なゆとりを提供できるように学習環境を整える必要性があると考える。

【引用文献】

緒方巧・田中静美・本多容子・原田ひとみ(2003)，ジグソー学習法による基礎看護技術「身体の清潔」の教育成果と課題，藍野学院紀要，17，91-98.

新屋智子（2016)，ジグソー学習法を用いた基礎看護技術の授業実践，京都中央看護保健大学紀要 23，33-36.

（なかじま　まさよ・はしもと　しょうこ・じんぐうじ　ようこ）

ブラック校則の遵守におけるアサーションスタイルの影響

○三村陽南[1]　見城晴香[1]　綱瞳美[1]（非会員）　桐生正幸[2]
([1]東洋大学大学院社会学研究科　[2]東洋大学)
キーワード：ブラック校則、規範意識、アサーションスタイル

【目的】

日本には多くの学校が存在しそれぞれの学校に独自の規則，すなわち「校則」が存在している。しかし近年，教育現場における校則の在り方が，生徒の健康に影響を及ぼすなどの問題を引き起こしている。校則に関する法令は定められておらず，各学校の責任と判断にて定めることができるため，校則が時代にそぐわない理不尽な規則となっている虞れがある。このような，社会から見て明らかにおかしい校則や生徒心得，学校独自ルールは「ブラック校則」と呼ばれており，容姿や校外での過ごし方に至るまで様々なものが存在する（荻上ら，2018）。

ブラック校則の遵守には，規範意識とアサーションスタイルが関連する可能性がある。つまり，規範意識のほかに，自分がどの程度自己主張できるかによってもブラック校則に従おうとする意識が左右されると考えられる。アサーションとは「適度な自己主張」 を示しており，自己主張を積極的に行わない生徒は，校則が理不尽であってもそのことを主張せず，ブラック校則に対しても従順であることが予想される。佐野（1990）も権威が学校教育実践において問題となるのは，教師と生徒の 1 対 1 の関係以上に，教師と集団との関係においてであると主張し，権威に従う者の傾聴に注目している。

本研究では，非主張型のアサーションスタイルの学生はそうでない学生よりも学校生活上の規範意識が高いことを仮説 1 とし，非主張型のアサーションスタイルの学生は理不尽な校則の下でも，そうでない学生と比較し規範意識が高いことを仮説 2 とし，ブラック校則の遵守における規範意識とアサーションスタイルの関連を検討することを目的とした。

【方法】

1.調査時期と対象

2022 年 7 月下旬に調査を実施した。調査対象者は東洋大学に通う大学生 201 名（男性 68 名，女性 131 名，その他 1 名，答えたくない 1 名）であり，平均年齢は 20.46 歳（*SD*=1.88）であった。

2.手続き

クアルトリクスを用い，調査対象者から同意を得た上でオンライン調査を実施した。

3.調査項目

調査内容は，1)対象者の属性（性別，年齢，通っていた高校の種類，通っていた高校の校則の有無），2) 学校内の問題行動や非行についての規範意識（金子，2011），3)ブラック校則（地毛の黒染め，パーマ禁止，下着の色の指定，スマートフォンの持ち込み禁止，部活動での水飲み禁止，恋愛禁止，下校中の寄り道禁止，校則違反をすると早退）に対し理不尽さを感じる程度と従順さ（4 件法），4)アサーションスタイル（玉瀬ら，2001）であった。

【結果】

アサーションスタイルに関する尺度を因子分析し，抽出された因子で相関分析を行った。

1.因子分析

アサーションスタイルの尺度について因子分析（最尤法，プロマックス回転）を実施し，因子負荷量.35 以上を有する項目を基準に因子を抽出したところ，1 因子 10 項目が抽出されアサーションスタイルとした。α 係数は.78 であった。

2.相関分析

相関分析を行った結果，アサーションスタイルと学校内の問題行動や非行についての規範意識において相関は示されなかった（r=-.057，p>.10）。一方，アサーションスタイルとブラック校則に対する従順さにおいて負の相関を示した（r=-.231，p<.01）。アサーションスタイルと校則ごとの相関では、地毛の黒染め（r=-.196，p<.01），パーマ禁止（r=-.184，p<.01），下着の色の指定（r=-.135，p<.05），部活動での水飲み禁止（r=-.119，p<.05），恋愛禁止（r=-.204，p<.01），下校中の寄り道禁止（r=-.169，p<.05），校則違反をすると早退（r=-.169，p<.05）でそれぞれ負の相関が示された。また学校内の問題行動や非行についての規範意識とブラック校則に対する従順さ（r=-.173，p<.05），ブラック校則に対し理不尽さを感じる程度と従順さ（r=-.446，p<.01）においてもそれぞれ負の相関を示した。

【考察】

本研究では，ブラック校則の遵守における規範意識とアサーションスタイルの影響を検討することを目的とした。本研究の結果からブラック校則における規範意識とアサーションスタイルは関連していると言える。しかし，今回の研究では仮説の検証には至らなかった。本研究は，大学生対象の後ろ向き調査であったため，現在，ブラック校則に直面している学生を対象にした場合とは結果が異なる可能性がある。また，非主張型のアサーションスタイルの者は自己の意見を積極的に伝えようとしないため，周囲が理不尽な校則に従っていれば，その理不尽さを主張せず自らも周囲の行動に同調し，理不尽な校則に従っている可能性がある。このように，ブラック校則の遵守には個人の規範意識やアサーションスタイル以外に周囲からの影響を受けることが予想される。今後は，ブラック校則の遵守に関わる周囲からの影響についても考慮し研究を重ねていく必要がある。

【引用文献】

荻上チキ・内田良編　(2018)．ブラック校則－理不尽な苦しみの現実　東洋館出版社
金子泰之　(2011)．中学校の規範文化と生徒の規範意識が中学校の問題行動に及ぼす影響　犯罪心理学研究，49，1，29-37
佐野好久　(1990)．授業における学習規律に関する研究　日本教育方法学会紀要　教育方法学研究，16，117-125
玉瀬耕治・越智敏洋・才能千景・石川昌代　(2001)．青年用アサーション尺度の作成と信頼性および妥当性の検討　奈良教育大学紀要，50，1，221-232

（みむら　はるな・けんじょう　はるか・つな　ひとみ・きりう　まさゆき）

嫌いな人物への対処行動とその後の感情の検討

―嫌悪人物との関わりの程度による相違―

○山田昂暉[1]　森下雄輔[2]　谷口淳一[2]
([1]帝塚山大学大学院　[2]帝塚山大学)

キーワード：対人嫌悪、対処行動、感情

【目的】本研究では、嫌悪対象者との関わりの程度による対処行動の相違とその後の感情の関連を検討した。

対人嫌悪についてはこれまで対人嫌悪の特徴（斎藤, 2003）や嫌悪対象者に対する対処行動（河野他, 2015）について検討が行われてきた。本研究では、嫌悪対象者に対する適切な行動を明らかにする目的で、対処行動とその後の感情との関連を検討した。また、嫌悪対象者との関わりの程度によって適切な行動も異なると考え、関わりの程度による対処行動とその後の感情との関連の相違について検討した。さらに、嫌悪対象者の特徴と対処行動との関連についても検討した。

仮説 1：「拒否」という相手を避ける行動と最も関連する嫌悪人物の特徴は「相手の自己中心性による嫌悪」だろう。

仮説 2：嫌悪対象者と 1 対 1 で関わらなければならない場面とグループになり関わらなければならない場面で、「妥協」という相手と関わろうとする行動をとるほど、行動後の感情はポジティブになるだろう。

仮説 3：嫌悪対象者と関わらなくてもよい場面で、「拒否」という相手を避ける行動をとるほど、行動後の感情はポジティブになるだろう。

【方法】心理系授業の受講者 179 名（男性 54 名、女性 123 名、その他 2 名）を調査参加者とした。平均年齢は 19.32 歳（*SD*=1.33）であった。

まず、嫌いだと感じた同性の他者 1 人の想起を求め、嫌悪対象者の特徴を調べるために、斎藤（2003）の「対人的嫌悪感尺度」を使用した。この尺度は 8 因子から構成されており、各因子から 3 項目ずつ合計 24 項目に 5 件法で回答を求めた。

次に、その人物と「1 対 1 で関わらなければならない場面(1 対 1)」「グループになり関わらなければならない場面(グループ)」「関わらなくてもよい場面」のうちの 1 つの場面に遭遇したか想起してもらい、その人物に対する対処行動とその後の感情について回答を求めた。

対処行動については、山嵜（2013）の「対人苦手意識対処法尺度」を使用した。この尺度は 6 因子から構成されており、各因子から 3 項目ずつ合計 18 項目に 5 件法で回答を求めた。

対処行動後の感情については、齋藤（1985）が開発した感情項目から、ポジティブな感情（嬉しさ、喜びなど）とネガティブな感情（絶望、憎悪など）それぞれ 8 項目ずつ合計 16 項目に 4 件法で回答を求めた。

【結果】嫌悪している人物に対する対処行動についての 18 項目について、因子分析を行ったところ、4 因子が抽出された。因子名はそれぞれ「妥協」「拒否」「従属」「主張」と名付けた。

嫌悪対象者の特徴と対処行動との相関を求めたところ、「相手の傲慢さによる嫌悪」は「主張」と、「相手の外見による嫌悪」と「自分との相違による嫌悪」は「拒否」と、「自分との類似による嫌悪」と「社会的望ましさによる嫌悪」は「従属」と有意な正の相関を示した。

4 つの対処行動についての場面間の相違について分散分析を行ったところ、「主張」で場面の有意な主効果がみられ（$F(2,176)=4.77$, $p<.01$）、グループ場面において、関わらなくてもよい場面よりも「主張」の対処行動が取られていた。

嫌悪対象者に対する対処行動とその後の感情との相関分析を場面ごとに行ったところ、グループ場面と関わらなくてもよい場面において、「妥協」の対処行動を行うとポジティブ感情が高くなっていた。また、「従属」の対処行動を行うとポジティブ感情もネガティブ感情も高くなっていた。一方、1 対 1 の場面では、「従属」の対処行動を行うとポジティブ感情が高くなり、「妥協」の対処行動を行うとネガティブ感情が低くなっていた。

Table1 嫌悪対象者と 1 対 1 で関わらなければならない場面での対処行動と感情の相関関係

	妥協	拒否	従属	主張
ポジティブ	.16	-.20	.32*	-.02
ネガティブ	-.28*	.17	.21	.19

** $p<.01$, * $p<.05$, + $p<.10$

Table2 嫌悪対象者とグループになり関わらなければならない場面での対処行動と感情の相関関係

	妥協	拒否	従属	主張
ポジティブ	.49**	.12	.31*	.00
ネガティブ	.12	.15	.31*	.07

** $p<.01$, * $p<.05$, + $p<.10$

Table3 嫌悪対象者と関わらなくてもよい場面での対処行動と感情の相関関係

	妥協	拒否	従属	主張
ポジティブ	.46**	.19	.30*	-.14
ネガティブ	.18	.01	.37**	.18

** $p<.01$, * $p<.05$, + $p<.10$

【考察】仮説 1 は支持されなかった。人を見下して優位に立とうとする相手に対して「相手の傲慢さによる嫌悪」を感じる（斎藤, 2003）ことから、「主張」の対処がとられたと考えられる。

仮説 2 は部分的に支持された。「表面的な付き合いにとどめる」といった「妥協」の対処行動は 1 対 1 以外の場合はポジティブ感情を高めるが、1 対 1 で関わらなければならない場合は無用な対立を避けることで、ポジティブ感情を高めるということはないものの、ネガティブ感情を低めるという関連がみられたと考えられる。

仮説 3 は支持されなかった。関わらなくてもよい場面であったとしても、嫌悪対象者が何らかの対人行動を起こし、関わる状況ができてしまう可能性がある。そのような場面で、「目を合わせないようにする」といった「拒否」の対処行動を取ってしまうと、今後の関係性を危惧することで、自身にストレスが生じていた可能性がある。そのため、ポジティブ感情と関連がみられなかったのかもしれない。

【引用文献】

斎藤 明子 (2003). 対人的嫌悪感情に対する社会心理学的研究 九州大学心理学研究, *4*, 187-194.

山嵜 千尋 (2013). 対人関係で生起する苦手意識への対処の分類－大学生を対象とした研究－ 北星学園大学大学院社会福祉学研究科 北星学園大学大学院論集, *16*, 137-148.

(やまだ こうき・もりした ゆうすけ・たにぐち じゅんいち)

刑務所に対する近隣住民の態度分析

美祢および島根あさひ社会復帰促進センター近隣住民への調査(2021年実施)から

上瀬由美子
(立正大学心理学部)

キーワード：PFI刑務所　接触経験　態度変容

【目的】　国、民間企業、地域が一体となり犯罪を行ったものの立ち直りを支える取り組みの嚆矢として2007年からスタートした社会復帰促進センター(PFI 刑務所)がある。開設後の施設近隣住民調査では住民が施設へ接触する様々な機会(施設見学や広報誌による情報取得)をもち、この接触が施設への抵抗感低減や出所者への受容的態度に結びつくことが示されている(上瀬ら, 2017)。当該施設は開設からおよそ15年が経過した。本研究は刑務所と地域の共生の現状と課題の把握を目的とし、2地域で施設近隣住民に調査を実施した。

【方法】　本調査は訪問留置郵送回収法により実施した。

調査手続きと実施時期　本調査は法務省矯正局、美祢市、浜田市、美祢社会復帰促進センター(以下美祢センター)、島根あさひ社会復帰促進センター(以下島根あさひセンター)の協力を得て実施された。対象地区において自治体が把握する全ての世帯に、調査票(世帯主用と配偶者用)および返送用封筒の入った封筒を配布した。調査実施期間は2021年10月末～2021年12月である。

調査地区および配布数　美祢センターの配布地区は、センターが開設されている豊田前地区とし、285 世帯に配布された。回収数は計206票、うち世帯主123票(配布世帯数を母数とした場合の回収率は 43.2%)、配偶者票 83票である。島根あさひセンターの配布地区は、センターが開設されている旭町とそれに隣接する金城町とし、2564世帯に配布された。回収数は、1976票、うち世帯主989票(配布世帯数を母数とした場合の回収率は38.5%)、配偶者987票である。

分析対象　無効票および地区に住む刑務官からの調査票は本報告の分析から除いた。地区別にみた分析対象者の数は、豊田前204票、旭664票、金城937票である(島根あさひ調査全体では居住地区が不明なものも含めた 1643 票)。

調査項目　回答者の属性のほか、施設への現在の抵抗感、開設後から現在までの施設への接触経験、開設後の地域変化および施設や出所者に対する考えなどを尋ねた。本報告はこのうち施設への抵抗感と接触経験の回答に焦点をあてて行った。

【結果】

抵抗感　施設への抵抗感について「抵抗感有」の比率は美祢が12%、島根あさひが13%であった(Table 1)。この比率は、2010年美祢調査の 14%(上瀬ら, 2017; 配布地区は豊田前と大嶺)、2013年島根あさひ調査の13%(矢野ら, 2013; 配布地区は旭と金城)と比較して、大きな変化はみられない。ただし、本調査結果を地区別にみると有意差があり、金城は他の2地区と比較して「全く抵抗を感じない」が少なく「あまり抵抗を感じない」が多かった。

Table 1　施設への抵抗感(%)

	美祢(豊田前) N=198		島根あさひ(旭) N=645		島根あさひ(金城) N=899		島根あさひ調査全体 N=1570
4. 強い抵抗を感じる	2.0		1.4		1.4		1.5
3. やや抵抗を感じる	9.6		10.1		12.2		11.3
2. あまり抵抗を感じない	39.9		44.3		49.2	↑	47.1
1. 全く抵抗を感じない	48.5	↑	44.2	↑	37.2	↓	40.0
抵抗有(強い抵抗＋やや抵抗)	11.6		11.5		13.7		12.9

3地区の分布の差　$\chi^2(6)=13.889$　$p<.05$

残差分析の結果5%水準で割合が高かったものに↑、低かったものに↓を記している

施設への接触経験　2つの開設地区(豊田前、旭)では、広報誌やニュース等による間接接触が半数を超え、見学や矯正展参加等による直接接触も4～5割程度経験されていた (Table 2)。他にも、刑務官やその家族と知り合いになったものが3割前後、センター外での受刑者の社会貢献作業を見たものが4割弱など、様々な形での施設接触が経験され、情報共有される機会を得ていた様子が示された。一方、隣接地区の金城では、他の2地区と比較して接触経験が全ての項目で低かった。

Table 2　施設への接触(%)

	美祢(豊田前) N=203		島根あさひ(旭) N=656		島根あさひ(金城) N=889		3地区の差 検定結果 $\chi^2(2)=$		島根あさひ調査全体 N=1586
1. センターに関する、住民向けの広報を読んだ	52.7	↑	66.8	↑	22.4	↓	313.829***		40.7
2. センターの中を見学した	50.7	↑	58.5	↑	23.8	↓	200.341***		38.7
3. センター内の食堂や武道場を利用した	41.9	↑	16.3		9.0	↓	136.370***		12.0
4. 「矯正展」に行った	48.3	↑	38.7	↑	5.6	↓	316.336***		19.5
5. 新聞・テレビ・雑誌などでセンターについてのニュースをみた	59.6	↑	54.7		48.1	↓	11.950**		50.5
6. センター内の運動会に参加した	3.9	↓	18.0	↑	1.8	↓	137.914***		8.6
7. 刑務官やその家族の人と知り合いになった	26.1		34.0	↑	11.6	↓	114.264***		20.8
8. 地域活動や仕事の用事で、センターを訪問した	20.2		24.5	↑	11.6	↓	45.197***		16.8
9. センター開催のイベント(盆踊公演・お祭り・その他行事)に参加した	20.2	↑	17.2	↑	1.9	↓	128.519***		8.3
10. 受刑者がセンターの外で清掃などをする「社会貢献作業」について聞いた	38.4	↑	36.6	↑	13.2	↓	133.321***		22.8
11. 受刑者がセンターの外で清掃などの「社会貢献作業」をしているのを見た	7.4	↓	23.5	↑	7.8	↓	86.817***		14.2
12. 学校の授業など教育の場で、センターについて話を聞いた	4.4	↑	3.5	↑	1.1	↓	13.166**		2.1
13. 自治体の会合やイベントで、センターについて話を聞いた	24.1	↑	28.2	↑	10.5	↓	82.568***		17.8
14. 学校や図書館、地元の施設などで、刑務所や矯正施設に関する本や資料を目にした	13.3	↑	13.9	↑	3.3	↓	62.299***		7.8
15. この中にあてはまるものはない	4.4	↓	5.5	↓	25.5	↑	137.089***		17.3

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

残差分析の結果5%水準で割合が高かったものに↑、低かったものに↓を記している

【考察】開設から約15年経過した調査時点で、施設に対し抵抗を感じる住民は全体のおよそ1割であった。2010年調査、2013年調査とは調査地区が異なるため完全な比較はできないが、この10年で住民の抵抗感には大きな変化はみられないと判断される。また接触経験の回答からは刑務所と地域の共生が多面的な形で継続していることが示された。

なお、2010年美祢調査では開設地区の方が隣接地区よりも抵抗感が高い様子が示されていた。しかし本調査の島根あさひセンターでは、開設地区(旭)の方が、隣接地区(金城)よりも抵抗感が低くなっていた。そして金城では接触経験を持つものが全体として少なかった。以上の結果は、島根あさひセンターにおける地域共生の取り組みが開設地区に焦点を当てた形で行われてきたことを示すとともに、その効果が開設地区の抵抗感の低さとして現れたものと考える。施設への接触は、施設に対する抵抗感の低減だけでなく、出所者への受容的態度につながる機会となる。再犯防止推進を念頭に刑務所と地域の連携を行う際には、隣接地域にもその効果が波及するよう連携のあり方を工夫していくことも重要と考える。

【引用文献】上瀬・高橋・矢野(2017). 官民協働刑務所開設による社会的包摂促進の検討　心理学研究, *87,* 579-589.
矢野・上瀬・齋藤(2014). 地域と刑務所の共生・協創は可能か 日工組社会安全財団2013年度一般研究助成最終報告書

※本研究はJSPS科研費(20K03302)の助成を受けて行った。　(かみせ　ゆみこ)

対人コミュニケーションにおける韓国の文化特定性の検討

援助行動を中心に

○申　知元
（神田外語大学外国語学部）

キーワード：対人コミュニケーション，日韓比較文化，援助行動，文化特定性

【目的】日韓の異文化コミュニケーションにおいて文化的な差異は，対人関係の葛藤や誤解を起こす理由となる。そのような行動の一つが，「援助行動」である。援助行動とは，報酬を期待せずに他者に利益の向上や問題の改善をもたらすための行動である（新谷，2020）。本研究の目的は，日本と韓国の援助行動に対する認識や行動様式の差異を多角的に検討し，対人コミュニケーションにおいて日本とは異なる韓国の文化特定的な側面を明らかにすることである。こうすることで，より円満な日韓の対人コミュニケーションを構築するための提言が可能になる。

【方法】本研究では，日本人韓国語学習者の韓国文化知識を測定する道具を開発した申（2020）を再分析する。申（2020）のうち援助行動に関する内容が対象である。

まず，半構造化インタビュー調査の語りを分析する。半構造化インタビュー調査は，2016 年 5 月から 2017 年 6 月の間に日本と韓国の両国で 3 か月以上の滞在経験のある成人 20 名（日本人 9 名，韓国人 11 名）を対象に実施した。主に，日本と韓国の対人コミュニケーションにおける文化的な差異が現れる経験を尋ねた。

そして，質問紙調査を行い，半構造化インタビューで語られた韓国の文化特定的な側面が韓国社会で共有されている行動様式であるのかを確認する。質問紙調査は，2018 年 11 月に首都圏（ソウル・仁川・京畿道）に居住する韓国人 459 名を対象にインターネット調査会社に依頼して実施した。質問紙は，日本と韓国の文化的な差異が見られる状況を提示し，それに対して現れる可能性がある四つの行動パターンを提示する 4 択問題で構成されている。

【結果】日韓の援助行動の差異が見られる状況に関する半構造化インタビューを分析した。その結果，韓国人は日本人に比べて多様な状況下で援助行動を行う点が特徴的であった。半構造化インタビューでは，韓国人の援助行動の例として，「親しくない韓国人が冬の厚着を貸してくれた」「日本人の友達のために，ホテルの不親切な対応に抗議したら何回も感謝された」「韓国人は突然でも，お願いすると助けに来てくれる」などが語られた。

一方で，韓国人の研究対象者から，日本では韓国と同様の援助行動が期待できない，もしくは韓国と同じように援助行動を振る舞うことは望ましくないと考えていることが示された。例えば，韓国人の研究対象者からは，「イベントの片付けなどをする際に，日本人は自分の分だけをする」「お店での葛藤状況において，日本人友人が他人のように振舞った」「困っている人に声をかけると嫌がられると思って，悩ましくなる」などが語られた。結果的に，日本では韓国での生活に比べて，知らない人に対する援助行動を回避していた。

こうしたことから，韓国人は日本人に比べて，相手との親密やコミュニケーションが行われる場所などを考慮せず，多様な状況で頻繁に援助行動を用いることが示された。

質問紙調査では，半構造化インタビューで語られた韓国人の援助行動が韓国社会で共有されている行動ではあるものの，個人差があることが確認された。援助行動を尋ねる 7 問に対して，韓国人の 44.4%から 78.9%が同じ行動様式を選択した。5 問は半構造化インタビューで示された行動様式が最も多くの人から支持されたが，2 問は別の行動様式が支持された。半構造化インタビューとは異なる行動様式が支持された項目は，同一の行動様式の選択率が 50%以下であった。

【考察】以上を踏まえて，援助行動において日本とは異なる韓国の文化特定的な側面として以下の 3 点が挙げられる。

第一に，韓国人は援助行動を人間関係の構築・維持の手段とする点である。援助行動に関しては，「韓国人の友人にお願いをしたら，喜んで助けてくれた」「（韓国人は）助け合いはお互い様だと思う」などの説明が語りから見られた。よって，韓国人は援助行動を用いて相手に対する好意を示し，対人関係を円滑にする方略として評価していると言える。一方で，日本では相手に迷惑にならないように自分で責任をとろうとする傾向が見られた。日本人は援助行動が人のプライベートを侵害することを懸念し，行動を抑制している可能性がある。

第二に，直接的な行動が援助行動として解釈されている点である。韓国人は，原田（1990）が分類した援助行動のうち，「金品の譲渡・貸与型」「紹介・勧誘型」「行動型」「同調型」「小さな親切行動型」など，様々な状況下で援助行動が用いられ，日本に比べて日常的な行動であることが示された。一方で，「助言・忠告型」については語られていなかった。

第三に，韓国の文化特定的な側面は，絶対的なものではなく，相対的なものである点である。質問紙調査においては，すべての状況において韓国人の全員が同じ行動様式を選択することはなく，項目によっては半構造化インタビューと異なる行動様式がより支持されることもあった。このことから、韓国の文化特定的な側面はあくまでも韓国社会の傾向を意味することが読み取れる。そして，対人コミュニケーションに状況を加えた研究においては，性差・世代差を含む個人差が大きく影響を与えることから、同一の行動様式を多角的に検討することの重要性が示唆される。

本研究は，日韓の援助行動に注目し，韓国の文化特定的な側面を提示すると同時に韓国社会の多様性を示したことに意義がある。本研究の成果は，日韓の異文化理解教育および韓国語教育の基礎資料としても活用することが期待できる。

【引用文献】

Bae, J. (2017). An exploratory study on criterion and intervention motive of interference or helping behavior. *Journal of social science, 28(4)*, 261-286.

原田純治（1990）．援助こうｋ同と動機・性格との関連 実験社会心理学，*30(2)*，109-121.

新谷　優(2,020)．助け合いの文化心理学　心理学評論，*63(3)*，329－345.

申知元（2020）．外国語学習者のための異文化コミュニケーション能力尺度の開発――態度的側面と韓国文化知識の 2 側面からの測定―― 青山学院大学博士論文

※本研究は JSPS 科研費（課題番号：22K13164）の助成を受けたものである。

（しん　じうぉん）

大学生は「百合」に何を求めるのか？

○山岡重行
（聖徳大学心理学科）

キーワード：百合、百合者尺度、腐女子、オタク

【目的】 女性同士の親密な関係を描いた小説、マンガ、アニメなどは「百合」と呼ばれるジャンルを形成している。この「女性同士の親密な関係」には、明確な女性同性愛から女性同士の友情までのグラデーションがある。女性キャラクターたちの「仲良し描写」を中心とした作品をゆるい百合という意味で「ゆる百合」、女性同士の性行為を含んだ恋愛作品を「レズもの」と呼んで区別することもあるが、むしろ積極的に境界線を曖昧にして、女性同士の親密な関係を扱った作品群を包括する「百合」という名称が用いられている。

BLが作家も編集者も読者もほぼ女性であるのに対し、百合には少なからぬ割合で男性読者が存在する。男性と女性では百合に求めるものは違うのだろうか。そもそも百合者は百合に何を求めるのだろうか。純潔さなのか、性的刺激なのか、それとも両方なのだろうか。本研究の目的は大学生が百合に何を求めるのか、その一端を明らかにすることである。

【方法】 **調査対象者** 調査1：首都圏私立大学2校の大学生574名(男性225名,女性349名)。平均年齢19.81歳(SD=2.228)。

調査2：首都圏私立大学2校の大学生296名(男性109名,女性187名)。平均年齢19.38歳(SD=1.144)。

調査1：百合者尺度の作成 百合者を選別するために腐女子度尺度(山岡,2016)を参考に百合者尺度を作成した。「男女の恋愛小説や漫画よりも女の子同士の恋愛ものを読む」「女の子同士の恋愛じゃない漫画や小説でもシチュエーションや台詞によってカップリングに変換してしまう」「気が付くと好きな女性キャラクターでガールズラブ(百合)な妄想をしてしまう」「女の子同士の恋愛物語である百合作品を読むのが好きである」の4項目。回答方法は、「1：全くあてはまらない」、から「5：とても良く当てはまる」の5件法。

百合者尺度の妥当性を検討するために、「女性同士の友情や絆を描いた作品が好きだ」「3次元や2次元、2.5次元の女性アイドルグループが好きだ」「カワイイ女の子たちが夢に向かって仲良くがんばっている姿を描く作品が好きだ」の3項目を設定。百合者は非百合者よりもこれらの項目の肯定度が有意に高いはずである。

調査2：百合に何を求めるのか 「二人の女性を主人公とした物語に、あなたは何を求めますか？ 下記の20の項目のそれぞれがあなたの求めるものにどの程度当てはまるかを、下の1～4の数字を1つ選んで回答欄に入力してください」という教示文で、以下の18項目の評定を求めた。「主人公たちの仲の良さ」「主人公たちの幸福」「主人公たちの友情」「主人公たちの愛情」「主人公たちのエッチなシーン」「主人公たちの成長と達成」「主人公たちの努力と勝利」「主人公たちの歪んだ愛情」「主人公たちの苦悩」「主人公たちの汚れのない純粋さ」「主人公たちの美しさ」「主人公たちのかわいらしさ」「主人公たちの強さ」「主人公たちの悲劇」「癒し」「性的興奮」「乱暴なもののない優しい世界」「他の人が関わらない2人だけの世界」。回答方法は、「1:あてはまらない、2:少し当てはまる、3:当てはまる、4:とても良く当てはまる」の4件法である。

【結果と考察】 百合者尺度4項目の主成分分析から得られた成分は1つで全ての項目が.815以上の高い負荷量を示した。この4項目の合計点を百合者得点とした(α=.894)。

「女の子同士の恋愛物語である百合作品を読むのが好きである」が3点以上であり、4項目の合計が8点以上の者を百合者群とした。また、この基準から外れても、「男女の恋愛小説や漫画よりも女の子同士の恋愛ものを読む」「女の子同士の恋愛じゃない漫画や小説でもシチュエーションや台詞によってカップリングに変換してしまう」「気が付くと好きな女性キャラクターで百合な妄想をしてしまう」のいずれか1項目でも明確に肯定(4以上)している者も百合者群とした。

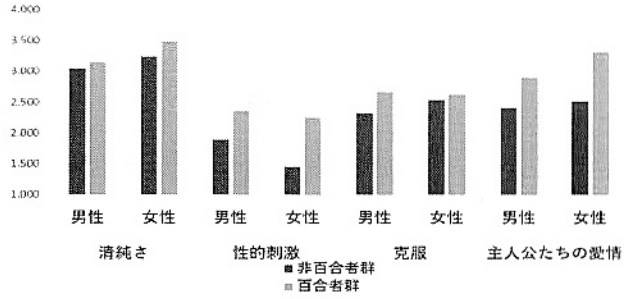
前述の百合者尺度の妥当性を検討するための3項目は全て百合者群が非百合者群よりも平均値が高いことを示す有意差が認められた。

女性2人を主人公とした物語に何を求める要素の18項目の主因子法プロマックス回転因子分析の結果、3因子モデルを採用した。第1因子に負荷量が高かったのは、「主人公たちの友情」「主人公たちの幸福」などの8項目で、無垢な清純さの因子と解釈できる。この8項目を合計し項目数で割ったものを清純さ得点とした(α=.896)。第2因子に負荷量が高かったのは、「主人公たちのエッチなシーン」「性的興奮」などの4項目で、性的刺激の因子と解釈できる。この4項目を合計して項目数で割ったものを性的刺激得点とした(α=.764)。第3因子に負荷量が高かったのは、「主人公たちの悲劇」「主人公たちの強さ」などの5項目で、試練を乗り越える成長と達成の因子と解釈できる。この5項目の合計点を項目数で割ったものを克服得点とした(α=.623)。また「主人公たちの愛情」は、第1因子と第2因子の2つに負荷量が高かったため、単独で従属変数とした。

2(百合傾向の個人差：百合者・非百合者)×2(回答者の性別：男・女)×4(女性2人の物語に求める要素：清純さ・性的刺激・克服・主人公たちの愛情)を独立変数とした1要因が繰り返し要因である3要因分散分析を行った結果、清純さ、主人公たちの愛情、克服、性的刺激の順に平均点が高いことを示す物語に求める要素の主効果、百合者群の方が非百合者群よりも平均点が高いことを示す百合の主効果、物語に求める要素と回答者の性別の交互作用、物語に求める要素と百合の交互作用が認められた(Fig.1)。物語に求める要素と回答者の性別の交互作用は、清純さ、主人公たちの愛情、克服に関しては女性の方が男性よりも平均値が高いが、性的刺激は逆に男性の方が平均値が高いことを表している。

大学生が百合に求めるものは清純さであり女性主人公たちの愛情描写である。乱暴なもののない優しい世界で繰り広げられる純粋で可愛らしく美しい女性主人公たちの友情と幸福描写に癒やされるのである。 （やまおかしげゆき）

Fig.1 女性2人の物語に求める要素



災害伝承施設来館者の想いの変化

－自由記述の分析－

○静間健人[1]
([1]日東日本大震災・原子力災害伝承館)

キーワード：災害伝承施設，東日本大震災，来館者ノートの記述内容

【目的】

東日本大震災の被災地には，震災の被害と教訓を「発信」するための展示施設や震災遺構といった震災伝承施設が多く整備されている。2022 年 7 月末時点で 308 件の展示施設や震災遺構が震災伝承施設として登録されている（3.11 伝承ロード推進機構ホームページ)。その中でも，福島県は大地震や津波の被害に加え，東京電力福島第一原子力発電所（以下，第一原発）事故に伴う放射性物質の拡散による原子力災害に見舞われた。東日本大震災で福島県が経験した原子力災害を含む複合災害の実態と教訓を後世に伝えていくための施設が現在整備されている。

一方で，東日本大震災後の 2012 年の災害対策基本法の改正により，住民側の責務として，第 7 条に「震災伝承」に関する記述が追加されることとなった。以上のことから，東日本大震災発生以降，災害の語り継ぎや教訓を伝えることの重要性があらためて認識されている。

博物館展示の研究において，田中（2018）は博物館展示の多様性に関わる 4 つの側面として，「コンテンツ」，「フレーミング」，「コンテキスト」，「スタンドポイント」を挙げたうえで，災害を展示しようとする際に，近代科学的な明快さや展示の分かりやすさ追求しようとすれば，災害の実態とは乖離し，失われる情報があることを指摘している。要するに，災害伝承施設に展示されているものは，テレビや新聞などの情報と同様に，さまざまな意図によって選ばれ，構成されたものであるといえる。

以上のことから，効果的に災害の教訓伝承を行うためには，災害伝承施設を訪れた人の施設体験の実態を把握しておくことが求められる。

レニー（2003）によると，博物館や美術館などのミュージアムの来館者を調査する来館者研究には，①来館者の属性や心理的特性などを対象とする来館者プロフィール研究，②来館者のミュージアムにおける行動または特定の展示物への反応や相互作用に関する研究，③来館者による展示自体やその周辺物の物理的消耗を監視する来館者インパクト調査の 3 つに分類される。2 つ目にあげられた視点は，来館者がミュージアムをどう解釈しているかを明らかにし，来館者の体験を把握するのに重要な調査である（奥本ら，2016)。

本研究では，災害伝承施に来館した人の自由記述の内容から施設体験の実態を把握する。

【方法】

（1）研究対象の概要

福島県双葉町にある「東日本大震災・原子力災害伝承館（以下，福伝)」を調査の対象とした。福伝は，原子力災害の教訓を後世に継承することなどを目的として，2020 年 9 月 20 日に開館した災害伝承施設である。

福伝は「①原子力災害と復興の記録や教訓の未来への継承・世界との共有，②福島にしかない原子力災害の経験や教訓を生かす防災・減災への寄与，③福島に心を寄せる人々や団体と連携し，地域コミュニティや文化・伝統の再生，復興を担う人材の育成等による復興の加速化への寄与」の 3 点を基本理念とし，この基本理念に基づき「収集・保存」，「調査・研究」，「展示・プレゼンテーション」，「研修」の 4 つの事業を展開している。常設展示室には収取した資料のうち，約 200 点の実物資料を展示し，さらに映像や解説で来館者の理解を深めるように努めている。「プロローグシアター」「1．災害の始まり」「2．原子力発電所事故直後の対応」「3．県民の想い」「4．長期化する原子力災害の影響」「5．復興への挑戦」の 6 ゾーンから構成されている。また，展示室内のワークショックスペースで，「語り部」の講話を聴くことができるようになっている。

（2）分析対象の概要と分析方法

開館初日から館内には，来館者のためのメッセージノート（来館者ノート）とアンケートが置かれている。来館者ノートは，B5 サイズで，誰もが自由に感想を書くことができるようになっている。

本報告では，開館から 2022 年 7 月 22 日までの期間に来館者ノートに記載されたメッセージのみ分析の対象とした。分析の方法として，来館者ノートに書かれたメッセージを筆者が読み，いくつかのカテゴリに分類する手法をとった。

【結果と考察】

時系列順に自由記述を整理した。その結果，開館当初から現在に至るまで，「災害に関する知識の取得（例えば，東日本大震災がどれだけ大変だったか知ることができた)」，「伝承していくことの必要性の認知（例えば，3.11 のことは忘れてはいけないと改めて思いました)」，「震災当時の記憶想起（例えば，あの日のことは，昨日のように思い出す。11 年…)」，「復興応援（例えば，福島大好きなので頑張ってください)」，「展示に対する満足（例えば，素晴らしい講演を聞けて良かったです)」，「展示に対する不満（例えば，なぜ原発事故が起き，なぜ防げなかったのか真相に迫った展示を見たかった)」に関するメッセージが寄せられていた。

同じ展示を見学した人であっても，展示に満足する人もいれば，展示に不満を持つ人もいた。すべての人が満足する展示を行うのは困難であるが，「両論併記」，「語り部の活用」「他施設との連携」を行うなど，何らかの形で情報を示す必要性が示唆された。

【謝辞】

本研究は，令和 4 年度東日本大震災・原子力災害伝承館個人研究費によって行われた。

【引用文献】

田中隆文　2018　災害展示の際に考慮すべき災曹の特質と近代科学の限界－展示学・災害科学・科学技術社会論に基づく総合考察－　展示学，**55**，30-39.

レニー　2003　参加型の科学館によるサイエンス・コミュニケーション：研究への展望　ストックルマイヤー他編著（佐々木勝浩他　訳）サイエンス・コミュニケーション：科学を伝える人の理論と実践　丸善プラネット，157-178.

奥本素子・阿児雄之・加藤幸治　2016　被災資料における来場者の語りの分析から見る博物館体験－テキストマイニングを用いた傾向の抽出－　博物館学雑誌，42(1)，19-35.

（しずま たけと）

自然観察法による保護者と子どもの手つなぎ行動の要因検討

○大谷　亮[1]
([1]（一財）日本自動車研究所自動走行研究部）

キーワード：子ども，交通安全，保護者の愛着と養育

【目的】道路交通法では，交通の頻繁な道路などにおいて，保護者などが付き添わないで6歳未満の幼児を歩行させることを禁じており，歩行中に保護者が幼児を監視すること（Parental Supervision：PS）が求められている。歩行中のPSの手段として手つなぎがあるが，駐車場などで発生した6歳以下の子どもの交通事故の人的要因をみると，保護者などの不注意の割合が高く，その内の70%が手をつないでいないことに起因している（(公財）交通事故総合分析センター，2016）。また，Rouse & Schwebel（2019）は，年少児に比べ，年長児は駐車場内でのPSが遂行され難いことを報告している。先行研究では，保護者や子どもの個人データと手つなぎ行動との関係が検討される例が多い。また，保護者の愛着や養育態度が，保護者の手つなぎの意志や子どもの手つなぎ拒否に関する保護者の認識に影響を及ぼすことが報告されている（例えば，大谷・栗山，2021）。しかしながら，保護者の愛着や養育傾向が，実際の手つなぎ行動に及ぼす影響を調べた例はみられない。本研究では，商業施設内の道路横断時の保護者と子どもの手つなぎ行動を観察し，アンケート調査により，上記の要因の影響を調べた。

【方法】茨城県つくば市にある商業施設を調査場所とした。駐車場から二車線道路を横断して施設に入場する保護者と子どものペアを調査者2名が目視により観察し，道路横断時の手つなぎ行動を調べた。観察日時は2021年10月9日（土）と10日（日）の9:30から16:00（晴天）であった。親子ペアが道路を横断した後，調査の主旨，内容，およびプライバシーの保護などを調査者が説明し，同意の得られた保護者（協力者）に対して，アンケート調査への回答を求めた。アンケート調査では，協力者や手つなぎ行動の対象となる子ども（対象児）の性別や年齢などへの回答を依頼した。この際，複数の子どもと来場した親子の場合，3歳から10歳の子どもの中で最年少の子どもを対象児として設問に回答するよう協力者に求めた。また，協力者の手つなぎの意志や対象児の手つなぎ拒否に関する協力者の認識について，事故の危険性が異なる3種類の交通場面のCG画像を提示し，各場面で手をつなぐか（手つなぎ意志），また手をつなごうとした際に対象児は手つなぎを拒否するか（手つなぎ拒否）を，7件法（7.とてもそう思う-4.どちらでもない-1.全くそう思わない）で回答するよう教示した。さらに，子どもへの愛着や養育について，計6因子（「適応」愛着：子どもへの依存，「適応」養育：役割受容，「敏感性」愛着：自分への関心，「敏感性」養育：子どもへの関心と理解，「親密性」愛着：自分に対する支え，「親密性」養育：子どもへの愛情と支え）を仮定する30項目からなる質問紙（武田，2014）への回答も依頼した。調査は，手つなぎが観察された親子ペア（手つなぎ群）と観察されなかった親子ペア（非手つなぎ群）の数が其々20名になった時点で終了した。また，手つなぎ群と非手つなぎ群の協力者および対象児の性別や年齢が同様となるように親子ペアを選定した（Tab. 1）。調査の実施に際しては，（一財）日本自動車研究所が定める実験倫理委員会からの承認を得た。

【結果】アンケート調査で対象とした3種類の交通場面について，手つなぎ意志および手つなぎ拒否ともに，場面間の相関係数が高かったため，合計得点を用いて分析を行った。その結果，非手つなぎ群の協力者は，子どもから手つなぎを拒否されるとの認識が高く有意傾向（効果量中）が示された（Tab. 1）。また，愛着と養育の6因子について，非手つなぎ群では，子どもへの依存（「適応」愛着）が高いことが示され，有意差（効果量大）がみられた（Tab. 1）。

Tab. 1　手つなぎ群と非手つなぎ群の比較

			手つなぎ群（20名）	非手つなぎ群（20名）
協力者（保護者）	性別	男性	6名	7名
		女性	14名	13名
	平均年齢（標準偏差）		39.9歳（6.8歳），25-49歳	39.1歳（6.4歳），30-53歳
対象児	性別	男性	7名	8名
		女性	13名	12名
	平均年齢（標準偏差）		6.3歳（2.1歳），3-10歳	6.9歳（1.6歳），3-10歳
手つなぎ意志の合計得点 平均値（標準偏差）			17.25（4.20）	15.70（3.64）
			t（38）=1.25，n.s.，d=0.39（小）	
手つなぎ拒否の合計得点 平均値（標準偏差）			6.25（4.55）	8.70（4.69）
			t（38）=1.68，p<.1，d=0.53（中）	
愛着		適応	10.90（3.68）	14.20（4.07）
			t（38）=2.69，p<.01，d=0.85（大）	
		敏感性	17.80（4.80）	17.55（4.20）
			t（38）=0.18，n.s.，d=0.06（なし）	
		親密性	16.45（4.80）	16.00（5.53）
			t（38）=0.28，n.s.，d=0.09（なし）	
養育		適応	25.40（8.18）	24.70（7.48）
			t（38）=0.28，n.s.，d=0.09（なし）	
		敏感性	25.55（7.13）	24.90（6.95）
			t（38）=0.29，n.s.，d=0.09（なし）	
		親密性	26.65（7.79）	26.20（7.32）
			t（38）=0.19，n.s.，d=0.06（なし）	

【考察】大谷・栗山（2021）は，アンケート調査の結果から，愛着傾向が高い保護者ほど，子どもが手つなぎを拒否すると回答することを報告している。本研究の結果から，自然観察により記録された実際の手つなぎ行動にも，保護者の子どもに対する依存（愛着）が関係し，また，保護者が手つなぎを拒否されると認識することで，実際の手つなぎ行動が成立し難いことが示唆された。先行研究の結果（大谷・栗山，2021）から，交通場面に対する保護者の危険認識や，道路横断時の交通状況が交絡因子として結果に影響している可能性があり，今後，データ数を増やし，保護者の危険認識などの影響を加味した上で，本研究の結果の妥当性を検証することが重要である。また，歩行中のPSの遂行や子どもの自立を促進するため（大谷・栗山，2021），保護者の適切な愛着や養育態度を育成するための方策や育児支援についても検討する必要がある。

【引用文献】

(公財）交通事故総合分析センター．2016 特集 駐車場等における歩行者対四輪車の事故．イタルダインフォメーション，No. 115.

大谷亮・栗山あずさ．2021 歩行中の子どもによる手つなぎ拒否と保護者の愛着・養育態度との関係．応用心理学研究，47（2），94－105.

Rouse, J. B., & Schwebel, D. C. 2019 Supervision of young children in parking lots：Impact on child pedestrian safety. Journal of Safety Research, 70, 201-206.

武田江里子．2014 「愛着－養育バランス」尺度短縮版の作成と信頼性・妥当性の検討－乳幼児健診での＜気になる＞母親との関連から－．小児保健研究，73(6)，783－789.

【謝辞】本研究は，一般社団法人日本損害保険協会2021年度自賠責運用益拠出事業の一部をまとめたものであり，ここに記して感謝申し上げます。また，調査に際してイオンモールつくば様より多大なご協力を頂きました。深く感謝申し上げます。

（おおたに あきら）

新規学卒就職者のプロアクティブ行動に対する導入研修の役割

竹内　倫和
（学習院大学経済学部）

キーワード：組織社会化、プロアクティブ行動、導入研修

【研究目的】

新規学卒就職者（以下、新規学卒者）は、企業等への入社後に、組織の規範や価値観を受け入れ、新たな組織に適応することが求められる。すなわち、個人のキャリア発達を考えるうえで、入社後に組織社会化（organizational socialization）を果たしていくことの重要性がキャリア発達論において指摘されている（e.g., schein, 1978）。組織社会化とは、「新規参入者が組織の外部者から内部者への移行をしていく過程」（Bauer et al., 2007）と定義づけられる概念である。

そのような中、新規学卒者が入社後、円滑に組織への適応を果たすために、組織社会化過程における新規学卒者のプロアクティブ行動が重要な役割を果たす可能性が既存研究で指摘されてきた（e.g., Ashford & Black, 1996）。プロアクティブ行動とは、組織社会化に必要な情報及び知識を新規学卒者自らが獲得していく行動を意味する概念である。具体的には、プロアクティブ行動として、3 要素 6 次元（意味づけ行動（情報探索行動・フィードバック探索行動）、関係構築行動（上司との関係構築行動・一般的社会化行動・ネットワーキング行動）、肯定的思考枠組み）が指摘されており（Kim et al., 2005; Klein & Heuser, 2008）、これら行動をより積極的に行うことにより、組織社会化の結果指標である組織コミットメントや職務満足が高まり、転職意思は抑制されることが明らかになっている（e.g., Bauer et al., 2007; Saks et al., 2011）。

既存の組織社会化研究では、プロアクティブ行動の規定要因として、パーソナリティなどの個人差変数（e.g., Wanberg & Kammeyer-Mueller, 2000）や職場要因としての上司サポート知覚及び同僚サポート知覚（e.g., 竹内, 2021）、組織要因としては組織社会化戦術（e.g., Gruman et al., 2006; 竹内, 2021）が確認されてきた。しかしながら、日本企業の多くで実施されている新入社員を対象とする導入研修が、プロアクティブ行動に対していかなる影響を及ぼすのかについては、必ずしも十分な経験的事実の蓄積がなく、議論の余地が大きく残されている（Klein & Weaver, 2000; 竹内, 2016）。

上記の研究上の課題を踏まえ、本研究では社会的交換理論（Blau, 1964）に基づき、図 1 に示す仮説と分析枠組みを設定し、新規学卒者に対して実施した 3 回の縦断的調査データ（導入研修前・研修後・研修 10 ヶ月後）を用いて、新規学卒者のプロアクティブ行動に対する導入研修の効果メカニズムを実証的に明らかにすることを目的とする。とりわけ、（1）導入研修前後での新規学卒者の組織との社会的交換関係の変化（仮説 1：導入研修によって新規学卒者の組織との社会的交換関係は高まるだろう）、（2）組織との社会的交換関係がプロアクティブ行動に及ぼす影響（仮説 2：組織との社会的交換関係がプロアクティブ行動に対して有意な正の影響を及ぼすだろう）について検討することを具体的課題とする。

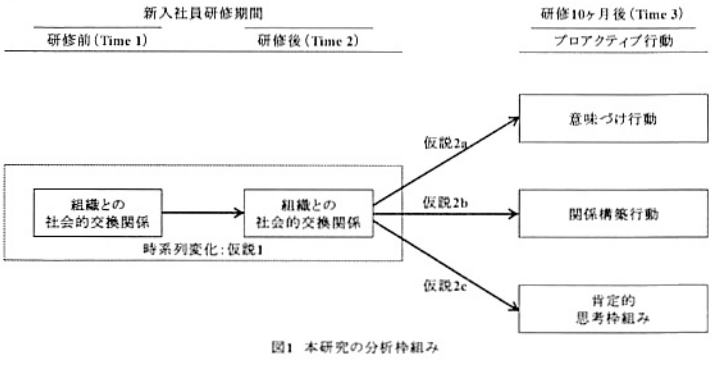


図1　本研究の分析枠組み

【方法】

（1）調査対象・時期

本研究は、A 企業の新卒採用者（正規従業員）115 名を対象に、分析枠組みに基づく 3 回の縦断的調査を実施した。なお、調査協力は回答者の自由意思であることが説明されると同時に、個人回答の企業への秘匿性への配慮が行なわれた。1 回目調査（Time 1、以下 T1）は、新入社員研修開始直前に集合一括調査を実施し、全数（115 部）から有効回答を得た。2 回目調査（Time 2、以下 T2）は、新入社員研修（約 2 週間）終了後に、T1 調査対象者に集合一括調査を実施し、115 部を回収した。3 回目調査（Time 3、以下 T3）は、T2 調査の 10 ヶ月後に同様の対象者に集合一括調査が行われた。その結果、115 部を回収することができたが、マッチング等ができないサンプルを除いた 113 部を本研究の最終的な分析対象とした。

（2）測定尺度

組織との社会的交換関係（T1・T2）　Shore et al.（2006）を参考にした 7 項目を用いた（α (T1)＝.69; α (T2)＝.80）。　プロアクティブ行動（T3）　Ashford & Black（1996）を参考にした 20 項目（情報探索行動：4 項目（α＝.79）、フィードバック探索行動：4 項目（α＝.89）、上司との関係構築行動：3 項目（α＝.77）、一般的社会化行動：3 項目（α＝.81）、ネットワーキング行動：3 項目（α＝.91）、肯定的思考枠組み：3 項目（α＝.85））を使用した。プロアクティブ行動 6 次元モデルに対して確認的因子分析を行った結果、このモデルがデータと高い適合性を持っているとともに、1 次元モデルよりも適合度が有意に高いことが確認された（IFI＝.92; CFI＝.92; RMSEA＝.08; $\Delta\chi^2$＝563.31, p < .001）。　統制変数（T1）　年齢と性別を設定した。

【結果と考察】

本研究の分析枠組みに従い、仮説の検証を行った。具体的には以下のとおりである。

第 1 に、新入社員研修の効果に関する仮説 1 を検証するため、新規学卒者の組織との社会的交換関係における研修前後での t 検定を行った。その結果、組織との社会的交換関係の平均値が、研修前よりも研修後の方が有意に高まっていることが明らかになった。この結果は、新入社員研修によって新規学卒者の組織との社会的な交換関係意識が高まることを示すものであり、仮説 1 は支持された。

第 2 に、研修終了 10 ヶ月後の新規学卒者のプロアクティブ行動（T3）に対する研修後の組織との社会的交換関係（T2）の影響（仮説 2）を検討するため、階層的重回帰分析を行った。その結果、新規学卒者のプロアクティブ行動の全次元（情報探索行動、フィードバック探索行動、上司との関係構築行動、一般的社会化行動、ネットワーキング行動、肯定的思考枠組み）に対して組織との社会的交換関係が有意な正の影響を及ぼしていることが明らかになった。これらの結果から、新入社員研修によって高められた新規学卒者の組織との社会的交換関係が、その後のプロアクティブ行動に対して効果的な影響を及ぼすことが示され、仮説 2 は支持された。　（たけうち　ともかず）

免許返納者と免許保有者における免許返納に対する意識の検討

○太子のぞみ[1,2]　金山英莉花[2]　内山伊知郎[2]
([1]独立行政法人日本学術振興会　[2]同志社大学)

キーワード：免許返納，運転中止，意思決定

【背景と目的】

運転を継続するか中止するかを選択することは，高齢期に重要な意思決定の一つである．事故防止のためには運転中止の判断を適切にすることが求められる．そのため，免許更新あるいは返納の判断に影響を与える要因を明らかにする必要がある．運転に対する主観的な感情によって運転継続の利点が高く評価されること，運転頻度によって運転継続の利点や運転中止の損失が影響を受けることを確認した（Taishi et al.,2018）．しかしながら，先行研究は場面想定法であるため，実際に免許返納を経験された高齢者を対象として検討することが望まれる．一方，運転中止は高齢者の心理社会的側面に悪影響を及ぼすことが指摘されてきた（例，社会的な孤立の助長（Choi et a., 2012），抑うつ症状の悪化（Fonda et al., 2001））．免許返納後に，運転中止に対してどのような心理状態になるのだろうか．より良い意思決定をするためには，免許返納者の運転中止に対する満足感及び関連する要因について明らかにすることが必要である．

本研究は，免許返納者と免許保有者を対象に免許返納を予測する要因を明らかにすること，免許保有者の免許返納についての意思決定，免許返納者の運転中止に対する満足感及びそれらに関連する要因を明らかにすることを目的とする．

【方法】

調査参加者　調査参加者は，免許返納群 309 名（女性 166 名，男性 143 名），平均年齢 75.27 歳（*SD* ＝4.22 歳），免許保有群 309 名（男性 192 名，女性 117 名），平均年齢 69.04 歳（*SD* ＝5.83 歳）であった．なお，㈱マクロミルに依頼して，60 歳以上の免許取得経験者を対象に抽出し，オンライン調査を実施した．

質問紙項目　基本属性として，年齢，性別，一人暮らしの有無，配偶者の有無，主観的健康度 1 項目 4 件法について回答を求めた．運転に関して，免許保有年数，運転頻度(回/月)，過去三年の違反回数，物損・人身事故の合計回数について尋ねた．なお，免許返納群に対しては，「自動車免許を保有していた最後の三年間についてお尋ねします.」と提示した上で，回答を求めた．運転に対する感情は 1 項目 7 件法（非常に嫌い 1～非常に好き 7），運転に対する必要度は 1 項目 7 件法（全く必要でない 1～非常に必要 7），運転に対するリスク認知は 1 項目 10 件法（全く危険ではない 1～非常に危険である 10），免許保有の利点は 1 項目 10 件法（全く利点がない 1～非常に利点がある 10），免許非保有に対する損失は 1 項目 10 件法（全く損失はない 1～非常に損失がある 10）で回答を求めた．対処行動尺度（佐藤他，2007）として，「二重タスクを避ける」「悪条件での運転を避ける」など 7 因子 16 項目 5 件法を使用した．さらに，免許保有群に対しては，免許返納･運転継続の意思決定として，「将来，あなたは免許を返納しますか？＊免許を返納するかわからない場合も，その場面を想定してお答えください.」に対して，間違いなく免許を返納する 1～間違いなく運転を継続する 6 の 1 項目 6 件法で尋ねた．免許返納群に対しては，運転中止に対する満足感として，「運転を止めたことについて，どの程度満足していますか.」に対して，非常に不満 1～非常に満足 5 の 1 項目 5 件法で尋ねた．

倫理的配慮　同志社大学心理学部研究倫理審査委員会による承認を得て実施した．

【結果と考察】

まず，従属変数を免許返納(1)と免許保有(2) としたロジスティック回帰分析を変数増加法ステップワイズ（尤度比）にて実施した（Table.1）．ダミー変数として，性別(男性 1,女性 2)，一人暮らし(該当 1,非該当 0)，配偶者(有 1,無 0)を投入した．その結果，年齢が高い，配偶者無し，免許保有年数が短い，運転頻度が少ない，物損・人身事故の合計回数が多い，免許を保有しないことに対する損失が小さい，加齢に伴う機能変化を補うために走行中に対処行動をとる者ほど，免許を返納していたことが示された．

Table.1 ロジスティック回帰分析結果

独立変数	標準化偏回帰係数 β	Odds rate		95%信頼区間 下限	上限
年齢	-0.34	0.71	***	0.67	0.76
性別					
一人暮らし					
配偶者の有無	0.82	2.28	**	1.24	4.19
主観的健康度					
免許保有年数	0.05	1.06	***	1.03	1.08
運転頻度	0.02	1.02	*	1.00	1.04
違反回数					
事故回数	-0.63	0.53	***	0.41	0.69
運転に対するリスク認知					
運転に対する感情					
運転に対する必要度					
免許非保有の損失	0.52	1.68	***	1.51	1.87
二重タスクを避ける					
悪条件での運転を避ける					
同乗者の存在によるディストラクションを避ける					
負荷の高い径路を避ける					
道路環境からの情報獲得をしない	-0.69	0.50	**	0.33	0.75
他車とのインタラクションを避ける	-0.41	0.67	*	0.47	0.93
交通規則違反を避ける					
Nagelkerke R^2	0.72				
Hosmer と Lemeshow の検定	$\chi^2(8)=4.19, p=.84$				

$^{*}p<.05, ^{**}p<.01, ^{***}p<.001$

次に，免許保有群の意思決定について，免許返納を選択した割合が 73.40%，運転継続を選択した割合は 26.50%であると回答した．そこで，従属変数を意思決定，独立変数を上記要因とした重回帰分析を実施した結果，性別（β = -.18, p <.01），運転の必要度（β = .12, p <.05），悪条件での運転を避ける（β = -.14, p <.05）との関連が示された（R^2 =.11, p <.001）．したがって，男性より女性，現段階で，運転の必要度が低く，特に雨天や夜間など悪条件での運転を避けている者ほど免許返納を選択していることが明らかとなった．

最後に，免許返納群の運転中止に対する満足感について，満足を回答した割合が 69.58%，不満足と回答した割合が 14.56%であると回答した．そこで，従属変数を満足感，独立変数を上記要因とした重回帰分析を実施した結果，運転に対するリスク認知（β = .12, p <.05），免許非保有の損失（β = -.46, p <.001），交通規則違反を避ける（β =.20, p <.001）との関連が示された（R^2 =.30, p <.001）．したがって，リスクを高く見積もり，免許を保有しないことの損失が少なく，当時違反をしないように交通標識を注意してみるといった対処をしていた者ほど，自身の選択に対する満足感が高いことが明らかとなった．

以上から，免許保有者の約 7 割は免許返納の意思があるものの，実際に免許返納を予測する要因とは異なることが確認された．また，免許返納者の約 7 割は自身の選択に満足しており，運転や免許に対する心理要因との関連が確認された．以上から，高齢期において運転中止および免許返納の判断に際してより良い意思決定をするための示唆が得られた．

（たいし のぞみ・かなやま えりか・うちやま いちろう）

2色(前面色・背景色)の関係を「怒り感情」を持つイラストから考える

○下平晃道(京都工芸繊維大学) 来田宣幸(京都工芸繊維大学)
キーワード：感情、色彩、表情

【目的】

色彩と感情の関係について、これまで多くの研究がなされてきた。しかし、表情を用いた線画イラストに配色を施して、それらに対する感情評価を行った加藤・山下（2016）のように、これまでの研究では色相の上で典型的な色のみを用いることが多く対象とした色数が少ないため、より多くの色彩での検討の必要性を感じた。そこで本研究では、彼らが調査した感情の中の一つである「怒り感情」に焦点をあて、「怒り」と関係の深いとされた赤だけでなく、 ビビッドトーン色相環のうち、暖色、寒色、中間色を含む8つの色を用いた調査を行った。

また、彼らの調査では、表情を用いた線画イラストに配色を施して、それらに対する感情評価を行っていたが、それらの感情が顔の表情からもたらされるものなのか、色彩からもたらされるものなのか評価が難しいと感じたため、本研究では、中心に置かれた前面色に顔の表情イラストを配置した（顔ありパターン）と、表情を置かずに色面だけにした（顔なしパターン）を用意し、２つを比較することによって、イラストにどのような効果が生じるのかを検証した。

【方法】

被験者：10代以下から70代以上の81名（男性42人、女性39人、回答なし1人／10代以下4名、20代11名、30代15名、40代43名、50代6名、70代以上3名）

手続き：Googleアンケートフォームによるアンケート調査。表示媒体はPC、タブレット、スマートフォンなど、被験者の表示環境に依存。グレー・黄緑・赤の前面色×8つの背景色の画像を1つづつ表示し、それぞれの図からどの程度の「怒り」を感じるかを 「全く感じない・感じない・ほとんど感じない・少し感じる・感じる・とても感じる」の6段階で評価。

刺激について：本研究では、評価する色を求めるために、PCCS(日本色研配色体系)という、日本の美術デザイン教育などで普及している表色系を用いて刺激用の画像を作成した。PCCSには明度・彩度の両方を含んだトーンの概念があり、明度と彩度を軸に区分された有彩色トーンが12分類と、無彩色の5分類がある。今回はビビッドトーンから、赤(v2)、だいだい(v5)、黄(v8)、黄緑（v11)、青緑(v14)、青(v17)、青紫(v20)、 赤紫(v23)、グレー(Gy-8.0)の9色を選んだ。なお、1-8が暖色系、13-20が寒色系、その他が中性色系である。

実験では、刺激として中心に置かれた前面色に「怒り」を表現したイラストを配置した(顔ありパターン)と、表情を置かず、色面だけにした(顔なしパターン)を用意した。

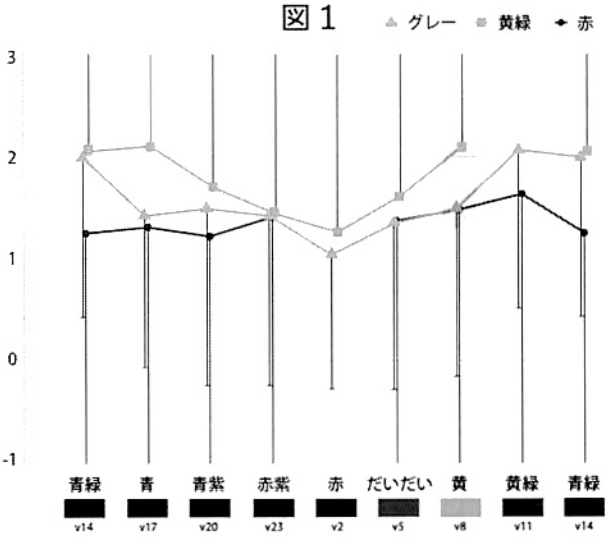
前面色には、事前に行ったパイロットにおいて最も高い怒り感情値を示した有彩色・赤、無彩色・グレー、最も低い怒り感情値を示した有彩色・黄緑を置き、背景色には、赤、だいだい、黄、黄緑、青緑、青、青紫、赤紫の8つの有彩色を用いた。

【結果】

色面のみの図となる（顔なしパターン）では、前面色・赤が、前面色・黄緑とグレーに比べて、どの背景色でも高い値を示した。この結果は、赤が「怒り感情」を高めると指摘した加藤・山下（2016）の先行研究と一致していた。また、背景色の違いで見比べると、背景色・赤が他の背景色と比べ、最も高い値を示したが、他の暖色の背景色・赤紫、だいだいが全体として高かった。すなわち暖色は他の色と比べて「怒り感情」を持ち、その中でも赤が最も高い値を示したということが確認できた。（顔ありパターン）では（顔なしパターン）と比べ、前面色にイラストがプラスされることによって、どの前面色と、どの背景色の組み合わせにおいても「怒り感情」が上昇した。また前面色・赤では、どの背景色でも「怒り感情」を一定の割合上昇させ、前面色・グレーと前面色・黄緑では、背景色との組み合わせによって上昇の度合いに違いが見られた。

背景色が「怒り感情」を高めることの少ない青などの寒色系のみの配色になると「怒り感情」は減少することもあり得るのではないかと予想したが、結果としてその配色でもイラスト効果値は上昇していた。つまり、寒色 + 寒色でもイラストの効果により「怒り感情」は高められることがわかったが、相対的に暖色が入っているものよりも値は低かった。

図１



【考察】

（顔ありパターン）の値 -（顔なしパターン）の値で求めたイラスト効果値のグラフで、前面色・グレー + 背景色・黄と黄緑 + 背景色・黄の値を比較すると（図１）、前面色によって値に差が見られ、暖色が持つ「怒り感情」効果はあるものの、暖色であるということだけでは説明することが難しい仕組みが「怒り感情」の認知にはあることが示唆された。しかし、今回の実験では特定することが難しかった。

色の理解には、生得的な面と後天的な面の二通りが考えられ、生得的な部分では視覚の進化や、交感神経や脈拍などに影響を与えるという側面がある。また後天的な部分としては、古くから平安時代の襲衣のようなものから視覚的に継承されてきた感覚や、万葉集などに収められた歌に表されたシンボルとしての色彩感覚など、地域特有の文化からの影響も考えられる。今後も、多様な方面から学術的な研究を重ねていく必要があるだろう。

【引用文献】

加藤真梨子・山下利之『線画表情の感情認知における色の影響』2016

（しもだいらあきのり・きだのりゆき）

視覚情報処理に基づく識別技術習得のために

○関陽子
（科学警察研究所）

キーワード：筆跡鑑定，アイトラッキング，専門知識

【目的】技術や知識の習得は，学校教育における知識や技術の習得のように，理論や技術，あるいは蓄積されたノウハウが存在していて，それに従って，あるいは習得者の個人性や能力に合わせて指導者が変更を加えながら指導するなどの方法がある．一方，特に伝統的な芸能や工芸品などの制作技術などは，師匠や先輩のパフォーマンスを見て技術を「盗ん」だり，本人が芸能や制作の経験や結果からのフィードバックを通じて知識や技術を理解しそれらを蓄積して身に付ける（成田・下出・来田，2017）という習得方法もある．

法科学における筆者識別技術は，原理や基本的な検査方法，検査のための機材とその使用法については，学校教育のような指導方法により技術や知識が伝達される．しかし，実際の検査の場面では，特に新規に筆跡鑑定に携わる者は，「文字のどの部分を観察すればよいのか」や「観察結果をどのように記述すればよいのか」「観察結果から結果を導いたプロセスを論理的に表現するにはどのように記述したらよいのか」などの場面で困難に直面することが多い．その対応として，「先輩の作成した鑑定書をたくさん読めばおのずとコツが身に着く」などといわれることがあるが，これは，いわゆる伝統的な芸能や工芸などの分野での知識や技術の伝達手法と通じるものがあるだろう．この職人的な技術習得手法に，学校の教育的な手法を取り入れることは可能だろうか．

一般に，専門家とは，専門家でない人（以後，非専門家と呼称する）が持っていない知識や技術を持っている人と解されるが，筆跡の個人性を識別するということについては，非専門家でも日常経験のレベルで容易に行っている．筆跡鑑定を職業としていない，いわゆる筆跡鑑定の専門家でなくても，友人の誰かが書いた文字を見て「これは○○さんが書いた」と筆者を正しく判断できる．そうであれば，筆跡鑑定の専門家とはどんな人なのだろうか．筆跡鑑定の専門家と非専門家はどこが違っているのだろうか．それとも，専門家とは名ばかりで，非専門家と異なるところはないのだろうか．もし違うとすると，専門家はどんな専門知識を持っているのだろうか．また，もし，非専門家が，専門家と同程度に筆者を正しく識別できるとすると，専門家と非専門家では，結論を導くための方法やその根拠に違いはあるのだろうか．

本稿では，筆跡鑑定の専門家の技術について，専門家が非専門家とは異なる専門知識を持っているならばどんな知識や技術なのかという点と，その専門知識の習得のためにどのようなトレーニングが必要かについて考察する．

【方法】アイトラッキング装置を使用して筆跡の個人性を識別するタスクを行い，タスク中の視線の動き（注視点の移動，停留箇所，停留時間など）と観察に要する時間を測定して，筆跡鑑定専門家と非専門家の間で比較した．また，識別結果とその根拠についての回答も比較した．

実験参加者は，文書鑑定を職業として行っている者（以後，専門家と呼称する）8名（男性7名，女性1名，経験年数は3ないし25年），文書鑑定の非専門家20名（男性10名，女性10名，年齢は20歳から59歳まで）であった。非専門家20名のうち2名は計測データ取得に失敗したため，非専門家については計測データ取得が可能であった18名のデータを計測結果の分析に使用した。ただし，識別結果と結果の根拠説明の分析には，計測データを取得できなかった2名分のデータも含めた20名分のデータを分析した．

実験では，ディスプレーに複数の筆者が記載した同じ字種の漢字1文字6個を提示した。実験参加者は，刺激を観察して，同じ筆者が書いたと思われる程度に書き方が似ているサンプルどうしにサンプルをグループ分けし，グループ分けの結果とその根拠を口頭で説明するよう指示された。観察に要する時間は制限せず，結果を得られるまで自由に観察できるようにした。回答は，すべて，もしくは一部であっても不明（＝わからない，判断できない）も可とした。刺激は，16種類を使用した。アイトラッキング装置（アイテックデジタルシステム・Eyetech TM3）および解析用ソフトウェア（デジタルイメージテクノロジー・QG-Plus）を使用し，実験参加者が刺激を観察しているときの視線の移動，停留個所，停留時間および観察時間（刺激提示から回答までに要した時間）を測定した。回答については，正答・不明・誤答の比較および回答の根拠の説明内容を分析した。

【結果と考察】すべての刺激の観察に要した総観察時間の平均は，専門家で1170.750sec，非専門家で1044.944secで，両者の観察時間の差は有意ではなかった（$t(24) = .527$, n.s.）。「不明」と答えた回答数を専門家と非専門家で比較したところ，専門家の平均は4.875個，非専門家の平均は1.833個で，両者の不明回答の平均個数の差は有意であった（$t(26) = 2.729$, $p < .05$）．非専門家は，回答に迷った場合でも，似ているか似ていないかのどちらかに分類するのに対して，専門家は，迷った場合には不明と回答することが多かった。専門家の回答に不明が多かったのは，無理にどちらかに分類しないという方略を用いたと考えられる。専門家の判断は，冤罪を防ぐという観点とかかわりがある可能性が考えられた。停留エリアと停留時間を，専門家と非専門家のそれぞれについて調べた。いずれのグループでも，判断結果の説明に用いた個所をよく観察しており，停留時間も他の個所より長かった。停留エリアを専門家と非専門家の間で比較すると，専門家の停留エリアの方がより広範囲であった。非専門家は，目立つ特徴のある個所およびその特徴を共通に持つサンプルを集中的に観察し，その他のサンプルはあまり観察しない傾向があった。一方，専門家は個々のサンプルの目立つ特徴以外の個所も観察し，目立つ特徴を共有しているかどうかにかかわらず6個のサンプルのすべての組み合わせを観察していた。ただし，両者の総観察時間には有意な差がなかったことから，専門家は効率よくサンプルを観察していたと考えられる。結論の理由の説明を専門家と非専門家で比較した。専門家は，字画相互の長さや位置関係で説明するなど相対的，論理的に説明したが，非専門家は，「若い人が書いた」など推測による説明や，擬態語を用いた説明が多かった。

目視による筆跡の特徴抽出，筆者の個人差との関連付けのためには，特徴の差を相対的に，論理的に説明する，目立つ特徴以外も観察し観察個所を増やす，すべての観察対象を観察するなどの訓練が必要であると考えられた。また，目立つ特徴から即座に結論を出すのではなく，それ以外の特徴の比較結果を含め，慎重に検討する訓練も必要と考えられた．

【引用文献】成田智恵子・下出祐太郎・来田宣幸（2017）．伝統的工芸品産業の技能継承における問題の所在　京都工芸繊維大学学術報告書，**9**，13-30.

（せきようこ）

反応スタイルと Satisfice の関係性を探る

Web 調査での回答モニターおよび学生の回答行動の比較を通して[a]

○田崎 勝也[1]
([1]青山学院大学国政政治経済学部)

キーワード：反応スタイル、Satisfice、バイアス、中間回答、Web 調査

【目的】Satisfice とは調査項目への回答時に十分に注意資源を割かずに行う回答行動で（Krosnick, 1991）、広義には手抜き回答を意味する。近年心理学研究でも利用されることが多くなった Web 調査では、謝礼と引き換えに調査に参加する「プロの回答者」が示し得る回答バイアスとしてその対応が議論されている。他方、調査全般で問題となる回答バイアスに反応スタイル（Response Style, 以下 RS）があり、例えば 5 件法のリカート尺度で日本人は中間回答の 3 を好んで選択することが示されている（田崎・申, 2017）。

手抜き回答の結果としてある特定の選択肢が選ばれることがあり、双方のバイアスの関係性は必ずしも明らかになっていない。田崎（2020）はこうした点に鑑み、Satisfice と RS を同時に測定し、両者の関係性を探った。分析の結果、質問内容に関わらず 5 件法で 3 を選ぶ回答バイアスには Satisfice の結果生じるものと RS の結果生じるものの双方があることがわかった。

本研究の目的は学生から収集したデータにおいてもこうした結果が再現されるのかを確認する。また手抜き回答と関連がある 3 種の指標によって Satisfice を因子として測定するモデルの適否についても検討する。

【方法】回答モニターによる Web 調査データは、調査会社 A に登録するモニター2,000 名（学生を除く）が対象で、2020 年 3 月にオンライン回答ツールを通してデータを収集した。回答者の基本属性は全国に居住する 20 歳から 60 歳（平均年齢＝40.33; SD＝10.94）で、その男女比は男性 984 名（49.2%）、女性 1,016 名（50.8%）だった。また学生への調査は 2021 年 10 月から 12 月にかけて都内私立大学に通う学生を対象に行った。Web 調査データは Google フォームにより作成したオンライン回答ツールを用いて 183 名からデータを収集した。平均年齢は 20.34 歳（SD＝1.15）、男女比は男性 59 名（32.2%）、女性 124 名（67.8%）だった。

本調査では 3 種の RS を取り上げ、平均・共分散構造分析を援用した RIRSMACS（Weijters, Schillewaert, & Geuens, 2008）を用いて測定した。測定内容の異なる 3 尺度（外国人労働者の意識 10 項目、文化的自己観 20 項目、関係流動性 10 項目）から計 42 項目をランダムに 3 つの観測変数（14 項目ずつ）に配置した。そして 5 件法リカート尺度への反応を基に、極端反応（ERS）は 1 もしくは 5 の選択数、中間反応（MRS）は 3 の選択数、黙従反応（ARS）は 4 もしくは 5 の選択数として数量化し因子として測定した。

さらに本研究では RS の測定と並行して Satsifice に関しても因子として数量化を試みた。Satsifice 因子の測定には、手抜き回答との関連が議論される(a)回答時間、(b)同一回答の頻度、(c)指示項目違反の頻度、の 3 指標を用いた。回答モニターの回答時間は調査会社から提供されるパラデータを利用し、学生データの回答時間は回答者が書き入れた回答開始時間とデータが送信された時間の差異によって指定した。Time 変数は正規性からの乖離を考慮し、6 段階の順序変数に変換して分析に用いた。また直線回答（straight line answering）としても知られる同一回答には、連続して配置される測定内容の異なる 5 項目 3 セット任意に取り上げ、各質問群で回答の分散がゼロになる頻度を計算した。最後に指示項目違反は Maniaci & Rogge (2014) の Directed Questions Scale (DQS) を参考に作成した 7 つの DQS 項目への違反回答の頻度を変数として用いた（例：「この項目には左から 2 番目の番号に○を付けてください」）。

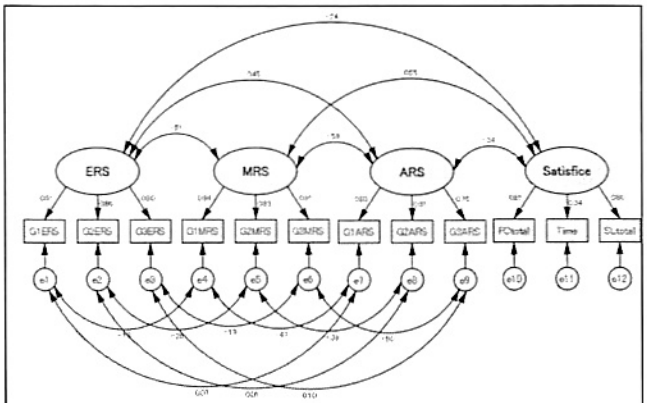


Figure 1. 「RS+Satisfice」測定モデル（学生データ）

【結果・考察】Figure1 は「RS+Satisfice」測定モデルの学生データへの適応結果である。当該モデルのデータとの適合度は χ^2=56.522, df=39, p=.034, CFI=.988, RMSEA=.050 と良好な値を示し、また回答モニターへの適合度（χ^2=623.664, df=39, p=.000, CFI=.978, RMSEA=.087）と比較すると若干であるがこちらのモデルの方が良かった。尤度比検定により因子分散をゼロに固定したネストモデルと比較すると、すべての因子がデータ適合に有意に寄与していたが、その影響力は MRS→ERS→ARS→Satisfice の順で減じ、回答モニターへの 4 因子モデルと同様、最もインパクトのある因子は中間反応バイアスだった。

Satisfice 因子と関連性が示された RS 因子は MRS で r=.548、p=.000 だった。回答モニターへの分析では当該因子間の相関は r=.640、p=.000 だったので、その関連性は若干弱くなったが、学生データでも手抜き回答は MRS とは異なる機制により 3 の選択となって示さることがわかった。

【引用文献】

Krosnick, J.A. (1991). Response strategies for coping with the cognitive demands of attitude measures in surveys. *Applied Cognitive Psychology*, 5, 213-236.

Maniaci, M.R. & Rogge, R.D. (2014). Caring about carelessness: Participant inattention and its effects on research. *Journal of Research in Personality*, 48, 61-83

田崎勝也 (2020). Web 調査データの反応バイアスおよび Satisfice の検出とその補正. 日本心理学会 第 84 回大会.

田崎勝也・申知元. (2017). 日本人の回答バイアス：レスポンススタイルの種別間・文化間比較. 心理学研究, 88, 34-42.

Weijters, B., Schillewaert, N., & Geuens, M. (2008). Assessing response styles across modes of data collection. *Journal of Academy of Marketing Science*, 36, 409-422.

[a]本研究は JSPS 科研費 19K03209 の助成を受けたものです。

（たさき かつや）

自己信頼性と社会的交流性の発達をとらえた保育・療育

―自画像描画と対図形画の事例検討をもとに―

○田中真介[1]、横井川美佳[2]、本原琴美[2]
([1]京都大学国際高等教育院 [2]京都大学大学院人間・環境学研究科)

キーワード：自己信頼性、社会的交流性、保育・療育、三方向画・成長画、対図形画

【問題提起】

幼児期の発達過程では、「自己信頼性」(自分自身の価値を発見し尊重する力)と「社会的交流性」(自分とまわりの世界とのつながりをつくる力)が連関して、人格形成を実現していく。「自画像」(成長画・三方向画)と「対図形画」の描画分析を通して、幼児期の自己信頼性と社会的交流性の特質をとらえ、新たな保育・療育の方法を提起した。

【対象と方法】

(1) 対象：京都市の保育所の幼児を対象とした研究資料を新たに自己信頼性の発達の観点から分析した。横断群：年中児18名(男7名、女11名)、年長児24名(男11名、女13名)。また、生活年齢(CA、6：2)と発達年齢(DA、5:10)が同一の幼児2名を比較検討した。縦断群：幼児24名(男11名、女13名)を、年中時(5歳0か月～5歳10か月)、年長時(5歳10か月～6歳10か月)に調査した。また、幼児3名を2歳から8歳の6年間、追跡調査を行った。

(2) 方法：新版K式発達検査で自己信頼性と社会的交流性の発達の水準と特質を把握し、次の描画課題を実施した。A4版の白紙を提示し、描画場面を録画した。①成長画：幼少、現在、成人の自分の姿を描かせ、幼時から現在への変化と将来への変化を質問した。②三方向画：「自分の顔と体を、前、後ろ、横から見たところ」を描かせた。③対図形画：A4用紙に一対の形を予め刺激図形として印刷した図版を準備した。大きい「□□」「○○」、小さい「□□」「○○」、小さい「△△」等の図版を提示して自由に絵を描かせた。

【結果と考察】

横断群と縦断群の結果を総合し、自画像(自己認識)と対図形画(対関係認識)の発達過程を素描する(図1、図2)。

(1) 成長画と三方向画(自己認識)

1) 初期(DA4歳～5歳代)：①4歳後半(DA5歳前半)：成長に伴う体の成長を表現したが、自己の発達を「拡大-縮小」の量的変化のみでとらえていた。後向き画は描け始めるが横向き画は前向きとなる。自己の観察と表現は精緻化した。

2) 中期(DA5歳半～6歳代)：②5歳半ば(DA6歳頃)：幼少を現在や成人と異なる服装に。拡大-縮小の認識は正確だったが、現在の自分と大人は服装・髪型とも同一表現。横向き課題を白紙にする場合もあった。③5歳後半～6歳前半(DA6:0-6:10)：成長画で服装を変えるなど各時期の独自の特質の表現が始まった。横向き画では目や鼻を側方に寄せた。

3) 後期(DA6歳半～7歳代)：④6歳半ば～6歳後半(DA6歳後半～7歳前半)：成長画で身体各部の変化への言及が始まり、三方向画では横向きが確定した。⑤7歳代(DA7歳後半)：身体全体や髪などの身体各部の変化を細やかに表現し、相違や変化を問う質問には服装や生活形態の変化を答えた。



図1. 成長画と三方向画の縦断変化
(4歳8か月から7歳0か月へ)

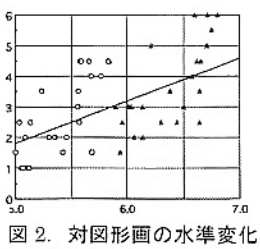


図2. 対図形画の水準変化
(○：年中児、▲：年長児)

(2) 対図形画(対関係認識)

1) 初期(DA4歳～5歳代)：①刺激図形を意識せず、図形内外に自由に好きな絵を描いた。②対図形の形を再生したり中に塗り込む、刺激図形を単純に囲み込んだ顔の絵を描くなど、刺激図形が意識され意味を持ち始めた。

2) 中期(DA5歳半～6歳代)：③刺激図形の内部に絵を描くとともに、対図形の形を顔などの輪郭線として利用した。④自分がイメージした素材や風景を刺激図形の中に密度高く凝縮して緻密な絵を描いた。

3) 後期(DA6歳半～7歳代)：⑤自分のイメージを全体とし、対図形を部分として自分の絵の一部に位置づけた。⑥ストーリーを展開しながら対図形を利用した絵を描き、さらに友人や家族などの「他者」に言及して「関係」や「経験」を表現した。図2に対図形画の水準変化の過程を示す。

(3) 事例検討と総合考察

1) 描画分析による自己信頼性の発達評価：横断群のM児(左)とK児(右)の自画像(三方向画と成長画)を図3に、対図形画を図4に示す。二人の生活年齢(CA)は6歳2か月、発達年齢(DA)は5歳10か月で一致していた。しかし両者には自己信頼性の形成水準に大きな違いがみられた。

M児は、三方向画で「横から見た自分」を十分にとらえておらず、また、成長画でも自分の発達的な変化を体の大小の観点から理解していた。それに対してK児は、「横から見た自分」を精密に描いており、さらにラケットをもった手の描き方から「視点や立場を入れ換える力」があると推察された。成長画でも身体各部の特徴を綿密に描き、自分の特徴とその変化の過程を客観的に繊細に理解し始めている。

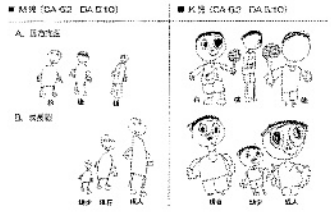


図3. 三方向画と成長画

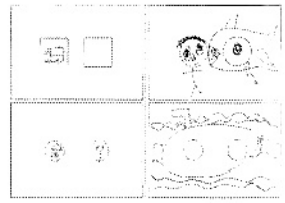


図4. 対図形画(M児とK児)

2) 自己信頼性の発達的意義：M児とK児は、自己信頼性の発達水準が異なっていた。M児(左)は、対図形の中に自分の世界を小さく描いた。それに対してK児(右)は、海の中の光景を思い浮かべて「サメと戦っている自分」や「潜水艦」を描き、海底の世界や潜水艦での冒険ストーリーをイメージ豊かに話した。さらに、対図形の円形(○)を自分やサメの目や潜水艦の窓として活かした。K児は自分の世界を広々と大きくイメージし、相手の世界(対図形)をその自分の世界の一部として位置づけている。

幼児期から児童期には、「内部と外部」「部分と全体」、そして「自他」の関係を発達的に「転倒」する力(二重の対関係の操作力)を獲得することによって、自他の立場を入れ換えて対象世界をより深く理解することができ始める。それは自分の魅力と価値の新たな発見につながっていく。自己信頼性と社会的交流性の生成発展は、幼児期から児童期・青年期に至る人格形成の発達的な基礎となる。

(たなかしんすけ、よこいがわみか、もとはらことみ)

看護学生と理系大学生の向社会的行動についての比較検討

○八木利香[1]　木村たき子[2]
([1]狭山市医師会立狭山准看護学校　[2]コンピタンス心理学センター)
キーワード：向社会的行動、思いやり、准看護学生

【目的】
向社会的行動は、「外的な報酬を期待することなしに、他人や他の人々の集団を助けようとしたり、こうした人々のためになることをしようとする行為のことである。このような行為をする場合には、行為をする側の者にあるコスト（損失）や自己犠牲、危険といったものを伴うことが多い。」（アイゼンバーグ&マッセン,1991）と定義され、思いやり行動とも呼ばれる。この向社会的行動には４つの特徴があるとされている。第１は、相手のためになる援助が含まれていること。第２には、外的報酬を目的としないものだということ。第３は、ある種の損失(コスト）が伴っている。第４には、自発的な行動ということである(菊池,1995)。向社会的行動を測定する尺度として、信頼性・妥当性共に検証されている菊池(1995)の作成した「向社会的行動尺度(大学生版)」がある。この尺度を使用し看護学生や医学生、大学生を対象とした先行研究は複数あるが、准看護学生を対象とした研究は見当たらない。向社会的行動は看護を志す学生の方がより高いのではないかと仮設し、准看護学生と理系大学生の向社会的行動の差異について検討をする。

【方法】
研究対象・調査時期：2022 年 4 月に入学した准看護学生 35 名(平均年齢 33 歳・男子 5 名・女子 30 名)および理系大学生 33 名（平均年齢 19 歳・男子 23 名・女子 10 名）を対象とし、入学 3 ヶ月後の 6 月に実施した。
調査方法：質問紙は、菊池(1995)の作成した「向社会的行動尺度（大学生版)」を使用した。質問項目は 20 項目で「したことがない」「一回やった」「数回やった」「しばしばやった」「いつもやった」の５段階であり，順に１～５点としており 20 項目の得点を加算していく。得点が高いほど向社会的行動の傾向が高いことを示している。

【結果】
菊池(1995)の作成した「向社会的行動尺度（大学生版)」20 項目の平均得点は准看護学生 3.43、大学生 2.43 であり、准看護学生の方が高い得点であり、各個人の合計得点の平均も准看護学生 64.60、大学生 43.67 と准看護学生の方が 20 点も高い得点であった。准看護学生で平均４点「しばしばやった」を超えている項目は、10)バスや列車で立っている人に席をゆずる 4.08・14)家族の誕生日や母の日などに家に電話したりプレゼントしたりする 4.53・15)見知らぬ人がハンカチなどを落としたとき、教えてあげる 4.25・16) 知らない人に頼まれて、カメラのシャッターを押してやる 4.42 の４項目であった。大学生は、平均 4 点を超えた項目はなく、3 点「数回やった」を超えたものは 13)授業を休んだ友人のために、プリントなどをもらう 3.15・14)家族の誕生日や母の日などに家に電話したりプレゼントしたりする 3.47・15)見知らぬ人がハンカチなどを落としたとき、教えてあげる 3.26・16)知らない人に頼まれて、カメラのシャッターを押してやる 3.09 の４項目であった。准看護学生と大学生の得点の高い項目は、14)15)16)の３項目共通していた。平均得点の差異が大きかった項目は、3)転んだ子供を起こす、7) 列車などで相席になったお年寄りの話し相手になるという２項目で 1.5 以上の差異があった。准看護学生で平均２点「一回やった」と低い得点の項目は、１)列に並んでいて、急ぐ人のために順番をゆずる 2.50・２)お店で渡されたおつりが多かった時、注意してあげる 2.94・４)あまり親しくない友人にもノートを貸す 2.67・17)バスや列車で、荷物を網棚に載せてあげる 2.50・20)自動販売機や切符売り場の近い方を教えてあげる 2.86 の５項目であった。大学生は、平均１点「したことがない」と低い項目は１)列に並んでいて、急ぐ人のために順番をゆずる 1.85・２)お店で渡されたおつりが多かった時、注意してあげる 1.85・７)列車などで相席になったお年寄りの話し相手になる 1.82・12)雨降りの時、あまり親しくない友人でもカサに入れてやる 1.91・17)バスや列車で、荷物を網棚に載せてあげる 1.85・19)ケガ人や急病人が出たとき、介抱したり救急車を呼んだりする 1.91 の６項目であった。准看護学生と大学生の得点の低い項目についても、１）２)17)の３項目が共通していた。

【考察】
本調査研究では、向社会的行動について准看護学生と理系の大学生の比較しその差異について検討することであった。今回の調査研究で使用した菊池(1995)の「向社会的行動尺度(大学生版)」は自分の生命が危機にさらされるような行動は含まれておらず「小さな親切尺度」というレベルの向社会的行動を比較したものであった。菊池(1995)の研究では看護学生は思っていたより低い結果が得られたと報告しているが、本研究では、准看護学生は「向社会的行動尺度（大学生版)」の質問項目 20 項目全てにおいて高い得点結果を示しており、准看護学生が向社会的行動の傾向が高いことが示唆された。大学生の高い得点となっている項目は、自らの行動に相手の反応が肯定的であることが保証されている行動の項目であるといえる。断られたらいやな思いをするという感情が優位になっていると考えられる。中でも 3)転んだ子供を起こす、7) 列車などで相席になったお年寄りの話し相手になるという項目の差異は 1.5 以上であり准看護学生が高い。これらの結果は、准看護学生と大学生の平均年齢に約 10 歳の差があることや、准看護学生の方が社会経験は豊富である人が多いこと、さらに女性が多く子どもを持つ親の立場の学生もいることも影響しているといえる。アイゼンバーグ(1991)は、向社会的行動をするかしないかの判断には、認知的な発達が関与しているとしており、認知的に未熟な場合や社会的経験が浅い場合などは、どのように助けてよいか分からないために向社会的行動をとれない場合もあると述べている。大学生は平均年齢 19 歳でこの状況に該当する者も多いと考える。菊池(1995)は、向社会的行動の生起過程として相手が援助を必要としている状況に気づく段階から、動機づけの段階、最後は意思決定という行動の段階を辿ると述べており、相手が援助を必要としている状況に気づくがどうかについても、認知的・社会的発達に関与しているとしている。大学生においては、思いやりの気持ちがあっても項目にある事象に遭遇したことがなく経験できなかった場合や、遭遇すればやることができるということも考えられる。准看護師を目指すというスタートの時点で「相手のためになる」「困っていたら手を差し伸べたい」という思いやりの気持ちをもって入学してきている学生が多いことも結果に影響しているといえる。今後准看護学生の２年次及び卒業後と縦断的に変化を追っていくことも必要であると考える。

（やぎりか・きむらたきこ）

離乳食場面における父子および母子の情動表出と子どものアタッチメント安定性との関連

開示すべき利益相反関連事項はありません。

○福田佳織[1]　尾形和男[2]　森下葉子[3]

([1]東洋学園大学人間科学部　[2]埼玉学園大学人間学部　[3]文京学院大学人間学部)

キーワード：情動表出、アタッチメント安定性、離乳食

【問題と目的】 これまでアタッチメント予測因として着目されてきた親のsensitivity(Ainsworth et al.,1978)は、想定された影響力より小さいことが指摘された(De Wolff & van Ijzendoorn,1997)。一方、sensitivityの派生概念としてreflective functionやinsightfulness、mind-mindnessが登場したが、それらは親による言語化を要したり、親の特徴に焦点化している。本研究では、親の言語化によらず、また、親・子それぞれの特性も踏まえた微視的分析を行うため、離乳食場面での親子のやり取りの観察と幼児期のアタッチメント安定性の測定を行い、父子・母子の情動表出の特徴と幼児期のアタッチメント安定性との関連を検討する。

【方法】 (1)対象者：離乳期調査(調査①)；離乳食開始期～生後10ヵ月未満の乳児とその父親および母親。幼児期調査(調査②)；調査①を終え、2歳前後になった幼児とその父親および母親。本研究の分析対象は3家庭6データ。家庭A(女児、調査①8ヵ月、調査②1歳8ヵ月、父母とも30代)、家庭B(女児、調査①8ヵ月、調査②2歳7ヵ月、父母とも20代)、家庭C(男児、調査①8ヵ月、調査②2歳4ヵ月、父40代、母30代)。(2)調査手続き：調査①では調査者1名が家庭訪問し、父親・母親が乳児に離乳食を与える場面をビデオ撮影した。調査②では調査者2名が再度家庭訪問し、2時間程度の観察に基づきアタッチメント安定性を測定(AQS)した。(3)分析：調査①の映像データは食事序盤・中盤・終盤の計3分間を33/100秒単位でコマ送りし、1秒内に見られた親と乳児の行動・情動・視線等を1～3記述した(BECO2(株)Q's fix DKH使用)。情動(ポジティブ(P)、ニュートラル(Neu)、ネガティブ(N))に関しては、調査者2名で確認し、食い違い箇所は著者3名の話し合いで統一した。調査②では、観察後に各々カードをソートし、大きく食い違う項目は話し合いで調整し、各々の得点の平均をZ変換した。

【結果・考察】　表1は、幼児期の対父・対母AQS得点と乳児期の父子・母子の情動表出数(率)をまとめたものである(本研究は少数サンプルのため統計処理は行わない)。表1から、A児母はP率が高いがA児のAQSは低く(r=.30より低い場合は不安定型)、C児父はP率が比較的低いがC児のAQSはそれほど低くないこと、乳児のN率が高い親はNを若干表出している(B児母やC児父)が、いずれもアタッチメント安定性は低くないこと、乳児のNやP情動とAQSに関連性が見られないことから、親・乳児それぞれの各情動表出頻度(率)だけでは、子のアタッチメント安定性を十分に説明できないことが推測される。また、表2は乳児のN情動表出直後に父・母が表出した各情動数および父・母の各情動表出総数にそれらの情動表出が占める割合を示したものである。対母AQSが低いA児の母は乳児N後のP率が低く、対母AQSが高いB児の母はP率が高く、対父AQSが中程度のC児の父はP頻度低だがP率が高いことから、これらがAQSに関与する可能性が推察された。しかし、これらの率は、乳児の各情動表出率と連動しやすい。そこで、乳児のN情動表出率が同程度のケースを比較した(A児の対父・対母、C児の対父・対母)ところ、上記のP率が高い方の親へのAQSが高いことから、こうした視点での検討の可能性が示唆された。今後は、ケース数を増やし、親・子それぞれの特徴のみならず、親子の2者関係の特徴を捉えて検討することとする。

表1　AQS得点と父子・母子の情動表出数(%)

A児				
AQS	r=.514		r=.250	
episode	父164	子163	母173	子173
p	66(40.24)	7(4.29)	106(61.27)	28(16.19)
Neu	96(58.54)	137(84.05)	67(38.73)	122(70.52)
N	1(0.61)	17(10.43)	0(0)	18(10.40)
不明	1(0.61)	2(1.23)	0(0)	5(2.89)
B児				
AQS	r=.443		r=.833	
episode	父168	子167	母169	子168
p	75(44.64)	56(33.53)	93(55.03)	72(42.86)
Neu	93(55.36)	81(48.50)	69(40.83)	48(28.57)
N	0(0)	30(17.97)	3(1.77)	44(26.19)
不明	0(0)	0(0)	4(2.37)	4(1.19)
C児				
AQS	r=.457		r=.438	
episode	父162	子162	母169	子171
p	52(32.09)	2(1.24)	62(36.69)	25(14.62)
Neu	106(65.43)	124(76.54)	99(58.58)	107(62.58)
N	2(1.24)	36(22.22)	0(0)	34(19.88)
不明	2(1.24)	0(0)	8(4.73)	5(2.92)

表2　乳児N情動後の父・母情動表出数(%)と父・母の各情動表出総数に乳N後の父・母の各情動表出数が占める割合

A児				
	N父対応	父情%	N母対応	母情%
P	10(58.82)	15.15	10(55.56)	9.43
Neu	7(41.18)	7.29	8(44.44)	11.94
N	0(0)	-	0(0)	-
不明	0(0)	-	0(0)	-
総乳N	17		18	
B児				
	N対応父	父情%	N対応母	母情%
P	12(40.00)	16.00	22(51.16)	23.66
Neu	18(60.00)	18.95	17(39.53)	24.64
N	0(0)	-	3※1(6.98)	100.00
不明	0(0)	-	1(2.33)	-
総乳N	30		43※2	
C児				
	N対応父	父情%	N対応母	母情%
P	13(36.11)	25.00	10(29.41)	16.13
Neu	22(61.11)	20.75	22(64.71)	22.22
N	1(2.78)	50.00	0(0)	-
不明	0(0)	-	2(5.88)	25.00
総乳N	36		34	

※1 いずれも乳児の表情を模倣したり、意図的にN情動を提示してみせたもの。

※2 乳児のNで記述が終わっているため、母の行動との組み合わせ上のN数字は総数44-1となる。

本研究の実施にあたり、科学研究費（基盤研究(C)(一般)課題番号17K04366，研究代表者：福田佳織）を受けた。

（ふくだかおり・おがたかずお・もりしたようこ）

思春期における「自己信頼性」と「社会的交流性」の発達連関

—自己理解と精神健康度の関連性をもとに—

○本原琴美[1]・田中真介[2]
（1 京都大学大学院人間・環境学研究科　2 京都大学国際高等教育院）

キーワード：思春期の発達,自己信頼性,社会的交流性,自己理解（20 答法）,精神的健康度（GHQ）

【問題提起】

思春期には,自分自身の価値を発見し尊重する発達的力量として「自己信頼性」が育ち,仲間集団の中での新たな「社会的交流性」の力の展開によって,自他に共通する普遍的な価値を発見し共有し尊重する発達的な力量を獲得していく。

心身の自己理解の内容をもとに思春期の自己信頼性の構造と発達過程を明らかにし,自己信頼性と社会的交流性の関連にもとづいた新たな教育方法を提起する。

【対象と方法】

（1）**対象**：小学 3 年生から 6 年生の児童（180 名）,及び中学 1 年生から 3 年生の生徒（119 名）,計 299 名に協力を得た。内訳（男:女）は小 3 年 53 名（18:35）,小 4 年 38 名（10:28）,小 5 年 50 名（12:38）,小 6 年 39 名（14:25）。中 1 年 34 名（17:17）,中 2 年 61 名（23:38）,中 3 年 24 名（9:15）。

（2）**方法**：1）自分自身の心身の健康の自己理解の内容をとらえるために,「健康アンケート」として「日本版一般健康調査 12 項目版（GHQ-12）」を実施した。各項目に 4 件法で「不健康～健康」の度合の回答を求めた。4 つの選択肢に－2 点から＋2 点の得点を与え,無回答の項目は 0 点とした。得点が高いほど精神的に健康となる。

2）自己理解の構造（自分自身の時間的・発達的な変化, 社会的・多面的な関係性）をとらえるために「自己理解アンケート」を実施し,次の 8 つの質問に自由記述で回答させた。①「20 答法」（「わたしは～」に続けて）,②「3 つの願い」,③「小さい頃の自分」,④「自分の成長の実感」,⑤「印象深い記憶」,⑥「将来どんな人になりたいか」,⑦「好きな歌」とその理由,⑧アンケートの感想。20 答法への記述内容をネガティブ/ポジティブで分類し,さらに「自己信頼性」と「社会的交流性」カテゴリーに類型化して分析した。

【結果と考察】

（1）**精神的健康度**：精神的健康度の得点は個人差が大きかったが,学年ごとの平均値（図 1）を比較すると,小学 3 年生（小 3）で健康度が高く,小 5 では低い傾向にあった。小 6 では回復したが,中学生は小学生よりも全体として低かった。また,中 1 に低下し,中 2 ではやや回復していたものの,中 3 では最も低い健康度を示した。

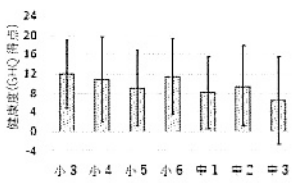


図 1. 健康度の学年比較

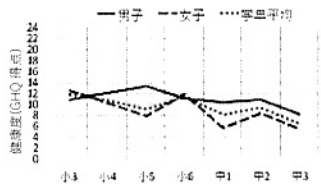


図 2. 健康度の男女比較

健康度得点の男女比較（図 2）では,小 5 で男子より女子の健康度が有意に低かった（$p<0.05$）。特に「有能度・信頼度」で不健康との回答が多かった。小 5 女子では,思春期スパートによる体の変化への戸惑い,また友人関係の悩みによって精神的健康度が低く抑えられている可能性がある。また大規模校の児童で特に健康度の低い事例が見られた（事例分析を参照）。小 6 男女の高い健康度には,将来への夢,最高学年での活躍,中学への希望などが影響していると推察される。

（2）**自己理解**：20 答法での記述数（図 3）は個人差が大きかったが,学年平均では小 5 と中 1 の記述数が多かった。小 3 と中 3 は平均 10.6 個だった。一方 20 個全てに回答したのは小学生で 52 名（29%）,中学生で 47 名（39%）だった。

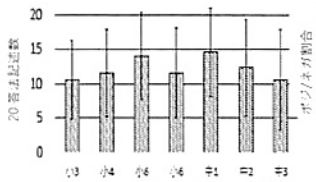


図 3. 記述数の学年比較

図 4. 記述内容のポジ/ネガ分析

20 答法の記述内容をポジティブとネガティブに分類した。ポジティブな記述例：「好き」「得意」「楽しい」「よくほめられる」「明るい」「友だちが多い」など。ネガティブな記述例：「～がきらい」「～が苦手」「身長が低い」「めんどくさがり屋」「勉強が苦手」「頭が悪い」「あきっぽい」などである。

小中学生とも全体としてポジティブな記述が多い傾向にあった。回答率の学年別の平均値（図 4）では,小学生ではポジティブ回答率が高く,小 5 女子と中学生では低い傾向にあった。自己理解と健康度との関連が示唆される。

（3）**事例検討と総合考察**：健康度 12 項目を 2 項目ずつ 6 カテゴリーに類型化し,教育的援助の観点を考察した。小 5 と中 2 のうち,健康度が特に低かった各 3 名の女子の健康度特性を六角形グラフで検討した（図 5）。

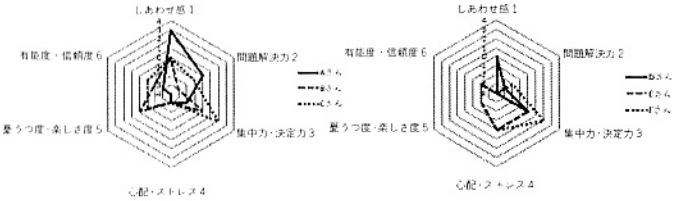


図 5. 健康度特性のカテゴリー分析（小 5,中 2）

小 5 では「しあわせ感」は高く「有能度・信頼度」「問題解決力」が低かった。20 答法では,国語や算数など勉強が苦手,感情表現の揺れ,自分への自信のなさが特徴的だった。

中 2 では,「集中力・決定力」以外の「しあわせ感」「有能度・信頼度」「憂うつ・楽しさ度」「心配・ストレス」「問題解決力」の 5 項目で健康度が顕著に低かった。20 答法では,「学業」よりも「性格・内面」の回答が多かった。将来展望に揺らぎがあったが,好きな人に出会いたいなど,社会的自立モデルとしての「あこがれの人」との出会いを求めていた。

健康度が高いほど,ポジティブな自己理解の回答が多くなる傾向にあった。自己理解の深まりが思春期での「心の小箱」の生成発展につながり,精神的な健康を支えている。

健康度が低い事例でも,日常生活での楽しさを実感していた場合には,ポジティブな自己理解の記述内容が多かった。

小中学生の発達では,自分の言葉で自己を理解し,未来への願いをもち,仲間や家族との交流の中で自分と向き合い, 自己信頼性を育んでいくことが重要と考える。

（もとはらことみ・たなかしんすけ）

絵本の読み聞かせにおけるマザリーズと年長児の物語産出の関連

○金山英莉花[1]　太子のぞみ[2・3]　内山伊知郎[2]
([1]同志社大学大学院心理学研究科　[2]同志社大学心理学部　[3]独立行政法人日本学術振興会)
キーワード：マザリーズ　物語産出　絵本

【目的】

幼児期後期になると自分で想像して物語を作る物語産出がみられる（内田, 1982)。これまでの研究で，お話しの題材や幼児の年齢による差が確認されてきた（e.g. 秋田・大村，1987)。本研究は，どのような読み聞かせ方が物語産出を促進するのか，マザリーズの観点から検討する。マザリーズとは，養育者による乳幼児への語りかけ方であり，声の調子が高い，抑揚が大きいなどの特徴を持つ。また，読み聞かせ頻度によって子どもの物語理解の能力やマザリーズを聞く機会が異なる可能性があるため，読み聞かせ頻度も独立変数として分析する。

【方法】

実験参加者　年長児（男児 13 名,女児 8 名　月齢 $M = 72.19$ $SD = 4.11$）とその母親　21 組

実験はすべて zoom を用いて行った。

質問紙　クアルトリクスを用いて，母親にフェイス項目と絵本の読み聞かせ頻度（回／月）を回答させた。

マザリーズの測定　母親に自身の子どもに読み聞かせをすると想定して文章を読ませて録音した。録音した声を音声分析し，平均周波数（声の高さ）と抑揚を算出した。

物語産出の測定　まず，母親が絵本「おまえうまそうだな」（ポプラ社）を参加児に読み聞かせた。その後，参加児の物語理解度を測るため，物語理解課題を 5 問行った。そして，参加児に絵本の続きを自由に口述させた。

物語産出の評価　物語産出の内容を内田 (1982)を参考に評価した。具体的には，量的分析と質的分析の 2 種類行った。量的分析とは，物語産出の長さであり，動詞の数で測定した。質的分析とは，参加児の話した内容が絵本の内容と一貫性があるか否かであり，一貫性のあるものは統合的結合，一貫性がなく内容が飛躍しているものは非統合的結合に分類した。

【結果】

分析対象児

全参加児が物語理解課題の基準（2 問）を上回った。そのため，全参加児を分析対象とした。平均周波数，抑揚，読み聞かせ頻度において，それぞれの中央値を基準に高群か低群のいずれかに分類した。中央値だった参加者は分析から除いた。

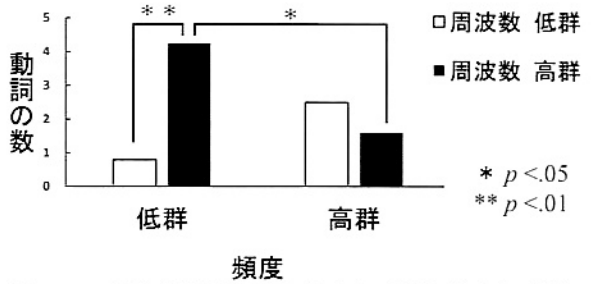


Figure1 平均周波数と読み聞きかせ頻度を独立変数とした分散分析の結果

Table1　質的分析のクロス集計表

	周波数 低群		周波数 高群		
	頻度 低群	頻度 高群	頻度 低群	頻度 高群	合計
統合的結合	3	3	1	5	12
非統合的結合	2	1	3	0	6
合計	5	4	4	5	18

量的分析　物語産出の長さについて，マザリーズと読み聞かせ頻度を独立変数として分析を行った。まず，平均周波数の高低と読み聞かせ頻度の高低を独立変数，動詞の数を従属変数とした分散分析を行った（Figure1)。その結果，平均周波数および読み聞かせ頻度のそれぞれの主効果は有意ではなかったが（$F(1,14) = 2.55$, $n.s.$；$F(1,14) = .35$, $n.s.$)，相互作用が有意であった（$F(1,14) = 7.41$, $p < .05$)。単純主効果の検定の結果，読み聞かせ頻度低群において，平均周波数高群の方が動詞の数が多いことが確認された（$F(1,14) = 9.32$, $p < .01$)。また，平均周波数高群において，読み聞かせ頻度低群の方が動詞が多いことが確認された（$F(1,14) = 5.50$. $p < .05$)。抑揚の大小，および読み聞かせ頻度を独立変数とした同様の分析を行ったが，それぞれの主効果および相互作用ともに有意ではなかった（$F(1,13) = .13$, $n.s.$；$F(1,13) = .13$, $n.s.$；$F(1,13) = 1.84$, $n.s.$)。

質的分析　実験者 2 名で，それぞれの参加児の物語産出を，統合的結合か非統合的結合かのどちらかに分類した。その結果，一致率は 86%であった。不一致の場合は両者で協議して決定した。統合的結合が 15 名，非統合的結合が 6 名であった。まず，平均周波数および読み聞かせ頻度との関連を検討するため，フィッシャーの正確確率検定を行った結果，周波数高群において，読み聞かせ頻度高群の方が統合的結合が多いことが確認された（$p < .05$）(Table1)。次に，抑揚および読み聞かせ頻度との関連を検討した結果，有意差は確認されなかった。

【考察】

マザリーズと物語産出の関連を検討した。量的分析について，読み聞かせ頻度が低い場合は，声の調子を高く読み聞かせている方が，子どもの物語産出が長いこと，また，声の調子を高く読み聞かせている場合は，読み聞かせ頻度が低い方が物語産出が長いことが確認された。本研究の対象年齢である年長は，親から読み聞かせてもらうだけではなく，自分で絵本を読むことに移行する時期でもある。本研究では，親が子どもに読み聞かせる頻度について質問したが，読み聞かせ頻度が低い参加児は自分で絵本を読んでいる可能性があり，マザリーズによる言語発達の促進（内山，2015）と，自分で絵本を読むことの 2 つの効果により語彙が増え，物語産出が長くなった可能性がある。また，年長は親からのマザリーズが大人向けの話し方に移行する時期でもある。読み聞かせ頻度が低く，マザリーズで読み聞かせる母親は，普段はあまりマザリーズで話しかけないが，読み聞かせの際はマザリーズであると示唆される。読み聞かせ頻度が少なく，マザリーズが珍しかったため，子どもがより絵本に注目し，物語産出も長くなった可能性もある。

さらに，質的分析について，声の調子を高く読み聞かせている場合は，読み聞かせ頻度が高いと，絵本と物語産出の内容に一貫性があることが確認された。これまでの研究では，マザリーズによって言語発達が促進されるということが指摘されてきたが，本研究により，子どもの話す内容にも効果があると確認された。今後そのメカニズムについて，さらに検討する必要がある。

（かなやま えりか・たいし のぞみ・うちやま いちろう）

障がい児の保護者における発達支援事業の満足度と療育効果

― 広島県の通所型施設における予備的検討 ―

○木村　友昭
（MOA 健康科学センター）

キーワード：児童発達支援、障がい児家族、アウトカム評価

【背景・目的】

広島県内にある通所型の児童発達支援事業所、および放課後等デイサービスでは、一人ひとりの発達に合わせて、個別および集団方式で療育を行っている。2016～18 年、この施設の療育の効果について調査研究を実施し、子どもの問題行動が有意に減少すること、並びに、子どもの問題行動と保護者の QOL が相関していることが明らかになった（木村他、2020）。障がい児への支援だけでなく、その家族への支援も重要な課題である。障がい児の家族に対して、療育の効果を評価するために、日本版家族アウトカム質問票（Family Outcomes Survey Japan: FOS-J）が開発された（Ueda et al., 2015）。本研究では、通所型の施設を利用している障がい児の保護者を対象に、FOS-J を使用して療育の効果を評価するとともに、保護者の QOL、および発達支援事業に対する満足度との関連を検討した。

【方法】

2021 年、広島県内の通所型の発達支援を実施している事業所において、利用している児童の保護者を対象にアンケート調査を行った。事前に MOA 健康科学センター倫理審査委員会の承認を得、事業所のスタッフが保護者に対し、研究内容、倫理的配慮、および個人情報の保護について説明を行い、調査票を配布した。

調査票の内容は、FOS-J、10 項目版 MOAQOL 調査票（MQL-10）、療育サービスに対する満足度（5 件法 8 項目）、保護者の年代および性別、並びに利用者（児童）の年齢、性別、障がいの内容、きょうだいの有無、サービス区分および通所期間である。

FOS-J は、子どものニーズに対する家族の対処に関する 24 項目（5 つの下位尺度）と、療育の効能に関する 17 項目（3 つの下位尺度）から構成され、5 件法で回答を得る（5 点満点）。得点が高いほど、家族のアウトカムが良好であることを示す。MQL-10 は包括的な QOL を測定するために開発された尺度であり、得点が高いほど、QOL が良好であることを示す（木村他、2009）。

統計解析は、SPSS ver. 20（IBM 社）で行い、尺度間の相関は、Spearman の順位相関で分析した。2 群の比較は t 検定、3 群以上の比較は ANOVA で分析した。また、尺度の信頼性は、Cronbach の α 係数で確認した。

【結果】

71 人の保護者（男性 5 人、女性 66 人）が研究に参加し、調査票に回答した。保護者の年代は、20 代が 2 人、30 代が 24 人、40 代が 39 人、および 50 代が 6 人であった。児童（男児 44 人、女児 27 人、平均年齢は 8.2 歳）のうち、児童発達支援が 15 人、放課後等デイサービスが 42 人、重症心身障がい児通所支援が 14 人で、平均通所期間は 3.3 年であった。児童の疾患は、自閉スペクトラム症などの精神疾患が 30 人、脳性麻痺などの身体疾患が 23 人、ダウン症などの染色体異常が 14 人、無回答が 4 人であった。また、兄弟姉妹のない児童が 9 人、1 人が 37 人、2 人以上が 21 人（欠損 4）であった。

FOS-J の各下位尺度の平均得点を表 1 に示す。

表 1．FOS-J（家族アウトカム調査）の平均得点

		平均得点
家族の対処		
Ⅰ-1	子どもの長所・ニーズ・能力の理解	3.17
Ⅰ-2	家族の権利と子どもの擁護についての知識	3.01
Ⅰ-3	子どもの成長や学びへの手助け	2.89
Ⅰ-4	家族を支援する体制について	3.19
Ⅰ-5	地域への参加について	3.08
療育の効能		
Ⅱ-1	家族の権利についての知識	3.11
Ⅱ-2	子どものニーズについての情報伝達	3.20
Ⅱ-3	子どもの成長や学びに対する支援	3.14

FOS-J の下位尺度（Ⅰ-3, 4, 5、Ⅱ-2）において、MQL-10 の合計得点との間に正の相関があった。下位尺度（Ⅰ-1, 4、Ⅱ-1, 2, 3）は、療育サービスに対する満足度と有意に相関した。また、一部の下位尺度において、サービス区分や疾患の種類による違いが見られたが、子どもの性別、きょうだい数は関連しなかった。

FOS-J の各下位尺度における Cronbach の α 係数は、0.75 - 0.97 で、療育サービスに対する満足度は 0.84 であった。

【考察】

発達支援事業については、利用している子ども本人から信頼性のあるアウトカムを評価することが困難である。保護者（家族）からの情報は、ある程度、子どもの状態を代弁していると考えられる。保護者は、子どもが支援サービスを受けること自体に満足感があり、その支援により成長していくことを期待していることが FOS-J の得点に表れていると推察される。療育サービスに対する満足度の質問票はオリジナルであるが、本研究の結果、FOS-J との相関も認められ、信頼性と妥当性の一部が示された。

今後、質的な調査との混合的アプローチやフォローアップ調査が必要である。

【謝辞】

共同研究者の広島大学医学部・烏帽子田彰名誉教授、および調査に協力いただいた事業所の堀島由利氏ほか、スタッフの方々、ならびに研究に参加された皆様に、心より感謝申し上げます。

【引用文献】

木村友昭他　2020　障がい児の行動は、その保護者の生活の質、スピリチュアルな態度、およびストレス対処力に関連する：通所型施設におけるフォローアップ調査　MOA 健科報，24, 3-12.

Ueda K et al. 2015 Psychometric validation of the Family Outcomes Survey-Revised in Japan. Res Dev Disabil, 39, 55-66.

木村友昭他　2009　大規模健康調査のための QOL 尺度開発とその妥当性の検証：10 項目版 MOAQOL 調査票（MQL-10）　MOA 健科報，13, 73-84.

（きむら　ともあき）

コロナ禍における大学生のストレス反応と思い

―KH Coderによる自由記述分析を中心に―

○有木永子[1)]　伊坂裕子[1)]　（日本大学　国際関係学部[1)]）

キーワード：Covid-19　大学生　ストレス KH-Coder　＊本発表に際して開示すべきCOIはありません

【問題と目的】

Covid-19により大学生のメンタルヘルスの悪化が指摘されている．我々は2021年の調査から，コロナ禍における大学生は①ストレス反応は男性より女性が高い,②「コロナ」「授業」「生活」「人」「自分」など学びと生活，他者と自己へ思いが巡らされ，高ストレス群は「予定」「ストレス」，低ストレス群は「自身」「慣れる」が特徴語であることを報告し,コロナ禍で強いられる生活状況の受け止め方がストレス反応の違いにつながった可能性を考察した[1)]．今回は2022年調査として，同内容について変化の様相を明らかにすることを目的とする．

【方法】

分析対象者：参加者448名のうち，日本出身で，男女の性別と自由記述欄への回答があり，2021年調査にも協力した10名を除く258名（男性120名・女性138名，平均年齢18.63±1.06）を分析対象とした．学年構成は，1年生191名・2年生19名・3年生26名・4年生22名であった．

調査時期：2022年4月～5月

調査方法および内容：心理系選択授業において口頭および文書で研究計画を説明し，同意の得られた人が所定のGoogle Formへアクセスして個別に回答する形式をとった．調査内容は，1．生活の変化　2．道徳判断　3．関係流動性尺度（Yuki et al, 2007）4．相互独立的－相互協調的自己観尺度（高田・大本・清家，1996）5．心理的ストレス反応尺度*（松浦・勝岡・脇，2012）6．自由記述設問：「新型コロナ感染症は，私たちの生活にさまざまな影響を及ぼしました．日本で新型コロナ感染症が問題になってから2年以上が過ぎました．あなたが今，感じていることを自由に記述してください」（文字数制限なし）であり、本研究では5．6を報告する．

【結果と考察】

1．心理的ストレス反応尺度は抑うつ感，易怒感，身体不調感，疲労感の4因子12問から構成された尺度で，2022年4～5月（以下，第2期）の心理的ストレス反応得点(range12～48)において，2021年4～7月（以下，第1期）との比較では有意に低下していた（$t(486)=3.17$ $p=.002$．表1）．

表1　心理的ストレス反応得点結果－2021年と2022年の比較

	2021前期(N230)		2022前期(N258)			
	M	SD	M	SD	t (486)	
抑うつ感	6.72	2.92	6.10	2.66	2.44	$p=.015$ *
易怒感	5.37	2.40	4.71	2.31	3.10	$p=.002$ **
疲労感	7.28	2.80	6.80	2.70	1.93	$p=.055$ n.s.
身体的不調感	7.87	2.78	7.12	2.77	3.00	$p=.003$ **
ストレス反応合計	27.24	8.94	24.73	8.53	3.17	$p=.002$ **

性差では男性より女性が高い結果（男性23.50 女性26.14, $t(266)=2.51, p=.013$）であり，第1期の結果と同様の傾向が示された．女性のストレス反応が高い結果は，女性はさまざまな事象にリスク認知や不安の影響を受けやすいことと関連があるかもしれない．第1期のように，ワクチン接種前で強い行動制限や自粛が要請されていた時期よりも，第2期はワクチン接種や治療薬の出現など社会情勢の変容もあり，疾患への理解や状況への慣れが進んだことはストレス反応の軽減に影響した可能性が考えられる．

2．大学生の「思い」の検討（KH-Coderによる分析）

①抽出語の分析：対象者258名における抽出語のうち上位30位に認められた語を表2に示した．第1期と同様に「コロナ」「生活」「人」「自分」「早い」が上位を占めたが，「授業」「今」「友達」「オンライン」「対面」の出現頻度が減少し，「制限」「行動」「収まる」「収束」「戻る」が増加した．大学での学びに関する思いの表明が減少したのは，対面授業が再開して登校機会が増え，友達が出来ず辛い状況から少し改善が見られるのだろう．しかし，依然として行動の制限はあり，収束を望む思いがうかがえた．

表2　対象者全体における上位30位の抽出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
コロナ	156	今 ▼	24	学校 △	19
生活	87	不安	24	時間	19
早い	55	友達 ▼	24	辛い △	19
人	53	授業 ▼	23	旅行 △	19
自分	44	マスク	22	機会	18
感染	42	行動 △	21	オンライン▼	17
制限 △	31	収まる △	21	行ける	17
ウイルス	28	収束 △	21	高校 △	17
大学	27	戻る △	20	減る △	16
行く	24	外出 △	19	前 △	16

△：第1期30位以下で第2期30位以内に出現した語　＊抽出にあたり，思う・感じる・考えるを削除
▼：第1期10位以内だった語

②共起ネットワーク分析：大学生の思いとして抽出された6つのテーマを図に示した．

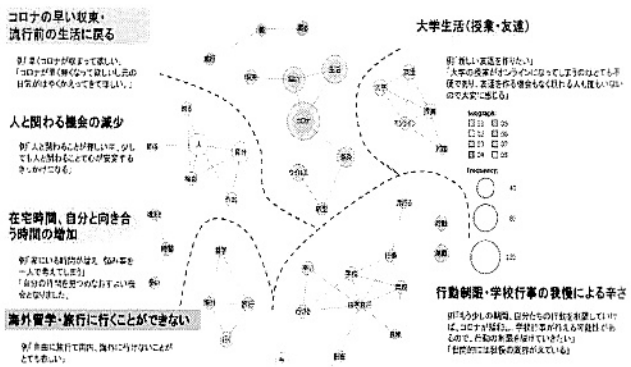


図　対象者全体の共起ネットワーク

第1期より増加したテーマは行動制限の辛さ・コロナの早い収束であり，時間経過で疾病理解やワクチン接種などが進み，長引くコロナ禍生活に慣れてきたが，行動の不自由さが辛いと考えられた．一方，減少したテーマは 大学生活（授業形態・友達）への思いで，授業への不安や友達作りへの課題はあるものの，調査協力者の74%が1年生で既に高校時よりオンライン・対面授業の経験を有することや以前より友達と関われる社会情勢が影響したと考えられた．

3．大学生の思いと“ストレスの程度（高・平均・低）×性別”を外部変数とした対応分析により，各群と特徴語の関連性を確認したところ，ストレス高群女性には「社会」「辛い」があり社会に対する思いや辛さを言語化していること，ストレス低群男性には「変わる」「必要」「続く」が見られ，コロナ禍は続き，自分（他者・社会）が変わる必要性について思いを巡らせていることがうかがえた．

文献：1）有木永子・伊坂裕子（2022）：大学生における新型コロナウイルス感染症による生活の変化とストレス（2）．日本大学国際関係学部生活研究書報告．44.pp43-52.

（ありきながこ・いさかひろこ）

催眠についてのイメージと催眠態度の対応関係の性差 その3

―一般的な催眠の利用可能性のテキスト・マイニングから―

○中谷智美[1]　福井義一[2]（非会員）　今井田貴裕[3]　磯和壮太朗[4]　堀　孝司[1]（非会員）　大浦真一[5]（非会員）
（[1]甲南大学大学院人文科学研究科　[2]甲南大学　[3]人間環境大学　[4]名古屋芸術大学　[5]東海学院大学）

キーワード：催眠イメージ，催眠態度，テキスト・マイニング，性差，大学生

【目的】

催眠は，うつ病（Alladin, 2012）や PTSD（Lynn et al., 2012）などの精神疾患だけでなく，疼痛や過敏性腸症候群などの身体疾患（Moore & Tasso, 2008）にも有効であるとされている。それにもかかわらず，わが国では催眠にまつわる誤解や偏見（例，一柳, 2006）に起因する否定的イメージのせいか，その普及は極めて不十分である。わが国における催眠の適切な普及には，誤解や偏見の解消による催眠イメージの修正が不可欠である。そこで，催眠イメージの4つの側面（一般的な催眠の利用場面と使用目的，催眠状態期待，一般的な催眠の利用可能性，自身が催眠者である場合の使用目的や利用可能性）を問う質問への回答が，テキスト・マイニングにより検討されてきた（福井他, 2022a; 中谷他, 2022a-c）。

これらの研究から，操作性（福井他, 2022a; 中谷他, 2022b, c）や本音の暴露（福井他, 2022a; 中谷他, 2022a-c），感覚・感情抑制（中谷他, 2022b），知覚・認知の低下や思考停止（福井他, 2022a），苦手克服や治療などの具体的な活用（中谷他, 2022a-c），気持ちを楽にすることや精神的治療（中谷他, 2022a, b），味覚などの感覚や思考の変容（中谷他, 2022b, c）など，様々なネットワークが検出された。これらのことから，使用場面や使用目的，利用可能性などの側面ごとに催眠イメージが異なるのに加えて，催眠者と被催眠者のどちらの立場を想像するかによっても異なることが分かった。

また，各質問への回答と催眠態度の対応関係も検討され，肯定的な催眠態度は治療（中谷他, 2022a）や潜在能力解放（福井他, 2022a），味覚の変容などを含む具体的な活用（中谷他, 2022b, c）のイメージと，中立的な催眠態度は娯楽目的の使用（中谷他, 2022a）や記憶・感情の操作（中谷他, 2022b），気持ちの変化，使途不明を示す語句（中谷他, 2022c）と，否定的な催眠態度は反社会的イメージ（中谷他, 2022a, b）や機能低下のイメージ（福井他, 2022a），使用拒否，想像不能を示す語句（中谷他, 2022c）とそれぞれ対応することが分かった。さらに，自記式尺度で測定された催眠イメージと催眠態度の相関関係には性差がある（中谷他, 2021）ことから，2つ目までの質問への回答と催眠態度との対応関係における性差も検討され，催眠態度が中立的な男性では，「思い込みが強くなる」，「本音が出てしまう」こと（福井他, 2022b）への，否定的な男性では，何かを強制するための使用や宗教（中谷他, 2022d），機能低下，思い通りに行動できないこと（福井他, 2022b）への言及がそれぞれ特徴的であることが分かった。以上のことから，質的・量的を問わず，催眠イメージと催眠態度の関係に性差があることが示唆された。

本研究では，催眠イメージについての3つ目の質問（一般的な催眠の利用可能性）への回答と催眠態度の関連における性差を検討した。

【方法】

協力者：有効回答が得られた大学生181名（うち女性130名）のデータを用いた。データには，中谷他（2022a-d）や福井他（2022a, b）と重複がある。

尺度構成：一般的な催眠の利用可能性について，「催眠を使って，どのようなことができると思いますか」という質問への回答を得た。催眠態度尺度（清水, 2009）で催眠態度得点を得た。質問票には本研究で使用しない質問や尺度も含まれる。

手続き：第2～4著者の担当講義で調査の主旨等を説明し，匿名で質問票調査を実施後，データの研究利用や不同意による不利益の非生起性等について同意した者のデータを用いた。

【結果】

得られた自由記述について，予め同義の語句の表記を統一した上で，KH Coder（樋口, 2004）により278語を抽出した。性別と催眠態度（否定，中立，肯定）の組み合わせによる6群と，差が顕著な上位42語との対応分析の結果をFigure 1に示した。催眠態度が中立的な男性では，気持ちを楽にさせること，否定的な男性では，トラウマの解消や治療，催眠態度が肯定的な女性では，味覚や感覚の変容への言及が特徴的であることが分かった。一方，催眠態度が肯定的な男性と中立的・否定的な女性では，特徴的な記述は見られなかった。

【考察】

本研究から，一般的な催眠の利用可能性についても他の質問（福井他, 2022b; 中谷他, 2022d）と同様に，催眠態度が中立的・否定的な男性の記述が特徴的であることが示された。加えて，肯定的な女性に特徴的な言及も得られた。さらに，治療的イメージは，協力者全体では肯定的な催眠態度と対応する（中谷他, 2022a）にもかかわらず，男性では否定的な催眠態度と対応することが分かった。催眠態度が否定的な男性は，諸疾患に対する催眠の有効性を知っていても，何かを強制するための使用（中谷他, 2022d）や機能低下（福井他, 2022b）などの否定的イメージに対する拒否感が強いのかもしれない。

（なかたに　ともみ・ふくい　よしかず・いまいだ　たかひろ・いそわ　そうたろう・ほり　たかし・おおうら　しんいち）

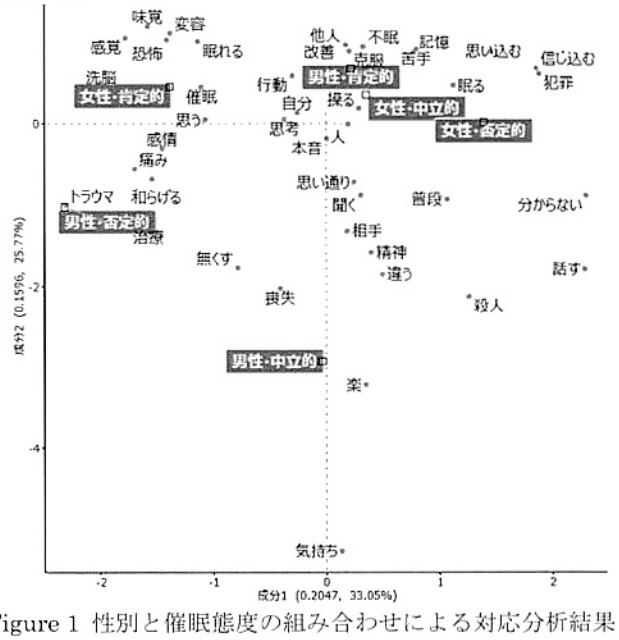


Figure 1 性別と催眠態度の組み合わせによる対応分析結果

心理カウンセリングの利用状況と利用意向

○岩﨑和子[1]
([1]京都工芸繊維大学)
キーワード：ソーシャルメディア，情報リテラシー教育，

【目的】

近年，メンタルヘルスの問題が大きな社会課題となっている。メンタルヘルス上の不調やうつ病などが疑われたときに，心理カウンセリングを受けることは早期回復や予防の点からも重要である。しかし，うつ病や摂食障害を抱えた人が医療機関を利用する割合は1割から2割程度と低い（藤原，1995；川上，2016；Cachelin & Stfiegel-Moore, 2006）。また，2019年の調査によると，心理カウンセリングの利用状況は3%と低く，積極的利用意向を示す者もわずか6%であった（中小企業基盤整備機構，2019）。援助が必要な状態にもかかわらず，援助サービスを利用しないことはサービスギャップと呼ばれ（Kushner & Sher, 1991），精神的な健康支援において解決すべき課題と認識されている。

このような状況下で，2020年から新型コロナウイルス感染症が拡大し，様々な対面サービスが困難になり，対面が中心であった心理カウンセリングも大きな制約を受けた。一方，遠隔会議ツールが活用され，社会全般で非対面のサービスが拡充した。定期的なカウンセリングを継続できるよう，遠隔でのサービスもみられるようになった（熊野ほか，2021）。遠隔での心理カウンセリングは，自宅から受けられる点や対面での緊張感が軽減される点などから，心理カウンセリングの利用を推進させ，サービスギャップを解消する1つの方策として期待できる。

しかし，心理カウンセリングに関する遠隔サービスの利用実態に関する調査報告はなく，現在の利用状況，認知状況および利用意向は不明である。そこで，本研究では，新型コロナウイルス感染症が拡大して以降における心理カウンセリングの認知・利用状況および利用意向について，対面型と遠隔型に分けてその実態を明らかにすることを目的とした。

【方法】

調査参加者および調査実施の手続き

ウェブ調査会社に登録するモニターを対象にウェブ調査をおこなった。回答者は1500名であり，20代から60代まで各300名（男性150名，女性150名）とした。調査は2021年3月に実施された。最初のページに，この調査が心理カウンセリングに関するものであること，回答は任意であり匿名であることなど倫理に関わる事項を記載し，それに同意した回答者のみが回答をおこなった。

調査項目

認知・利用状況　対面と遠隔（ビデオ，電話，チャットおよびメール）による心理カウンセリングについて，知っているか否か，利用したことがあるか否かについて尋ねた。得られた回答から「知らない」，「知っているが利用なし」，「利用あり」の3群に分けた。

利用意向　対面およびビデオによる心理カウンセリングの利用意向について，「利用したい」，「どちらかといえば利用したい」，「どちらともいえない・わからない」，「どちらかといえば利用したくない」，「利用したくない」の5件法で尋ねた。中小企業基盤整備機構（2019）の方法に従い「利用したい」と「どちらかといえば利用したい」への回答を積極的利用意向とした。

【結果】

心理カウンセリングの利用状況を性別，年代別，種類別に検討した結果、対面または遠隔いずれかの利用者は全体の13.2％（男性，12.3%；女性，14.1％）であった。カイ二乗検定にて性と年代の影響を検討した結果，いずれの年代においても性差は検出されず，年代差は女性および全体で60代と比べて40代で有意に高い値であった。対面は遠隔と比べて利用状況が高い値であった（対面，11.4％；遠隔，5.4％）。遠隔の利用者81名のうち67.0％が対面も利用していた。

認知状況については，すべてに「知らない」と回答した者は25.4%（男性，28.8%；女性，22.0%）であり，カイ二乗検定の結果，男女に有意な差はみられなかった。

認知・利用状況に男女差がみられなかったため，対象者を「知らない（N = 381）」，「知っているが利用なし（N = 921）」，「利用あり（N = 198）」の3群に分け，対面およびビデオによるカウンセリングの積極的利用意向者の年代別の割合を表2に示した。対面は全体の23.7%であり，「知らない」群で7.6%，「知っているが利用なし」群で23.8%，「利用あり」群で54.0%であった。ビデオは対面より低く，全体の14.9%で，「利用あり」群でも30.3%であった。

【考察】

本研究は，コロナ禍が1年間経過し，遠隔サービスが浸透しはじめた2021年3月に実施した。コロナ禍直前の報告（中小企業基盤整備機構，2019）と比較すると，対面型の利用状況および利用意向はいずれも4倍程度上昇していた。本研究では，医療機関以外で実施されるカウンセリングも対象としたため高い値となったと考えられるが，コロナ禍によって心理カウンセリングのニーズが高まった可能性もうかがわれる。

一方，遠隔型のカウンセリングの利用状況は対面型の半分程度であり，また，遠隔型の利用者のうち半数以上が対面型も利用していた。このことから，遠隔型を利用している人の多くは対面型も利用しており，コロナ禍において対面型の代替として遠隔型が利用されていることがうかがわれる。ただし，カウンセリングの利用経験がある人を対象としても，遠隔型の利用意向は対面型と比較して半分程度であり，遠隔型の利用促進には課題が大きいといえる。

また，遠隔型によって新たな顧客を開拓することができれば，サービスギャップ問題の解決に寄与できる可能性が高いが，対面型の利用経験がなく，遠隔型のみの利用者は少なかった。したがって，現時点ではこれまで心理カウンセリングを利用していなかった人にサービスを届けられておらず，認知度を高める工夫などが必要といえる。

（いわさき　かずこ）

育児中女性の心理的ウェルビーイング向上を目的とした メンタルトレーニングの効果検証：ランダム化比較試験

○島田恭子[1]、染矢瑞枝[2]、桐生正幸[3]
([1]東洋大学現代社会総合研究所　[2]一般社団法人ココロバランス研究所　[3]東洋大学社会学部社会心理学科)
キーワード：心理的ウェルビーイング、対人関係、無作為化比較試験(RCT)

【目的】

子育て中女性の精神健康やウェルビーイングは、産後うつなどの精神疾患や、多重役割、性役割仮説等による量的・感情的負担により、それ以外の属性に比べ低いことが示唆される。本研究は育児中の女性を対象に、オンデマンド型メンタルトレーニング HIPCom(Healthy Inter-Personal Communication)プログラムを開発し、無作為化比較試験（RCT）により効果を検証した。時間的・空間的に柔軟な精神健康増進プログラムの可能性について言及する。

【方法】

ランダム化比較試験のデザインを用い、一般事業所や自治体、SNS、プレスリリース等を通じて子育て中の女性を募集した。組み入れ基準は末子が 20 歳以下、インターネットに接続可能であること、除外基準は精神疾患で通院中ではないこと、とした。基準を満たし同意が取れた対象者を介入群と対照群に無作為割り付けし、全員にベースライン調査（T1）を行った。その後介入群は、約 6 週間の介入期間で 4 モジュールのプログラムを学習し、介入直後（T2）と 12 週間後にフォローアップ調査（T3）を実施した。対照群も T2・T3 ともに介入群と同じタイミングで調査を行い、T2 と T3 の間でプログラムを施行した。

HIPCom は、精神疾患の精神療法としてエビデンスのある対人関係療法を取り入れたオンデマンド型ウェブ配信の動画中心プログラムで構成される。忙しく細切れの時間しか取れない子育て女性に対応し、短時間で効率よく学びを深められるよう、動画、音声、テキストの複数ツールにて好みや状況に応じた方法で学習可能とし、選択分岐型、タイプ別診断、コミュニケーションの疑似体験などを取り入れ、オンラインでも学習効果が上がるよう工夫を行った。

アウトカムは心理的ウェルビーイング(以下 PWB)とし、信頼性・妥当性の検証された日本語短縮版 24 項目にて測定した。

本発表では T1-T2 のデータセットを用い、PWB の介入効果を検証するため、群（介入群・対照群）と時点（T1・T2）の交互作用を介入効果の指標として、混合効果モデルを用いた反復測定分析の結果を報告する。

【結果】

対象者は 380 名で、介入群は 189 名、対照群には 191 名が割り付けられた。年齢は 30～40 代が中心(40 代が 47.9%;30 代が 43%)で、子どもの数は 1 人=44.4%、2 人=45%、3 人=9.8%、末子の平均年齢は 4.76±4.58 歳であった。またワーキングマザーは 71.8%であり、これは厚生労働省「国民生活基礎調査」(2017)による 18 歳以下の子どもを持ち、働く母親の割合=70.8%とほぼ同程度であった。

混合モデルを使用した反復測定分析結果を示す。表 1 は介入群・対照群の時点水準ごとの PWB 得点、表 2 は固定効果の推定値、図 1 は、群ごとの PWB 得点の推移プロット図である。

分析の結果、介入群の PWB 平均値は、T1 から T2 にかけて上昇し、反復測定分析においても、群間の有意差が見られた（t=2.3; p=0.0218）ものの、群と時点の交互作用に、有意な差が見られなかった（t=-0.41; p=0.6798）。

表 1. 介入群と対照群の時点水準ごとの PWB 得点

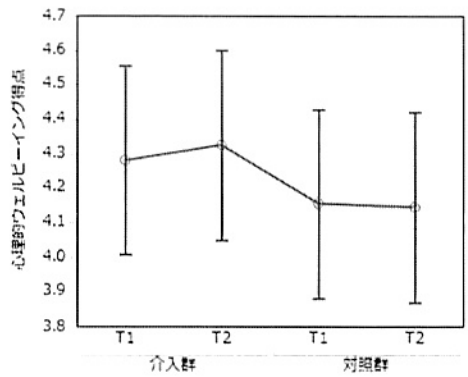
	介入群		対照群	
	n	Mean(SD)	n	Mean(SD)
T1	153	4.28(0.11)	131	4.15(0.11)
T2	80	4.33(0.12)	131	4.14(0.11)

表 2. 固定効果の推定値

	t値	p値
群	2.3	0.0218 *
時点	-0.25	0.7991
交互作用（群×時点）	-0.41	0.6798

* p<0.05

図 1. PWB 得点のプロット



【考察】

育児中女性を対象としたオンデマンド型メンタルトレーニング無作為化比較試験の結果、群間の有意差は認められたものの、心理的ウェルビーイング向上に対する有意な介入効果は認められなかった。

心理的ウェルビーイングは下位概念として、自律性、自己受容、あたたかく信頼できる他者関係、人格的成長、人生の目的、周りの環境をコントロールできる感覚、の 6 つがある。

本プログラムのコンテンツには、自分の気持ちを受け入れる(自己受容)、コントロールできる部分を見極める(自律性)、対人関係の心構えやテクニック(他者関係)、は含まれていたものの、それ以外が網羅されていなかったことや、ウェルビーイングの性質上、知識として理解してから得点が上がるまで、ある程度の時間を要した可能性が考えられる。

また本研究の限界として、追跡調査の回収率が低く、とくに介入群の脱落によるバイアスの可能性も挙げられる。多重役割や育児中の忙しさにより、プログラム前後の調査票回答に対するハードルが高かった可能性がある。今後、同様のプログラム開発にあたっては、特に介入後の調査協力へのモチベーション維持に対する工夫が必要であろう。

【助成・謝辞】

本研究は科研費基盤 C 研究(子どもの健康増進を目的とした親のワークライフバランスとこころの健康への介入：17K01799)の助成を受け行った。(しまだきょうこ・そめやみずえ・きりうまさゆき)

首尾一貫感覚と関連があるライフスタイル因子の探索について

○内田誠也[1]　田中英明[1]
([1]一般財団法人 MOA 健康科学センター)

キーワード：首尾一貫感覚，ライフスタイル，食意識，食事習慣，ストレス

【目的】 Antonovsky は「健康生成論」を提唱し，ストレスフルな出来事や状況において心身の健康を害さず，逆に成長や発展の糧になる健康要因として，自分の生きている世界は首尾一貫しているという首尾一貫感覚（SOC: sense of coherence，以下 SOC）が重要であると論じている(山崎他，2001)。

SOC は，把握可能感，処理可能感，有意味感の 3 つの下位尺度から成り立っている。把握可能感とは，自分が置かれている状況や，将来おこるかもしれない状況をある程度予測，理解できる感覚であり，処理可能感とはどんな困難な出来事でも自分で切り抜けられるという感覚や，何とかなるという感覚，有意味感とは自分の人生・生活に対して，意味があるという感覚である。このような感覚で日常生活をおくっている人はストレスを対処する能力が高く，健康であると考えられている。本研究では，SOC が高い人は，特別なライフスタイルを保持しているため健康が維持されやすいと仮説を立てた。内田他（2021）は横断調査で SOC が食意識や休養と相関があることを報告しているが、縦断調査では明らかになっていない。そこで、本研究の目的は縦断調査によって SOC とライフスタイルの関連を調べることである。

【方法】 都内にある統合医療認定施設内において健康チェックに参加した人に対して研究参加の案内を行い，書面で同意を得られた人に対して実施した。検査項目は SOC13 調査票（5 検法）(山崎他，2008)，自覚ストレス度（JPSS10）(岩橋他，2002)，ライフスタイルに関する調査票（食事・運動・休養習慣(一般社団法人 MOA インターナショナル，2016)，食意識，美術文化）であった。調査票の入力方法はインターネットを介したアンケート収集サイト（SurveyMonkey）に対象者が所有するスマートフォンあるいはパソコンを用いてアクセスして入力した。

本研究はＭＯＡ健康科学センターの倫理審査委員会の承認を得て実施した。

解析について，2 回以上健康チェックに参加した人を抽出し，各パラメータの差分のデータセットを作成した。ライフスタイル（食事，運動，休養，食意識，美術文化）のパラメータの変化で 3 群（悪化群，変化無群，改善群）に分け，群間の違いを ANOVA で解析した。

【結果】 同意が得られた対象者は 47 例（男性 19 例，女性 28 例）であった。平均年齢は 51.4 歳（SD14.7）であり，2 回調査の間隔の平均値は 248.9 日（SD161.7）であった。表 1 に各ライフスタイルの 3 群間に関する SOC の平均値の比較を示す。SOC と関連があったライフスタイルは食事習慣（p=0.012，ANOVA），運動習慣(p=0.041)，食意識(p=0.014)であった。食事習慣の多重比較検定に関して，悪化群の SOC は改善群の SOC より有意に低かった（Tukey 検定，p=0.01)。運動習慣に関して，変化無群の SOC が高く，悪化群の SOC が低い傾向であったが，多重比較検定では有意な違いは見られなかった。食意識に関して，悪化群の SOC は改善群（p=0.016）および変化無群（p=0.022）より有意に低かった。

【考察】 本研究では，SOC の変化は食事習慣と食意識の変化と関連がみられ，それらの習慣が悪化すると SOC が低下する結果が得られた。Lindmark, U. et al(2005)は，野菜を多く摂取している人は SOC が高いと報告している。本研究の食事習慣の質問項目に野菜や豆類の摂取の質問項目が含まれており，先行研究の結果を裏付けている。更に SOC と食意識と関連は新しい知見であると考える。食意識の質問は，①生命力あふれる食材（新鮮なもの，旬のもの，地元のもの，自然農法のものなど）を選んで食べていますか？②食べ物と作る人に感謝していますか？③食を楽しんでいますか？の 3 つからなっている。SOC が低くなった人は、食材に対する付加価値を意識しないようになり，食事に感謝できなくなり，食を楽しめなくなったと考えられる。日常の食事において食事の素材や，農家や調理師の思いを常に感じながら，食事の意味や対処方法を伝えるような教育によって，SOC が変化し，食生活の改善や維持につながる可能性があると推測される。

研究限界として，健康チェックの体験者が対象者であり，健康志向が高い対象者が集まった可能性がある。そのため、本研究結果は限られた群内の結果である。また，社会経済的変数による調整はされておらず，結果に影響を与えた可能性がある。

表 1　各ライフスタイルの 3 群に関する SOC の比較

		SOC				多重比較検定　p値	
		n	平均	SD	ANOVA p値	悪化ー改善	悪化ー変化無
食事	悪化	15	-2.5	6.9	0.012	0.010	
	変化無	17	0.2	5.5			
	改善	15	5.3	8.3			
運動	悪化	15	-2.8	5.2	0.041		
	変化無	5	5.2	6.7			
	改善	27	2.3	8.0			
休養	悪化	18	-0.5	6.7	0.526		
	変化無	8	2.9	7.8			
	改善	21	1.5	8.1			
食意識	悪化	8	-5.9	4.6	0.014	0.016	0.022
	変化無	18	2.3	6.8			
	改善	21	2.5	7.8			
美術文化	悪化	20	0.0	7.4	0.720		
	変化無	5	0.8	3.6			
	改善	22	1.9	8.3			

引用文献

山崎喜比古・吉井清子.(監訳) (2001). 健康の謎を解く－ストレス対処と健康保持のメカニズム. 有信堂高文社.

内田誠也・柴維彦・田中英明(2021). 首尾一貫感覚（SOC）と食事に対する意識との関連　－健康チェック参加者の質問調査より－　日本統合医学会誌. 14(2), 144-149.

山崎喜比古・戸ヶ里泰典・坂野純子(編) (2008). ストレス対処能力 SOC. 有信堂.

岩橋成寿・田中義規・福土審・本郷道夫(2002). 日本語版自覚ストレス調査票作成の試み 心身医学, 42, 459-466.

一般社団法人 MOA インターナショナル(2016). 元気になる食事法　こころとカラダの健康づくり. 一般社団法人 MOA インターナショナル.

Lindmark, U., Stegmayr, B., Nilsson, B., Lindahl, B. & Johansson, I. (2005). Food selection associated with sense of coherence in adults. Nutr J, 28, 4-9

（うちだ　せいや・たなか　ひであき）

災害による地域文化の変容と喪失

―2000年三宅島噴火の被災者への面接調査からの検討と考察―

○　大森哲至　大下茂　尹成秀（帝京大学）　田宮憲（帝京大学短期大学）

○　キーワード：自然災害 2000年三宅島噴火 地域文化の変容と喪失

【目的】

2000年に起こった東京都三宅島の噴火は15年という長期間にわたって人体や植生に有毒な火山ガスの放出が続くなど火山学的にも非常に珍しい噴火であった。この噴火により被災者は4年半におよぶ避難生活を経験し、避難解除後も火山ガスの放出が続くなかでの生活再建を強いられた。

この2000年三宅島噴火の被災者の精神健康状態について日本版GHQ28を使用し調査している大森・田宮・岩井（2019）の研究では災害の被害が長期にわたって被災者の精神健康に悪影響をもたらし、特に高齢者の精神健康の悪化が著しいことを明らかにしている。

また大森・田宮の研究（2020）では2000年三宅島噴火で被災した高齢者の精神健康の悪化の背景には、避難解除後に直面した生活環境変化への適応が若年者と比較して困難になっていることを問題視している。しかし先行研究では災害後の生活環境変化への適応と高齢者の精神健康の悪化との関連については検討されているものの、被災者の直面した生活環境の変化とは具体的にどのような変化なのかなどの検討はされていない。

わが国での災害研究を調べると、被災者の精神健康状態やPTSDなどの個人的な被害を調査している研究は多いものの災害の被害が被災地の地域コミュニティにどのような社会的被害をもたらすのかを検討するような社会的な被害を調査している研究は十分な研究成果を得るには至っていないのが実情である。したがってこれからの災害研究において災害の被害が被災地の地域コミュニティにどのような社会的被害をもたらすのかの知見を蓄積し、被災者の心理的支援につなげていくことは重要な課題であると考える。

以上の問題提起を踏まえ、本研究では2000年の三宅島噴火の被災者を対象に面接調査を行い、災害後に生じた地域文化の変容や喪失体験が被災者の日常生活や習慣にどのような変化をもたらしたのかについて検討することを目的とした。

【方法】

調査時期：面接調査は2000年三宅島噴火から21年後の2021年3月14日～16日、4月3日～6日、8月2日～6日、12月15日～16日に実施した。

対象者：本研究では2000年三宅島噴火を経験し現在も三宅島に居住している10名に研究の趣旨を説明し面接の同意を得た上で調査を実施した。調査対象者の年齢は32歳から82歳まで分布しており、平均年齢は65.4歳（SD =14.5歳）であった。

面接の手続き：面接の実施は、対象者となる三宅村の被災者の自宅を訪問して個別面接を実施した。面接に要した時間は1名あたり約1時間程度であった。面接の結果は被面接者の同意を得てICレコーダーに録音し、その内容について逐語録を作成し、分析を行った。

面接内容：面接は半構造化面接を実施した。質問の内容は対象者の性別や年齢などのデモグラフィック特性、災害前後に感じる地域コミュニティや文化の変化、災害後の日常や習慣の変化、それら変化に対する心情などであった。

倫理的配慮：面接調査の実施にあたり、質問への回答は本人の自由意思を尊重し、強制することはしなかった。

【結果】

面接の内容は共同研究者ですべての面接内容を討議し、各概要を整理した。その一部を紹介する。

・65歳男性：噴火前と後での大きな変化として感じるのは葬儀の方法である。噴火前の三宅島の葬儀のスタイルは地区のみんなが参列するのが一般的だった。しかし噴火後はそのような伝統的なスタイルはなくなり近親者だけで質素に行うスタイルが定着するようになっている。その影響は島の伝統的なスタイルの喪失だけでなく、みんなで集まる機会の減少にもなっているなど、特に高齢者にとっては人間関係の面でも負の変化や影響をもたらしている。

・82歳女性：三宅島には昔から「島ことば」という島独特のことばがあった。噴火前はそんな島ことばでの会話が聞こえてくるのが日常的だった。いまでは島ことばを使う人は高齢者でもほとんどいなくなった。それは都会に長く避難したことが原因だと思う。これまで引き継がれてきたものがなくなってしまうのは淋しい感じがする。

・72歳女性：噴火後の三宅島では火山ガスの被害から雇用の場が少なくなり、若い人たちの島離れが加速している。噴火前の島の魅力は子どもからお年寄りまでみんなが顔見知りで島の伝統文化を地区のみんなで守っていこうという意識が強かった。噴火後はそのようなつながりや意識も希薄化していて、伝統文化を喪失していくことに対してもあきらめの気持ちが強くなっている。

【考察】

分析の結果、2000年三宅島噴火後は、お葬式などの方法が変化したり、方言が減少したり、若い人たちの島離れが加速したりなど、被災者を取り巻く日常や習慣にさまざまな変化をもたらしていることが明らかになった。また災害後に起こっているさまざまな変化は、地域文化の変容や喪失の問題だけでなく、それらの変化や喪失が起こっていることにより、地域の人間関係の希薄化や淋しさ、あきらめなど、心理的な面でも負の影響を及ぼしていると語っていた。

これまでの2000年三宅島噴火の被災者を対象にしている大森・田宮・岩井（2019），大森・田宮（2020）では、2000年三宅島噴火の被災者の精神健康の悪化が持続している理由として、打ち込めるものや趣味の有無、生きがいの有無などの要因が影響していることを示している。しかし、本研究の結果では、被面接者の多くが災害後に生じた地域文化の変容や喪失に対して、多大な心理的ダメージを被っていると語っていた。したがって今後の災害研究においては、被災者個人に焦点をあてるだけでなく、災害がもたらす社会的被害についての検討についても知見を積み上げ、被災者支援に活かしていくことが重要であると考える。

本研究の調査は、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C）課題番号19k03212研究代表者：大森哲至）からの支援を受けた。

（おおもりてつし・おおしもしげる・ゆんなりひで・たみやけん）

SNSへのポジティブ/ネガティブな投稿と幸福感との関連

―自己隠蔽度の調整効果―

谷口　淳一
（帝塚山大学心理学部）

キーワード：SNS投稿、幸福感、自己呈示、自己隠蔽

【目的】本研究では、SNS(Instagram)にポジティブ/ネガティブな投稿をする人ほど幸福感が高い/低いのかを自己隠蔽度を考慮に入れて検討した。ポジティブ/ネガティブな投稿をすることで、他者からそのような評価を得られることが期待されるため、幸福感が高く/低くなると考えられる（仮説1）。ただし、あるがままの自分を隠しながら投稿すると、他者から期待される評価を本来の自分への評価と捉えられないため、幸福感への影響は弱くなると考えられる。つまり、仮説1の関連は自己隠蔽しているほど弱くなるだろうとの仮説2を検証した。

【方法】調査参加者　女子大学生179名(平均年齢19.96, *SD*=0.74)がオンライン調査に回答した。　調査時期　2021年11月　調査項目　(1) Instagramの利用有無（167人(93.30%)が利用）、アカウント保有数　(2) 1個目～3個目の各アカウントの種類（本垢（フェイストゥフェイスでよく会う知り合いや友人、アルバイト先の同僚等とフォローし合っているアカウント）、趣味垢（趣味用のアカウント）、サブ垢（親しい友達と繋がるためのアカウント）、その他）(3) 各アカウントでのポジティブ/ネガティブな内容の投稿頻度各1項目5件法（5.かなりしている～1.全くしていない）(4) 各アカウントでの投稿の自己隠蔽度（自分のポジティブ/ネガティブな部分を閲覧者にどの程度隠しているか）各1項目5件法(5.かなり隠している～1.全く隠していない）(5) 主観的幸福感：伊藤他(2003)の主観的幸福感尺度15項目4件法

【結果と考察】本発表では、1個目、2個目のアカウントの結果のみ報告する。1個目のアカウントは94%が「本垢」であった。2個目のアカウントは49%が「趣味垢」で、47%が「サブ垢」であった。

1個目のアカウントでポジティブな投稿をしている人ほど幸福感が高く(r=.16, p=.058)、ネガティブな投稿をしている人ほど幸福感が低い(r= -.16, p=.067)という有意傾向の相関関係が見られた。また、2個目のアカウントでポジティブな投稿をしている人ほど幸福感が高い(r=.21, p=.041)という有意な相関関係がみられ、仮説1は概ね支持された。2個目のアカウントでのネガティブな投稿と幸福感との有意な関連はみられなかった(r= -.06, p=.538)。

次に、幸福感を目的変数、ポジティブ/ネガティブな投稿の頻度と隠蔽度、その交互作用項を説明変数とした重回帰分析を行った(Table)。1個目のアカウントについてはいずれの変数からの有意な影響もみられなかった。2個目のアカウントでのポジティブな内容の投稿については交互作用項(β= -.27, p=.006)が有意になっていた。下位検定を行ったところ(Figure 1)、隠蔽度が低い場合(-1SD)にはポジティブな内容の投稿をしているほど、主観的幸福感が高くなっていた(b=.17, p<.001)が、隠蔽度が高い場合(+1SD)にはそのような関連はみられなかった(b=－.02, p=.76)。これは仮説2を支持する結果だった。つまり、あるがままの自分のポジティブな部分を投稿する人ほど幸福感が高いといえる。

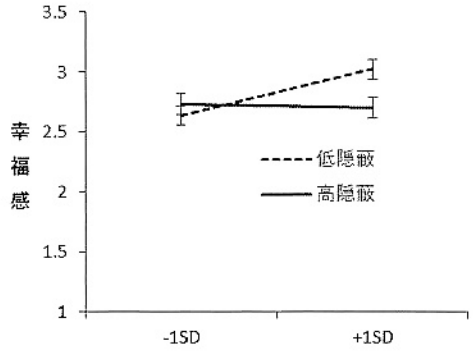


Figure 1. ポジティブな内容の投稿頻度×自己隠蔽度の交互作用についての下位検定結果

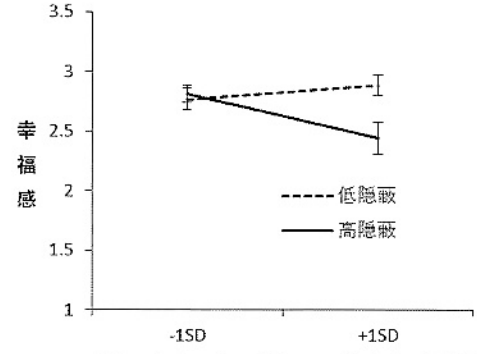


Figure 2. ネガティブな内容の投稿頻度×自己隠蔽度の交互作用についての下位検定結果

また、2個目のアカウントでのネガティブな内容の投稿についても交互作用項(β= -.29, p=.012)が有意になっていた。下位検定を行ったところ(Figure 2)、隠蔽度が高い場合(+1SD)にはネガティブな内容の投稿をしているほど、主観的幸福感が低くなっていた(b= -.13, p=.014)が、隠蔽度が低い場合(-1SD)にはそのような関連はみられなかった(b=.04, p=.35)。これは仮説2とは逆の結果だった。あるがままの自分のネガティブな投稿をすることは幸福感を低下させないといえる。逆に自己隠蔽しながら自分のネガティブな部分を投稿することは幸福感を低下させている。これは、自分自身が受け入れていないネガティブな部分を他者に見せることで、自己受容感も低下し、幸福感が低くなるのかもしれない。

Table ポジティブ/ネガティブな投稿頻度と自己隠蔽度が幸福感に与える影響

	1個目ポジティブ	1個目ネガティブ	2個目ポジティブ	2個目ネガティブ
	β (p)	β (p)	β (p)	β (p)
投稿頻度	.15 (.099)	-.17 (.107)	.19 (.052)	-.14 (.186)
自己隠蔽度	-.11 (.220)	-.07 (.477)	-.13 (.197)	-.22 (.068)
投稿頻度×自己隠蔽度	-.04 (.631)	.04 (.681)	-.27 (.006)	-.29 (.012)
R^2	.04 (.150)	.03 (.215)	.13 (.005)	.07 (.066)

※本研究は、渋谷七星さんが筆者の指導のもとに行った卒業論文（2021年度）で用いたデータを再分析したものである。ここに記して感謝する。

（たにぐち　じゅんいち）

保育現場における職員間コミュニケーションを円滑にするための工夫

○日向野智子[1]　磯　友輝子[2]　藤後悦子[1]　髙橋一公[2]　角山　剛[2]
([1]東京未来大学こども心理学部　[2]東京未来大学モチベーション行動科学部)
キーワード：保育現場の職員間連携，園長の個人的工夫，園全体の組織的工夫

【目的】子どもを心身ともに健やかに安全に保育するためには、保育士間の効果的な連携やコミュニケーションは欠かせない。しかし、保育現場では、保育観や年齢、経験、性格等の異なる保育士が数名単位でクラスを担当するうえ、慢性的な保育士不足や業務過多の影響もあり、コミュニケーションが難しくなりやすい。そこで、本研究では、保育施設の園長にインタビュー調査を実施し、保育士間の連携やコミュニケーションをよりよくするための園長個人の工夫と園全体としての組織的な工夫の特徴を探る。

【方法】

被面接者と保育施設　2019 年 1 月下旬から 2 月中旬にかけて、保育施設の園長 10 名にインタビュー調査を行った。被面接者の年齢は、30 代 1 名、40 代 3 名、50 代 1 名、60 代 2 名、不明 3 名であり、園長経験年数は、平均5.20年(*SD*=2.68)であった。保育施設の内訳は、小規模保育所 5 園（定員 34～40 名の東京都認証保育所 4 園、定員 36 名の認可保育所 1 園)、中規模認可保育所 2 園（定員 60 名と 70 名)、大規模認可保育所 3 園（定員 120～121 名）であった。所在地は、8 園は東京都および千葉県、残り 2 園は仙台市と那覇市であった。

質問項目　6 つの質問について半構造化面接を行った。①保育士間の連携がうまく行っている時のコミュニケーションの様子。②保育者間の連携がうまくいくように、施設長が個人的に工夫していること。③保育者間の連携がうまくいくように、園全体として工夫していること。④保育者間でコミュニケーションをとろうとしたが失敗した例やコミュニケーションをとろうとしないで失敗した例。⑤職員間のコミュニケーションについて、困っていること。⑥職場のコミュニケーションを円滑にするために、今後どのような工夫が必要だと思うか。本研究では、質問②と③を分析対象とした。

手続き　インタビューは、9 園は被面接者と面接者が対面して一対一で行い、1 園は skype によるビデオ通話であった。

調査対象施設は発表者が所属する学校法人が運営する保育施設であったことから、インタビューで回答した内容によって個人に不利益は生じないこと、個人情報の保護ならびにデータの管理方法、録音の許可等を含めたインフォームドコンセントを行い、同意書に署名をしてもらった。Skype によるビデオ通話を行った保育施設については、あらかじめインフォームドコンセント等を送付しておいた。

インタビューの所要時間は 40 分～60 分程であったが、ビデオ通話によるインタビューは会話が負担にならないよう 25 分にとどめた。インタビュー終了後、園長個人ではなく保育施設に対する謝礼（図書カード）を渡した。

【結果】上述した質問②と質問③について、インタビューの逐語記録から、保育士間の連携やコミュニケーションをスムーズにするための工夫に関する部分を抜き出した(全 136 件)。園長個人の工夫と園全体の組織的な工夫を 2 つの大カテゴリとして、コーダー6 名による KJ 法による分類を行った。

Figure1-1 の通り、園長の個人的工夫は、4 つの中カテゴリ（以下 MC：middle category）に分けられた。「あたたかい関係性の形成」には、小カテゴリ（以下 SC：small category）として「水平的アプローチ」(SC 中の最小カテゴリ以下 min.C: minimum category,『職員に話しかけやすい雰囲気づくり』、『園長からの声掛け』)，「ポジティブな関係づくり」(min.C『保育士間の雰囲気づくり』『保育士間交流』『保育士同士の敬意・尊重の促し』)，「言語的コミュニケーションの工夫」(min.C『間接的な指導・言葉がけ』『多角的な伝達・説明』『コミュニケーション・ギャップの解消』) がまとまった。MC「職員の健康安全管理」には、SC として「職員のメンタルヘルスサポート」(min.C『保育士の体調管理』)、「職員理解」(min.C『保育士のコミュニケーションタイプに合わせた声掛け』『保育士の言葉への傾聴』『個別面接とバックアップ』) がまとまった。「個人の資質向上」には、SC として「保育士の自己成長の促し（min.C『保育士の自主性の促し』『保育士からの発信・発言の促し』『保育士としてのロールモデル・目標をみつける促し』『知恵の提供』)、「園長自身の自己成長」(min.C『園長自身の自己啓発』)、「問題対応と指導」(min.C『保育士の問題行動の指導』『保育上の問題点の確認と状況把握』) がまとまった。

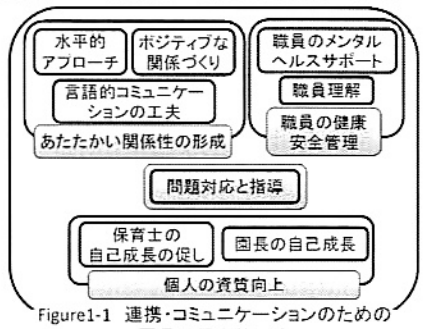


Figure1-1　連携・コミュニケーションのための園長の個人的工夫

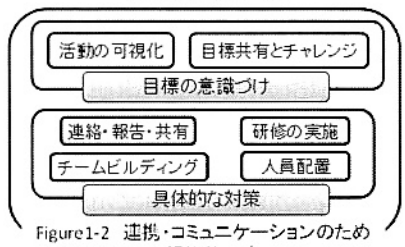


Figure1-2　連携・コミュニケーションのための組織的工夫

Figure1-2 の通り、組織としての工夫は 2 つの MC に分けられた。「具体的な対策」には、SC として「人員配置」(min.C『保育士の経験年数を活かした人事配置』『柔軟なシフトチェンジ』)、「連絡・報告・共有」(min.C『定期的なミーティング』『問題・トラブル対処行動の共有・徹底』『ボードの活用』『連絡・報告の徹底』)「研修の実施」(min.C『チームビルディング研修の実施』『対人関係スキルに関する研修の実施』)「チームビルディング」(min.C『組織構造の理解を求める』『組織内の信頼関係の形成』『保育士間の信頼関係づくり』『保育士間交流』) がまとまった。また、「目標の意識づけ」には、SC として「活動の可視化」(min.C『活動の可視化』)と「目標の共有とチャレンジ」(min.C『ビジョンの共有』『個人の目標設定とフォローアップ』『カリキュラムの作成』) がまとまった。

【考察】「園長の個人的工夫」では、職員間あるいは園長と職員との関係性の強化、問題対処や資質向上によって、職員間の連携向上や良好なミュニケーションを目指す工夫がみられた。「組織的工夫」では、「具体的な対策」として、保育上の連携強化と組織としてのチーム保育の向上を目指す工夫が多く、これらの取り組みの中で、職員間の連携やよりよいコミュニケーションを目指すと考えられる。今後は、園長と保育士双方に調査を実施し、連携やコミュニケーションが円滑な園とそうでない園では、園長・保育士間の視点がどの程度一致あるいは異なるか、検討が必要であろう。

【注】本研究は、JSPS 科研費 18K18672 の助成を受けた。本研究は、東京未来大学研究倫理・不正防止委員会の承認を得ており、利益相反関係にある組織及び団体はない。本研究に協力いただいた東京未来大学の山極和佳先生に感謝します。
(ひゅうがの ともこ・いそ ゆきこ・とうご えつこ・
たかはし いっこう・かくやま たかし)

ソーシャルメディアリテラシー教育の取り組み

○富田瑛智[1]
([1]関西国際大学心理学部)

キーワード：ソーシャルメディア，情報リテラシー教育，

【目的】ソーシャルメディアをはじめとしたインターネットメディアの利用は日々増加している。このような中で，利用により生じる事故や事件が取り上げられることも増え，対策の必要性が高まっている。

各教育機関では情報メディアリテラリー教育を実施することで学生や生徒の事件や事故への遭遇を防止しようとする取り組みが行われている。しかしながら，教員側の情報メディアリテラシー知識も高いとは言えず，情報学を専門とする教員以外によるリテラシー教育は困難な側面がある。その1要因として，教員側のソーシャルメディアを含めたインターネットメディア利用経験の少なさがある。総務省情報通信政策研究所の2021年の調査によると，ソーシャルメディア利用時間は10代～20代が最も長く，教職員の年齢層である30代～60代はその半分以下とされる。加えて，近年のソーシャルメディアの変化は激しく，様々なメディアが台頭している。このような状況下で，教員がソーシャルメディアを学習し，学生に指導する労力は非常に高いと考えられる。

本研究では，メディアリテラシー教育を学生間で実施する取り組みの効果を検証した。学生は教員に比べ，ソーシャルメディアに関する知識が豊富であり，様々な経験を経ている。上学年の学生（大学生）が公共機関の公開しているメディアリテラシーに関する資料を学習し，下学年（高校生）に教育を行うことでメディアリテラシー意識に変化が生じるのか検討した。

【方法】参加者　関西国際大学心理学部の2，3年生24名と神戸山手女子高校1，2年生72名であった。調査では個人が特定できる情報は取得しなかった。

手続き　この取り組みは，事前学習，事前調査，グループワーク1，中間調査，グループワーク2，事後調査から構成された。事前学習では大学生が公的機関の提供するソーシャルメディアに関連する資料を熟読し，独自に情報リテラシーに関する学習を行った。そして，グループワーク1では大学生が高校生に対して，自身の体験や利用方法を語る中で，どのような利用方法が適切か議論した。グループワーク2では，グループワーク1で出てきた「ソーシャルメディア利用時に注意すべき内容」を題材とした資料を大学生が高校生に提示し，さらに議論を行った。事前調査，中間調査，事後調査はすべて同じ内容であり，ソーシャルメディアの利用方法やソーシャルメディアに対する不安に関する項目で構成されていた。いずれの調査項目も高校生が回答した。

【結果】まず，ソーシャルメディアの利用率及び，どのようなメディアで問題につながる出来事に出会っているか（怖い思いをしているか）分析した。利用率の高いソーシャルメディア(50 %以上)はLINE (99 %)，Twitter (76 %)，Instagram (87 %)，TikTok (77 %)，Youtube (97 %)であった。利用していて怖い思いをしたメディアは，Instagram (19 %)と最も多く，次にTwitter (9 %)であった。

次に大学生とのグループワークを経て，高校生のソーシャルメディア利用意識が変化したか各評定項目に対して調査時期を独立変数とした一要因分散分析を行った。その結果，「一度投稿するとどこまで広がるかわからず不安である」及び「ソーシャルメディアへの投稿は誰にチェックされているかわからないので不安である」の2項目において調査時期（事前，中間，事後）の評定平均値に有意な主効果が得られた（$ps < .05$）。両項目の評定値とも事前調査時に比べ事後調査時の方が高かった。両項目の回答を選択肢別に集計すると「まったくあてはまらない（全く不安がない）」の回答者数が事前調査時から事後調査時にかけて減少していたのに対して，「とてもよく当てはまる（非常に不安が大きい）」の回答者数には大きな変動がなかった。「ソーシャルメディア上で自分が発信（投稿）した内容がどのような人にまで伝わるかわかる」についても調査時期に有意な主効果が得られた（$p < .001$）。事前調査時にくらべ，中間調査時，事後調査時の評定値が高かった。

【考察】本研究では学生間で実施するメディアリテラシー教育の効果について検討を行った。学生間のグループワーク前後で高校生のソーシャルメディア利用時の不安が高くなっていた。ただし，この結果は，不安が非常に高くなった学生が増えたためではなく，不安が全くない学生が減ったためであった。また，ソーシャルメディア上の情報伝達についての知識に関する項目もグループワーク後に高くなっていた。高校生は大学生と議論する中で，情報メディア利用に関する知識を獲得し，その中で利用に伴う危険性や問題を理解した結果，不安が生じたと示唆される。加えて，本研究では，高校生が主観的に怖いと感じる出来事に出会ったメディアを明らかとなった（Instagram及びTwitter)。今後はこれらのメディアを中心にリテラシー教育を行うことも有効であろう。

本取り組みでは，グループワークの内容は大学生に一任しており，詳細な内容まで指示は行っていない。このような方法でも，高校生はメディアリテラシーを一定程度獲得できたといえる。今後は大学生の学習内容および高校生の意識変化を詳細に検討する必要があるだろう。

本取り組みは高校生のみを効果測定の対象としていたが，教育を実施する側（大学生）にもメディアリテラシーの向上が予測される。大学生も対象とすることで教育を実施する側，教育を受ける側の両方向の効果を検証することも可能であろう。

		1	2	3	4	5	平均値
一度投稿すると，投稿がどこまで広がるかわからず不安である	事前	17	23	16	8	7	2.44
	中間	10	12	23	14	5	2.88
	事後	4	6	22	14	7	3.26
ソーシャルメディアへの投稿は，誰にチェックされているのかわからないので不安になる	事前	18	16	16	8	12	2.67
	中間	9	13	15	20	7	3.05
	事後	3	9	19	13	9	3.30
ソーシャルメディア上で自分が発信（投稿）した内容がどのような人にまで伝わるかわかる。	事前	9	17	24	14	4	2.81
	中間	2	6	29	19	8	3.39
	事後	1	7	19	16	10	3.51

図　ソーシャルメディア利用時の不安及び知識に関する項目への各時点（事前，中間，事後）での回答。各選択肢の回答者数と評定値の平均値を示す。最上段は選択肢を示し1が「まったく当てはまらない」，5が「とてもよくあてはまる」を示す。

（とみた　あきとし）

逸脱行為の抑制要因についての検討

—逸脱した友人の存在に着目して—

○見城晴香[1]　綱瞳美[1]　三村陽南[1]　桐生正幸[2]
([1]東洋大学大学院社会心理学研究科　[2]東洋大学社会学部)

キーワード：逸脱行為，自尊感情，自律性

【目的】

非行や逸脱行為の促進要因の一つとして、逸脱した友人の存在があげられている(Brendgen, Vitaro&Bukowski, 2000；西野, 2014)が、一方で「逸脱した友人を有するが、自分は逸脱行為をしない」という者も存在する。小保方・無藤(2005)の研究では、そのような子どもはセルフコントロールが高く、親子関係が親密であることが示された。逸脱行為の抑制要因について、逸脱した友人の有無に着目して検討した研究はほかに見当たらず、「逸脱した友人を有しているが、自分は非行や逸脱行為をしない」という者について、その他の抑制要因はあまり明らかになっていない。

そこで、本研究では逸脱した友人の存在に着目し、とくに「逸脱行為経験のある友人を有しているが、自分は逸脱行為経験がない」という者について、自尊感情と自律性が逸脱行為の抑制要因となるのかを検討する。

【方法】

調査対象：東洋大学の学生163名(男性54名、女性109名、平均年齢20.17歳、SD=0.970)を対象とした。

調査手続き：2021年11月下旬、授業内でWeb上でのアンケート調査を行った。

調査項目：(1)逸脱行為経験の有無(7項目)：飲酒、喫煙、怠学、深夜徘徊、無断外泊、万引き、自転車盗について、高校時代の経験の有無を回答させた。(2)逸脱行為経験がある友人の有無(7項目)：(1)の項目について、高校時代に付き合いのあった親しい友人にそれらの行為をしていた人がいたかを回答させた。(3)自尊感情(10項目)：桜井(2000)の自尊感情尺度を使用。(4)自律性(8項目)：西田(2000)による心理的well-being尺度の下位尺度のうち、「自律性」の項目を使用。(5)属性：年齢、性別

【結果】

分析するにあたり、「自身の逸脱行為経験なし」および「友人の逸脱行為経験なし」に該当する者を「両者なし」群、「自身の逸脱行為経験あり」および「友人の逸脱行為経験なし」に該当する者を「自分のみ」群、「自身の逸脱行為経験なし」および「友人の逸脱行為経験あり」に該当する者を「友人のみ」群、「自身の逸脱行為経験あり」および「友人の逸脱行為経験あり」に該当する者を「両者あり」群とし、自身および友人の逸脱行為経験の有無ごとに4群に分類した。自尊感情および自律性について性別と逸脱行為経験の群による2要因の分散分析を行った。

(1)自尊感情

性別の主効果($F(1,155)=1.10$, $p=.295$, $\eta^2=.007$)、逸脱行為経験の群による主効果($F(3,155)=0.60$, $p=.617$, $\eta^2=.011$)、性別と逸脱行為経験の群による交互作用($F(3,155)=0.13$, $p=.945$, $\eta^2=.002$)について、いずれにおいても有意差は得られなかった。

(2)自律性

逸脱行為経験の群による主効果が有意傾向であった($F(3,155)=2.17$, $p<.10$, $\eta^2=.040$)。性別の主効果($F(1,155)=2.73$, $p=.100$, $\eta^2=.017$)、性別と逸脱行為経験の群による交互作($F(3,155)=0.15$, $p=.930$, $\eta^2=.003$)に有意差は得られなかった。逸脱行為経験の群について多重比較(Holm法)を行ったところ、「自分のみ」群と「両者あり」群の間に有意差が得られた(両者あり＞自分のみ，$p=.044$)。

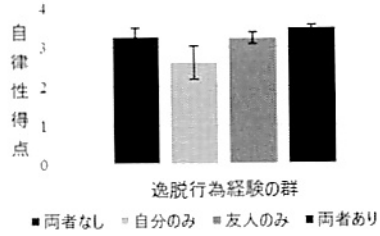


図1．自律性得点の比較(逸脱行為経験の群ごと)

【考察】

分析の結果から、逸脱した友人を有していた場合、自尊感情および自律性が自身の逸脱行為の抑制要因とはならないことが示された。

自己価値と非行の関連について、自身の学業成績や家族関係などの第3の要因に依存する可能性があるという指摘から、自尊感情が逸脱行為に直接の影響を及ぼすというよりも、間接的に影響を及ぼしている可能性が考えられる。

また、本研究では自律性が逸脱行為の抑制要因とならないことが示されたが、このような結果になった要因の1つとして考えられるのが、逸脱行為に対する許容度である。自己統制や自己意思決定ができたとしても、逸脱行為に対して許容的な態度をとっている場合、自律性の高さは逸脱行為を抑制する要因になるとは考えにくい。

非行や逸脱行為にはさまざまな要因が複雑に関連しているとされている。今後の課題として、逸脱した友人を有する者を逸脱行為から守る示唆を得るために、さまざまな逸脱行為の規定要因を取り入れ、その要因間の影響まで検討することが重要である。

【引用文献】

Brendgen, M., Vitaro, F., & Bukowski, W. M. (2000). Deviant friends and early adolescents emotional and behavioral adjustment. *Journal of Research on Adolescence*, 10(2), 173-189. /小保方晶子・無藤隆(2004). 中学生の非行行為について逸脱した友人の存在の有無による検討 お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要(2), 75-84. /小保方晶子・無藤隆(2005). 親子関係・友人関係・セルフコントロールから検討した中学生の非行傾向行為の規定要因および抑止要因 発達心理学研究, 16(3), 286-299. /西田裕紀子(2000). 成人女性の多様なライフスタイルと心理的well-beingに関する研究 教育心理学研究, 48, 433-443. /西野泰代(2014). 中学生の逸脱行為に対する保護要因の検討 広島修大論集, 55(1).

(けんじょう はるか・つな ひとみ・みむら はるな・きりう まさゆき)

孤独感と攻撃行動の関連について

○綱瞳美[1]　見城晴香[1]　三村陽南[1]（非会員）桐生正幸[2]
([1]東洋大学大学院社会学研究科　[2]東洋大学)
キーワード：孤独感・攻撃行動・関係性攻撃

【目的】

現代の日本では，社会的孤立が問題となっている。超高齢化社会となり高齢者の犯罪が増加していることや，若者の引きこもりや失業などの社会的孤立も浮き彫りとなっている。また，インターネットやSNSの普及により，近年ネットいじめが増加している。孤独感は，社会的相互作用の願望レベルと現実の達成レベルの不一致から生じる不快感情の１つであり（Peplau&Perlman，1979），攻撃行動は不快感情の表出であることから，孤独感が攻撃行動に影響を与える（仮説1），SNSの利用が増えていることから孤独感が直接的な攻撃を使わずに社会的な関係や対人関係を操作し攻撃をする関係性攻撃に影響を与える（仮説2）を検討する。

【方法】

手続き　東洋大学の学生を対象とし，同意を得た上でクアルトリクスを用いたWeb上でのアンケート調査を実施した。

調査時期と対象者　2021年11月9日から11月30日の間で，東洋大学の犯罪心理学を受講する生徒108名（男性33名，女性75名，平均年齢20.85歳）を対象とした。

質問項目　本研究では3つの尺度，対象者の属性（性別，年齢）の項目を用いた。(1) 孤独感：工藤・西川（1983）による改訂版UCLA尺度を用いた（4件法）。(2) 攻撃性尺度：日本版Buss-Perry攻撃性尺度（安藤・曽我・島井・嶋田・宇津木・大芦・坂井，1999）を用いて，本研究では自己への攻撃を想定した3項目を追加した（5件法）。(3) 関係性攻撃尺度：櫻井・小浜・新井（2005）の関係性攻撃傾向尺度を参考に，無視や排除，SNSを利用した攻撃想定し大学生向けの尺度を作成し用いた（5件法）。

【結果】

回答に不備のあった7名を除き，すべての質問項目に回答している101名（男性32名，女性69名，平均年齢20.8歳）を分析対象とした。それぞれの尺度を因子分析し，抽出された因子を用いて相関分析を行った。

因子分析　孤独感尺度は3因子抽出され，第1因子を「不安な感情」，第2因子を「対人関係」，第3因子を「楽観性」とし，α係数はそれぞれ.90，.81，.67であった。攻撃性尺度は4因子抽出され，第1因子を「身体的攻撃」，第2因子を「敵意」，第3因子「言語的攻撃」，第4因子「短気」とし，α係数はそれぞれ.86，.77，.79，.74であった。関係性攻撃尺度は2因子抽出され，第1因子を「無視・排除」，第2因子を「SNSを利用した無視・悪口」とし，α係数はそれぞれ.83，.78であった。

相関分析　孤独感尺度と攻撃性尺度の相関分析を行った結果，負の相関がみられた（r=-.352，p<.01）。下位因子ごとの相関分析では，「不安な感情」と「敵意」（r=-.537，p<.01），「不安な感情」と「身体的攻撃」（r=-.439，p<.01），「不安な感情」と「言語的攻撃」（r=.204，p<.05），「不安な感情」と「短気」（r=-.249，p<.05），「対人関係」と「身体的攻撃」（r=.275，p<.01）、「対人関係」と「敵意」（r=.343，p<.01），「楽観性」と「敵意」（r=.388，p<.01）で相関がみられた。

孤独感尺度と関係性攻撃尺度の相関分析を行った結果，負の相関がみられた（r=-.352，p<.01）。下位因子ごとの相関分析では，「不安な感情」と「SNSを利用した無視・悪口」で相関がみられた（r=-.333，p<.01）。

重回帰分析　孤独感3因子を説明変数とし，相関がみられた下位因子を目的変数として重回帰分析を行った。「身体的攻撃」を目的変数とした重回帰分析の結果はR^2値が.227で有意であった。「不安な感情」と「楽観性」の係数がそれぞれ-.642と-.350であり，p値はそれぞれ.000と.042で有意であった。「敵意」を目的変数とした重回帰分析の結果は，R^2値が.305であった。「不安な感情」の係数が-.551であり，p値は.000で有意であった。「短気」を目的変数とした重回帰分析の結果は，R^2値が.102で有意であった。「不安な感情」と「対人関係」の係数が-.527と-.392であり，p値はそれぞれ.003と.045で有意であった。「SNSを利用した無視・悪口」を目的変数とした重回帰分析の結果は，R^2値が.187で有意であった。「不安な感情」の係数が-.533でp値は.000で有意であった。言語的攻撃を目的変数とした重回帰分析の結果は有意でなかった。

t検定　攻撃性尺度と関係性攻撃尺度の間で有意な差がみられ（t(100)=3.801，p<.01），攻撃性尺度の方が関係性攻撃尺度より高いと解釈することができる。また，孤独感の高低により各攻撃行動に差はあるのかt検定を行ったところ，「身体的攻撃」「敵意」「短気」「SNSを利用した無視・悪口」で有意な差がみられた。

【考察】

重回帰分析の結果より孤独感は「身体的攻撃」「敵意」「短気」「SNSを利用した無視・悪口」に影響を与えていたことから，孤独感が攻撃行動に影響を与えるという仮説1は支持された。しかし、孤独感から攻撃行動を説明するには内的特性や環境要因など他の要因の影響もあるだろう。また，攻撃性尺度と関係性攻撃尺度では孤独感尺度との相関に差がみられず，仮説2は不支持であった。新型コロナウイルス感染拡大によりオンライン授業が続いたことから学生自身が普段の行動を想起して回答するのが容易ではなかった。また，関係性攻撃尺度の「無視・排除」は孤独感との相関がみられず，悪口や噂の流布など関係性攻撃行動の具体例を更に検討していく必要があるだろう。

【引用文献】

安藤明人・曽我洋子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・坂井明子(1999)　日本版Buss-Perry攻撃性質問紙(BAQ)の作成と妥当性,信頼性の検討　心理学研究,70,pp384-392.

工藤力・西川正之(1983)　孤独感に関する研究　孤独感尺度の信頼性・妥当性の検討　実験社会心理学研究 22(2),pp99-108.

櫻井良子・小浜駿・新井邦二郎(2005)　中学生における関係性攻撃傾向の検討―同調行動および学校適応感の関連―　筑波大学発達臨床心理学研究 17,pp39-44.

Peplau, L. A. & Perlman, D. (1979)　"Blueprint for a social psychological theory of loneliness" In M. Cook & G. Wilson (Eds.) Love and attraction. Oxford, England: Pergamon Press,pp101-110.

（つなひとみ・けんじょうはるか・みむらはるな・きりうまさゆき）

社会人基礎力アセスメント尺度の開発の試み

―新卒求職者による経済産業省版社会人基礎力の認識と

求人者が求める社会人基礎力との異同を明らかにするために―

○長内優樹[1]　内間　望[2]（非会員）
([1]Secondary, LLC　[2]目白大学）

キーワード：社会人基礎力，新卒求職者，求人者

【問題】

経済産業省（以下，経産省）は2006年，社会人基礎力を「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」と定義づけ，提唱した。この経産省版社会人基礎力は3分類12能力要素で構成されているが，これは学生が社会の一構成員となることを想定し，社会において生産性の高い人物となるよう育成することを目的に作られたものである（経産省，2018）。一方，学生が社会に求められていると認識する能力を把握することで，企業と学生，教育機関との連携がより密接になり，生産性の向上が期待できる。

【目的】

本研究では，1)新卒求職者が認識している社会人基礎力を測定するアセスメント尺度を作成し，2)経産省による概念との異同を検討することを目的とした。本大会では，1)部分について報告する。

【方法】

調査協力者　関東圏内の大学に通う新卒での就職を希望する大学生を対象に，質問紙調査を実施した。本調査で有効回答の得られた290名を分析対象とした。

調査時期　2022年6月から7月であった。

手続き　本調査実施前に尺度作成の項目収集のため経産省が提唱している社会人基礎力を構成する12要素について提示し，それぞれが具体的にどういう能力だと思うのか，自由記述式で回答を求める予備調査1を実施した。得られた項目を12要素毎に「社会人基礎力を測定する記述として適切」と思われる項目上位3つの選択を依頼する調査を実施した（予備調査2）。最後に，予備調査2で選択された項目で構成される本調査を実施した。また，併存的妥当性の検証および経産省による社会人基礎力との異同を検討するために北島・細田・星（2011）の社会人基礎力尺度を使用した。調査はいずれもオンラインで実施した。

【結果】

予備調査1・2で得られた回答をもとに12因子96項目の社会人基礎力アセスメント尺度を作成し，経産省の提唱する12の能力要素と同様の因子構造となるかを検討するため，最尤法による確認的因子分析を実施した。各因子に含まれると想定した項目の代表例として，第1因子【主体性】（α＝.793）には「話し合いやグループワークで1番初めに発言することができる。」，第2因子【働きかけ力】（α＝.772）には「チーム内で孤立している人がいると放っておけない。」，第3因子【実行力】（α＝.864）には「自分でやろうと思ったことは必ず実行することができる。」，第4因子【課題発見力】（α＝.695）には「自分が直面した問題に対して，現状や具体的にどこが悪いのかといったように，自らの課題を見つけることができる。」，第5因子【計画力】（α＝.810）には「達成したい目的があるとき，その目的を達成するまでの道のりが具体的に想像できる。」，第6因子【創造力】（α＝.888）には「今までの常識を覆して，新しいことを考えることができる。」，第7因子【発信力】（α＝.831）には「自分の想いや考えを整理し，分かりやすいように相手に伝えることができる。」，第8因子【傾聴力】（α＝.548）には「相手の意見が自分と異なるものでも，尊重することができる。」，第9因子【柔軟性】（α＝.627）には「他者の意見を否定することなく受け入れることができる。」，第10因子【状況把握力】（α＝.608）には「その場に合った態度や対応をとることができる。」，第11因子【規律性】（α＝.630）には「和を乱さずに行動するのは得意だ。」，第12因子【ストレスコントロール力】（α＝.631）には「自力で解決できないことであっても，気分転換をしながら待つことができる。」が挙げられる。また，適合度指標は，χ^2＝962.326，df＝563，p＝.000，CFI＝.902，RMSEA＝.049，SRMR＝.056，GFI＝.855，AGFI＝.819であった（Figure1）。因子負荷量と共通性に問題がないため，解釈可能性の観点からこれが最適解としたが，十分なモデル適合度は得られなかった。

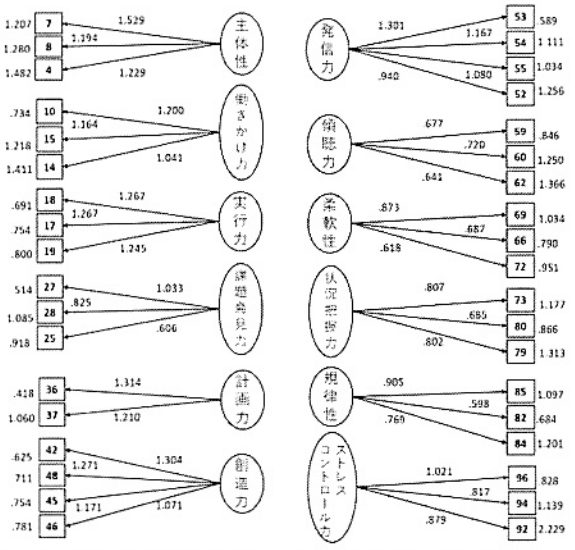


Figure 1　社会人基礎力アセスメント尺度の認的因子分析結果
注）観測変数内の数字番号を表す。また，煩雑なため誤差変数と共分散は省略している。

【考察】

新卒求職者が認識している社会人基礎力は、経産省が提唱している12要素以外で構成されている可能性が示された。本研究は，求職者―求人者間の認識の齟齬を検討する際の基礎的な資料として意義があると考える。今後は、求職者―雇用者間でどのような認識の異同があるのかを検討していく。

【引用文献】

経営産業省(2018). 人生100年時代の社会人基礎力について　Retrieved from https://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/sansei/jinzairyoku/jinzaizou_wg/pdf/007_06_00.pdf（2022年10月1日）

北島洋子・細田泰子・星　和美(2011). 看護系大学生の社会人基礎力の構成要素と属性による相違の検討　大阪府立大学看護学部紀要，17(1),13-23.

（おさない ゆうき・うちま　のぞみ）

広告における帰属誘導型両面的説得の効果

濱　保久
（北星学園大学　文学部　心理・応用コミュニケーション学科）
キーワード：広告、両面的説得、帰属誘導

【研究の目的】

情報の送り手にとって有利なことしか提示しない一面的説得に比べて、不利なこともあわせて提示する両面的説得の方が特別な条件を除けば有効であるといわれている。本研究ではさらなる効果を期待した帰属誘導型両面説得を広告で展開した場合、どの程度の効果を示すかを明かにしたいと考える。その昔、無印良品が初めて登場した時に用いていた「わけあって安い」というコンセプトとキャッチコピーがまさに帰属誘導型説得に近いものであった。安かろう悪かろうという帰属が生じがちなところを逆手にとって、弱点でもある不揃いさを安さの原因であるという逆方向の帰属を試みたのである。本研究ではさらに一歩進めて、弱点があるからこそこのような利点を付けざるを得なかったと提示することで、さらなる効果が生まれるかどうかを検証する。

【方　法】

実験協力者：北星学園大学文学部学生93名
手続き：質問紙上で、架空の航空会社の一面的説得広告と両面的説得広告と帰属誘導型両面的説得広告を順序効果を相殺の上繰り返し提示し、それぞれの提示後に、1）その会社に対する信頼度、2）その会社に対する好感度、3）その価格に対する関心度、4）価格の安さに対する納得度、5）その会社を使用しようと思う程度、そして、最後に6）広告の訴求方法の上手さの程度を7段階で評定させた。
提示広告：
（一面的説得広告）
「私たち航空会社Aは、メジャーな航空会社にはない格安な料金設定をしています。コストパフォーマンスという点においてきっとご満足頂けると思います。」
（両面的説得広告）
「私たち航空会社Bは、メジャーな航空会社に比べて小型機を使用しており、座席が少し狭くなっています。しかし、メジャーな航空会社にはない格安な料金設定をしています。コストパフォーマンスという点においてきっとご満足頂けると思います。」
（帰属誘導型両面的説得広告）
「私たち航空会社Bは、メジャーな航空会社に比べて小型機を使用しており、座席が少し狭くなっています。しかし、数時間の移動とはいえ多少の価格差ではお客様がメジャーな航空会社に流れてしまいます。そこで、旅先での思い出作りによりお金をかけていただこうと思い、メジャーな航空会社にはない格安な料金設定をしています。コストパフォーマンスという点においてきっとご満足頂けると思います。」

【結　果】

1.その航空会社に対する信頼度
評定値（1：全く信頼できない～7：とても信頼できる）に基づき繰り返しのない1要因の分散分析を行ったところ有意な結果（$F[2, 98]=31.16, p<.001$）を得たので多重比較を行った。その結果、一面的説得広告（$M=2.74$）と両面的説得広告（$M=3.82$）の差は0.1%水準で有意で、さらに両面的説得広告（$M=3.82$）と帰属誘導型両面的説得広告（$M=4.54$）の差も0.1%水準で有意であった。
2.その会社に対する好感度
評定値（1：全く好感をもてない～7：とても好感をもつ）に基づき繰り返しのない1要因の分散分析を行ったところ有意な結果（$F[2, 98]=26.91, p<.001$）を得たので多重比較を行った。その結果、一面的説得広告（$M=3.22$）と両面的説得広告（$M=4.08$）の差は1%水準で有意で、さらに両面的説得広告（$M=4.08$）と帰属誘導型両面的説得広告（$M=4.76$）の差も5%水準で有意であった。
3.その価格に対する関心度
評定値（1：全く関心をもたない～7：とても関心をもつ）に基づき繰り返しのない1要因の分散分析を行ったところ有意な結果（$F[2, 98]=27.50, p<.001$）を得たので多重比較を行った。その結果、一面的説得広告（$M=3.80$）と両面的説得広告（$M=4.34$）の差は5%水準で有意で、さらに両面的説得広告（$M=4.34$）と帰属誘導型両面的説得広告（$M=5.10$）の差も0.1%で有意であった。
4.価格の安さに対する納得度
評定値（1：全く納得できない～7：とても納得できる）に基づき繰り返しのない1要因の分散分析を行ったところ有意な結果（$F[2, 98]=63.09, p<.001$）を得たので多重比較を行った。その結果、一面的説得広告（$M=2.80$）と両面的説得広告（$M=4.80$）の差は0.1%水準で有意であったが、両面的説得広告（$M=4.80$）と帰属誘導型両面的説得広告（$M=5.14$）の差は有意ではなかった。
5.その会社を使ってみようと思う程度
評定値（1：全く使いたくない～7：とても使いたい）に基づき繰り返しのない1要因の分散分析を行ったところ有意な結果（$F[2, 98]=31.78, p<.001$）を得たので多重比較を行った。その結果、一面的説得広告（$M=3.14$）と両面的説得広告（$M=4.22$）の差は0.1%水準で有意であったが、両面的説得広告（$M=4.22$）と帰属誘導型両面的説得広告（$M=4.74$）の差は有意ではなかった。
6.その広告の訴求方法の上手さ
評定値（1：とても下手～7：とても上手）に基づき繰り返しのない1要因の分散分析を行ったところ有意な結果（$F[2, 98]=34.70, p<.001$）を得たので多重比較を行った。その結果、一面的説得広告（$M=2.74$）と両面的説得広告（$M=4.10$）の差は0.1%水準で有意で、さらに両面的説得広告（$M=4.10$）と帰属誘導型両面的説得広告（$M=4.80$）の差も5%水準で有意であった。

【考　察】

まず、すべての項目において一面的説得が劣っていることが明かとなりこの点については先行研究と一致した。本研究で取り上げた帰属誘導型説得が単なる両面的説得より効果を上げたのは、その企業に対する信頼度や好感度など企業イメージへの貢献であった。また、価格の安さに対する関心の喚起という点でも有効ではあったものの、価格の安さに対する納得という点では帰属誘導の効果が見られず、また、実際に使ってみたいという段階にまでもってくる力も不足しているようである。ただ、広告手法に対する評価は悪くないので、今後の研究において単なるイメージアップからさらに行動変容にまで期待できる強固な帰属誘導型両面説得の展開が期待される。

本研究の遂行に当たり石田勇氏の多大なる貢献を得た。ここに記して謝意を表す。　（はま　やすひさ）

単路部における歩行者の斜め横断の危険性

○矢野伸裕
（科学警察研究所交通科学部）

キーワード：斜め横断違反、危険認知速度、死亡重傷率

【目的】道路の斜め横断は、歩行者が車道上に存在する時間が長くなるため事故可能性が高まる恐れがある。特に、歩行者が接近車両に背を向ける方向に斜め横断した場合、接近車両にほとんど気づかないことも考えられる。実際、歩行者が斜め横断した事故では、大多数が背中側から車両に衝突されたケースであることが示されている（矢野・森，2022）。

本研究では、そのような斜め横断が絡む事故の特徴と事故の重大さとの関連について検討した。

【方法】警察庁の2012～2021年の交通事故データベースに登録されており、単路部（交差点やその付近でない）かつ横断歩道でない箇所で発生した道路横断中の歩行者と車両との人身事故の中から、歩行者の年齢、横断時の進行方向、運転者が危険を認知した時の走行速度がいずれも不明でない事故をすべて抽出して分析した。ただし、歩行者の年齢が6歳未満の事故は除外した。なお、本研究では、

①事故歩行者に「斜め横断」の交通違反が記録され、且つ、接近車両に背を向ける方向へ斜め横断を行った事故

②事故歩行者に交通違反がなく、且つ、接近車両の進行方向に対して垂直の方向へ横断を行った事故

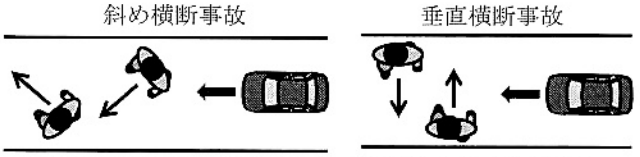
を比較した。本稿では①を「斜め横断事故」、②を「垂直横断事故」と呼ぶ（図1参照）。本研究では、②の垂直横断事故を‘歩行者の横断行動の危険度が最も小さかった事故の場合’と捉えて、①の斜め横断事故の特徴を②の事故と比較させて導いた。なお、分析単位は事故歩行者数である。

【結果】本研究で分析対象となった事故歩行者数は、①斜め横断事故が853名、②垂直横断事故が6,174名であった。

表1は、垂直横断事故者数に対する斜め横断事故者数の比を年齢層別に示したもので、斜め横断事故の相対的な多さを示すと考えられる。12-17歳の中学・高校の男子生徒が昼夜ともに多く、また夜間の35-44歳の女性も多かった。

歩行者が車両に背を向ける方向へ斜め横断を実行する場合、自分の後ろ側となる接近車両の動きが適切に認知できず、その速度を見誤りやすくなり、その結果、より高速の接近車両の場合にも横断を敢行して轢かれる事故が多くなると予想される。表2は、事故車両の運転者が歩行者と衝突する危険を認知した時の走行速度を40km/h以下と40km/h超に分けた場合の、より高速である40km/h超の割合を示したものである。斜め横断事故のほうがより高速の車両との事故割合が大きく、特に夜間にその傾向がみられた。

車両が高速であれば衝突時の衝撃が大きく、歩行者が受ける傷害程度が大きい事故が多くなると予想される。表3は、分析対象の事故歩行者数に占める死亡者と重傷者の割合を示したものである。昼夜ともに、斜め横断事故のほうが歩行者の死亡重傷の割合が大きかった。



（歩行者が接近車両に背を向けて横断した場合に限定）

図1　斜め横断事故（歩行者の交通違反あり）と垂直横断事故（歩行者の交通違反なし）の定義

表2　危険認知速度が40km/h超である事故の割合（%）

	斜め横断事故	垂直横断事故
昼	10.0	8.2
夜	37.6	31.4

表3　分析対象の事故歩行者数に占める死亡重傷者の割合（%）

	斜め横断事故	垂直横断事故
昼	28.6	23.4
夜	57.7	51.2

【考察】斜め横断事故は、中学・高校生に該当する年齢層の男性で比較的多く見られ、交通経験の未熟さによる状況判断の甘さや危険に対する慣れによるリスクテイキングのしやすさ、仲間の行動の影響などが考えられる。中学・高校生を対象にした安全教育の場における斜め横断の危険性についての注意喚起が必要と思われる。一方、夜間の35-44歳の女性でも比較的多く見られた理由は不明である。

斜め横断では、背後から接近する車両を認知しにくく、特に夜間でその影響が大きいことが考えられる。接近車両が適切に認知できなければ車両速度が高く危険なタイミングでも横断を敢行してしまい、そのため、より高速の車両に轢かれる事故の割合が大きいことが表2の結果より示唆された。また、表3の結果より、より高速の車両に轢かれやすいことで事故時の傷害程度を高めてしまうことが示唆された。

以上より、斜め横断の危険性とは、背後からの接近車両に対する認知不全のため、より高速の車両との衝突事故の可能性が高まり、その結果、傷害程度の大きな深刻な事故につながりやすくなる、ということができよう。

【引用文献】矢野伸裕・森健二(2022)．歩行者の横断中事故の分析：車両の接近方向に着目して　交通工学論文集，8(2)，B_21-B_27.

（やの　のぶひろ）

表1　斜め横断事故者数と垂直横断事故者数の比（斜め横断事故／垂直横断事故）

		年齢層								
		6-11	12-17	18-34	35-44	45-54	55-64	65-74	75以上	全年齢
昼	男	0.098	**0.296**	0.145	0.098	0.115	0.130	0.120	0.106	0.118
	女	0.127	0.187	0.145	0.190	0.195	0.155	0.178	0.119	0.143
夜	男	0.067	**0.364**	0.175	0.101	0.147	0.116	0.149	0.161	0.145
	女	0.116	0.174	0.089	**0.277**	0.125	0.106	0.166	0.157	0.149

新入社員の縦断的研究による職場における silence 発生過程の検討

○松本友一郎[1]　吉田琢哉[2]

([1]中京大学心理学部　[2]岐阜聖徳学園大学教育学部)

キーワード：新入社員，組織，職場，silence，多元的無知

【目的】

職場をはじめとする組織の課題として，成員が組織内の問題について思うことがあってもそれを口にしない silence (沈黙) がある。これまでの研究から，silence は問題点の修正や新たなアイデアの活用の機会を組織から奪うことが指摘されている (Morrison, 2014)。一方で，組織の成員は，自分の考えとは違っても他者に合わせることで多元的無知に陥って，成員自らが silence を維持している可能性も指摘されている (Geiser & Swim, 2016)。そこで，本研究は，まず多元的無知によって silence が発生しうるのか検討することを目的とする。具体的には，まだほとんど組織風土の影響を受けていないと考えられる新入社員を対象として，入職時に推測した職場の考えが入職 1 年後の自分の行動と考えに及ぼす影響を検討する。もし自分の考えは入職時そのままで行動だけ職場の考えに合わせるのであれば，入職 1 年後の自分の考えは入職時の自分の考えのみから正の影響を受けるのに対し，入職 1 年後の自分の行動は入職時に推測した職場の考えから正の影響を受けるという仮説が考えられる。

【方法】

調査時期及び対象者　大学新卒の会社員，公務員，団体職員 1,200 名（男性 278 名，女性 922 名）を対象として第 1 回調査（以下，T1）を 2021 年 4 月後半に実施した。第 1 回調査の回答者のうち，1 年後に転職をしていない 90 名（男性 26 名，女性 64 名）を対象として第 2 回調査（以下，T2）を 2022 年 4 月後半に実施した。第 2 回調査時の平均年齢は 23.544 歳（SD = 0.889）であった。

手続き及び倫理的配慮　楽天インサイト株式会社に委託して，登録モニターに回答を依頼した。本研究は JSPS 科研費 19K03200 の助成を受けて実施された。本研究は，中京大学の「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」の承認を得て実施された（申請番号 2021-010)。本発表に関して開示すべき利益相反事項は無い。

質問項目　スクリーニング項目，職種等のフェイスシートの他，以下の T1，T2 共通の質問項目で構成されていた。最初に，特定の行動ではなく silence 自体についての考えを聞くために，職場において自分の考えを述べることにどの程度賛成か，0（反対）～8（賛成）の 9 件法で，①自分の考え，②現代日本社会の賛成度の推測（以下，社会推測)，③所属する職場の賛成度の推測（以下，職場推測）について回答を求めた。次に，silence に関わる具体的な発言行動について①～③に加え，④自分ならその行動をとるか回答を求めた (以下，自分の行動)。行動の内容は，やむを得ない事情で残業を断る，有給休暇を取得する，先輩に異論を唱える，自分が忙しい時に他の仕事を断る，上司からの傷つく言動を窓口に相談するの 5 つであった。たとえば，残業を断るか問う場合，0（確実に断らない）～8（確実に断る）というように，その行動に合わせた文言を両端に設定して 9 件法で回答を求めた。その他，本発表には含めていないが，組織風土の尺度も用いた。

【結果と考察】

分析には Amos25 を用いた。最初に silence 自体についてパス解析を行った。具体的には，T1 の自分の考えから T2 の自分の考えというように，T1 から T2 の同じ項目へパスを引いた。さらに，T1 の職場推測と社会推測から T2 の自分の考えにもパスを引き，T1 の自分の考えから T2 の職場推測及び社会推測にもパスを引いた。分析の結果，適合度は χ^2 (2) = 2.474 (p = .290), GFI = .991, AGFI = .905, CFI = .995, RMSEA = .052 となった。T1 の自分の考えから T2 の自分の考えには有意な正の影響が見られたが (β = .233, p = .036)，T1 の職場推測により T2 の silence に対する自分の考えが影響を受けることは無いことが示された (β = -.163, p = .142)。

次に，考えではなく行動に職場推測の影響が見られるのか検討した。5 つの行動について，上記のモデルに，T1 の職場推測から T2 の自分の行動へのパス及び T1 の自分の行動から T2 の職場推測へのパスを加えてパス解析を行った。すべての行動について同じモデルで比較するため，個々のモデルについてパスを削除する等の修正は行わなかった。分析の結果，自分が忙しい時に頼まれた他の仕事を断る場合について，仮説が一部支持された (χ^2 (2) = 5.607 (p = .061), GFI = .985, AGFI = .726, CFI = .991, RMSEA = .142)。具体的には，T2 の自分の行動に対して T1 の自分の行動からの有意な影響は見られず (β = .020, p = .910)，T1 の職場推測から正の有意な影響が見られ，仮説の通りとなった (β = .363, p = .008)。しかし，T2 の自分の考えに対しても T1 の自分の考えからの有意な影響は見られず (β = .140, p = .419)，T1 の職場推測から正の影響が有意傾向で見られ，仮説とは異なっていた (β = .224, p = .088)。

その他の行動については，それぞれ違う形で仮説と異なる結果となった。たとえば，有給休暇を取得する場合，T1 の職場推測から T2 の自分の行動には有意な影響は見られなかったが，T1 の自分の行動から T2 の職場推測には正の有意な影響が見られた。一方で，先輩に異論を唱える場合は，T1 の職場推測から T2 の自分の行動へ有意な負の影響が見られた。以上より，発言行動の種類によっては，推測された職場の規範に個々人の行動が寄っていくことで多元的無知が生じる可能性はあるが，すべての発言行動に見られるわけではないと考えられる。

【引用文献】

Geiger, N. & Swim, J. K. (2016) Climate of silence: Pluralistic ignorance as a barrier to climate change discussion. *Journal of Environmental Psychology*, *47*, 79-90.

Morrison, E. W. (2014) Employee voice and silence. *Annual Review of Organizational Psychology and Organizational Behavior*, *1*, 173-197.

(まつもととともいちろう・よしだたくや)

親和図法を用いた都市イメージに関する検討

～女子サッカーチームのホームタウンを対象として～

○桑原大空[1]　亀岡聖朗[2]
([1]桐蔭横浜大学大学院スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻　[2]桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部)

キーワード：女子サッカー、親和図法、都市イメージ

【目的】本研究は、観客数の増加を課題の一つとする女子サッカーチームに焦点をあて、観戦者と非観戦者との比較から、観戦者増加に繋がる要因を検討・考察しようとするものである。押見ら(2017)は、「ツール・ド・フランスさいたまクリテリウム 2015」の観戦者を対象に、スポーツイベントの観戦経験に伴う快感情が都市イメージなどにもたらす影響について検討し、スポーツイベントが持つ感情的側面が観戦経験に果たす役割の重要性を示唆した。

そこで本報告では、観戦意図に関連する要因としての都市イメージに注目し、女子サッカーチームのホームタウンの神奈川県大和市の都市イメージを検討することを目的とした。

【方法】神奈川県民を対象に、女子サッカーなでしこ 2 部リーグ所属の大和シルフィードのホームタウンである神奈川県大和市のイメージについてオンラインによる質問紙調査を実施した。**調査対象者**：神奈川県民 343 名(男性 221 人、女性 122 名)。年齢は「70 歳以上」が最も多く(48 人;14%)、続いて「55 歳～59 歳」(44 人;12.8%)が多かった。**結果の整理**：親和図法に基づいて分析を行った。親和図法とは、KJ 法に由来する情報整理法の一つで、品質管理において言語データを分析するために開発され、統一性のない情報やアイデアを意味合いの親和性によってグループ化・図式化して問題の所在を明確化し、解決を図るものである(齊藤ら，2020)。具体的な手順は、調査対象者が抱く大和市のイメージを自由に 3 つまで記述してもらい、それぞれ－3(否定的)から＋3(肯定的)まで 7 段階尺度で評定を求め得点化した。その後、項目化したイメージ内容(以下キーワード)に対して調査員 1 名と教育心理学の専門家で話し合い、親和性が高いキーワードをまとめてベースクラスターとし、さらにベースクラスターで類似したものを中間クラスターとしてまとめ、各々に名称を付与して親和図を完成させた。なおクラスターには各キーワードの得点の合計値を、(　)内の合計件数とともに図に表示した。合計値は、そのクラスターをどの程度人々が肯定的(＋)ないし否定的(－)に捉えているかを知る目安となる。

【結果】回答されたキーワードは 593 件(合計値 177)で、【街の雰囲気】、【公共交通(電車)の発達】、【神奈川県】、【外国との共生】、【商業施設】、【スポーツ・健康】、【道路交通(自動車)の発達】、【自然が多い】、【交通の便】、【公園が多い】、【教育・福祉】、【その他】の 12 の中間クラスターが抽出された(図 1)。

最も件数が多かったのは【街の雰囲気】で合計値は 4 点で 164 件、ベースクラスターは「にぎわい」、「のどか」、「街の規模」、「住みやすさ/暮らしやすさ」、「治安」、「なじみ」、「都会/田舎的」、「その他(かっこいい/地味など)」の 8 つであった。次に件数が多かったのは【公共交通(電車)の発達】で合計値は 65 点で 112 件、ベースクラスターは「電車」、「駅」、「通過点」の 3 つであった。三番目に件数が多かったのは【神奈川県】で合計値は 40 点で 88 件、ベースクラスターは「神奈川県下の都市大和」、「近隣の都市」の 2 つであった。【外国との共生】も多く合計値は－59 点で 54 件、ベースクラスターは「米軍基地」、「外国人」の 2 つで、否定的な中間クラスターでは最も件数が多かった。続いて【商業施設】で合計値は 40 点で 32 件、ベースクラスターは「飲食店」、「ショッピングモール」、「その他(パチンコ屋/ 店が潰れた)」の 3 つであった。

【教育・福祉】は合計値 2 点で 10 件、ベースクラスターは「ポジティブ(学校/子育てしやすさ)」、「ネガティブ(引きこもり/障害者差別)」の 2 つであった。【スポーツ・健康】は合計値 14 点で 8 件、ベースクラスターは「健康都市宣言の都市」、「スポーツが盛ん」の 2 つであった。

【道路交通(自動車)の発達】は合計値－13 点で 25 件、否定的なクラスターであった。【交通の便(良/悪)】は合計値 17 点で 17 件、【公園が多い】は合計値 17 点で 16 件、【自然が多い】は合計値 30 点で 12 件、【その他】は合計値 21 で 41 件であった。これらは中間クラスターとして扱った。

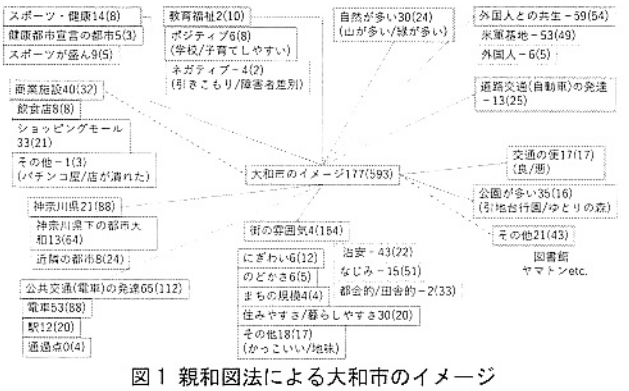


図 1 親和図法による大和市のイメージ

【考察】比較的件数が多かった中間クラスターは、【街の雰囲気】、【公共交通(電車)の発達】、【神奈川県】、【外国との共生】、【商業施設】であった。これらの合計値は【外国との共生】以外は＋を示し、その他の中間クラスターの合計値の符号もほぼ＋なことから、人々は大和市を概ね肯定的に捉えていると考えられた。また、公共交通の発達や商業施設の抱負さといった都会的な側面と、自然や公園が多いといった郊外の側面を併せ持つ都市イメージであることが示された。一方で、【外国との共生】や【道路交通(自動車)の発達】は合計値が－を示し、否定的に捉える側面があることも示された。これは、米軍基地(厚木基地)が近いことや高速道路の渋滞に由来すると考えられた。

なお、【スポーツ・健康】も導き出された。これは大和市が女子サッカーチームのホームタウンであることや高齢者対象の健康イベントの実施に由来すると考えられたが、出現件数は相対的に少なかった。このことから、大和市のスポーツ・健康に対する取り組みは、都市イメージとしてはあまり浸透していないことがうかがえた。

今回の調査では、イメージを質的に捉えその内容が肯定的か否定的かを量的に捉える工夫も行った。今後、抽出内容に基づき都市イメージの測定尺度を作成する予定である。

【引用文献】

押見大地・原田宗彦（2017）スポーツイベントの開催が観戦者の行動意図に及ぼす影響：イベントにおける快感情、イメージフィット、都市イメージに着目して．スポーツマネジメント研究,9(2),3-18.

斎藤れい・佐藤昴省ほか（2020）競技ドッジボールの国内普及と強化ならびに国際化に向けての提案．スポーツ産業学研究,30(1),121-124.

（くわはらそら　かめおかせいろう）

高嶋正士と偉大性心理学

― 鎌倉時代に生きた親鸞聖人の偉大性について ―

藤田主一
（日本体育大学）
キーワード：高嶋正士、偉大性、親鸞聖人、鎌倉時代

【研究の背景と目的】

高嶋正士（本学会名誉会員）は、人格の偉大性を研究した心理学者である。高嶋が偉大性を研究しようとした背景には成育歴との関係が大きかった。彼は新潟県上越市の浄土真宗本願寺派の寺院に生まれ後年第16世住職になるのだが、京都の仏教系大学の学生だったころ心理学に興味を抱いていた。


高嶋正士（1925-2021）

彼は戦後混乱期の只中で、生家を継承し仏教を生涯の職として生きるべきか、心理学を学んで新たな道を求めるべきかという大きな葛藤の中にいた。思い悩んだ後、彼の大叔父で高名な仏教学者である高嶋米峰（1875-1949 東洋大学第12代学長）に思い切って相談したところ、米峰からの深い助言を得ることで、仏教を土台とする心理学者が誕生したのである。

高嶋が志した研究は、仏教心理学の体系化ならびに宗教的偉人の偉大性要因を明らかにすることであった。宗教的偉人については、ほぼ同時代（鎌倉時代）の法然（1133-1212）、親鸞（1173 - 1263）、日蓮（1222 - 1282）を取り上げているが、なかでも自身の生い立ちと関連するため浄土真宗の宗祖である親鸞聖人を中心にすることが多かった。彼の修士論文や博士学位論文は「偉大性（傑人性格）」に関するもので、心理学者の千葉胤成や古賀行義の指導を受けている。

ここでは、高嶋が何を明らかにしようとして宗教的偉人の偉大性（特に親鸞）に迫ろうとしたのか、得られた心理学的な成果を検討することが目的である。（本文中の敬称略）

【方法】

人格の偉大性について高嶋が公表した著書や論文、日本応用心理学会や日本心理学会などの年次大会で発表した大会論文集の記録等をもとに、回顧展望する方法を用いた。

【結果と考察】

（1）2022年NHK大河ドラマ「鎌倉殿の13人」は、平安末期から鎌倉時代にかけて平家、源氏、北条氏、天皇家などが絡み合う権力闘争を描いているが、同時に親鸞が誕生して生き抜いた時代でもあることを知っておきたい。登場する平清盛、源義経、源頼朝、北条時政、北条義時、北条政子、後白河法皇、後鳥羽上皇など歴史上の有名人が暗躍するころに、親鸞は幼少期から壮年期を過ごしている。清盛死去、平家滅亡、義経死去、頼朝征夷大将軍（鎌倉幕府）、頼朝死去、北条氏執権という動乱のほぼ20年間（親鸞9～29歳）、親鸞は比叡山延暦寺で修行し学問に励むのだが、天台宗による修行に行き詰まり1201年に下山して法然の弟子になる。

司馬遼太郎は、著書『この国のかたち』の中で、「鎌倉時代というのは、一人の親鸞を生んだだけでも偉大だった」と述べている。親鸞は、「鎌倉殿の13人」にはお目見えしていない。歴史の表舞台に華々しく登場する上記の人々とは異なり書物を読み自己と向き合う姿、民衆と語り合う姿は決して表舞台の活躍とは言えないが、彼が残した足跡はこの時代に生きた民衆ばかりか、その後の人々の大きな支えとなった。

（2）高嶋は、親鸞をもって法然や日蓮とならんでわが国中世における宗教家であると位置づけ、同時に時代を風靡した一大傑人であると評価している。彼が親鸞を「傑人」（または偉人）と評価した理由は、以下の観点からである。

（1）人生に一貫する宗教的信念を把握し、自己の特別な信仰の根本が絶対的真実であるという確信をもっていたこと。

（2）直感的情操に優れ、強い宗教的感情をもち、徹底した個我主義であること。

（3）道徳の一切を自己の教義の形式で説き、自説をまげず終始一貫させたこと。

（4）流罪（越後国、現在の新潟県上越市）に際し、毅然として節を持し、泰然として難に処したこと。

（3）傑人といえば、一般的に「飛び抜けて優れた人」「並外れて優れた人物」を指し、人格や思想、業績などに傑出した特色があったり、その人物が知者徳者や事業家であったりすることが多い。一方、高嶋はそれだけでは十分とは言えずもっと斯界に名を馳せるような外面的に現れる「なにものか」を持っていなければならないと説く。そのため、具体的に親鸞の生涯をとおしてその意義を明白にしようと試みている。要約すれば、次のようになるだろう。

親鸞は法然の教えをいっそう深め、念仏の行者として自説を主張した。35歳のとき、承元の法難（1207年、後鳥羽上皇によって法然の門弟4人が死罪とされ、法然および親鸞ら門弟7人が流罪にされた事件）に法然とならんで越後国府へ流罪（法然は土佐国）となった。彼の何が罪科に相当したのか。その大きな1つは、大胆な他力の信仰告白と女犯（にょぼん、妻帯を含む）とが忌諱にふれたことであろう。当時世間の眼は絶えず親鸞に向けられ、このような彼の態度は斯界の問題となったに違いない。しかし、親鸞は勇敢にも信仰の実際化、生活化の第一歩を進めていったのである。

親鸞は法然の門弟として自己の主張を守りとおし、強い信念を持ち続けることで流罪の身を悲しまなかった。また徹底した信念に生きることで、誠心誠意、人に対してこれを欺瞞する態度がなかった。業績は精神界に大きな影響を与え、宗教を刷新して心理的な「なにものか」を与えてきた。その背後には、親鸞の精神的素質があったからだと思われる。

（4）親鸞聖人90年の生涯を回顧すると、これまでの考察からその偉人（傑人）としての偉大性が浮き彫りにできる。

高嶋は、偉大とは「存在の力」「活動の意義と価値」「魂の偉大」「人格の高貴」「意志の強固」「意力の平衡」などが複合統合したものであると捉えている。

【引用文献】

高嶋正士（1968）伝記にあらわれた宗教的偉人の偉大性－法然・親鸞・日蓮の性格分析を中心に－，現代心理学論集，明星大学心理学研究室編，pp.257-281.
高嶋正士（1992）親鸞のパーソナリティ形成要因に関する一考察，共立女子大学家政学部紀要第38号，pp.81-87.
高嶋正士（1997）偉人・天才の心理学，医学出版社.
藤田主一（2021）高嶋正士と偉大性心理学－偉人・天才の偉大性について－，日本応用心理学会第87回大会発表論文集，p.27.
（ふじた しゅいち）

自主企画発表

幼児期・児童期・青年期の自己信頼性の発達診断と保育・療育

田中真介[1]、塚田直也[2]、横井川美佳[3]、本原琴美[3]

([1]京都大学国際高等教育院、[2]筑波大学附属視覚特別支援学校 [3]京都大学大学院人間・環境学研究科)

キーワード：幼児期・児童期・青年期の発達、自己信頼性、社会的交流性、発達診断、保育・療育

【企画の趣旨】

乳幼児期から児童期・青年期の発達過程では、自己信頼性（自分自身の価値を発見し尊重する力）と社会的交流性（自分と世界との絆を結び、つながりをつくる力）の生成発展が、運動、手指、認知・言語などの個別諸機能の発達を支えている。子どもたちは社会的交流活動を通じてまわりの世界に積極的に働きかけ、基本的な安心性と信頼性を形成し、自分の気持ち（感情）や思い（願い）を表現する力を得て自らの自然本性を豊かにする。

一方、発達過程で自己信頼性の生成発展が制約されている場合に、個別機能の発達も抑制され、教育的な援助を必要とする子どもたちが少なくない。このワークショップでは、保育・教育・療育の実践現場で、自己信頼性の発達の水準と特質をとらえる新たな発達診断の観点と具体的な方法についての研究成果をもとに、子どもたちを支える新たな教育方法を構想し実践してきた成果と課題を検討する。

とくに自閉症療育、乳幼児保育、小中学校教育の実践現場で基礎的な発達研究と教育実践研究を行ってきた３名の演者から研究成果の報告を受けて、幼児期、児童期、青年期での自己信頼性の発達診断の観点と方法、また、保育・教育・療育の中での具体的な教育的援助の方法を検討し、自己信頼性の発達的意義を討議する。

…

【話題提供１：自閉症療育】

塚田直也「自己信頼性を尊重した教育の意義　～自閉症児童への療育実践を通して～」

自閉症児３名、A 児（生活年齢 CA 3:1、発達年齢 DA 1:7）、B 児（CA 6:8、DA 1:9）、C 児（CA 11:1、DA 5:8）を対象として、自己信頼性を尊重した療育実践を行った。１年間の実践記録をもとに、各対象児の発達過程を分析した。自己信頼性の発達水準が異なる３名への実践内容を相互に比較し、自己信頼性の発達的意義と教育援助の方法を考察した。

A 児（自我の誕生期）は、よく物を壊し人を叩くなどの傾向を示し「自分・対象の価値の実感」への援助を求めているとみて、気持ちに共感し、言語表現を模倣・再現（ミラーリング）して自己理解を援助した。母親や教師に抱きつくといった温かい交流が多彩になり、自己表現の言葉が増えて相手を理解し受け入れる力が獲得されていった。

B 児（自我の拡大期）は、働きかけを「イヤ！」と強く拒否する傾向があった。社会的価値（好きな絵本や歌）を共有する遊びを通して、「気持ちを受けとめてもらう心地よさの実感」を得て「自我の拡大と充実」が実現できるよう援助した。相手を受け入れてそのリズムに合わせて一緒に体を動かす遊びを楽しむなど、多彩な自己表現ができ始めた。

C 児（自励心・自制心の形成期）は思いを率直に表現できず、気持ちの揺らぎを抱えていた。嫌だと思うことを歌詞に取り入れた「嫌いの歌」を作って友だちや教師と一緒に歌うなど、多彩な価値を理解して自己表現に生かせるよう援助した。自分自身を繊細に理解し、相手の多様な思いを受けとめて仲間同士での共同の遊びが発展していった。

自我・自己信頼性の発達段階に焦点をあわせた教育方法を工夫することで、人や物との関わりや自己表現が豊かになり、破壊や拒否などのネガティブな行動は減少した。①自我の誕生期（DA10 か月～2 歳代）：子どもの行為を意味づけ、共感的に受けとめることで自他の価値を実感でき始めた。②自我の拡大期（DA1 歳半ば～3 歳代）：自分の力を多様な場面で発揮し受けとめられて自他を尊重する力が育まれた。絵本や音楽を楽しんで世界を拡げ、自己理解を多彩にしていった。③自励心・自制心の形成期（DA3 歳～5 歳代）：気持ちを受けとめられ多様な価値観に触れる援助によって、自分の多面的な多面的に発見できた。自分の変化を見つめる自己が育ち、相手の内面を理解して自励心・自制心が育まれた。

…

【話題提供２：幼児期の発達と保育】

横井川美佳「幼児期の自己認識と手指操作の関連性　～自画像描画による自己信頼性の発達評価～」

3～6 歳児 56 名を対象として、自己信頼性と個別の諸機能（手指操作、認知機能）との関連性を考察した。自己信頼性の形成水準と特質を自画像描画で推定した。自画像はグッドイナフ人物画検査で評定した。

握り圧計を用いて手指操作の水準と特質をとらえた。両手に持ったゴムバルブを次の３つの条件で左右交互に把握させ、手指把握操作の圧力変動を定量的に分析した。①モデルありで１秒ごとの切換え、②モデルありで２秒ごとの切換え、③モデルなし。モデルを見ずに自律的に行う交互開閉の水準が自画像得点と有意な関連性があったことから、自己認識を深めて自分自身への信頼性を啓培することによって手指操作の水準が高まると推察される。認知的力量とは別に、子ども自身の自己信頼性を発達的に評価し、支援の焦点とする必要がある。自我の育ちを支え、自己信頼性の力を育むためには、受動的な活動でなく子どもたちが自発的・能動的・主体的に取り組む活動が重要となろう。

…

【話題提供３：思春期の発達と教育】

本原琴美「思春期での自己信頼性と社会的交流性の発達と教育　～自己認識と精神健康度の関連性～」

思春期には、自分自身の価値を発見し尊重する「自己信頼性」が育ち、仲間集団の中で新たな「社会的交流性」の力を展開して普遍的な価値を発見し共有していく。小学 3～6 年生 211 名、中学 1～3 年生 119 名の計 299 名を対象として「一般健康調査 12 項目版（GHQ-12）」で健康度を調査し、「自己理解アンケート」（20 答法、3 つの願い、小さい頃、成長の実感、印象深い記憶、将来展望、好きな歌、感想）によって社会的・関係的（空間的）及び発達的・形成的（時間的）な自己認識の内容をとらえた。自己理解の内容をもとに思春期の自己信頼性の構造と発達過程を明らかにし、自己信頼性と社会的交流性の関連にもとづいた新たな教育方法を考察した。

全体に健康度が高いほどポジティブな自己理解の回答が多くなる傾向にあった。小学生では、精神的健康度のうち「しあわせ感」は高かったが「有能度・信頼度」「問題解決力」の評価が低かった。自分への自信のなさ、感情表現の揺れが顕著だった。中学女子では健康度が顕著に低い事例がみられた。将来展望に揺らいでいる一方で、社会的自立モデルとしての「あこがれの人」との出会いを求めていた。思春期には、自己理解を深めて自分自身の存在と価値を実感して「心の小箱」をつくる。それが精神的健康を支えていると推察される。

（たなかしんすけ、つかだなおや、よこいがわみか、もとはらことみ）

企業における心理データを活用した応用研究

心理学とAIのコンバージングテクノロジー

○紺野剛史[1]　陽奥幸宏[1](非会員)　近野恵[1]　多田有美子[2](非会員)　古田晶子[2](非会員)　沢田秀司[3](非会員)　桐生正幸[4]
([1]富士通株式会社　[2]こころのケアのための芸術協会　[3]順天堂大学健康総合科学先端研究機構　[4]東洋大学社会学部)

キーワード：心理学，AI，コンバージングテクノロジー

【目的】近年，患者の状態に合わせたヘルスケア支援や，多様化する犯罪など，複雑化する社会課題に対し，単一分野に閉じたAI技術だけで解決することが困難となっている。
我々は，これらを解決するためには人を深く理解する必要があると考え，AI技術に心理学の知見を融合したコンバージングテクノロジーの研究を進めている。特に，AIを用いた感情推定技術の精度向上や，人の心理状態などの内面の理解を目指して，心理データを活用した応用研究に取り組んでいる。本稿では，企業における心理データを活用した応用研究事例として，二つの取り組みを報告する。一つ目は，オンラインでのヘルスケアの指導者に対し，患者の状態把握を支援する取り組みである。二つ目は，防犯向けに，犯罪心理学を活用した特殊詐欺未然防止AIを開発する取り組みである。

AIによるヘルスケア支援に向けた取り組み

【目的】コロナ禍において，オンラインでのヘルスケアなどの需要が高まっている。特に高齢で認知機能の低下した患者においては，コロナ禍により人との接触が減ることで症状の悪化が懸念されており，リモートでの認知症ケアが急務となっている。しかしながら，カメラ越しでの観察となるため患者の細かな状態の把握が難しいという問題がある。そこで，富士通（株）では順天堂大学と共同で，オンラインでの非薬物療法実施時の行動・表情を分析することで，患者の状態を把握し，継続的な支援を行うオンラインデイサービスの実現を目指している。本研究では，最初のステップとして，運動療法，芸術療法への支援に向け，以下の評価を行った。
[運動療法] 主観的運動強度（Rating of perceived exertion; RPE）[1][2]と表情（Action Unit; AU）[3]の関係を評価し，運動負荷の制御の可能性を検証した。
[芸術療法] 芸術実施時の表情から，集中度と笑顔の推定を行い，臨床美術士の振り返りへの活用可能性を検証した。
【方法】
[運動療法] 40歳以上の健常者5名を被験者とした。実験では，臨床美術士による指導のもと，スクワット15回(短縮-伸張リズム:3秒-3秒)を1セット，セット間休息を60秒として計5セットを実施してもらい，この時の表情を4Kカメラにより撮影した。また，各セット後，被験者にはRPEを申告してもらい記録した。本件は，順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科の倫理委員会の承認の上実施した。
[芸術療法] 65歳以上の軽度認知障害患者4名を被験者とした。臨床美術士による指導のもと1回1時間程度の芸術療法を4回実施し，その表情をWEBカメラにより撮影した。本件は，順天堂大学病院の倫理委員会の承認の上実施した。
【結果】
[運動療法] RPEと複数のAUに高い相関が見られた。特にAU06，AU07，AU09，AU10，AU12，AU14といった目周り，口元周りのAUが高い相関を示していた。特に，運動習慣の少ない3名で強い相関が見られた。
[芸術療法] 顔向きをベースとした集中度推定，AUを用いた笑顔推定のAIモデルを開発し，振り返り支援のためのUI案を考案した。上記は臨床美術士の判断とある程度一致しており，振り返りに活用できるとの意見が得られた。
【考察】
[運動療法] RPEと相関の高いAUが発見されており，表情からRPEを推定できる可能性が示唆された。今後は，RPEを推定するAI技術を開発するとともに，被験者へのフィードバック方法を検討していく。
[芸術療法] 集中度，笑顔推定AIモデルを開発し，臨床美術士の振り返りに活用可能であることが示唆された。今後は，現場での適用可能性を検証していく。

特殊詐欺未然防止AIの開発に向けた取り組み

【目的】高齢者の特殊詐欺被害が増加しており，未然防止策が必要とされている。電話音声を分析する手法が提案されている（遠藤・谷田，2022）。しかし，犯人の手口が変化するため，手法が適用できなくなる課題がある。そこで，手口によらず共通して生じる被害者側の騙された心理状態に着目し，富士通（株）のAIによるセンシング技術と東洋大学の心理学の知見を融合し，心拍数や呼吸数などの生理反応から心理状態を推定することで，被害を未然に防ぐ技術の実現を目指している。本研究では，高齢者が特殊詐欺電話を受けたときの生理反応と心理状態の関係を分析することで，心理状態推定の可能性を検証した。
【方法】68～84歳の男女15名が実験に参加した。還付金詐欺を模擬した音声聴取時に，装着したセンサーから心電および呼吸データを取得した。また，改良したPOMS2の緊張・混乱に関する項目に回答してもらった。さらに，性格的な特性の寄与を考慮し，猜疑心尺度などを改良した心理尺度も測定した。本実験は，東洋大学社会学部の倫理委員会の審査による承認を得た上で実施された。
【結果】異常な測定データを除いた12名分を分析対象とした。心理状態を目的変数とした重回帰分析により，被害者が緊張・混乱状態を引き起こす要因を分析した結果，性格的な特性を含む11因子が関与していることを明らかにした。
【考察】11因子を基に詐欺被害者の心理状態を予測できる可能性が示唆された。今後はこれらを用いて心理状態を推定し，特殊詐欺未然防止AI技術の開発を行う予定である。

以上より，心理データを活用することにより，AI技術だけでは実現できなかった感情推定や心理状態推定ができることを明らかにした。AIと心理学の知見を融合した応用研究を進めることで社会課題の解決に貢献していきたい。

【引用文献】

[1] Borg GA. Perceived exertion: a note on "history" and methods. Med Sci Sports. 1973 Summer;5(2):90-3.
[2] 小野寺孝一・宮下充正（1976）．全身持久性運動における主観的強度と客観的強度の対応性: Rating of perceived exertion の観点から．体育学研究. 21(4):191-203.
[3] Paul Ekman・Wallace V. Friesen・工藤 力（訳），表情分析入門－表情に隠された意味を探る，誠信書房，1987
[4] 遠藤 渉太・谷田 康司（2020）．特殊詐欺通話の検出のための感情分析を用いた音声解析に関する検討　信学技報 NS2020-78, 120 (257), 14-19.

（こんの たけし・ようおく さちひろ・ちかの めぐみ・ただ ゆみこ・ふるたあきこ・さわだ しゅうじ・きりう まさゆき）

読書と自然，そのカウンセリングにおける役割

読書カウンセリング，森林を利用したカウンセリングやメンタルヘルスとは？

○林潔[1]　平宮正志[2]　竹内啓恵[3]
([1]白梅学園短期大学　[2]神田外語大学　[3]樹づ木合同会社・東京農業大学)
キーワード：　森林散策カウンセリング

はじめに

さまざまな対象とのかかわりが，人を癒し，成長の手がかりとなっている。

カウンセリングは，本人の意志決定を基本とした相談活動である。

人間は努力するかぎり迷うものだ。
（ファウスト　天上の序曲　手塚富雄訳）

岡部弥太郎は進路相談で，産業界を志望する学生に日経の「私の履歴書」を読むことを勧めていた。学生相談ではEndeの「モモ」が活用されていた。読書のカウンセリング，心理療法的な役割については古くから知られており，古代テーベの図書館の入り口に「魂をいやす所」という銘板が掲げられていたといわれる（室伏,1965）。

森林アメニティ，すなわち森林の休養，健康増進，また医療，福祉，心理面での利用の可能性が指摘されている（上原・高山・竹内,2022）。森林散策カウンセリングは，その方法の一つである。生物としての人間。人工空間と自然とのバランスが求められる。

このワークショップではこの二つの領域の最近の動向を紹介する。

読書カウンセリングの可能性：愛から出発して愛に終わる
平宮正志

フロム，E.(1959)が指摘する愛の要素は，配慮・責任・尊敬・知識である。読書の視点から考察するなら，読書を通して新しい知識を得ること，他者への配慮の仕方を学ぶこと，自己責任について把握すること，他者への敬意の伝え方を学ぶこと等が，愛の学習である（平宮，2019）。すなわち読書は愛を育むものである。

次に読書カウンセリングを「読書を活用しての教育的カウンセリング活動」（平宮，2019）と定義する。なおここでのカウンセリングとは，國分（1990）のカウンセリングの定義「カウンセリングとは言語的および非言語的コミュニケーションを通して，健常者の行動変容を試みる人間関係である」をふまえてのものである。

読書カウンセリングの具体的な方法としては，現時点で①図書室登校，②詩作活用エクササイズ，③集団読書，④読書指導，⑤図書館・書店巡り，⑥書籍からの知識の整理，⑦読書を活用しての創作指導（例；作文，詩歌，論文），⑧本に囲まれた環境づくり（例：家庭，学校，職場，社会的施設）がある。

今回それらを基に，読書カウンセリングの更なる可能性を提唱する。

具体的には，①小中学校における積極的な書籍の環境整備，②図書館司書や司書教諭等へのカウンセリングやコミュニケーションスキルの研修，③詩作活用エクササイズの工夫，④学校における「読書気づきノート」の導入，⑤小中高等学校における読書会の定期的な実施，⑥幼稚園・保育所・小学校における親子読書会の開催，⑦ボランティア団体や地方自治体等による読書啓発活動，⑧地方自治体や民間による駅前への図書館の誘致，以上８つを提唱する。

なお一つ目の，小中学校における積極的な書籍の環境整備と，八つ目の地方自治体や民間による駅前への図書館の誘致は，環境からの影響を考慮したものである。付き合う人同様，身近にある書籍の力を活用する。また今回の発表では，電子書籍に関しても述べている。

終わりに，ゲーム依存やインターネット依存の問題，愛を育む読書の重要性，さらに参考文献を紹介した。

森林を活用したカウンセリングやメンタルヘルスとは？
竹内啓恵

さまざまなカウンセリングの理論や手法があるが、一般的に、カウンセラーとクライエントが面接を行う場所は室内であることが多い。クライエントによっては、室内で行う面接に閉塞感、圧迫感、息苦しさなどを感じて、話したくても思うように話せなくなる場合がある。また、都市部に住む私たちの日常生活では、身近に存在していた自然環境が、いつの間にか失われてきたこともあり、ちょっとした気分転換や息抜きが気軽にできなくなってきている。そうなると、学校や職場、また家庭などで生じたストレスや怒り、また不安や行き詰まりなどを発散させる場所や方法の種類も少なくなってしまうのではないかと考えられる。さらに、2020年から始まった新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、私たちは外出することや人と会うことに制限が強いられ、以前にもまして、コミュニケーションの機会が少なくなってきており、心身共に厳しい状況に置かれている人も多いのではないかと推測される。

日本は、国土の約７割が森林で覆われており、都市部に住んでいても、森林のある環境へは１時間程度で出かけられ、そこには、動物、樹木、植物、昆虫、微生物、鳥などの生物と気象や土壌の環境条件、光、水などの資源が存在し、これらが互いに関係し合い影響し合いながら生き続けるシステム（生態系）が存在する。これらの関係は、私たち人間の生活においても、人と人が互いに関係し合い、影響し合いながら生きていることと何ら相違ない。これらの環境を活用したカウンセリングやメンタルヘルスは、屋外へ出る気分転換が得られ、体を動かす運動機能や自然享受を獲得できる他、これらがクライエントの感性や情動を刺激し、自己の振り返りや新たな自己の再発見を促し、第三者とのコミュニケーションを容易にさせる働きがあると考えられる。森林を活用したカウンセリングは、室内でのカウンセリングとは別に、今後の社会において必要となっていく手法の一つではないだろうか。

引用文献

室伏武　1965　読書療法研究の史的展望　読書科学,8,3,1-7.

上原巌　高山規理　竹内啓恵　2022　事例に見る森林アメニティ　全国林業開発普及協会

教育発表

【 教育発表】

Instagramの自撮り投稿への「いいね」の多少が自己愛に及ぼす影響

坂本 茅杜 ・ 江尻 尚生 ・ 西川 由梨 ・ 谷口 淳一
（帝塚山大学心理学部）

キーワード：SNS投稿、自撮り、自己愛、いいね

【目的】

本研究では、SNSに投稿した自撮りに対しての「いいね」の多少が自己愛に及ぼす影響について検討した。「いいね」が多いほど承認欲求が満たされるため自己愛が高まると考えられる。

そのため、自撮りに対する「いいね」が多い場合の方が少ない場合よりも、自己愛がより高まるとの仮説を設定し、検証した。

【方法】

調査参加者 大学生198名（男性61名、女性134名、回答しない3名、平均年齢＝19.67歳、*SD*=1.28）がオンライン調査に回答した。

フェイス項目 年齢、性別、誕生月について回答を求めた。誕生月は「いいね」量条件の割り振りのために設定した。誕生月が奇数の場合は「いいね少ない」条件、偶数月の場合は「いいね多い条件」の場面を提示した。「いいね多い」条件、「いいね少ない」条件ともに99名だった。また、SNS自撮り経験についても尋ねた。自撮り経験がある人は110名（55.56%）だった。

場面の設定 「あなたはSNSをしています。あなたのフォロワーは100人です。ある日あなたは自分が映っている画像をアップしました。」とSNSに自撮りした画像を投稿した場面を提示し、それに対して「いいね」が多かった場面(フォロワー100人中80人)か、少なかった場面(10人)かのいずれかを想定するように求めた。また、自撮りには後ろ姿は含まないこと、顔が写っているものであること、集合写真や他撮りで自分が写っているものでも構わないことを説明しておいた。

自己愛についての項目 自撮りに対する「いいね」反応の場面設定の提示前と提示後の2回、自己愛の尺度に回答を求めた。小西・大川・橋本（2006）の自己愛人格傾向尺度(NPI-35)から「注目欲求」「誇大感」「主導性」「身体賞賛」「自己確信」の各因子3項目の合計15項目を抜粋して用い、「7.非常にあてはまる」～「1.全くあてはまらない」の7件法で回答を求めた。場面提示後は「上記のような場面に直面した瞬間のあなたについてお尋ねします」として回答を求めた。

【結果と考察】

場面想起前の自己愛についての15項目について、探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。因子数は、小西他(2006)と同様に5因子とした。その結果、小西他(2006)の「自己確信」因子に含まれる項目が同一因子にまとまらなかった。そのため、小西他(2006)の「自己確信」因子に含まれる3項目を除外した12項目について因子数を4因子に指定して再度因子分析を行った。小西他(2006)と同様の4因子が示されたため、小西他(2006)に従い因子の命名を行った。第1因子は「誇大感」、第2因子は「主導性」、第3因子は「注目欲求」、第4因子は「身体賞賛」因子と名付けた。各因子負荷量の高い項目の平均値を算出し合成変数を作成した。各因子のα係数を求めたところ、誇大感=.91、主導性=.67、注目欲求=.77、身体賞賛=.75と十分に高い値を示していた。また、各因子の平均値（*SD*）は、誇大感= 2.25 (*SD*=1.10)、主導性= 2.77 (*SD*=0.96)、注目欲求= 3.17 (*SD*=1.14)、身体賞賛= 2.08 (*SD*=0.94)だった。

また、場面想起後の自己愛についての15項目については、上記の場面想起前の自己愛についての因子分析結果に基づき、各因子に含まれる項目の平均値を算出し合成変数を作成した。各因子のα係数を求めたところ、誇大感=.91、主導性=.70、注目欲求=.78、身体賞賛=.83と十分に高い値を示していた。各因子の平均値（SD）は、誇大感= 2.38 (*SD*=1.15)、主導性= 2.83 (*SD*=1.02)、注目欲求= 3.18 (*SD*=1.18)、身体賞賛= 2.21 (*SD*=1.08)だった。

因子ごとに場面想起後から場面想起前の値を差し引き、各因子の場面想起による変化量の値を求めた。

「いいね多い」条件と「いいね少ない」条件それぞれの自己愛の変化量の平均値と標準偏差を求め、Tableに示した。

「いいね多い」条件と「いいね少ない」条件で自己愛の変化量が異なるかを調べるために因子ごとに *t* 検定を行った。その結果、誇大感、注目欲求、身体賞賛において、「いいね少ない」条件よりも「いいね多い」条件において自己愛の変化量が有意に高くなっていた。また、主導性においても有意傾向差がみられ、「いいね少ない」条件よりも「いいね多い」条件において自己愛の変化量が有意に高くなっていた。自撮りに対して「いいね」が多い方が自己愛が高くなるといえる。

本研究の結果から、SNSへの自撮り投稿は「いいね」を求めたものであり、多くの「いいね」を得ることで自己愛が高まることが示唆された。

（さかもと かやと・えじり なおき・にしかわ ゆり・たにぐち じゅんいち）

Table.「いいね多い」条件と「いいね少ない条件」の自己愛の変化量の平均値(SD)とt検定結果

	いいね少ない	いいね多い	*t*値	*df*	*p*値
誇大感	-0.10 (0.69)	0.35 (0.87)	4.10	186.6	*p*<.001
主導性	-0.04 (0.80)	0.16 (0.79)	1.79	195.9	.075
注目欲求	-0.19 (0.78)	0.21 (0.88)	3.34	193.4	.001
身体賞賛	-0.04 (0.61)	0.28 (0.85)	3.07	176.7	.002

浮気行動に対する許容度の大学生と社会人の相違

大西 将宗・今津 尚美・坂口 明日香・橋本 美優・谷口 淳一
(帝塚山大学心理学部)

キーワード：浮気行動、許容度、社会人、結婚

【目的】本研究では、浮気の許容度が結婚しているか否か、社会人であるか大学生であるかによって異なるのかを検討した。仮説１：結婚状態の方が交際状態よりも浮気の許容度が高いだろう。仮説２：社会人の方が大学生よりも浮気の許容度が高いだろう。仮説３：既婚の社会人の方が未婚の社会人よりも浮気の許容度が高いだろう。

【方法】調査参加者　オンラインにて調査を実施し、回答に不備のなかった大学生 184 名（男性 60 名、女性 122 名、回答しない２名、平均年齢＝19.59 歳、*SD*=1.21)、社会人 467 名（男性 226 名、女性 236 名、ノンバイナリー/第３の性別１名、回答しない４名、平均年齢＝33.33 歳、*SD*= 4.00、既婚者 206 名、未婚者 248 名、既婚歴があるが現在未婚である人 13 名）を分析対象者とした。

質問紙の構成　1)フェイス項目：年齢、性別、誕生月について回答を求めた。誕生月は場面想定を実施する条件の割り振りのために設定した。誕生月が奇数の場合は「交際状態」条件、偶数月の場合は「結婚状態」条件の場面を提示した。交際状態条件が 336 名、結婚状態条件が 307 名だった。また、社会人回答者には既婚の有無と社会人歴についても回答してもらった。2)浮気行動への許容度：浮気行動の項目について、増田(1994)および船谷(2006)を参考に 25 項目を作成した。「パートナーがあなた以外の異性と次の行動をとった際、あなた自身はどの程度許せるかをありのままにお答えください」という教示のもと、浮気行動のそれぞれの項目に対する許容度への回答を求めた。回答は「5.許せる」「4.多分許せる」「3.どちらともいえない」「2.多分許せない」「1.許せない」の５件法で求めた。3)各条件の提示場面：「あなた自身が次のような状況におかれていると想像して下さい」との教示のもと、交際状態条件では「あなたには現在交際１年目のパートナーがいます。」、結婚状態条件では「あなたには現在交際３年目を経て、結婚１年目のパートナーがいます。子供はいません。」という場面を提示した。なお、社会人回答者の交際状態条件では「既婚の方は、現在独身であると仮定してご回答下さい」との一文を添えた。

【結果と考察】

浮気行動 25 項目について探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行ったところ、「異性と２人で買い物に行った」などの「グレー行動」、「異性と性交した」などの「黒行動」、「異性と友人や勉強、仕事の話をした」などの「白行動」の３因子が得られた。

各因子に負荷が高かった項目の平均値を各因子の合成変数とした。各因子のα係数を求めたところ、グレー行動α=.93、黒行動α=.86、白行動α=.81 といずれも十分に高い値となっていた。

浮気行動の許容度の３因子について、属性（大学生、社会人）と条件（交際状態、結婚状態）別の平均値と *SD* を算出して、Table 1 に示した。次に、各浮気行動の許容度の３因子のそれぞれが属性と条件によって異なるのかを調べるために、各浮気行動の許容度の３因子それぞれを従属変数、属性×条件を独立変数とする２要因分散分析を行った。その結果、いずれの因子についても、主効果、交互作用効果ともに有意とはならなかった。

社会人において結婚しているか未婚であるかによって、浮気行動への許容度が異なるのかを調べるために、まずは社会人の既婚・未婚と条件別の平均値と *SD* を算出して、Table 2 に示した。次に、各浮気行動の許容度の３因子それぞれを従属変数、既婚・未婚×条件を独立変数とする２要因分散分析を行った。「グレー行動」について、既婚・未婚×条件の有意傾向の交互作用効果がみられた($F(1, 450)=2.75$, $p=.098$)。条件別に既婚・未婚の単純主効果検定を行ったところ、結婚状態のみで既婚・未婚の有意傾向の単純主効果がみられた($F(1, 450)=3.47$, $p=.063$)。結婚状態条件では、既婚者よりも未婚者の方が許容度が高かった。「黒行動」については、有意な主効果、交互作用効果はみられなかった。「白行動」については、既婚・未婚×条件の有意な交互作用効果がみられた($F(1, 450)=6.11$, $p=.014$)。条件別に既婚・未婚の単純主効果検定を行ったところ、交際状態($F(1, 450)=3.19$, $p=.075$)、結婚状態($F(1, 450)=2.93$, $p=.087$)いずれも有意傾向の単純主効果がみられた。交際状態では、未婚者よりも既婚者の許容度が高くなっており、結婚状態では、既婚者よりも未婚者の許容度が高くなっていた。

以上より、仮説３は支持されず、現在の状態とは異なる状態の場合に許容度が高くなっており、これは理想としては浮気を許容したいが現実としては許容できないことを反映した結果なのかもしれない。

（おおにし まさむね・いまづ なおみ・さかぐち あすか・はしもと みゆ・たにぐち じゅんいち）

Table 1. 浮気行動の許容度の属性×条件別の平均値と分散分析結果

	大学生		社会人		属性		条件		属性×条件	
	交際状態	結婚状態	交際状態	結婚状態	*F*	*p*	*F*	*p*	*F*	*p*
グレー行動	2.88 (0.94)	2.90 (0.86)	2.99 (0.88)	3.02 (0.83)	1.99	.16	0.14	.71	0.05	.83
黒行動	1.56 (0.74)	1.53 (0.55)	1.61 (0.73)	1.65 (0.69)	1.79	.18	0.04	.84	0.50	.48
白行動	4.46 (0.67)	4.51 (0.59)	4.51 (0.56)	4.46 (0.60)	0.00	.99	0.00	.98	0.85	.36

Table 2. 浮気行動の許容度の既婚・未婚×条件別の平均値と分散分析結

	既婚		未婚		既婚・未婚		条件		既婚×条件	
	交際状態	結婚状態	交際状態	結婚状態	*F*	*p*	*F*	*p*	*F*	*p*
グレー行動	3.02 (0.89)	2.90 (0.88)	2.97 (0.88)	3.12 (0.77)	1.06	.30	0.05	.82	2.75	.098
黒行動	1.57 (0.66)	1.59 (0.63)	1.65 (0.78)	1.70 (0.73)	1.81	.18	0.35	.56	0.03	.86
白行動	4.58 (0.45)	4.39 (0.66)	4.45 (0.62)	4.52 (0.54)	0.00	1.00	1.16	.28	6.11	.01

【 教育発表】

体育系大学生における認知的方略と心理的競技能力の関連性について

○二見優水　種ケ嶋尚志
（日本大学スポーツ科学部）
キーワード：認知的方略，心理的競技能力，スポーツ

【目的】 人間には様々な「物事に対する捉え方」が存在する．Cantor et al.（1987）は，個人が目標を追求するときの期待・評価・計画・努力などの一貫したパターンのことを「認知的方略」と定義している．スポーツ活動において不安を抱くことは，精神の安定や集中への阻害要因と成り得る可能性があり，その対策としてポジティブシンキングを促すことが実力発揮のためには重要である（福井ら，2014）．つまり，不安には積極的な認知的方略を用いることが重要であると考えられる．しかしながら，全ての競技者が積極的な認知的方略のみで実力発揮しているわけではない．近年，Norem et al.（1986）は，物事を悪い方に考えることで成功を修める「防衛的悲観主義」という認知的方略を用いる者の存在を明らかにした．また，堀川ら（2007）の研究においても，不安はパフォーマンスを促進することもあれば，逆に抑制することもあるということを明らかにしている．以上のことから，競技者が用いる認知的方略は，心理的競技能力に影響を与えることが考えられるが，認知的方略と心理的競技能力の関連性について調べた研究は少数にとどまっている．

そこで本研究では，体育系大学生における認知的方略と心理的競技能力の関連性を明らかにし，精神力を高めていくための方略を検討することを目的とした．

【方法】 調査対象者　2022年7月上旬，体育系大学に通い，スポーツ経験のある大学生133名（男性101名，女性32名，平均年齢19.69±0.8歳，平均競技年数10.30±3.47年）を対象に，講義内にて質問紙調査を実施した．

調査内容　**Ⅰ．基本属性**：性別，年齢，学年，競技種目，競技年数，競技レベル，目標志向性について回答を求めた．

Ⅱ．認知的方略尺度（外山，2015）：①失敗に対する予期・熟考，②過去のパフォーマンスの認知，③成功に対する熟考，④計画に対する熟考 の4因子20項目の質問に対し，7件法にて回答を求めた．

Ⅲ．心理的競技能力診断検査（徳永，2000）：①競技意欲，②精神の安定・集中，③自信，④作戦能力，⑤協調性 の5因子52項目の質問に対し，5件法にて回答を求めた．

【結果と考察】 はじめに，認知的方略と心理的競技能力および目標志向性との関連性について検討するために相関分析を行った結果，認知的方略の“失敗に対する予期・熟考”とDIPCA総合得点との相関においては，比較的強い負の相関（r=-0.59(p<.01)）がみられた．さらに，“成功に対する熟考”“計画に対する熟考”とDIPCA総合得点の相関においては，比較的強い正の相関（成功：r=0.49(p<.01)，計画：r=0.48(p<.01)）がみられた（Table 1）．さらに，認知的方略と各因子との関連性について検討するためにt検定を行った結果，競技レベル別における“失敗に対する予期・熟考”の得点には有意差が見られ（t(72)=-2.24，(p<.05)），全国大会以下の競技レベルの選手の方が“失敗に対する予期・熟考”の得点が高かった（Figure 1）．

これらの結果から，精神力の高い選手は，将来のパフォーマンスに対して「失敗」について熟考しない傾向があり，反対に「成功」やそれに向けた「計画」に対しては考えを巡らせる傾向があるということが明らかになった．また，競技レベルが高い選手ほど，将来起こりうる失敗に対して認知しない傾向があるということも示唆された．以上のことから，心理的スキルを高めていくための方略としては，失敗に対してネガティブな考え方に陥らずに，将来の「成功」や「計画」に対して熟考すること（させること）が挙げられる．

Table1.　認知的方略と心理的競技能力および目標志向性との相互相関

		M	SD	認知的方略 失敗予期	過去認知	成功への熟考	計画への熟考
認知的方略	失敗予期	15.39	6.77	-	-	-	-
	過去認知	20.92	4.72	-	-	-	-
	成功への熟考	25.75	5.96	-	-	-	-
	計画への熟考	24.62	6.51	-	-	-	-
DIPCA	総合得点	171.68	24.64	-.59**	.37**	.49**	.48**
	競技意欲	62.11	9.44	-.39**	.18	.46**	.48**
	精神の安定・集中	38.59	9.71	**-.52****	.44**	.29**	.21*
	自信	27.62	5.73	**-.52****	.37**	.47**	.37**
	作戦能力	27.32	5.24	-.43**	.20	.31**	.42**
	協調性	16.04	3.40	-.17	.01	.19	.23*
目標	課題志向性	3.68	0.57	-.09	.02	.09	**.34****
	自我志向性	3.09	0.76	-.07	-.04	.15	.22*

** p<.01, * p<.05

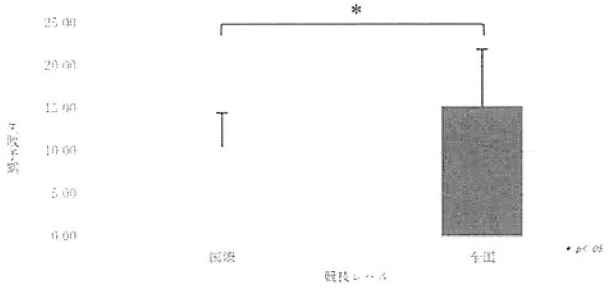


Figure1.　競技レベルと「失敗に対する予期・熟考」の関係

【引用文献】

Cantor, N., Norem, J. K., Niedenthal, P. M. Langston, C. A., Brower, A. M.（1987）. Life tasks, self-concept ideals, and cognitive strategies in a life transition, *Journal of Personality and Social Psychology, 53 (6)*, 1178-1191

福井邦宗・土屋裕睦・豊田則成（2014）．大学生アスリートにおける不安と実力発揮の関係―特性不安と心理的競技能力に着目して―，びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要，11，71-77

堀川雅美・八木昭宏（2007）．スポーツ場面におけるプレッシャーによる心理生理的影響とパフォーマンスの関係，人文論究，57(3)，47-60

（ふたみ　ゆうな・たねがしま　ひさし）

【 教育発表】

その問題，心理の専門家に相談しますか？ その１

—Yahoo!知恵袋における「メンタルヘルス」カテゴリーの質問の分析—

○澤田　戒[1]　福井義一[2]
([1]甲南大学文学部人間科学科　[2]甲南大学)

キーワード：援助要請，心理専門職，テキスト・マイニング，Yahoo!知恵袋，メンタルヘルス

【目的】

わが国の心理専門職の資格化は，民間団体が認定する臨床心理士が先行する形で 1988 年に始まり，2018 年には国家資格の公認心理師が誕生した。2022 年時点で前者は約 4 万人（日本臨床心理士資格認定協会, 2022），後者は約 5 万人（日本心理研修センター, 2021）がそれぞれ登録されているが，心理専門職への相談が身近であるとは言えない現状にある。

わが国では，一般に心理専門職への援助要請意図は，家族や友人へのそれに比して非常に低い（例, Fukui & Hori, 2021）ことが知られている。そのため，心理専門職への援助要請の抑制要因の特定と，その促進のための効果的プログラムの開発等に寄与する研究が推奨されている（一般社団法人日本公認心理師協会, 2021）。

海外では，心理専門職への援助要請を妨げる個人内要因として，リスクや利益の予期，セルフ・スティグマ等の寄与が検討されてきた（Li et al., 2014; Nam et al., 2013）が，環境要因への注目は不足気味である。例えば，現代のような高度情報化社会においては，利便性や匿名性といった利点から，インターネットでの情報検索や，コミュニティ Q&A サイト（例，Yahoo!知恵袋，教えて!goo，OKWAVE 等）への質問で手軽に個人的な問題の解決を試みる人が多い。実際，悩みや困りごとの解決方法として，「インターネットで検索する」という回答は，58.5%と非常に多い（内閣府, 2020）のに対して，「専門職へ相談する」という回答は，7.9%と非常に少ない（男女共同参画局, 2010）。このような傾向は，心理専門職への相談が妥当または可能であると思われる悩みについても同様であると推察される。

代表的なコミュニティ Q&A サイトである Yahoo!知恵袋には，1 年間で全 651 カテゴリーに 800 万件を超える質問が投稿されている。このうち，メンタルヘルス，不登校，うつ病，ストレス，治療・カウンセリング，発達障害，家族関係の悩み，職場の悩み，学校の悩み，友人関係の悩み，生き方・人生相談，恋愛相談・人間関係の悩みの計 12 カテゴリー（総質問数は約 120 万件で，全投稿の約 15%に相当）には，心理専門職への相談が妥当または可能だと考えられる質問が，数多く含まれると思われる。

本研究は，上述した 12 のカテゴリーから，公認心理師の主な活動分野である 5 領域のうち保健医療に相当し，心理専門職への相談が妥当または可能な質問が多いと思われる「メンタルヘルス」カテゴリーの質問内容のテキスト・マイニングを実施することで，メンタルヘルスの問題に対するインターネット上での解決行動の概要を把握することを目的とした。

【方法】

国立情報学研究所の IDR（Informatics Research Data Repository）データセット提供サービスにより，ヤフー株式会社から提供を受けた「Yahoo!知恵袋データ（第 3 版）」を使用し，「メンタルヘルス」カテゴリーの質問を抽出した。分析対象となった質問数は，計 2588 件であった。

【結果】

KH Coder（樋口, 2020）により，テキストデータを形態素に分解し，出現頻度 75 以上の 174 語を抽出し，共起ネットワーク分析を行った結果を Figure 1 に示した。各ネットワークについて，「Ⅰ：時間や睡眠不足の悩み」，「Ⅱ：人間関係や学校関係の悩み」，「Ⅲ：薬の服用や治療の質問」，「Ⅳ：夢分析の依頼」，「Ⅴ：入院の推奨や強制の悩み」，「Ⅵ：症状や障害についてインターネットで調べた経験」，「Ⅶ：自身や家族の帰宅にまつわる感情や行動」，「Ⅷ：辛い気持ちや希死念慮の吐露」，「Ⅸ：理由なく涙が流れた経験」，「Ⅹ：自傷行為の経験」とそれぞれ命名した。

【考察】

本研究から，インターネット上に投稿された「メンタルヘルス」カテゴリーの質問の全体像が明らかになった。こうしたこころの悩みについて，医師や心理専門職等に相談せずとも，インターネットで解決可能であると考えている人が多いことが示唆された。

共起ネットワーク分析で得られたメンタルヘルスの問題は，専門職への相談が可能な問題（Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅸ）と，妥当な問題（Ⅲ・Ⅴ・Ⅷ・Ⅹ）に二分することが可能だと考えられる。前者については，心理専門職への相談が推奨されるものの，比較的緊急度は低く，インターネット上でも解決が可能または解決が必須でない問題であるともいえる。一方で，後者については，生命や健康を脅かす深刻な問題であり，医師や心理専門職への相談が必須であるといえる。かように重大な問題までもがインターネット上で質問されていることから，問題の深刻さにかかわりなく，専門家への相談よりも，インターネット上での相談の方がアクセシビリティが高いことが示唆された。

本研究では，公認心理師の 5 つの活動領域のうち，保健医療分野に相当する問題しか検討していない。そのため，今後の課題として，心理専門職への相談が妥当または可能な他のカテゴリーにおいても精査が必要であろう。

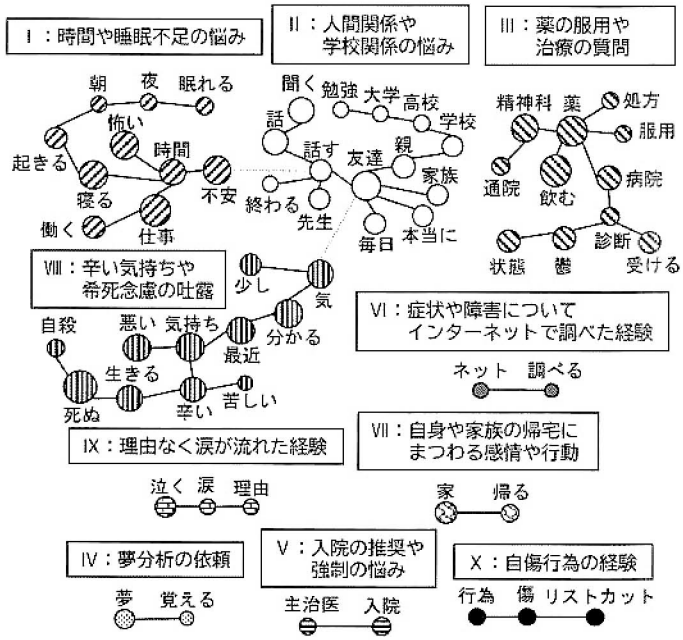


Figure 1 共起ネットワーク分析の結果

（さわだ　かい・ふくい　よしかず）

【 教育発表】

同性の友人関係における束縛行動の性差の検討

○芦賀啓太　石川恵梨奈　中林文香　（非会員）時田 学[2]
[1]日本大学商学部時田ゼミナール　日本大学商学部

キーワード：束縛行動　同性の友人・嫌悪感

【目的】友人関係に関する研究として，（丹野・松井2006；丹野，2007）では友人関係を，「ふだんからよく会う友人関係（HI 友人関係）」，「めったに会えないが親密な友人関係（LI 友人関係）」の2種類に分けて検討している．ところで友人関係の捉え方には，男女で大きな違いが見られるようである（水野，2002）．また，女子は男子よりも早い段階から自己の内面に関する自己開示をする傾向があるという指摘がある（水野，2002）．さらに楠見（1986）は，男子は小集団のメンバー同士が何らかのつながりを持つのに対し，女子は集団ごとに孤立することを報告している（水野，2002）．そのほかにも，女子は男子よりも凝集性の高い友人関係を形成しやすいことを見出した調査がある（水野，2002）．これらのことから，女子の友人関係は，特に同性同士の関係において，男子のそれと比べて強い情緒性を基盤とした強い絆で構成されていることが窺え（水野，2002），友人関係の捉え方に顕著な男女差があることを見出している（水野，2002）．すなわち，男子は恋人と親友（異性，同性を含めて）を全く対極的なものとして捉えている．対して，女子は恋人と異性の親友を対極的に捉えている．しかし，同性の親友は上述したことは全く別次元として解釈している（水野，2002）．このように捉える原因として水野（2000）は，女子の方が，援助を受けられる，より多くの種類の仲間を必要とするために，同性の親友には恋人以外の存在としての特殊な位置づけを与えている可能性があることを挙げている（水野，2002）．ところで，対人関係，特に異性間の恋愛関係の特徴的な行動に束縛行動がある．束縛行動は身体的・言語的・性的な攻撃行動と異なり，直接的な危害を加えるものではない（片岡，2020）．一方，束縛行動は恋人の人格を無視した行動であることから，心理的なダメージを与える可能性があるものということができるだろう（片岡，2020）．しかし，従来の研究において，恋人同士についての束縛行動は検討されているが，友人同士の束縛行動については検討されていない．さらに，異性友人間の場合，恋愛関係と混在してしまう恐れがあると考える．そのため本研究では，同性友人関係における束縛行動を対象とする．以上のことから，男女差が顕著な友人関係内における束縛行動の有無及び束縛行動の程度を明らかにすることを目的とする．

【方法】本研究に関する質問紙はインターネット調査会社によるオンライン調査を依頼し，作成・実施した．また，統計ソフトSAS（バージョン9.4）を使用して分析を行った．質問紙の内容は，「対象者の性別，年齢」，「対象者の同性の友人から受ける束縛行動についての対象者自身の嫌悪感について」である．調査対象者には，各項目に対して「1．非常に当てはまる」から「6．まったく当てはまらない」までの6件法で回答を求めた．また，「対象者の同性の友人から受ける束縛行動についての対象者自身の嫌悪感について」は片岡（2020）によって作成された「束縛行動尺度」を一部変更し，使用した．また，分析は対象者の同性の友人から受ける束縛行動についての対象者自身の嫌悪感に関する設問，全20問について，性別を要因とした１要因2水準の分散分析を実施した．

【結果】本研究の有効回答数は84名であった（男性20名，女性64名）．設問6「あなたは，自分の都合であなたを呼び出す同性の友人にどの程度嫌悪感を抱きますか」では5%水準で性差による有意な差が示された（$F(1,82)=5.97$，$p<.05$）．同様に，設問20「あなたは，「あなたに絶交されたら死ぬ」と言う同性の友人にどの程度嫌悪感を抱きますか」でも5%水準で性差による有意な差が示された（$F(1,82)=4.92$，$p<.05$）．また，設問15「あなたは，あなたに無断で携帯電話やスマートフォンのメッセージを見る同性の友人にどの程度嫌悪感を抱きますか」では，10%水準で性差による有意な傾向が示された（$F(1,82)=3.19$，$p<.1$）．同様に，設問21「あなたは，あなたに命令する同性の友人にどの程度嫌悪感を抱きますか」でも，10%水準で性差による有意な傾向が示された（$F(1,82)=4.92$，$p<.1$）．上記の設問以外では有意な差はみられなかった．

【考察】今回の結果から，有意な差及び有意な傾向が示された設問については，男女共に自らの生活に介入する強い束縛行動に対しては嫌悪感を抱き，自らの生活に支障がない場合は嫌悪感を抱かないと考えられる．また，女性は同性友人間の距離感が近いことから，束縛による嫌悪感を抱かないと予想したが，設問4・5・9に有意差が示されなかったため，女性は，束縛に対してより嫌悪感を持っていることが明らかになった．同様に男性においても，設問4・5・9に有意差が示されなかったことから，男性は同性の友人からの束縛行動に寛容で柔軟な対応をする可能性が考えられる．今回の研究の課題として，調査で用いた片岡（2020）の「束縛行動尺度」は異性間の恋愛関係を対象としていたため，同性の友人関係による束縛行動における尺度としての妥当性を再検討する必要性がある．また，調査に使用した質問項目には，日常では起こりにくい質問も含まれていたため，回答者の想定での回答となった可能性があり，実際に起きた事柄とは異なる反応であることが考えられる．最後に，性別だけでなく，年齢との関連性についても検討するべきであったと考えられる．

【引用文献】

(1) 水野邦夫（2002）恋愛・友人関係観の性差に関する研究　聖泉大学　info:doi/10.34359/00000863
【2022年9月14日閲覧】
(2) 楠見幸子（1986）欲求並びに現実次元での友人関係に関する研究　九州大学　https://doi.org/10.5926/jjep1953.34.4_337
【2022年9月14日閲覧】
(3) 片岡祥（2020）恋人支配行動からみた恋愛関係の理論的考察　久留米大学　https://kurume.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=1101&item_no=1&page_id=13&block_id=21
【2022年9月14日閲覧】
(4) 丹野宏明　（2007）友人との接触頻度別にみた大学生の友人関係機能　筑波大学　https://www.jstage.jst.go.jp/article/personality/16/1/16_1_110/_pdf
【2022年9月14日閲覧】
(5) 大学生における友人関係機能の探索的検討　丹野宏明・松井豊（2006　筑波大学心理学研究（32），21-30，2006-08-15筑波大学心理学系
【2022年9月14日閲覧】

あしが けいた　いしかわ えりな　なかばやし ふみか・ときた　がく

【 教育発表】

テレワークはなぜ浸透しないのか

○河﨑百花[1]　小田中美紅[1]　山本怜実[1]　時田　学[1]
([1]日本大学商学部　時田　学ゼミナール)

キーワード：テレワーク・同調・コロナウイルス

【目的】民間企業におけるテレワークは，新型コロナ感染症の拡大に伴い，急速に導入が進んでいる（総務省，2021）．しかし，在宅勤務を「現在，実施している」企業は29.1%で，2021年10月の37.0%から下降傾向にあり，「実施したが取りやめた」と回答した企業は27.2%で2021年10月の20.7%から大幅に増加した（東京商工リサーチ，2022）．こうした現状を研究する上で着目したいのが，米国はテレワークを導入している企業が85%と感染症拡大前から非常に高い（厚生労働省，2015）という点である．この点は，類似したコロナ禍の状況であるのにかなりの差異がみられる．

また，太田（2021）はテレワークの阻害要因について同調圧力を指摘する．加えて日本の組織や集団は「閉鎖的」「同質的」「個人の未分化」という三つの特徴を備えており，それがメンバーへの同調圧力につながっている（太田，2021）．このような同調圧力が働いてしまう要因として，組織の環境もあげられるという（太田，2021）．太田（2021）は同調圧力を「職場は見えない圧力で覆われていること」と指摘している．また，藤原（2006）は同調行動を「自分とは異なる意見・態度・行動を周囲から求められたとき，迷いながらも周りの意見・態度・行動に合わせてしまうメカニズム」と定義している．本研究では同調圧力と同調行動を同一のものと捉える．

以上の点から私たちは今回，日本におけるテレワークの阻害要因は日本人の同調しやすい傾向が根底にあるのではないかという仮説を立てた．仮説をふまえ，同調行動尺度を用い，テレワーク項目と同調行動のそれぞれの関係性を測定した．

【方法】調査は，調査会社Surveroidに依頼した．調査対象者は，調査対象者は男性56人，女性54人の110人で関東地方，または近畿地方に居住する20歳以上の社会人とし，質問紙法のアンケート調査を実施した．

調査は，2022年8月10日に実施された．質問紙の内容は，回答者の基本的属性を問う4項目，テレワークに関する8項目，五十嵐・野村・岩﨑（2013）の同調行動尺度19項目（自己犠牲・追従9項目，仲間への同調9項目，1項目は回答者の態度を測定する質問）を使用し，テレワーク項目との同調行動のそれぞれの関係性を測定した．調査用紙は，上記した計30項目で構成した．統計解析にはSASVer9.4を用いた．

【結果】本研究での調査対象者は110名であったが，有効回答者数は問14の13「この項目は3を選んでください」で3を選ばなかった回答不備者を除いた94名であった（男性47名，女性47名）．テレワークの実態についての質問（問7「あなたはテレワークをしていますか」）に対しては，「テレワークをしている」回答者は37名，「テレワークをしていない」回答者は13名であった．同調に関する尺度18項目（問14の1から19：1項目は調査者の態度を測定する質問）について第Ⅰ因子「仲間への同調」（9項目），第Ⅱ因子「自己犠牲・追従」（9項目）を因子ごとに問7と分散分析を行ったところ，有意差は示されなかった．第Ⅰ因子では有意差が示されなかった（F（1，48）＝0.84，p=0.36）．第Ⅱ因子でも，有意差が示されなかった（F（1，48）＝0.41，p=.0.52）．

一方，問8「テレワークの継続を希望しますか」の問いに対しては，テレワークを継続したいと答えた回答者は34名，継続したくないと答えた回答者は3名であった．同調に関する尺度18項目と問8とそれぞれ分散分析を行ったところ8項目で有意差が確認された（Fs（1，35）=4.36，p<.05）．また，問14の第Ⅰ因子，第Ⅱ因子を因子ごとに問8と分散分析を行ったところ，第Ⅰ因子では5%水準で有意差が示された（F（1，35）＝6.67，p<.05）．第Ⅱ因子では，10%水準で有意傾向が示された（F（1，35）＝3.03，p<.1）．また，第Ⅰ因子において，テレワークを継続したいと答えた回答者の平均得点は26.33（SD=5.26），テレワークを継続したくないと答えた回答者の平均得点は18.33（SD=2.08）であった．第Ⅱ因子においては，テレワークを継続したいと答えた回答者の平均得点は29.88（SD=5.73），テレワークを継続したくないと答えた回答者の平均得点は24.00（SD=3.00）であった．

【考察】日本におけるテレワークの阻害要因は日本人の同調しやすい傾向が根底にあるのではないか，という今回の仮説に基づいて調査を行ったが，「テレワークを行っているか」と同調圧力に関する尺度について，有意な違いは見られなかった．さらに，平均得点についても第Ⅰ因子，第Ⅱ因子共に差が示されなかった．このことから，今回の仮説を実証することはできなかった．一方，テレワークの継続希望の有無と同調圧力に関する尺度については，有意差が示された．これは，テレワークの継続を希望する者は，同調圧力を受けやすく，周囲に合わせたり，自分の考えを主張しない人が多い可能性が考えられた．会社に出社して仕事をすることは，同調を受けやすい者にはストレスになっている可能性があり，在宅での仕事は周りとの関わりが減るためテレワークは好まれると予測された．今後の課題は3点指摘できた．一点目は今回使用した五十嵐他（2013）の同調行動尺度は，仲間との関係を測定する上では最適と判断し使用した．しかし，上述の尺度は友人関係を基に作成された尺度であり，本研究での測定に必要な職場の仲間関係を測定する場面で使用するには限界があったのではないかと考えられる．二点目は現在もテレワークを行っている者の中で，希望の有無を問いた，回答の人数比が極端な割合になった（34名と3名）ことから，調査のサンプリングを再考する必要があると考えられた．三点目は，テレワークを行うことが難しいとされる業種については資料を基に（総務省，2021）除外したものの，仕事内容についての配慮（部署等）考慮に入れることを検討したい．

【引用文献】(1) 五十嵐透子・野村珠紀・岩崎眞和（2014）「大学生の同調行動と文化的自己観および大学適応感との関連」
https://cir.nii.ac.jp/crid/1050282813767324288
(2) 総務省（2021）「令和3年通信利用動向調査の結果」
https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r03/html/nd123410.html
(3) 太田肇（2021）『同調圧力の正体』(PHP新書)
(4) 厚生労働省　テレワーク総合ポータルサイト
https://telework.mhlw.go.jp/telework/abr/
(5) 東京商工リサーチ　第22回「新型コロナウイルスに関するアンケート」調査（2022）
https://www.tsr-net.co.jp/news/analysis/20220622_01.html

（かわさきももか・おだなかみく・やまもとれいみ・ときたがく）

【 教育発表】

大学生の対面とオンライン状況における「空気」を読めない言動への対処行動

○千歳珠子　粟飯原果南　中田茉実
（日本大学商学部 井上裕珠ゼミナール）
キーワード：空気　面識　対処行動

【目的】
小岩(2020)は、対面環境における空気の読めない言動への対処行動（以下：ＫＹ対処行動とする）について検討し、状況の文脈がまじめな時の対処行動は叱責がとられやすく、遊びの文脈ではフォローがとられやすいことを示した。本研究では、オンライン状況を加えて検討することを目的とする。

【方法】
研究対象　日本の大学生 202 名（男性 73 名，女性 128 名，その他 1 名，年齢 *M* =20，*SD* =1. 02）
質問紙概要　回答者には、高校時代の「仲良しグループ」の想起を求め、そのグループの中で所属する一人が空気を読むことに失敗した場面を提示した。場面には対面での会話場面とオンライン上での文字での会話場面が設定されていた。さらに、オンライン授業で先生が無作為に作成したグループに所属する直接会って話したことがない 1 人を想起させ、オンライン状況の空気を読むことに失敗した場面を提示した。
質問紙の構成　小岩(2020)をもとに、対面環境とオンライン環境（面識の有無）の計 3 環境について、それぞれまじめとあそびの文脈で 2 場面の合計 12 場面を作成し、ＫＹ対処行動を測定した。それぞれの場面では、社会的文脈や周囲の様子を説明する教示により、その場面でのコミュニケーション・モードを規定し、それらから逸脱した言動を行った人物を描写することでＫＹ対処行動を測定した。

【結果】
対処行動得点について、環境要因(対面 vs オンライン)と条件要因(まじめ vs 遊び)および対処行動要因(放置 vs 叱責 vs いじり vs フォロー)を独立変数とした三要因参加者内分散分析を行った。
対面環境とオンライン環境の比較の結果、まじめ条件では、「放置」は対面環境とオンライン環境に有意差が見られなかった($F(1,552)=0.05, p\eta^2=.00, ns$)。「叱責」は対面環境よりもオンライン環境の方が有意に高かった($F(1,552)=11.16, p\eta^2=.14, p<.01$)。「いじり」は対面環境とオンライン環境に有意差が見られなかった($F(1,552)=0.30, p\eta^2=.00, ns$)。「フォロー」はオンライン環境よりも対面環境の方が有意に高かった($F(1,552)=8.36\ p\eta^2=.11, p<.01$)。あそび条件では、「放置」は対面環境とオンライン環境に有意差が見られなかった($F(1,552)=2.28, p\eta^2=.03, ns$)。「叱責」はオンライン環境よりも対面環境の方が有意に高かった($F(1,552)=5.20, p\eta^2=.08, p<.05$)。「いじり」はオンライン環境よりも対面環境の方が有意に高かった($F(1,552)=16.38, p\eta^2=.19, p<.01$)。「フォロー」は対面環境とオンライン環境に有意差は見られなかった($F(1,552)=0.02, p\eta^2=.00, ns$)（figure1）。
面識の有無に比較の結果、まじめ条件では、「放置」は面識のあるオンライン環境と面識のないオンライン環境に有意差が見られなかった($F(1,552)=0.26, p\eta^2=.00, ns$)。「叱責」は面識のあるオンライン環境と面識のないオンライン環境に有意差は見られなかった($F(1,552)=2.58, p\eta^2=.04, ns$)。「いじり」は面識のないオンライン環境よりも面識のあるオンライン環境のほうが有意に高かった($F(1,552)=5.24, p\eta^2=.07, p<.05$)。「フォロー」は面識のあるオンライン環境と面識のないオンライン環境に有意差は見られなかった($F(1,552)=0.47, p\eta^2=.01, ns$)。あそび条件では、「放置」は面識のあるオンライン環境よりも面識のないオンライン環境の方が有意に高かった($F(1,552)=31.36, p\eta^2=.31, p<.01$)。「叱責」は面識のあるオンライン環境よりも面識のないオンライン環境の方が有意に高かった($F(1,552)=5.24, p\eta^2=.07, p<.05$)。「いじり」は面識のないオンライン環境よりも面識のあるオンライン環境の方が有意に高かった($F(1,552)=16.33, p\eta^2=.19, p<.01$)。「フォロー」は面識のないオンライン環境よりも面識のあるオンライン環境の方が有意に高かった($F(1,552)=4.70, p\eta^2=.06, p<.05$)（figure2）。

Figure 1　対面とオンラインの KY 対処行動。

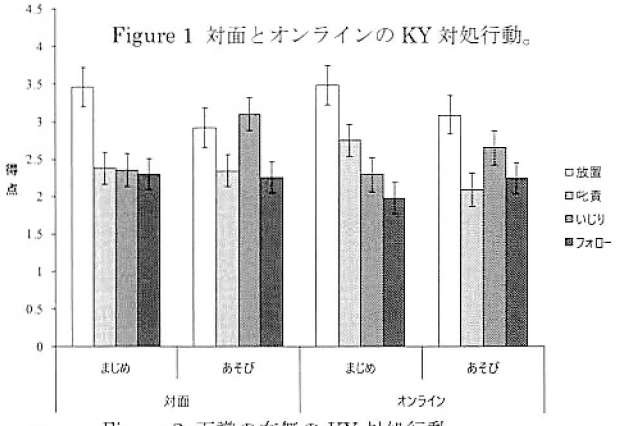
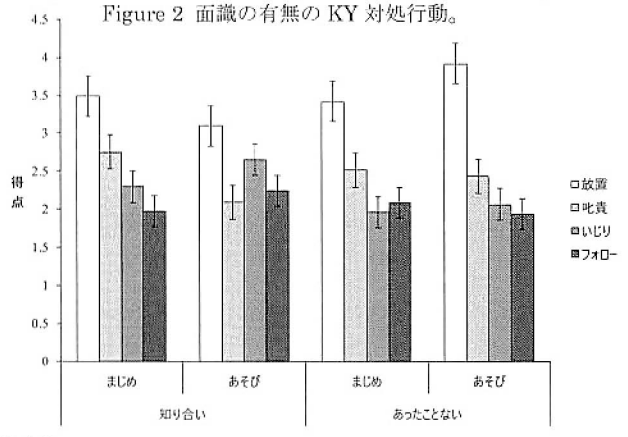


Figure 2　面識の有無の KY 対処行動。



【考察】
これらの結果から、対面環境ではオンライン環境とは異なり、相手の表情やジェスチャーをリアルタイムで感じることができるため、あそびの文脈における空気を読めない行動に対し、いじりの様な踏み込んだコミュニケーションを選択しやすいと推測される。

【引用文献】
小岩 広平(2020). 現代青年の友人集団における「空気」を読めない言動への対処行動 心理学研究, *91*, 312-322.
（ちとせ みこ・あわいばら かなん・なかだ まみ）

【 教育発表】

大学生における、SNS利用を目的とした食べ残し傾向と性格特性の関連の検討

○石川智也[1]　郭慧都[1]　金岡百々[1]（非会員）
([1]日本大学商学部）

キーワード：SNS、食べ残し、賞賛獲得欲求

【目的】近年、SNSの利用は増えている。それによって「SNS映え」や、「いいね数」を気にする人が増えている。その中には「映え」や「いいね」を気にするがあまり食べ物を購入し、写真を撮り、SNSに投稿するが、購入した料理を食べきらずに廃棄する人も存在することが問題になっている。そこで、SNSの利用率が、人々の食べ残し量に関連しているのではないかと考え、今回の研究を実施した。

【方法】調査参加者には、「フードロスとSNS利用に関する調査」としてオンライン上のアンケート調査を実施した。実験参加者は、都内の私立大学201名を対象とし、性別の内訳は、男性73名（平均19.4歳、標準偏差0.99）、女性128名（平均20.0歳、標準偏差0.94）であった。また、無回答はおらず、性別に関して「3 どちらでもない」を選択した1名を除く200名を分析対象とした。

調査項目　フードロスに関する行動傾向を測定する6項目（普段の外食（テイクアウト含む）で食べ残すことがある。など）を作成し使用した。また、代表的なSNSの利用状況および、自尊感情(桜井, 2000)・承認獲得欲求(小島・太田・菅原, 2003)・BigFiveを測定するTIPI-J(小塩・阿部・カトローニ, 2012)の項目を使用した。

【結果】得られたデータを分析するにあたり、フードロス傾向6項目の平均得点を算出し、フードロス傾向得点（M = 2.21, SD = 0.51）とした。分析対象の201名のうち、LINEを利用したことがある人は200名、Twitterは180名、Instagramは181名、TikTokは127名、Facebookは27名であった。

SNSの利用経験の有無により、フードロス傾向得点に影響がみられるかを検討するため、t検定をおこなった(Table 1)。今回LINEはほとんどの参加者が「利用経験がある」と回答したため、分析から除外した。TikTokの利用経験のある人は、利用経験のない人と比較して有意にフードロス関連得点が高く（t (131.82) = 3.35, p < .01）、以下同様にInstagramとFacebookは有意傾向にあったが(それぞれ、t (22.20) = 1.86, p < .10, t (54.34) = 1.73, p < .10)、Twitterでは有意な差は見られなかった（t (23.09) = 0.48, ns ）。

Table 1. 各SNS利用経験とフードロス傾向得点の関連

	利用あり		利用なし		
SNS	13.33	(2.85)	12.86	(4.52)	
インスタ	13.46	(2.86)	11.71	(4.21)	
tiktok	13.85	(2.74)	12.32	(3.35)	**
twitter	13.33	(2.85)	12.86	(4.52)	
Facebook	13.93	(1.84)	13.18	(3.21)	

** p < .01

続いて、フードロス傾向に有意差が見られたTikTokの利用経験について、性格特性との関連を検討した（Table 2）。TikTokの利用経験のある人は利用経験のない人に比べて、外向性と協調性が有意に高い（それぞれ、t (2.21) = 150.52, p < .01, t (3.04) = 138.14, p < .01）ことが示された。つまりTikTokを利用したことがある人はフードロス傾向が高いため、フードロス傾向と外向性、協調性に関連がある可能性が考えられる。

Table 2. TikTokの利用経験と性格特性の関連

	利用経験あり		利用経験なし		
自尊感情	24.90	(6.27)	23.68	(5.99)	
賞賛獲得欲求	26.13	(7.09)	26.47	(6.44)	
外向性	5.21	(1.53)	4.71	(1.59)	**
開放性	4.74	(1.47)	4.85	(1.42)	
協調性	6.58	(1.12)	6.04	(1.29)	**
勤勉性	4.11	(1.42)	4.25	(1.45)	
神経症傾向	4.52	(1.37)	4.29	(1.41)	

** p < .01

また、TikTok利用経験とフードロス傾向得点と性格特性との関連については、相関分析を実施した（Table 3）。全体としてフードロス傾向は自尊感情と外向性と正の関連が見られたが、賞賛獲得欲求とは関連が見られなかった。

Table 3. TikTok利用経験別の性格特性とフードロス傾向の相関

	全体		利用経験あり	利用経験なし	
自尊感情	.188	**	.035	.371	**
賞賛獲得欲求	.125		.136	.136	
外向性	.227	**	.110	.316	**
開放性	.162		.118	.262	
協調性	.030		-.096	.063	
勤勉性	.070		-.039	.252	
神経症傾向	.149		.067	.225	

** p < .01

「TikTok利用経験あり」の人は、フードロス傾向が高いことが示された。一方、「TikTok利用経験なし」の人は、フードロス傾向が低いが、その中でも、自尊感情や外向性が高い人はフードロス傾向が高くなることが示された。

「フードロス傾向の高い人ほど賞賛獲得欲求のためにSNSを利用している」という仮説は支持されなかったが、自尊感情や外向性と関連があることが示唆された。

【引用文献】

藤倉 まなみ・大和 妃香里・福岡 雅子（2018）.「インスタ映え」料理写真のSNS掲載による食べ残し増加の可能性 第29回廃棄物資源循環学会研究発表会, 105-106.

小島 弥生・太田 恵子・菅原 健介(2003). 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み 性格心理学研究, *11*, 86-98.

小塩真司・阿部晋吾・カトローニ ピノ（2012）. 日本語版Ten Item Personality Inventory(TIPI-J)作成の試み パーソナリティ研究, *21*, 40-52.

桜井 茂男（2000）. ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討 筑波大学発達臨床心理学研究, *12*, 65-71.

（いしかわともや・かくけいと・かなおかもも）

【 教育発表】

大学生の就職活動不安が就職活動関与度に及ぼす影響

○田村清志郎　但馬宏直　内木咲楽
（日本大学商学部井上裕珠ゼミナール）
キーワード：就職活動　大学生　就職活動不安

【目的】
松田ほか（2008）は、就職活動不安と就職活動量の関係を検討し、就職活動不安が活動量と満足度に負の影響を与えることを報告している。しかし、松田ほか(2008)では、就職活動量を企業説明会やセミナーの予約・参加といった内容に限定している。そこで本研究では、就職活動量を活動意欲などを含めてより広範に捉え、Blustein & Philips,(1988)の就職活動不安が就職活動を促進させるというモデルが再現されるかについて検討することを目的とする。

【方法】
調査対象　全国の大学３年生計 83 人（男子：40 人，女子：43 人）であった。平均年齢は２０.３３歳（*SD* = 0.48、範囲 20－22）であった。

調査手続き　2022 年５月下旬から６月下旬に、授業終了時 QR コードを配布する方法と、SNS を活用しリンクから回答してもらう方法を採用し、無記名方式で実施。

調査項目　就職活動への不安は、就職活動に対する不安についての項目を，松井・新井，（2006）の就職活動不安尺度を採用し，計２０項目を”まったくあてはまらない(1)”－”とてもあてはまる(4)”の４件法で回答を求めた。

就活関与度は，その時点での活動量を測定する「就職活動のために資格取得の学習や、SPI などの筆記試験対策を行っている、もしくは行いたいと思っている」の項目と、今後の就職活動意欲を測る「セミナーなどには積極的に参加したい」などの独自に作成した項目を加えた計１０項目を”まったくあてはまらない(1)”－”非常に当てはまる(7)”の７件法で回答を求めた。

就職活動の満足度は，”現在の就職活動についてどの程度満足しているか 100 点満点で記入してください”という教示の下、”全く満足していない(0)”－”非常に満足している(100)”として満足感についての数値化を求めた。

ストレス解消法（コーピング）は，尾関（1993）のコーピング尺度を用い，「最も強くストレスを感じていること」を就職活動とし”まったくくしない（1）”－”いつもする（4）”の４件法で回答を求めた。

【結果と考察】
分析に先立ち、各尺度について因子分析を実施した。不安尺度は，松田・永作・新井(2008)とは異なり、実践不安，試
関与度は「就活に関する情報が目に入るとついつい見てしまう」などの項目からなる情報追跡因子、「セミナーなどには積極的に参加したい」などからなる就活意欲因子、「セミナーやイベントへの参加は時間の無駄だと思う」などからなる就活消極因子の３因子構造が示された。

これら３つの尺度得点および就活満足度を用いて共分散構造分析を実施した。松田・永作・新井(2008)のモデルをもとに、パスの追加と削除を繰り返しながら最適なモデルを検討した。その結果、figure1 に示されるモデルが得られた。このモデルの適合度指標は,$\chi 2 = 30.32$(ns.),df＝26,GFI＝.93,AGFI＝＝.88,RMSEA＝.05 であり、これは松田・永作・新井(2008)のモデルを本研究のデータに適用したモデルと比較して、より適合しているものであった。

共分散構造分析によって得られたモデルから、就職活動不安が高まるほど、情報追跡、就活意欲が高まることが示されたが、同時に先行研究とは異なり、積極的コーピングを媒介すると、情報追跡、就活意欲は増加しないことも示された。その積極的コーピングは、情報追跡、就活意欲に関与し、消極的コーピングに関しては就活消極に関与することが示唆された。しかし今回の研究では、消極的コーピングの就職活動不安との関連、そして関与度そのものとの関連は示されなかった。最後にパス図から、就職活動不安は積極的コーピングを媒介するかどうかにより、関与度を増加させるのか、妨げるのかが左右されることが明らかになった。

【引用文献】
Blustein, D. L., & Phillips, S. D. 1988. Individual and contextual factors in career exploration. *Journal of Vocational Behavior*, *33*, 203-216.

尾関 友佳子 (1993).大学生用ストレス自己評価尺度の改訂 トランスアクショナルな分析に向けて 久留米大学大学院比較文化研究科年報, *1*, 95-114.

松田 侑子・新井 邦二郎 (2006).就職活動不安尺度作成の試み 日本教育心理学会第 48 回大会発表論文集, *100*.

松田 侑子・永作 稔・新井 邦二郎(2008). 大学生の就職活動不安が就職活動に及ぼす影響ーコーピングに注目してー 心理学研究, *80*, 512-519.
（たむらきよしろう・たじまひろなお・ないきさくら）

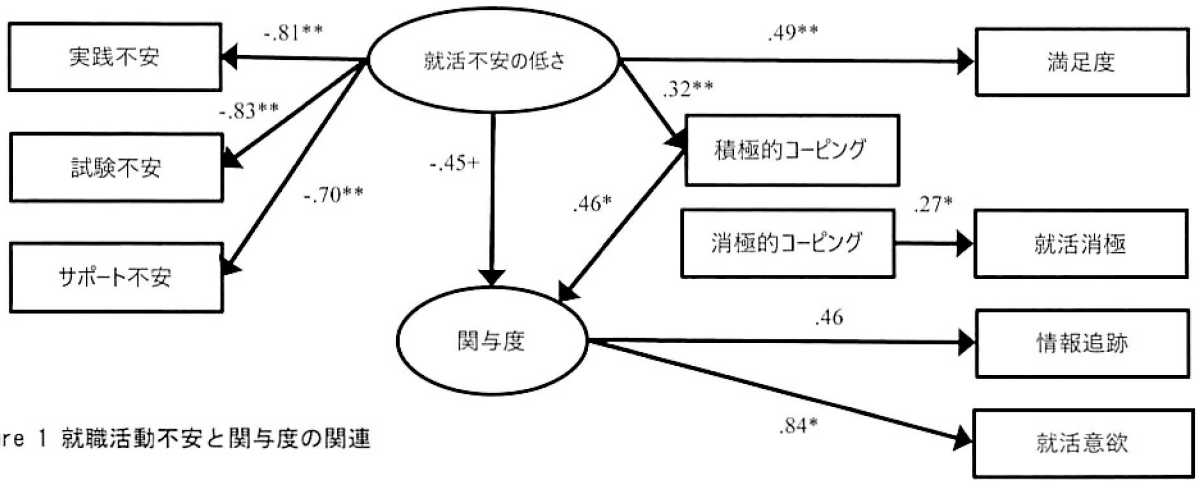


Figure 1 就職活動不安と関与度の関連

日本応用心理学会第88回大会　賛助団体等御芳名

本大会の開催にあたり、下記団体・企業の皆さま方からご協賛をいただくことができました。深く感謝し、御礼申し上げます。

株式会社　北大路書房
トビー・テクノロジー　株式会社
株式会社　トーヨーフィジカル
福村出版　株式会社
株式会社　ブックマン京都
（敬称略・五十音順）

日本応用心理学会第88回大会　実行委員会

実行委員長	来田　宣幸	京都工芸繊維大学　基盤科学系
実行委員	西崎　友規子	京都工芸繊維大学　情報工学・人間科学系
実行委員	成田　智恵子	京都産業大学　文化学部
実行委員	大門　耕平	東北学院大学　文学部
実行委員	北尾　浩和	京都きづ川病院
実行委員	寅嶋　静香	京都工芸繊維大学
実行委員	田中　真紀	京都文教短期大学
実行委員	権野　めぐみ	京都工芸繊維大学

表　紙	下平　晃道	Murgraph、京都工芸繊維大学大学院

オンライン検査

☑健康度・生活習慣診断検査 DIHAL.2
☑日本語版UWIST気分チェックリストJUMACL
☑心理的競技能力診断検査 DIPCA.3
☑試合前の心理状態診断検査 DIPS-B.1
☑スポーツ特性－状態不安診断検査 TAIS.2&SAIS.2

心理検査用紙

新ストループ検査Ⅰ・新ストループ検査Ⅱ
「新ストループで何がわかるか－新ストループ検査Ⅰ・Ⅱ解説書－」
情動的知能質問紙　（小学3年～中学3年生）
ストレス対処法質問紙（小学3年～中学3年生）
役割取得検査（4歳～11歳）
社会的視点取得検査 通常版／簡易版（中学・高校生）
ウエルライフ（学校生活充実検査）小学・中学生版
動作法評価検査票・動作法評価検査解説書

表情認知検査（子ども版／成人版）
日本語版UWIST気分チェックリスト　JUMACL
複合数字抹消検査　CDCT
健康度・生活習慣診断検査　DIHAL.2
スポーツ行動診断検査　DISC.5
精神的健康パターン診断検査　MHP.1
健康度診断検査
食物摂取頻度調査票
生活と運動のアンケート

カテゴリー分析装置　行動分析
発言や行動・表情を、あらかじめ定めたカテゴリーに従って分類してメモリーボックスへ入力します。ソフト上でこれらの相互作用に注目した分析が行えます。



生体情報装置　自律神経系測定
面接やカウンセリング中の緊張、リラックス等、生体情報（心拍、呼吸、皮膚温、G.S.R.）を同時測定し、データはテキファイルに変換できます。



Win行動科学のBASIC集
統計解析ソフト　著者 祥原弘章
心理学実験や検査におけるデータの統計解析処理、検定用ソフト。4要因・5要因のχ^2検定（尤度比検定）プログラム及び解説が新たに加わりました。

TOYO PHYSICAL　株式会社トーヨーフィジカル　http://www.toyophysical.co.jp
〒810-0014 福岡市中央区平尾3-7-21園ビル　TEL：092-522-2922 FAX：092-522-2933